ちくま学芸文庫

原典訳マハーバーラタ 6

第6巻(1-117章)

上村勝彦 訳

筑摩書房

目次

原典訳　マハーバーラタ6

［家系図］

太陽神―タパティー

パラターサンヴァラナ

クル―プラティーパ

ガンガー女神

シャンタヌ

サティヤヴァティー

パラーシャラ

ヤドゥ―ヴリシュニ……シューラ

スバラ

ビーシュマ

チトラーンガダ

ヴィチトラヴィーリヤ

ヴィヤーサ

アンバー

アンビカー

アンバーリカー

クリピー

ドローナ

太陽神

ガーンダーリー

シャクニ

ドリタラーシトラ

マードリー

パーンドゥ

ヴィドゥラ

クンティー

ヴァスデーヴァ

ドルパダ

アシュヴァッターマン

カルナ

ドゥルヨーダナ

ドゥフシャーサナ

（百王子）

ヴィカルナ

ナクラ

サハデーヴァ

ユディシティラ

ビーマセーナ

アルジュナ

（マツヤ国王）

ヴィラータ

スバドラー

クリシュナ

バララーマ

ドラウパディー（クリシュナー）

ドリシタデュムナ

シカンディン

ウッタラー

アビマニユ

パリクシット―ジャナメージャヤ

パーンダヴァ　　　　カウラヴァ

主要登場人物

アシュヴァッターマン　ドローナの息子で、父に劣らぬ勇士。

アルジュナ　パーンドゥの五王子のうちの三男。母クンティーがインドラ神より授かった息子。あらゆる武芸に秀でた勇士。妻スバドラーとの間に息子アビマニユが生まれる。

アビマニユ　アルジュナとスバドラーの息子。

アンバー　カーシ国王の長女。アンビカーとアンバーリカーの姉。ビーシュマに復讐を誓い、後にシカンディンという男性になる。

アンバーリカー　カーシ国王の三女。ヴィチトラヴィーリヤの妻。パーンドゥの母。

アンビカー　カーシ国王の次女。ヴィチトラヴィーリヤの妻。ドリタラーシトラの母。

ヴァイシャンパーヤナ　聖仙。ヴィヤーサの弟子。蛇の供犠祭を催すジャナメージャヤ王の前で、ヴィヤーサから聞いた『マハーバーラタ』を吟誦する。

ヴァスデーヴァ　ヤドゥ族の長シューラの息子。クンティーの兄。バララーマ、クリシュナ、スバドラーの父。

ヴィチトラヴィーリヤ　シャンタヌとサティヤヴァティーの次男。カーシ国王の娘アンビカーとアンバーリカーを妃に迎える。

ヴィドゥラ　ヴィヤーサとアンバーリカーの召使女の徳高い息子。ドリタラーシトラとパーンドゥの異母弟。

ヴィヤーサ（クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ）　聖仙。『マハーバーラタ』の作者。サティヤヴァティーと聖仙パラーシャラとの間に生まれる。ドリタラーシトラ、パーンドゥ、

ヴィドゥラの実父。

ヴィラータ　マツヤ国の王。パーンダヴァたちは変装してこの王の宮廷に仕えた。

ウグラシュラヴァス　吟誦詩人。ローマハルシャナの息子。ヴァイシャンパーヤナが語った『マハーバーラタ』をナイミシャの森で聖仙たちに語る。

ウッタラ　ヴィラータの息子。妹のウッタラーはアビマニユの妻になる。

カルナ　クンティーが太陽神より授かった息子。生まれつき甲冑と耳環をつけた勇士。

ガンガー　ガンジス川の女神。シャンタヌ王との間に息子ビーシュマを産む。

ガーンダーリー　ガーンダーラ国王スバラの娘。ドリタラーシトラの妻。百王子の母。

クリシュナ　ヤドゥ族の長ヴァスデーヴァの息子（ヴァースデーヴァ）。バララーマの弟。ヴィシュヌ神の化身とみなされる。

クリタヴァルマン　ヴリシュニ族の勇士。フリディカの息子。

クリパ　武術の達人で、クル族に仕える。妹のクリピーはドローナの妻。

クンティー（プリター）　ヤドゥ族の長シューラの娘。太陽神よりカルナを授かる。パーンドゥの妻。ユディシティラ、アルジュナ、ビーマの母。

サティヤヴァティー　漁師の長の娘。聖仙パラーシャラとの間にヴィヤーサをもうける。シャンタヌの妻となり、チトラーンガダ、ヴィチトラヴィーリヤを産む。

サハデーヴァ　パーンドゥの五王子のうちの五男。マードリーの双子の息子の一人。

サーティヤキ　ヴリシュニ族の勇士。ユユダーナとも呼ばれる。シニの孫。

サンジャヤ　ドリタラーシトラの吟誦者。『マハーバーラタ』の戦争の語り手。

シカンディン　ドルパダの次男。アンバーの生まれ変わり。

シャウナカ　聖仙。十二年におよぶ祭祀を行うナイミシャの森の祭場で、様々な神聖な物語をウグラシュラヴァスから聞く。

シャクニ　ガンダーラ国王スバラの長男。ドゥルヨーダナ兄弟の叔父。

ジャナメージャヤ　パーンダヴァ族の後裔。パリクシットの息子。ヴィヤーサの弟子ヴァイシャンパーヤナの物語る『マハーバーラタ』の聞き手。

ジャヤドラタ　シンドゥの王。ドリタラーシトラの娘婿。

シャリヤ　マドラ国の王。ナクラとサハデーヴァの母マードリーの兄（または弟）。

シャンタヌ　クル族の王プラティーパの息子。ガンガー女神との間に息子ビーシュマを、サティヤヴァティーとの間にチトラーンガダとヴィチトラヴィーリヤをもうける。

スバドラー　ヤドゥ族の長ヴァスデーヴァの娘。バララーマとクリシュナの妹。大アルジュナとの間にアビマニユをもうける。

ソーマダッタ　バーフリーカの息子。ブーリシュラヴァスの父。

チトラーンガダ　シャンタヌとサティヤヴァティーの長男。

ドゥフシャーサナ　ドリタラーシトラの次男。

ドゥルヨーダナ　ドリタラーシトラの長男。邪悪な性格で、パーンダヴァ兄弟を苦しめる。

ドラウパディー（クリシュナー）　パーンチャーラ国王ドルパダの娘。パーンドゥの五王子の共通の妻。

ドリシタデュムナ　ドルパダの長男。

ドリタラーシトラ　ヴィヤーサとアンビカーの盲目の息子。ガーンダーラ国王の娘ガーンダーリーを妃とする。百王子の父。

ドルパダ　パーンチャーラ国王プリシャタの息子。祭火よりドラウパディー、ドリシタデュムナ、シカンディンの三人の子を授かる。

ドローナ　聖仙バラドゥヴァージャの息子。クリピーを妻とする。アシュヴァッターマンの父。パーンドゥの五王子とドリタラーシトラの百王子に武術を教授する。

ナクラ　パーンドゥの五王子のうちの四男。マードリーの双子の息子の一人。

バガダッタ　プラーグジョーティシャの王。クル族の側につく。

バーフリーカ　ソーマダッタの父。シャンタヌの兄。

パラーシャラ　聖仙。ヴィヤーサの父。

バララーマ　ヴァスデーヴァの長男。クリシュナの兄。

パリクシット　アビマニユとウッタラーの息子。ジャナメージャヤの父。

パーンドゥ　ヴィヤーサとアンバーリカーの息子。ドリタラーシトラの弟。五王子の父。

ビーシュマ（デーヴァヴラタ）　シャンタヌ王とガンガー女神の息子。パーンドゥとドリタラーシトラの伯父。

ビーマ（ビーマセーナ）　パーンドゥの五王子のうちの次男。クンティーが風神より授かった息子。

ブーリシュラヴァス　クル族の勇士。ソーマダッタの息子、バーフリーカの孫。

マードリー　マドラ国王の娘。パーンドゥの妻。アシュヴィン双神より双子の息子ナクラとサハデーヴァを授かる。

ユディシティラ（アジャータシャトル）　パーンドゥの五王子のうちの長男。クンティーがダルマ神より授かった息子。高徳であり、ダルマ王と呼ばれる。

第6巻　ビーシュマの巻（ビーシュマ・パルヴァン）

第一章―第百十七章

マハーバーラタ関連地図

(61) ジャンブー大陸の創造（第一章―第十一章）

戦いのルールを定める

ジャナメージャヤはたずねた。

「クルとパーンダヴァとソーマカ（パーンチャーラ）の人々、そして諸国から参集した偉大な王たちはどのように戦ったか。（一）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

クルとパーンダヴァとソーマカの勇士たちが、苦行（タパス）の地であるクルクシェートラにおいてどのように戦ったかを、王よ、聞きなさい。（二）

強力なパーンダヴァとソーマカの軍はクルクシェートラに入ると、クル族（カウラヴァ）の軍に対し、勝利を望んで進軍した。（三）彼らはみなヴェーダ学習を完了し、戦闘を好み、戦いに勝利することを望み、戦場で〔敵を〕殺すことを求めていた。（四）彼らは軍勢を率いて、難攻のドゥルヨーダナの軍に対して進軍し、西側に位置して東方を向いて布陣した。（五）クンティーの息子ユディシティラは、サマンタパンチャカの外側に、幾千の軍営を〔建築の〕規定に従って作らせた。（六）全地上には、馬や人や戦車や象が払底したかのようになって、子供と老人だけが〔家に〕残っていた。（七）最高の王よ、ジャンブー大陸（ドゥヴィーパ）（閻浮提）一円を太陽が照らす限りの場所から軍隊が集められていた。（八）すべての種姓（ヴァルナ）の人々が一堂に会し、幾由旬（ヨージャナ）に及ぶ地帯、地方、川々、山々、森林をすっかり満たしていた。（九）人中の雄牛よ、ユディシティラ王は彼らすべてと動物たちに、種々の最高の食物を給するよう命じた。（一〇）そしてユディシティラは、彼らに種々の符牒（合言葉）を定めた。このように言えば、彼はパーンダヴァ側だと知ることができるようにである。（一一）クル族の側も、戦いの時が近づいた時、全員の証拠の品と符牒と装飾を定めた。（一二）

パーンダヴァたちの軍旗の先端を見て、偉大なドゥルヨーダナは、すべての王たちとともに、パーンダヴァ軍に対する布陣を整えた。（一三）ドゥルヨーダナは頭上に白い傘を差しかけられ、千頭の象の中央で、弟たちに取り囲まれていた。（一四）そのドゥルヨーダナを見て、すべてのパーンダヴァ軍は喜び勇んだ。幾千もの兵が、一斉に大法螺や太鼓を鳴らした。（一五）味方の軍隊が喜び勇んでいるのを見て、パーンダヴァたちと強力なヴァースデーヴァ（クリシュナ）は心から喜んだ。（一六）それから、人中の虎であるクリシュナとアルジュナは、戦車に立ち、兵士たちを歓喜させつつ、神聖な法螺を吹き鳴らした。（一七）その両者の〔法螺である〕パーンチャジャニヤとデーヴァダッタの音を聞いて、兵士と馬や象は糞尿を垂れ流した。（一八）獅子の吼え声を聞いて獣たちが恐れるように、ドゥルヨーダナの軍隊も恐れたのである。（一九）土ぼこりが舞い上がり、何も見分けられなかった。太陽は軍隊の立てるほこりにおおわれて隠れてしまった。（二〇）そして雨神は、肉と血の雨をすべての軍隊に降り注いだ。それは奇蹟のようであった。（二一）そして下の方で風が起こった。それは砂利を吹きつけて軍隊を苦しめたが、あのほこりを吹き払った。（二二）王よ、そこで両方の軍隊は非常

に喜び、戦うべく身構えて、波立つ海のようにクルクシェートラに立っていた。(二三) 両軍の会戦は驚異的で、宇宙紀（ユガ）の終末が訪れた時の二つの海のようであった。(二四) クル族によって大軍が召集されたので、全地上は空っぽのようになり、子供と老人だけが〔家に〕残っていた。(二五)

それから、クルとパーンダヴァとソーマカの人々は約定を定めた。戦い方に関する規定（ダルマ）（ルール）を定めたのである。バラタの雄牛よ。(二六) 我々の戦いが終わったら、相互に満足すべきこと。前述の場合、状況に応じて再び詐術を用いてはいけない（テクスト疑問）。(二七) 言葉によって戦いを始めた者たちに対しては、言葉によってのみ対戦すること（異本による）。戦闘から外れた者は、決して殺されるべきでない。(二八) 戦車に対しては戦車で戦うべきこと。象の背に乗る者に対しては象で、騎兵に対しては騎兵で、歩兵に対しては歩兵で戦うべきこと。バーラタよ。(二九) 状況に応じ、力に応じ、気力に応じ、年齢に応じて、声をかけて攻撃すべきである。安心している者、動転した者を攻撃してはならぬ。(三〇) 他者と交戦中の者、油断した者、背を向けて逃げる者、武器を失った者、鎧を失った者は、決して殺されるべきでない。(三一) 御者（スータ）、動物（馬など）、武器を運ぶ者、太鼓や法螺を演奏する者たちに対しては、決して攻撃してはならぬ。(三二)

クルとパーンダヴァとソーマカは、このように約定を定めて、お互いに見合って、最高に驚嘆した。(三三) そしてこれら偉大な人中の雄牛たちは、兵たちとともに野営し、喜び勇み、上機嫌になった。(三四)

（第一章）

大々的な滅亡の兆候

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから、すべてのヴェーダを知る人々の最上者である、サティヤヴァティーの息子、尊い聖仙ヴィヤーサは、東西の軍隊の間にあって（異本による）見渡した。(一) そのバラタ族の祖父であり、過去と現在と未来を知る尊者は、恐ろしい戦争が始まろうとする時に、息子たちの悪い政策を心配して嘆き悲しんでいるドリタラーシトラ王に密かに告げた。(二―三)

ヴィヤーサは言った。

「王よ、汝の息子たちと他の王たちの命運は尽きた。彼らは戦場に会して、お互いに殺し合うであろう。(四) 命運尽きて彼らが滅びる時、バーラタよ、時間（カーラ）の移り変わりを知らないで、悲嘆に暮れてはならぬ。(五) ところで、もし汝が戦況を見たいと望むなら、汝に視力を授けるであろう。さあ、この戦いを見よ。(六)」

ドリタラーシトラは言った。

「最高の梵仙よ、私は親族の殺し合いを見たくはありません。しかし、あなたの威光により、この戦いを残らず聞きたいと思います。(七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

彼が戦争を見たくはないが聞きたいと望んだので、願いをかなえる主（ヴィヤーサ）は、サンジャヤに恩寵を与えた。（八）

ヴィヤーサは告げた。

「王よ、ここにいるサンジャヤが汝にこの戦争について語るであろう。彼にとって戦場のすべては直接に経験されるものになるであろう。（九）王よ、このサンジャヤは天眼を得て、汝に戦況を語るであろう。彼は一切知になるのだ。（一〇）公に行なわれたことでも密かに行なわれたことでも、夜中のことであろうと昼のことであろうとも、心の中で考えられたことでも、サンジャヤはすべてを知るであろう。（一一）武器は彼を切らないであろう。疲労が彼を悩ますこともないであろう。このガヴァルガナの息子は、この戦争を生きながらえるであろう。（一二）そしてバラタの雄牛よ、私はすべてのクル族とパーンダヴァ族の名声を広めるであろう。嘆くことはない。（一三）これは前から定められた運命である。それについて嘆くのは適切ではない。それを制止することはできない。法（ダルマ）（正義）があるところに勝利がある。（一四）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

クル族の曾祖父である尊者はこのように告げてから、更に勇士ドリタラーシトラに言った。（一五）

「大王よ、この戦争においては、大々的な滅亡があるであろう。私はこれらの危険を告げる

兆候を認めている。（一六）鷹、禿鷲、鴉、鷺（カンカ）、鳶（バラ）（異本では「鶴」）たちが、森に降りて、群をなしている。（一七）これらの鳥は、喜んで、非常に恐ろしい戦いを見下している。肉食の動物たちは象や馬の肉を食べようとしている。（一八）危険を知らせる鶴（カラヴァ）たちが、恐ろしく、カターカターと鳴いて、〔両軍の〕中間を、南方をめざして飛んで行く。（一九）バーラタよ、朝夕の薄明の時に、東山と西山にかかる太陽が諸々の〔首のない〕胴体におおわれているのを見る。（二〇）朝夕の薄明に、白と赤の両端を持ち、黒い首を持ち、稲光をともなう、三色の鉄棒が太陽をおおう。（二一）私は毎日のように、昼夜を分かたず、太陽や月や星々が燃え上がるのを見る。それは滅亡をもたらすであろう。（二二）カールッティカ月（十月―十一月）の満月の日に、月は光を失って見えなくなる。あるいは、火の色（異本は「〔紅〕蓮の色」）をした空で、月は火の色になる。（二三）勇猛な国王たち、王侯、王子たち、鉄棒のような腕を持つ英雄たちは殺されて、大地をおおって横たわるであろう。（二四）いつも夜な夜な、空中に、猪と猫が戦って恐ろしい叫び声をあげているのを認める。（二五）また神像がふるえ、笑い、口から血を吐き、汗をかき、倒れる。（二六）王よ、太鼓は打たれないのに鳴り、王侯の大きな戦車は、馬をつながれないのに動き出す。（二七）コーキラ（郭公）、シャタパトラ（キツツキ）、チャーシャ（カケス？）、バーサ（クイナ、または禿鷲？）、鸚鵡、サーラサ（鶴）、孔雀たちが恐ろしい声をたてる。（二八）武器をとり、鎧を着た騎兵たちが叫び声をあげる（異本による）。太陽が昇った時、蝗（いなご）の群が幾百となく認められる。（二九）朝夕の薄明は輝き、諸方が燃え上がる。血の雨と骨の雨が降る。バーラタよ。（三〇）王よ、三界に名高い、善き人々に尊敬される〔貞女〕アルンダティーですら、〔夫である〕ヴァシ

シタをないがしろにする。（三一）王よ、土星はあのようにローヒニー星を苦しめている。月の印がずれている。大きな危険があるであろう。（三二）雲もないのに絶えず非常に恐ろしい雷鳴が聞こえる。馬や象たちは嘆き、それらの涙の粒が落ちる。（三三）」

（第二章）

ヴィヤーサは続けた。

「牝牛に驢馬が生まれる。息子は母親と性交をする。森の樹々は季節はずれの花や実をつける。（二）妊娠した王女が、恐ろしい肉食の獣、鳥、ジャッカル、その他の獣を生む。（三）不吉な獣たちが生まれる。すなわち、三つの角を持つもの、四つの眼のもの、五足のもの、二つの男根を持つもの、二つの頭のもの、二本の尾のもの、牙を持つものたちである。彼らは口を開いて不吉な声を出している。また、三本足の冠毛と角がある馬が生まれる。（三―四）汝の都においては、ブラフマン（ヴェーダ）を唱える人々の妻たちが、ガルダ鳥や孔雀を生むのが認められる。（五）王よ、雌馬は仔牛を生み、雌犬はジャッカルを生み、シャーリカー鳥（サーリカー）はクラカラ（鷸鴒の類）を生む。そして孔雀は不吉な声で鳴く。（六）ある女たちは四、五人の娘を生む。娘たちは生まれたばかりで、踊り歌い笑う。（七）すべての低い階層の惨めな者たちが、笑い、踊り、歌う（異本による）。大きな危険を予告して……。（八）他の幼児たちは、カーラ（時間、破壊神）にかりたてられ、武器を持つ像を描き、棒を手に持ってお互いに駆け寄る。戦おうとして、〔偽の〕都城を作って攻囲する。（九）紅蓮（パドマ）、青蓮（ウトパラ）、睡蓮（クムダ）が樹木に咲く。恐ろしい暴風が吹く。ほこりは鎮まらない。（二〇）大地は絶えず震動する。またラーフ（日食を起こす悪魔）は太陽を呑む。また白い惑星（グラハ）（彗星の一つ）はチトラー星宿を通過して止まっている。（二一）これは特にクル族の滅亡を予見するものである。また非常に恐ろしい別の彗星（ドゥーマ・ケートゥ）がプシャ星宿を通過して止まっている。（二二）この大惑星は両軍に恐ろしい災いをもたらすであろう。火星はマガー星宿に、木星（ブリハスパティ）はシュラヴァナ星宿に逆行する。（二三）太陽の息子（土星）はバーギヤ星宿に近づいて苦しめる。王よ、金星（シュクラ）はプールヴァー・バードラパダー星宿に昇り、ウッタラー・バードラパダー星宿の方に動き、〔パリガという小惑星と〕ともに、〔そちらに移動しようと〕うかがっている。（二四）白い惑星（ケートゥ）は煙と火を出して燃え上がり、インドラに属するジェーシターという星宿を攻撃して止まっている。（二五）ドゥルヴァ（北極星）は恐ろしく燃え上がり、右の方に移動する。荒々しい惑星（ラーフ）はチトラーとスヴァーティの中間に位置を占めている。（二六）赤い天体（火星）は火のような輝きを放ち、何度も逆行を繰り返し、ブラフマラーシ（ブリハスパティ、すなわち木星か）を妨害して、シュラヴァナ星宿に位置する。（二七）

大地はありとあらゆる作物におおわれ、果実に満ちている。麦は五つの穂、米は百の穂をつけている。（二八）牝牛は全世界で最上の動物であり、この世界はそれに依存しているが、その牝牛が仔牛に乳をやる時、血を流出する。（二九）刀剣はひどく燃えて、鞘から飛び出る。明らかに武器たちは戦いが近づいたのを見る。（三〇）武器、水、鎧、旗の輝きは火の色のようである。大帰滅があるであろう。（三一）鳥獣は燃えるような口をして、方々歩きまわる。非常に恐ろしい大災害を示し、予告しつつ。（三二）一つの翼、眼、足を持つ鳥が夜中に空を

飛行し、怒って絶えず血を吐きながら、恐ろしい声で鳴く。（二三）赤銅色の先端を持つ二つの惑星が、高貴な七仙（北斗七星）の輝きをおおって燃えるかのように止まっている。（二四）燃える二つの惑星、すなわち木星と土星とは、二つのヴィシャーカの近くで、一年間も止まっている。（二五）激しい惑星（ラーフ）は、クリッティカー（すばる星団）における第一の星宿で燃え、その輝きでその星宿の美を奪って、彗星（ドゥーマ・ケートゥ）のように止まっている。（二六）王よ、前方の三つの星宿すべての中に、水星が絶えず入って行く（テクスト疑問）。それは非常に大きな危険を生じるものである。（二七）以前は新月の日は第十四日目か第十五日目か第十六日目であったが、今や不可解なことに、第十三日目である。（二八）月と太陽の両者は、一カ月の第十三日目に食を受ける。このように月相の変わり目でない時に食を受けることは、生類を滅亡させる。（二九）すべての方角はほこりにおおわれ、いたるところ塵の雨が降る。恐ろしい狂雲が夜中に血の雨を降らせる。（三〇）また黒月（黒分）の第十四日目に、非常におぞましい激しい肉の雨が降る。真夜中に、羅刹たちはそれを飲んでも満ち足りることはない。（三一）河川は血の水をたたえ、逆流する。井戸は泡立ち、雄牛のような音をたてる。流星はインドラの雷電のように輝き（異本による）、大音響をたてて落下する。（三二）（三三―四二略）バーラタよ、汝は以上のことを聞いて、この世界が全滅しないように、適宜に努力すべきである。（四三）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

このような父の言葉を聞いて、ドリタラーシトラは次のように言った。

「このことは前もって定められたことであると考える。疑いもなくそのようになるであろう。（四四）もし戦争において、王族たちが王族の法により殺されたとしても、彼らは英雄の世界に達して、無上の幸福を得るであろう。（四五）この人中の虎たちは、大戦争において生命を捨てて、現世においては名声を、来世においては長い間、大きな幸福を得るであろう。（四六）」

（第三章）

戦争に勝利する前兆

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

最高の王よ、聖仙（詩人）の王である聖者は、息子のドリタラーシトラに、このように真実に告げられて、非常に深く考えこんだ。（一）そしてその適切な時に語る大苦行者は再び言った。

「王中の王よ、疑いもなくカーラ（時間、破壊神）が世界を滅亡させる。（二）そして再び世界を創造する。この世には永遠のものは存在しない。クル族の親類縁者と友人たちに、法にかなった道を教えよ。お前は制止することができるから。親族を殺すことは卑しいことだと言われる。私に不快なことをしてくれるな。（三―四）王よ、カーラは今、お前の息子（ドゥルヨーダナ）の姿で生まれた。殺害はヴェーダにおいて讃えられない。それは決して有益なものではない。（五）一族

の法（ダルマ）を滅ぼす者は、自分の身体を滅ぼすであろう。お前は正道を歩めるのに（原文疑問）、カーラによって悪しき道をたどっている。（六）王国という姿をとって、不利益はこの一族と王たちを滅ぼす。不幸をもたらすその不利益を捨てるべきだ。（七）お前はこの上なく知性を失っている。息子たちに法を示しなさい。お前にとって王国が何になるか。無敵の者よ。それによってお前は災いに陥っているのだ。（八）誉れと法と名声を守れば、お前は天界に達するであろう。パーンダヴァたちは王国を得るべきである。クル族が平和になるように。（九）」

最高のバラモンがこのように告げた時、言葉を知るアンビカーの息子ドリタラーシトラは言葉を発し、次のように述べた。（一〇）

ドリタラーシトラは言った。

「あなたのお考えのように私も考えている。存在と非存在（存立と滅亡）についても、私は正しく知っている。しかしお父さん、世人は自分の利益については迷うものです。私も世人に他ならないと思って下さい。（一一）無比の力を持つあなたにお願いします。賢明なあなたは我々の寄る辺であり、教師である。大仙よ、息子たちは私の命令に従いません。そして私の理性は罪悪を犯すこともできないのです（異本を参照）。（一二）実にあなたは、法、浄化具、誉れ、名声、堅固（平静）、記憶（念）〔をもたらす者〕である。あなたはクル族とパーンダヴァ族とに尊敬される祖父である。（一三）」

ヴィヤーサは言った。

「ヴィチトラヴィーリヤの息子である王よ、お前の心にあることを望みのままに告げよ。私はお前の疑惑を断ってあげよう。（一四）」

ドリタラーシトラは言った。

「尊者よ、戦争に勝利する人々のすべての前兆を、正しく聞きたいと願います。（一五）」

ヴィヤーサは言った。

「火は上方に光を放ち、清浄に輝く。右まわりの火焔を有し、煙を出さない。献供の清浄な香りがする。これが来るべき勝利の前兆であると言われる。（一六）法螺貝と太鼓は深い音、大きな音で鳴る。太陽と月は清らかな光を放つ。これが来るべき勝利の前兆であると言われる。（一七）止まっている鴉と飛んでいる鴉が背後で好ましい声で鳴く。王よ、鴉が背後で鳴く時は進軍をうながし、前方で鳴く時は進軍を制止するものである。（一八）禿鷲、ラージャハンサ（鷲鳥の一種）、鸚鵡、クラウンチャ、シャタパトラ（キツツキ）が好ましい声で鳴き、右まわりにまわる時は、必ずや戦いに勝利するとバラモンたちは述べる。（一九）王たちの装飾、鎧、旗、金色に輝く顔色により、彼らの軍勢がまぶしく輝き、それを見ることが難しい場合、彼らは敵に勝利する。（二〇）兵士たちが喜びの声をあげ、勇気を持ち、その花輪がしおれない場合、彼らは戦いにおいて敵をうち破る。（二一）すでに〔敵との戦闘に〕入った者に好ましい言葉をかけ（異本による）、これから入ろうとする者に巧妙な言葉をかけること。前に制止して、後で目的を達成する（テクスト疑問）。（二二）彼らにとって、望ましい音声、形態（色）、味、接触、香りが現われ出ている場合、また、彼らの兵士たちが常に満足している場合、彼らの勝利は確定的である。（二三）順風が吹く。また、雲（異本は「太陽」）、鳥、〔瑞〕雲が後に従う。虹が出る。王よ、

以上は勝利する人々の前兆である。その逆は死に行く者たちの前兆である。(二四―二五) 軍隊が小さかろうと大きかろうと、兵士の群が歓喜していることが、唯一の勝利の前兆であると言われる。(二六) 一人の恐れる者が、大軍をも恐れさせる。最も勇猛な兵たちも、その恐れる者につられて恐れるのである。(二七) 大軍が破れたら、それを止めるのは最高に難しい。激流や恐れた鹿の群を止めがたいように。(二八) 大軍は壊滅した場合に立て直すことはできない。それが破られたということで、最も勇猛な兵たちも恐れる。うち破られ恐れた者たちを見て、恐怖は更に増大する。(二九) 王よ、大軍が敵にうち破られ、諸方に逃げ惑う時、勇士たちといえどもそれを制止することはできない。(三〇) 英明な王は、四部門よりなる大軍を召集し、方策(ウパーヤ)を前提として、常に精励し努力すべきである。(三一) 方策による勝利は最上であると言われる。離間による勝利は中位である。戦闘による勝利は最低である。王よ。戦争は大きな罪過を有する。それは最大の損失をともなうと言われる(異本による)。(三二) 五十人の勇士といえども、互いに他を知り、喜び勇み、執着を断ち、よく決定(けつじょう)していれば、大軍をも粉砕する。五、六、七名でも、退くことがなければ勝利する。(三三) ヴィナターの息子ガルダは、鳥の大群を見ても、群をなすことを好まなかった。バーラタよ。(三四) 軍隊の数が多いことによって勝利があるのではない。バーラタよ。勝利というものは不確定である。運命が拠り所である。戦いにおいては、勝利者もまた敗者となる。(三五)」

(第四章)

生物の種類と五元素

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ヴィヤーサは英邁なドリタラーシトラにこのように告げると立ち去った。ドリタラーシトラはそれを聞いて考え込んでしまった。(一) 彼はしばらく考えてから、何度もため息をつき、自己を制御したサンジャヤにたずねた。(二)

「サンジャヤよ、これらの戦いを好む勇猛な王たちは、種々の武器によりお互いに攻撃し合う。(三) 王たちは大地のために、生命を捨てて攻撃し合い、ヤマ(魔閻)の領土の人口を増大させ、静まることはない。(四) 彼らは大地の主権を望んで、お互いに我慢しない。大地は多くの属性を有すると私は思う。サンジャヤよ、それを私に告げてくれ。(五) 幾千、幾百万、幾千万、幾億の、世界的英雄たちがクルの未開地に集結している。(六) サンジャヤよ、これらの人々がそこからやって来た国々や都市の大きさ〔と位置〕を正しく聞きたいと思う。(七) あの無量の威光を持つ梵仙ヴィヤーサの恩寵により、そなたは神的な知性の灯明と、智慧の眼(天眼)をそなえているから。(八)」

サンジャヤは語った。――

大知者よ、私は能力が許す限り、大地の諸属性についてあなたに語るであろう。教典(シャーストラ)を

眼として、御覧下さい。バラタの雄牛よ、あなたに敬礼いたします。（九）

この世で、生類は二種である。すなわち、「動くもの」と「不動のもの」とである。「動くもの」の出生は三様である。すなわち、卵生、熱（湿）生、胎生である。（一〇）王よ、すべての「動くもの」のうちで最上のものが胎生である。胎生のうちの最上のものが人間と獣類である。（一一）それらは種々の形態をとるが、十四種類である。それらのうち七種類は森林に住み、七種類は人里に住む。（一二）獅子、虎、猪、水牛、象、熊、猿の七が森林に住むものとされる。王よ。（一三）牛、山羊、人間、羊、馬、騾馬、驢馬。これらの七は人里に住むものであると賢者たちに説かれる。（一四）王よ、以上がヴェーダに説かれる、人里または森林に住む十四種の動物である。それらにおいて祭祀が確立する。（一五）人里に住むものたちのうちでは人間が、森林に住むものたちのうちでは獅子が最上である。すべての生類は相互に依存して生活している。（一六）

「不動のもの」とは植物であると言われる。それらには五種類がある。樹木、灌木（グルマ）（クシャ、カーシャなどの茂み）、蔓植物（ラター）、蔓草（ヴァッリー）、竹類。以上が草〔木〕の種類である。（一七）〔以上、生類は〕十九種である。〔それらを含む世界は〕五元素よりなる。かくて合計二十四となる。これが世人に尊ばれるガーヤトリー（非常に神聖な讃歌。二十四シラブルからなる）であると言われる。（一八）バラタの雄牛よ、このすべての美質をそなえた神聖なガーヤトリーを真に知る者は、諸世界から滅することはない。（一九）すべてのものは大地に生じ、大地に滅する。生類にとって大地は拠り所である。大地のみが最高の寄る辺である。（二〇）大地を所有する者には、動不動の全世界が属する。王たちは大地を欲して、お互いに殺し合う。（二一）（第五章）

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、河川や山の名前、諸地方の名前、そしてその他の大地に依存するもの、そして大地の大きさ、森林、それらをすべて残らず語ってくれ。測量に通じたサンジャヤよ。（一―二）」

サンジャヤは語った。――

大王よ、世界に存するすべてのものは、要するに五元素〔からなり〕、均一であると賢者らは説く。（三）五元素は地、水、火、風、虚空（アーカーシャ、霊気）である。すべて〔前のものほど〕属性は一つずつ多い。それらのうちでは、地が最も主要である。（四）音声、接触、形態（色）、味、香。地にはこれらの属性があると、真理を知る聖仙たちは言う。（五）王よ、水には四属性がある。そこには香が存しない。火には音声、接触、形態という三属性がある。風には音声と接触、虚空には音声のみがある。（六）王よ、これらの五つの属性が五元素にある、つまり全世界に存する。それらにおいて諸世界は確立する。（七）世界が均一（平等、未分離）の状態にある時、それらは別個に存在しない。しかし、それらが相互に均等でない状態に入ると、別々の体をとるにいたり、別様ではなくなる（個々の性質を持つ）。（八）

元素は前から順に滅びる（地→水→火→風→空）。そして順を追って生ずる（空→風→火→水→地）。それらはすべて量ることができない。それらの本性は主に属する（すべてはブラフマンである）。(九)

いたるところに五元素よりなる個物（ダートゥ）が見られる。人間は推理によってそれらの量（大きさ）を考察する。(一〇) しかし思議できないものを推理によって証明しようとすべきではない。〔人間の〕本性を超えるというのが、不可思議なるものの定義である。(一一)

だがクルの王よ、私はスダルシャナ大陸（ドゥヴィーパ）についてあなたに語ろう。大王よ、この大陸は円形で、車輪の形をしている。(一二) それは河川におおわれ、雲のような山々、種々の形状の都市、快い地方におおわれている。(一三) 花と果実をつけた樹々におおわれ、財物に満ち、穀物に満ちている。周囲をすべて塩辛い海に囲まれている。(一四) 人が自分の顔を鏡に見るように、スダルシャナ大陸は月輪に〔影じて〕認められる。(一五) その二分の一はピッパラ樹であり、他の二分の一は大きな兎である。いたるところ、ありとあらゆる草木で取り巻かれている。それ以外は水であると知られるべきである。それについて簡潔に説く。(一六)

（第六章）

兎の形をした大地とメール山

ドリタラーシトラはたずねた。

「サンジャヤよ、大陸について言及したが、その詳細を告げてくれ。兎の形に見える部分に

大地の余地が認められるが、その大きさを言いなさい。それからピッパラ樹の部分について説明せよ。(一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

王にこのように問われて、サンジャヤは次のように語った。――

大王よ、東〔西〕に広がる六つの大山（テクストは「宝の山」。これらは「ヴァルシャの山」と呼ばれる）があり、東と西の両方の海にまで延びている。(二) すなわち、ヒマヴァット（ヒマーラヤ）、ヘーマクータ、最高の山ニシャダ、瑠璃よりなるニーラ、銀色に輝くシュヴェータ、一切の鉱脈におおわれた（異本による）シュリンガヴァット山である。(三) 王よ、これらの山にはシッダやチャーラナ（いずれも半神の一種）たちが住む。それらの間に介在するスペースは一千由旬（ヨージャナ）である。(四) そこに清浄な諸々の国土がある。パーラタよ、それらがヴァルシャ（一つの大陸の区域）である。それらにありとあらゆる多様な種類の生類が住む。(五)

〔我々が住む〕ここがパーラタ・ヴァルシャである。それから〔ヒマヴァットの北方にあるのが〕ハイマヴァタである。ヘーマクータ山から先がハリ・ヴァルシャと呼ばれる。(六)

大王よ、ニーラ山の南、ニシャダ山の北にあり、東〔西〕に広がる山がマーリヤヴァットという山である。(七) そのマーリヤヴァットの先に（北方に）ガンダマーダナ山がある。その両山の中央に、円形の黄金の山メールがある。(八) それは朝日のように輝き、煙のない火のようである。その深さは一万六千由旬であるとされる。(九) 高さは八万四千由旬である。王よ、

それは上方に、下方に（異本による）、水平に、諸世界をおおって立っている。（二〇）バーラタよ、メールの傍に四つの｜大陸《ドゥヴィーパ》が位置する。すなわち、バドラーシュヴァ、ケートゥマーラ、ジャンブー大陸、及び、福徳をなした者が住むウッタラ・クルである。（二二）そこにはスパルナ（金翅鳥）の息子であるスムカという鳥が住んでいるという。彼は〔メールにいる〕黄金の鳥たちを見て考えた。「メールでは、最上・中位・最低の鳥が区別できないから、私はそれを捨てよう」と。（二三）

天体の主である太陽は、常にそのメールを右まわりにまわっている。月と星宿と風神も同様にまわっている。（二四）大王よ、その山は神聖な花と果実に満ちている。すべて黄金よりなる美しい家におおわれている。（二五）王よ、神々の群が、ガンダルヴァ、｜阿修羅《アスラ》、羅刹、｜天女《アプサラス》、蛇（竜）とともに、その山で常に楽しんでいる。（二六）そこで、梵天、ルドラ（シヴァ）、神々の主シャクラ（インドラ）たちは集まって、種々の祭祀を行ない、多大の謝礼を払っている。（二七）トゥンブル、ナーラダ、ヴィシュヴァーヴァス、ハハーとフフー（二名のガンダルヴァの名。あるいは、ハーハとアーフフか。三・四四・一四参照）など、最高の神的な存在（神仙や半神）がやって来て、讃歌により〔メールを〕讃える。主よ。（二八）偉大な七仙（七人の聖仙、北斗七星）と造物主カシャパは、月相の変わり目ごとに、常にそこに行く。あなたに幸あれ。（二九）大王よ、その山頂で、ウシャナス・カーヴィヤ（シュクラ、悪魔たちの師）は悪魔たちと〔楽しんでいる〕。我々の見る宝物はその山に属し、諸々の宝の山はその山に帰属する。（三〇）クベーラ神（財宝の主、毘沙門天）はその四分の一を享受する。彼はその十六分の一の財宝を人間たちに与える。（三一）

そのメール山の北側にカルニカーラ森がある。その森は神聖で吉祥で、すべての季節の花が咲き、心地よく、岩石の集積が隆起している（テクスト疑問）。（二二）そこに、生類の創造主である尊い｜獣主《パシュパティ》（シヴァ）御自身が、神的な眷属たちに囲まれ、ウマー（パールヴァティー）をともなって楽しんでいる。（二三）彼は足まで届くカルニカーラの花環をかけ、昇る三つの太陽のような三つの眼で輝いていた。（二四）厳しい苦行を積み、よく誓戒を守り、真実を述べる｜成就者《シッダ》たちが彼を見る。というのは、行ないの悪い者たちは偉大な主を見ることができないから。（二五）

王よ、その山頂から美しい聖河ガンガー、別名バーギーラティーが、激しい勢いで美しいチャーンドラマス湖に流れ落ちる。その川の流れは乳のよう（白色）で、三十｜腕《バーフ》（長さの単位）ほどの量で（テクスト疑問）、恐ろしく激しい音をたて、最も清らかな者たちに｜嘉《よみ》されている。実にその海のような聖なる湖は、その川によって生じさせられた。（二六－二七）かつて偉大なる主（シヴァ）は、山々によっても支えがたいその川を、幾百千年（無限の時間）も頭で受け止めて来たのである。（二八）

王よ、メールの西側にケートゥマーラがある。まさにそこに、ナンダナ（歓喜園）のようなジャンブーシャンダがある。（二九）バーラタよ、そこでは寿命は一万年である。人々は黄金色で、女性は天女のようである。（三〇）そこでは人々は無病で、憂いを離れ、常に満足している。熱せられた（または、「磨かれた」）黄金のように輝いている。（三一）

ガンダマーダナ山の頂では、グヒヤカ（夜叉）の主であるクベーラが、羅刹とともに、天女の群に囲まれて楽しんでいる。（三二）ガンダマーダナの他の山麓には、別の山々がある。そ

こでは寿命は一万一千年である。(三三) 王よ、そこでは人々は黒色で（異本は「喜び」）、威光をそなえ強力である。女性は蓮弁のようで、すべて非常に美形である。(三四)

ニーラの彼方がシュヴェータ〔ヴァルシャ〕である。シュヴェータの彼方（北方）がハイラニヤカ（ヒラニヤカ）である。シュリンガヴァットの彼方がアイラーヴァタというヴァルシャである。(三五) 大王よ、最南（バーラタ）と最北（アイラーヴァタ）の二つのヴァルシャは弓の両端に当たる。中間にイラーヴリタ〔などの〕五つのヴァルシャがある（合計七ヴァルシャ）。(三六) これらのヴァルシャは、北に行くほど諸々の美質の点で優れている。すなわち、寿命、身長、健康、徳性（ダルマ）、享楽（カーマ）、実利（アルタ）〔は北ほど勝る〕。(三七)

バーラタよ、それらのヴァルシャでは、諸生物は共存している。大王よ、以上のように大地は山々でおおわれている。(三八) 大山ヘーマクータはカイラーサとも呼ばれる（ここではこれらの二つの山は同一視されている）。ヴァイシュラヴァナ（クベーラ）王はそこでグヒヤカ（夜叉）たちと楽しむ。(三九) カイラーサ山の北側、マイナーカ山の方に、神聖で宝玉よりなるヒラニヤシュリンガという大山がある。(四〇) その山の傍に、非常に神聖で美しく、金の砂がある心地よいビンドゥサラス湖がある。そこでバギーラタ王は、〔天上の〕ガンガー（ガンジス）を見て長い間〔苦行をして〕住んでいた。(四一) そこに、宝玉でできた祭柱と、黄金製の祭場がある。誉れ高い千眼者（インドラ）は、そこで祭祀を行なって成就に達した。(四二) そこで激しい威光を有する永遠なる生類の主（シヴァ）は、全世界を創造して、眷属である鬼神たちに囲まれてかしずかれている。そこには、ナラとナーラーヤナ、梵天、マヌ、スターヌ（シヴァ）の五名がいる。(四三) 三つの流れを持つガンガーの女神は梵界から流出し、最初はそこに位置し、そして七様に分かれる。(四四) すなわち、ヴァスヴォーカサーラー、ナリニー、浄化するサラスヴァティー、ジャンブーナディー、シーター、ガンガー、シンドゥの七である。(四五) (四六—四九略)

大王よ、以上七つのヴァルシャを一つずつ説明した。動不動の生物はそこに住む。(五〇) 彼らに、多様な神的・人的な富貴が認められる。それらを数えあげることはできないが、しかしそれを享受しようとする者はそれを望むべきである。(五一)

王よ、あなたは私に兎の形をした神聖な地域についてたずねた。「兎」の両脇は、南北の二つのヴァルシャである。しかるにその両耳は、ナーガ大陸（ドゥヴィーパ）とカシャパ大陸とである。(五二) 王よ、銅色の石を有する（異本による）マラヤ山〔の地域〕は、兎の形をした、大陸の第二の部分であると認められる。(五三)

(第七章)

ウッタラ・クル、ジャンブー樹など

ドリタラーシトラは言った。——

「大知者サンジャヤよ、メールの北側と東側について、またマーリヤヴァット山について、すべて語ってくれ。(一)」

サンジャヤは語った。——

王よ、ニーラの南、メールの北側に、シッダ（半神または成就者）の住む神聖なるウッタラ・クルがある。(二) そこでは樹々は甘い果実をつけ、常に花と果実におおわれている。花々はよい香りがし、果実は美味である。(三) 王よ、ある種の樹々はすべての願望をかなえる。王よ、他の樹々はクシーリン（「乳を出す」という意）という名である。(四) それらは常に、甘露のような六味の乳を流す。それらは果実の中に、装飾品と衣服とを生み出す。(五) すべての土地は宝玉でできていて、繊細な金の砂に満ちている。王よ、いたるところ快い感触で、泥濘がない。(六) 天界から堕ちたすべての人々がそこに生まれる。彼らは平坦地においても非平坦地においても（テクスト疑問）、等しい容姿と徳性をそなえている。(七) そこでは〔男女の〕双子たちが生まれる。女性は天女のようである。彼らは甘露のようなクシーリン樹の乳を飲む。(八) 双子が生まれ、まったく等しく成長する。双子は等しい容姿と徳性をそなえ、等しい衣裳をつける。チャクラヴァーカ鳥（夫婦仲がよいことで知られる）のように、一人一人愛し合う。王よ。(九)

人々は無病で憂いを離れ、常に満足している。大王よ、彼らは一万一千年生き、お互いに捨てることはない。(一〇) 鋭い嘴を持つ強力なバールンダという鳥たちが、死んだ者たちを運び、峡谷に投下する。(一一) 王よ、私はあなたに、ウッタラ・クルについて手短かに説明した。次に私は、メールの東側について正しく述べるであろう。(一二)

王よ、主要な地がバドラーシュヴァであり、そこにバドラサーラの森があり（異本を参照した）、そこにカーラームラ（マンゴーの一種）という大樹がある。(一三) 大王よ、このカーラームラは美しく、常に花と果実をつけている。その樹は（異本による）、一由旬の高さで、シッダとチャーラナ（いずれも半神の種類）がそこに住んでいる。(一四) そこに住む人々は白色で、威光をそなえ、強力である。女性は睡蓮の色（白色）で、美しく、見目麗しい。(一五) 月のように輝き、月のような色をして、満月のような顔をしている。月のように清涼な肢体を持ち、舞踊と歌に秀でている。(一六) バラタの雄牛よ、そこでは寿命は一万年である。彼らはカーラームラの液を飲み、常に若さを保っている。(一七) ニーラの南、ニシャダの北に、スダルシャナという永遠なるジャンブー（閻浮樹）の巨木がある。(一八) その樹はすべての願望をかなえ、神聖で、シッダやチャーラナがそこに住む。永遠なるジャンブー大陸（閻浮提）は、その樹の名前にちなんでつけられた。（この記述から、スダルシャナ大陸はジャンブー大陸と同じであることがわかる）(一九) バラタの雄牛よ、その樹の王の高さは千百由旬で、天に届くほどである。王よ。(二〇) その樹の熟した果実の円周は、二千五百腕尺（一アラトニは肘から小指の先までの長さ）である。(二一) それらは地面に落ちると大音響をたてる。そして王よ、そこで銀のような液を流出する。(二二) 王よ、そのジャンブーの果汁は川となって、メール山を右まわりにまわって、ウッタラ・クルに流れ込む。(二三) 王よ、人々は常に喜んでその液を飲む。その果実の液を飲むと、人々は老いることがない。(二四) そこにあるジャーンブーナダと呼ばれる黄金は神々の装飾〔として用いられる〕。そこに生まれる人々は、朝日のような色をしている。(二五)

バラタの雄牛よ、マーリヤヴァットの峰には、サンヴァルタカという名の終末の火が燃えている。(二六) マーリヤヴァットの東峰には、山々が連なる（テクスト疑問）。マーリヤヴァットは高さ五万由旬である。(二七) そこに生まれる人々は黄金のような〔色〕である。彼らはすべて

梵界（ブラフマローカ）から堕ちた人々で、すべてブラフマン（ヴェーダ）を唱える人々（バラモン）である。（二八）彼らは苦行を行じ、精を漏らすことはない。生類を守るために、彼らは太陽に入る。（二九）その数は六万六千で、太陽を取り囲んで、アルナ（暁光）の前を進む。彼らは六万六千年の間、太陽の熱に熱せられ、そして月輪に入る。（三〇）

（第八章）

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、諸ヴァルシャの名前、山々の名前、そして山々に住む者たちについて、正しく告げてくれ。（一）」

サンジャヤは語った。――

シュヴェータの南、ニーラ（異本はニシャダ）の北は、ラマナカというヴァルシャである。そこに生まれる人々は白色で、すべて血統がよく、非常に見目麗しい。またそこに生まれる人々は、専ら快楽を重んじる。（二―三）王よ、彼らは常に満足し、一万一千五百年間生きる。（四）シュリンギン（シュリンガヴァット。異本はニーラ）の南、シュヴェータ（異本はニシャダ）の北は、ハイランヴァタ（ヒランヴァアク、異本はヒランマヤ）というヴァルシャである。そこにハイランヴァティーという川が流れている。（五）大王よ、そこの住人は夜叉（ヤクシャ）を従者とし、富裕で、見目麗しく、強力であって、王よ、常に満足している。（六）王よ、彼らは一万二千五百年間生きる。それが寿命である。（七）

王よ、シュリンガヴァットには三つの峰がある。一つは宝玉からなる。もう一つは黄金からなり、驚異的である。（八）もう一つはすべての宝物よりなり、家々により飾られている。そこに、自ら輝く女神シャーンディリーがいつも住んでいる。（九）

王よ、シュリンガ〔ヴァット〕の北方、海に至るまでがアイラーヴァタというヴァルシャである。シュリンガヴァットの彼方では、太陽は熱することなく、人々は老いることはない。星々をともなう月だけが天体である（テクスト疑問）。（二〇―二一）そこに生まれる人々は、蓮花の輝きと蓮花の色を持ち、蓮弁のような眼をして、蓮弁のように芳しい。（二二）彼らはふるえることなく（異本は「汗をかくことなく」？）、よい香りで、食事をせず、感官を制している。王よ、すべては天界より堕ちた人々で、汚れを離れている。（二三）王よ、彼らは一万三千年間生きる。バラタの最上者よ、それが寿命である。（二四）

乳海の北に、最高の主ハリ・ヴァイクンタ（ヴィシュヌ）が、黄金の車の上に住んでいる。（二五）その乗物は八つの車輪をそなえ、眷属たちを乗せ（テクスト疑問）、思考のように速い。火のような色をし、非常に高速で、ジャーンブーナダ（最高の黄金）で飾られている。（二六）バラタの雄牛よ、彼は一切の生類の主で、遍在者である。〔世界を〕回収する（破壊する）〔者〕であり、開展する〔者〕である。創造者であり、創造せしめる者である。（二七）王よ、彼は地、水、空、風、火である。彼は一切の生類にとって祭祀（ヤジュニャ）である。火は彼の口である。（二八）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

王よ、偉大なドリタラーシトラ王は、サンジャヤにこのように告げられて、息子のことについて考えこんだ。（二九）大王よ、彼は考えてから再び言った。
「スータの息子（サンジャヤ）よ、疑いもなくカーラ（時間、破壊神）が世界を回収する（滅ぼす）。そしてまた創造する。この世ではすべては無常である。一切知であるナラとナーラーヤナとが、すべての生類を支える（異本は、「滅ぼす」）。神々はそれがヴァイクンタであると言う。諸ヴェーダ（異本は「人々」）はヴィシュヌであると説く。（三〇）」

（第九章）

バーラタ・ヴァルシャ（インド亜大陸）

ドリタラーシトラは言った。
「今この軍隊は、バーラタ・ヴァルシャにおいて満ちあふれている。私の息子であるドゥルヨーダナはそこを切望している。（一）パーンドゥの息子たちもそこを切望している。そして私の心はそれに執着している。それについて私に正しく告げてくれ。サンジャヤよ、そなたは賢明であるから。（二）」
サンジャヤは語った。——
パーンダヴァたちはそこを切望しない。王よ、私の申し上げることを聞いて下さい。ドゥルヨーダナとシャクニがそこを切望しているのだ。（三）そして他の諸国の主である王族（クシャトリヤ）たちも切望している。バーラタ・ヴァルシャを切望する人々は、相互に許容し合わない。（四）バラタ族の王よ、私は今、バーラタ・ヴァルシャについてあなたに語ろう。それはインドラ神と、ヴィヴァスヴァットの息子であるマヌにとって愛しい地である。（五）王よ、プリトゥ、ヴァイニヤ、偉大なイクシュヴァーク、ヤヤーティ、アンバリーシャ、マーンダートリ、ナフシャ、（六）ムチュクンダ、ウシーナラの息子シビ、リシャバ、イラ、ヌリガ王、（七）大王よ、その他のすべての強力な王族にとっても、バーラタ（ヴァルシャ）は愛しい。王中の王よ、バーラタよ。（八）敵を制する者よ、そこで私はそのヴァルシャについてあなたに語ろう。あなたが私にたずねたことについて答えるので、私の言うことをお聞きなさい。（九）

マヘーンドラ、マラヤ、サヒヤ、シュクティマット、リクシャヴァット、ヴィンディヤ、パーリヤートラ。以上が七つの主要山脈（クラ）である。（一〇）王よ、それらの周辺に、重要で多彩な尾根を有する有名な高山がある。（一一）その他にも、有名でない小さな山々があり、そこには部族民たちが住む。クルの王よ、アーリヤ族、ムレーッチャ族（異民族）、及びそれらの混血である多様な人々は、川の水を飲む。すなわち、ガンガー（ガンジス）、シンドゥ、サラスヴァティー、ゴーダーヴァリー、ナルマダー、大河バーフダー、（一二—一三）ドリシャッドヴァティー、ヴィパーシャー、ヴィパーパー、ストゥーラヴァールカー、（一四）ヴェートラヴァティー、クリシュナヴェーナー川、イラーヴァティー、ヴィタスター、パヨーシュニー、デーヴィカー、（一五）ヴェーダスムリティ、ヴェータシニー、トリディヴァー、イクシュマーリニー、カリーシニー、チトラヴァハー、チトラセーナー川、（一六）ゴーマティー、ドゥータ

パーパー、大河ヴァンダナー、カウシキー、トリディヴァー、クリティヤー、ヴィチトラー、ローハターリニー、（二七）ラタスター、シャタクンバー、サラユー、チャルマンヴァティー、ヴェートラヴァティー、ハスティソーマー、ディシュ、（二八）シャターヴァリー、パヨーシュニー、パラー、パイマラティー、カーヴェーリー、チュルカー、ヴァーピー、シャタバラー、（二九）ニチーラー、マヒター、スプラヨーガー、パヴィトラー、クンダラー、シンドゥ、ヴァージニー、プラマーリニー。（三〇）（三一—三五略）また、これほど有名でない川は幾百、幾千とある。王よ、以上聖伝書（スムリティ）にもとづいて河川が列挙された。（三六）次に地方（国土）について述べるから聞きなさい。

クルとパーンチャーラ、シャールヴァ、マードレーヤ、ジャーンガラ、（三七）シューラセーナ、カリンガ、ボーダ、マウカ、マツヤ、スクティー（または、スクティヤ）、サウバリヤ、クンタラ、カーシとコーシャラ、（三八）チェーディとヴァッツァ、カルーシャ、ボージャ、シンドゥとプリンダカ、ウッタマウジャ（テクスト疑問）、ダシャールナ、メーカラ、ウトカラ、（三九）パーンチャーラ、カウシジャ、エーカプリシタ、ユガンダラ、サウダ、マドラ、ブジンガ、カーシ、アパラカーシ、（四〇）ジャタラ、クックシャ、スダーシャールナ、クンティ、アヴァンティ、アパラクンティ、（四一）ゴーヴィンダ、マンダカ、シャンダ、ヴィダルバ、アヌーパヴァーシカ、アシュマカ、パーンスラーシトラ、ゴーパラーシトラ、パニータカ。（四二）（四三—七四略）

（第十章）

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、このバーラタ・ヴァルシャとハイマヴァタ（ヒマヴァット）・ヴァルシャにおける寿命、善悪の果報、未来・過去・現在について、私に詳細に述べよ。同様に、ハリ・ヴァルシャについても。（一—二）」

サンジャヤは語った。——

バラタの雄牛よ、バーラタ・ヴァルシャには四つのユガ（宇宙紀）がある。すなわち、クリタ、トレーター、ドゥヴァーパラ、プシュヤ（カリ）である。クルの王よ。（三）王よ、まず第一はクリタ・ユガで、次がトレーター・ユガである。ドゥヴァーパラが終わった後はプシュヤになる。（四）

クルの最上者よ、クリタ・ユガにおいては、寿命は四千年である。最高の王よ。（五）また王よ、トレーターにおいては、寿命は三千年である。ドゥヴァーパラにおいては二千年であり、現在（プシュヤ）は百年である。（六）しかしバラタの雄牛よ、このプシュヤにおいては寿命の長さは確定していない。ここでは胎内にいる者も死に、生まれてすぐに死ぬ場合もある。（七）

王よ、クリタにおいては、強力で純質に満ち、子宝にめぐまれ、苦行を積んだ聖者（ムニ）たちが生まれた。（八）王よ、クリタ・ユガにおいては、気力に満ち、偉大で徳性あり、真実を語り、

富裕で、見目麗しい人々が生まれた。（九）トレーターにおいては、長寿で、偉大な勇士で、戦いにおいて最上の弓取りであり、勇猛な転輪王（チャクラヴァルティン）である王族が生まれる。（一〇）大王よ、ドゥヴァーパラになると、気力に満ち、強力で、相互に殺し合うことを望む、すべての種姓の人々が生まれる。（一一）バラタ族の王よ、プシュヤにおいては、わずかな威光をそなえ、怒りっぽく、貪欲で、嘘をつく人々が生まれる。（一二）王よ、プシュヤにおいては、人々に嫉妬、高慢、怒り、詐術、妬み、欲望、貪りが存する。バーラタよ。（一三）王よ、このドゥヴァーパラにおいては、破滅が存する（テクスト疑問）。ハイマヴァタ（ヒマヴァット・ヴァルシャ）は美質に関して〔バーラタ・ヴァルシャよりも〕優れ、ハリ・ヴァルシャはそれよりも優れている。（一四）

（第十一章）

(62) 地上界〔諸大陸の詳説〕（第十二章―第十三章）

シャーカ大陸について

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、そなたはジャンブー大陸（カンダ）について適切に語った。次はその広さ（径直）と大きさを正しく語れ。（一）漏れなく観察するサンジャヤよ、そして海の大きさ、そしてシャーカ大陸（ドゥヴィーパ）、クシャ大陸について正しく語れ。（二）またシャールマラ大陸、クラウンチャ大陸について正しく語れ。ガヴァルガナの息子よ、ラーフ（日食月食の悪魔）、ソーマ（月）、太陽についてすべて述べよ。（三）」

サンジャヤは語った。——

王よ、この世界をおおう非常に多くの島があるが、七つの大陸だけについて述べよう。また月と太陽と惑星（グラハ）について述べよう。（四）

王よ、ジャンブ山は広さ（径直）一万八千六百由旬（ヨージャナ）である。（五）塩海の広さ（径直）はその二倍であるとされる。海は様々な国土（ジャナパダ）に満ち、宝玉や珊瑚で飾られている。（六）海は多くの鉱脈で多彩な山々に飾られ、シッダやチャーラナ（いずれも半神の種類）に満ち、円形である。（七）

王よ、今度はシャーカ大陸について正しく述べるであろう。クルの王よ、私は適切に語るからお聞きなさい。（八）王よ、その大陸はジャンブー大陸の大きさの二倍である。そして大

王よ、海の広さ（径直）も二倍である。バラタの最上者よ、〔その大陸は〕海に取り囲まれている。（九）そこには清らかな地方（土国）がある。そこに住む人々は死なない。どうして飢饉があろうか。彼らは忍耐力と威光をそなえている。（一〇）バラタの雄牛よ、シャーカ大陸について適切に簡潔に述べた。大王よ、他に何を聞きたいと望むか。（一一）

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、あなたはシャーカ大陸について適切に簡潔に述べた。気高い者よ、正しく詳細に述べよ。（一二）」

サンジャヤは語った。——

王よ、その大陸には、宝玉で飾られ宝物に満ちた七つの山がある。また諸々の川がある。私はそれらの名前を言うから聞きなさい。王よ、そこではすべてが非常な美質をそなえ、清浄である。（一三）

メールは神々や聖仙やガンダルヴァの住む最高の山であると言われる。大王よ、東方に広がる山脈がマラヤという山である。そこから雲が生じ、いたるところに広がる。（一四）クルの王よ、その向こうはジャラダラという大山である。そこでインドラは常に、最高の水を得る。王よ、それから雨季に雨が生じるのである。（一五）次は高山ライヴァタカである。そこの天空に、レーヴァティーという星宿が常に位置している。これは梵天が定めたことである。

（二六）王中の王よ、その北にシュヤーマ（「黒ずんだ色」という意）という大山がある。王よ、そこでそこに住む人々も黒ずんだ色となった。（二七）

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、今そなたが言ったことについて、非常に大きな疑問が生じた。そこの住民はどうして黒ずんだ色なのか。（二八）」

サンジャヤは語った。——

大知者であるクルの王よ、すべての大陸において、住民は白色か黒色であるか、その二つの中間である。（二九）ところがシュヤーマ山に住むから彼らは黒ずんだ色である（テクスト疑問。注釈を考慮して訳した）。そこに尊者クリシュナ（「黒色」という意）が住むから、その光沢により黒ずんだ色になった（批判版によるも、疑問の読み）。（三〇）

クルの王よ、その彼方にドゥルガシャイラという大山がある。〔その次が〕ケーサリン（異本は「ケーサラ」）で、そこからケーサラ（花の名。または花糸）をともなう風が吹く。（三一）それらの山の広さ（直径）は、それぞれ直前のものの二倍である。クルの王よ、それらには七つのヴァルシャがある（異本による）と賢者たちに言われる。（三二）

マハーメール〔のヴァルシャ〕はマハーカーシャである。水をもたらすもの（マラヤ）〔のヴァルシャ〕はクムドーッタラである。王よ、ジャラダーララーの彼方がスリマーラであると

される。（二三）ライヴァタカの〔ヴァルシャ〕がカウマーラである。シュヤーマの〔ヴァルシャ〕がマニーチャクラである。ケーサラの〔ヴァルシャ〕がモーダーキンである。その彼方がマハープマーンである。（二四）（二五略）（テクスト疑問）大王よ、その大陸の中央にシャーカという名の大樹がある。そこには清浄なる国土《ジャナパダ》があり、そこではシヴァが崇拝されている。（二六）シッダ、チャーラナ、神々がそこを訪れる。バラタ族の王よ、そこに住む四姓よりなる人々は非常に徳性がある（法《ダルマ》を守る）。（二七）四姓は自己の仕事に専念し、そこには偸盗は見られない。大王よ、人々は長寿で、老いること死ぬことがない。（二八）そこに住む人々は、雨季の川のように増大する。そこでは河川は清浄な水をたたえ、ガンガー（ガンジス）は多様な水流を有する。（二九）クルの王よ、すなわちスクマーリー、クマーリー、シーター、カーヴェーラカー、マハーナディー、マニジャラー川、イクシュヴァルダニカーである。バラタの最上者よ。（三〇）クルの一族を担う者よ、それから清浄な水をたたえた何万という河川が流れる。そこからインドラは雨を降らせる。（三一）それらの川の名前と大きさを列挙することはできない。実にそれらは清浄で最高の川である。（三二）

そこには世人に尊敬される四つの清浄な国土がある。すなわち、マガ、マシャカ、マーナサ、マンダガである。（三三）王よ、マガには主として自己の仕事に専念するバラモンたちがいる。またマシャカには、すべての願望をかなえる徳高い王族たちがいる。（三四）大王よ、マーナサには、それぞれの仕事で生活する実業者《ヴァイシャ》たちがいる。彼らは一切の願望を満たされ、勇猛で、法《ダルマ》と実利《アルタ》に専念している。マンダガには、常に法を守るシュードラ（従僕の階層）の人々

がいる。(三五) 王中の王よ、そこには国王もなく、刑罰も罰する者もいない。人々は自己の義務(スヴァダルマ)によりお互いに法を守る。(三六) その大陸についてはこれだけのことを言うことができる。栄光あるシャーカ大陸についてこれだけのことが聞かれるべきである。(三七)

（第十二章）

北方の諸大陸

サンジャヤは語った。――

クルの大王よ、北方の諸大陸(ドゥヴィーパ)について説かれていることを、聞いた通りに申し上げるからお聞きなさい。(一) そこにはグリタ(ギー。バター状の乳製品)の水をたたえた海と、ダディ(ヨーグルト状の乳製品)の水をたたえた海がある。酒(スラー)の水の海もあり、また熱い海もある。(二) 王よ、大陸の大きさはすべて、それぞれ〔北に行くほど〕二倍ずつ増す。大王よ、それらは一面に山々におおわれている。(三) 真中の大陸にはガウラという赤砒素〔でできた〕大山がある。王よ、西方の山はクリシュナで、ナーラーヤナ神(クリシュナと同一視される)のような姿をしている。(四) そこでクリシュナ自身が神聖な宝物を守っている。彼はそこで満足し(異本による)、生類に幸福を授ける。(五) クシャ大陸においては、地方(土国)の中央にクシャの草むらがある。シャールマリカ大陸においては、シャルマリ樹が尊崇されている。(六) 大王よ、クラウンチャ大陸においては、莫大な宝物を蔵するマハークラウンチャ山が、四姓の人々に常に尊崇されている。(七) 王よ、そこにはすべての鉱脈を有するゴーマンダという非常に大きい山がある。蓮の眼をした栄光ある主、ナーラーヤナ・ハリ(ヴィシュヌ)がいつもそこに住み、解脱(げだつ)を望む人々に常に讃えられている。(八)

王中の王よ、クシャ大陸にはスダーマンという第二の山がある。この山は珊瑚におおわれ、侵しがたい黄金の山である。(九) クルの王よ、クムダという光り輝く第三の山がある。第四はプシュパヴァットであり、第五はクシェーシャヤである。(一〇) 第六はハリギリである。これらの六つの最高の山がある。それらの間隔は、〔北に行くほど〕二倍ずつ増える。(一一) 第一のヴァルシャはアウドビダ、第二はヴェーヌマンダラ、第三はラターカーラ、第四はパーラナであるとされる。(一二) 第五のヴァルシャはドリティマット、第六のヴァルシャはプラバーカラ、第七のヴァルシャはカーピラである。以上の七がヴァルシャの群である。(一三) 王よ、これらにおいて、神々、ガンダルヴァ、その他の生類は時を過ごし楽しんでいる。それらにおいて、人々は死ぬことはない。(一四) 王よ、それらには盗賊も異民族(ムレーッチャ)もいない。王よ、その住民は大部分白色であり、非常に繊細である。(一五) 王よ、その他のヴァルシャについて、私の聞いた通りに述べるであろう。大王よ、注意深くお聞きなさい。(一六)

大王よ、クラウンチャ大陸には、クラウンチャという大山がある。クラウンチャの彼方がヴァーマナカである。ヴァーマナカの彼方がアンダカーラカである。(一七) 王よ、アンダカーラ〔カ〕の彼方にマイナーカという最高の山がある。王よ、マイナーカの彼方に、ゴーヴィンダという最高の山がある。(一八) 王よ、ゴーヴィンダの彼方にニビダという山がある。

家系を栄えさせる者よ、それらの間隔は先に行くほど二倍ずつ増す。（一九）

私はそこにおける国々について述べよう。申し上げますからお聞きなさい。

クラウンチャにはクシャラという国がある。ヴァーマナにはマノーヌガがある。（二〇）クル族の王よ、マノーヌガの彼方はウシュナ国である。ウシュナの彼方はプラーヴァラカである。プラーヴァラ〔カ〕の先はアンダカーラカである。（二一）アンダカーラカ国の彼方はムニデーシャであるとされる。ムニデーシャの彼方はドゥンドゥビスヴァナであると言われる。（二二）王よ、そこはシッダやチャーラナに満ち、住民は大部分白色である。大王よ、以上の国々には神々やガンダルヴァたちが住む。（二三）

プシュカラ〔大陸〕には、宝玉や宝物を蔵するプシュカラという山がある。そこには、造物主である神（梵天）御自身がいつも住んでいる。（二四）王よ、すべての神々は、大仙たちとともに、心地よい言葉で讃えつつ、常にその神に仕えている。（二五）それらのすべての大陸の住民たちは、ジャンブー大陸に産する種々の宝物を所有する。（二六）バラモンたちは、梵行（清浄行）、真実、自制、健康、寿命、大きさに関して、〔北に行くほど〕二倍ずつ勝る。（二七）

バラタ族の王よ、これらの大陸においては、一つの国土しかない。というのは、そこにおいて一つの法が見られるところのものが「国土」と呼ばれるから。（二八）造物主である主宰神が自ら刑罰（王杖）を振り上げて、常にそれらの大陸を守っている。大王よ。（二九）王よ、彼は王であり、吉祥であり、父であり、祖父である。最高の人よ、彼は愚者と賢者を含む住民（生類）を守っている。（三〇）クルの大王よ、そこでは住民は常に自ずから訪れる調理された

食物を食べる。（三一）

大王よ、その彼方に、サマーという世界が認められる。それは四角形（注釈によれば、四弁の蓮花の形）で、三十三の輪円を〔有する〕。（三二）クルの王よ、バラタの最上者よ、そこにヴァーマナやアイラーヴァタなどの、世間で敬われる四頭の方位象がいる。またスプラティーカという、こめかみから分泌液を流す象もいる。（三三）私はここでその大きさを計算することはできない。横にも上にも下にも、それは決して計量できないから。（三四）

大王よ、そこでは風は妨げられることなく一切の方角から吹く。大王よ、その象たちは鼻の先によって風を受け止める。それらの鼻の先は蓮花のようで、美しく、強い輝きを放つ。そして彼らはいつも、速やかにその風を再び吐き出す。（三五―三六）大王よ、息を吐く方位の象たちによって放たれる風は、この世界に達し、それで生類は存続する。（三七）

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、あなたは最初のことについて非常に詳細に述べた。大陸の構成についても説いた。サンジャヤよ、残りの問題について述べよ。（三八）」

サンジャヤは語った。――

大王よ、諸大陸については述べた。惑星について私の言うことを如実にお聞きなさい。またスヴァルバーヌ（ラーフ）についても。その力に関して……。クル族の最上者よ。（三九）スヴァ

ルバーヌという惑星は球形であるという。その広さ（直径）は一万二千由旬（ヨージャナ）である。（四〇）その円周の長さは四万二千由旬（円周率はおよそ3.5と考えられていたようである）であると古伝承（プラーナ）を知る賢者たちは説く。非の打ち所のない王よ。（四一）ところで王よ、偉大な月は直径一万一千由旬であるとされる。クルの最上者よ、また月の円周の長さは三万八千九百由旬であるとされる。（四二）クルの王よ、最高に気高いこの太陽の直径は一万由旬である。その円周の長さは三万五千八百由旬であるという。非の打ち所のない王よ。バーラタよ、以上、太陽の大きさが示された。（四三―四四）

そのラーフ（スヴァルバーヌ）は大きいので、定期的に月と太陽と両者をおおい隠す。大王よ、それが食と呼ばれる。（四五）

大王よ、私は論書（シャーストラ）の眼により、あなたの問いにすべて如実に答えました。心安らかになって下さい。（四六）私は示された通りに世界とその創造（異本による）について説きました。それ故クルの王よ、息子のドゥルヨーダナに関する〔悩みから離れ〕安らかになりなさい。（四七）

バラタの最上者よ、この心地よい「地上界の章（ブーミパルヴァン）」を聞くやいなや、王族は目的を成就し、善き人々に敬われ、栄光あるものとなる。彼の寿命、力、気力、威光は増大する。（四八）王よ、誓戒を守り、月相の変わり目ごとにこれを聞くならば、その人の父祖は喜ぶ。（四九）我々がそこに住んでいるこのバーラタ・ヴァルシャと、〔この章を聞く〕福徳について（テクスト疑問）、あなたはすべて聞いた。（五〇）

（第十三章）

(63) バガヴァッド・ギーター（第十四章―第四十章）

ビーシュマは何故シカンディンに倒されたか

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
一切を目のあたりに見る、過去と現在と未来を知る、ガヴァルガナの息子である賢明なサンジャヤは、戦場からもどって来た。(一) 彼は悩み、物思いにふけっているドリタラーシトラに急いで近づいて、バラタ族の無比の勇士ビーシュマが倒されたことを告げた。(二)
「大王よ、私はサンジャヤです。バラタの雄牛よ、敬礼いたします。シャンタヌの息子、バラタ族の祖父ビーシュマが倒されました。(三) 一切の戦士の最上者、一切の弓取りの拠り所であるあのクル族の祖父が、今、矢の床の上で横たわっています。(四) あなたの息子はビーシュマの力を頼って賭博をやった。王よ、そのビーシュマは、シカンディンに倒されて、戦場に横たわっています。(五) その偉大な戦士ビーシュマは、カーシの都で、ただ一騎で、すべての集結した王たちに激戦において勝利しました。(六) ヴァス神から生まれたビーシュマは、戦場でジャマダグニの息子ラーマ(パラシュラーマ)と戦って、ラーマに殺されなかった。その彼が今日、シカンディンに倒されました。(七) ビーシュマは勇武にかけて大インドラに等しく、確固たることにかけてヒマーラヤに等しく、深さの点で海のようであり、忍耐にかけて大地に等しい。(八) 矢が歯であり、弓が口であり、刀が舌である、無敵の人獅子、そのあなたの父が、今日、パーンチャーラの王子(シカンディン)によって倒されました。(九) パーンダヴァの

大軍は、戦場で身構えるビーシュマを見て、牛の群が獅子を見るように恐怖にかられて戦慄(おのの)く。(一〇) 敵を殺すビーシュマは、あなたの軍隊を十日のあいだ守って、なしがたい行為をしてから、太陽が西に沈むように沈んだ。(一一) 彼はインドラのように揺ぎなく、幾千の矢を雨降らせて、戦いにおいて、十日で一億の戦士を殺した。(一二) そのビーシュマが、うめき声をあげて、風で折られた樹木のように地面に横たわっています。バラタ族の王よ、あなたの悪しき政策により、彼にふさわしくなく……。(一三)」(第十四章)

ドリタラーシトラは言った。
「クルの雄牛であるビーシュマはどうしてシカンディンに倒されたのか。インドラに等しい私の父が、どうして戦車から落ちたのか。(一) ビーシュマは強力で神にも等しく、父のために不犯を通した。サンジャヤよ、そのビーシュマを失って、私の息子たちはどうしたか。(二) その勇気に満ちた強力で偉大な射手である虎のような勇士が倒された時、彼らはどのように考えたか。(三) クル族の雄牛、揺ぎない人中の雄牛が倒されたとそなたが私に告げた時、最高の苦悩が私に入り込んだ。(四)
サンジャヤよ、彼が出陣した時、いかなる人々が彼の後に従ったか。いかなる人々が彼の前を行ったか。いかなる人々がとどまり、いかなる人々が退却したか。いかなる人々が進撃したか。(五) その戦士のうちの虎、不滅な王族の雄牛が、戦車の群に激しく突入した時、い

かなる勇士たちが彼の後につき従ったか。（六）
その太陽のような敵を殺す勇士は、太陽が闇を除去するように敵軍を駆逐し、敵たちを恐怖させ、クルの王の指令により、戦場においてなしがたい行為を行なった。（七）その無敵で敏腕のビーシュマが、敵軍を呑みながらまさに間近に迫った時、パーンダヴァたちは彼を取り囲み、戦いにおいてどのようにして彼を食い止めたか。（八）ビーシュマは弓という広げた口を持ち、矢という牙を持ち、刀という舌を持ち、迅速で恐ろしく、近づきがたく、敵の軍隊をうち破る。（九）彼は他の人中の虎たちを凌駕し、廉恥心あり、無敵である。どうやってアルジュナは、その戦いにおいて無敵の彼を倒したのか。（一〇）恐るべき弓取りで、恐るべき矢を放つビーシュマは、最高の戦車に乗り、敵の頭を鋭い矢で切り取る。（一一）終末の火のように抗しがたいビーシュマが戦場で身構えるのを見て、パーンダヴァの大軍は常に縮みあがった。（一二）しかし敵を殺す彼は、私の軍隊を十日間指揮して、なしがたい行為を行なってから、太陽が西に没するように没した。（一三）彼はインドラのように、尽きざる矢の雨を放ち、戦場において、十日間で一億の兵士を殺した。（一四）そのバラタ族の勇士が、私の悪しき政策により、彼にふさわしくなく、うめき声をあげて、風で折られた樹木のように地面に横たわっている。（一五）

パーンダヴァの軍隊は、恐ろしく勇猛なシャンタヌの息子ビーシュマを見て、どうして攻撃することができたか。（一六）パーンドゥの王子たちはどうしてビーシュマと戦うことができたか。サンジャヤよ、ドローナが生きているのに、どうしてビーシュマは勝利することが

できなかったか。（一七）最高の戦士ビーシュマは、クリパやバラドゥヴァージャの息子（ドローナ）がそばにいるのに、どうして死ぬことになったか。（一八）戦いにおいて神々ですら対抗できない超戦士ビーシュマが、どうしてあのパーンチャーラの王子シカンディンに倒されたのか。（一九）

彼は常に戦いにおいて、強力なジャマダグニの息子（パラシュラーマ）と競い合う。インドラに等しい勇猛さを持ち、ジャマダグニの息子にうち破られない。（二〇）その偉大な戦士の力に対抗する勇士ビーシュマが、戦いにおいてどうして倒されたのか、サンジャヤよ、告げてくれ。我らは彼の守護を見出せない。（二一）サンジャヤよ、我々の偉大な射手たちの誰が、その不滅の人を捨てなかったか。いかなる勇士たちが、ドゥルヨーダナに命じられて、彼を守ったか。（二二）シカンディンを先頭にして、すべてのパーンダヴァたちがビーシュマを攻撃した。サンジャヤよ、クル族は恐れてその不滅の人を捨てたのではないか。（二三）

ビーシュマはそびえ立つ大雲のようだ。その弓弦の音は雲の轟き、矢の大雨を降らし、弓は雷のような大音響をあげる。（二四）その勇士は、パーンダヴァたちやパーンチャーラ軍やスリンジャヤ軍に矢の雨を降らせ、インドラが悪魔たちを殺すように敵の戦士を殺す。（二五）恐ろしい弓箭の海原。それは矢という鰐を持ち、近寄りがたく、弓という波を持ち、不滅である。島（拠り所）はなく、動揺し（異本による）、舟（渡る手段）もない。棍棒と刀というマカラ（海獣）と渦巻を持ち、馬という鮫を持ち、象で混雑している。（二六）多くの馬、象、歩兵を速やかに戦場に沈め、敵の勇士を奪い、怒りと威光により燃える、敵を苦しめる海を、いかな

る勇士たちが、海岸のように食い止めることができるか。（二七―二八）
　サンジャヤよ、敵を殺すビーシュマが、戦場でドゥルヨーダナのために働いていた時、いかなる人々が彼の前方にいたか。（二九）いかなる人々がビーシュマの右の車輪を守ったか。いかなる誓いを守る勇士たちが、彼の背後で敵を食い止めたか。（三〇）いかなる人々がビーシュマのすぐ前で、彼を守っていたか。いかなる勇士たちが、戦っているその勇士（ビーシュマ）の左の（テクスト疑問）車輪を守ったか。（三一）サンジャヤよ、いかなる人々が彼の左の車輪のところにいて、スリンジャヤ軍を殺したか。いかなる人々が彼の前方を行き（異本による）、その無敵の人を守ったか。（三二）ビーシュマが進みがたい帰趨を行く時、いかなる人々が彼の両脇にいたか。サンジャヤよ、合戦においていかなる人々が敵の勇士たちと対戦したか。（三三）彼が勇士たちに守られ、彼らが彼に守られている時、敵は難攻ではあるが、どうして彼らは戦いにおいて敵の軍隊を速やかにうち破れなかったか。（三四）ビーシュマはすべての世界の主、最上者（パラメーシュティン）である造物主のようである。サンジャヤよ、パーンダヴァたちはどうして彼を攻撃することができたか。（三五）クル族は彼を島として寄辺を求め、敵と戦う。サンジャヤよ、その人中の虎であるビーシュマが倒れたとそなたは言う。（三六）私の強力な息子はビーシュマの力を信じて、パーンダヴァをものともしなかった。どうして彼が敵に倒されたのか。（三七）」（三八―七五略）

（第十五章）

すべての王が集結する

サンジャヤは語った。――
大王よ、あなたに問われた（異本による）質問はあなたにふさわしい。しかしこのようにドゥルヨーダナに過失を押しつけるのは正しくない。（一）人が自分の誤った行動により悪い結果に陥った場合、その人はその罪を他者のせいにすることはできない。（二）大王よ、人々に非難されるすべてのことを行なう者は、非難される行為を行なって、すべての世人に殺されるであろう。（三）パーンダヴァたちはあなたに仕えることにより、顧問たちとともに、邪悪な人々により屈辱を味わった。そして長らく森で忍耐した。（四）
王よ、馬や象や無量の威力に満ちた勇士たちについて、私が実際に見たこと、またヨーガの力により見たことを聞きなさい。心を悲しみにひたしてはなりませぬ。王よ、確かにこれは、あらかじめ定められたように実現するのです。（五―六）
パラーシャラの息子であるあなたの聡明なる父上（ヴィヤーサ）に敬礼します。その方の恩寵により、神的な最高の知識が私に訪れました。（七）王よ、私の視力は感官を超える。そして耳は遠方の音を聴くことができる。他人の心を知ることができ、また過去と未来のことを知ることができる。（八）突発的なことが起きるのを知ることができる（テクスト疑問）。常に空中を行くことができる。戦いにおいて、武器により傷つけられない。その偉大な方の恩寵により〔私は

以上の能力を得ました」。（九）バラタ族の大戦争は華々しく、最高に奇蹟的で、身の毛がよだつものであった。私は詳細に語りますから、それをお聞きなさい。（一〇）

軍隊が規定に従って布陣し、戦闘準備を整えた時、ドゥルヨーダナ大王はドゥフシャーサナに言った。（一一）

「ドゥフシャーサナよ、ビーシュマを守る戦車隊をすぐに準備せよ。そして急いで全軍に指令を出せ。（一二）今や長年の間考えて来た、パーンダヴァ軍とクル軍の合戦が私に訪れた。（一三）戦いにおいてビーシュマを守ることほど大切な仕事はないと私は思う。守られた彼は、パーンダヴァたちとソーマカ軍とスリンジャヤ軍を滅ぼすであろう。（一四）心清らかな彼は言った。『私はシカンディンを殺さないであろう。彼は以前に女性であったということだから。それ故、私は戦いにおいて彼を免除する』と。（一五）だからして、特にビーシュマを守るべきだと私は考える。わが軍のすべての兵は、シカンディンを殺すべく努力せよ。（一六）東部、西部、南部、北部の、一切の種類の武器に通じた者たちは、祖父（ビーシュマ）を守れ。（一七）強力な獅子も守られなければ狼にも殺されるだろう。ジャッカルのようなシカンディンに獅子を殺させてはならぬ。（一八）ユダーマニユは左の車輪を、ウッタマウジャスは右の車輪を、アルジュナから守れ。アルジュナはシカンディンを守っているから。（一九）シカンディンはアルジュナに守られ、しかもビーシュマにより免除されている（ビーシュマは彼と戦わない）。ドゥフシャーサナよ、その彼がビーシュマを殺さないように注意してくれ。（二〇）」

それから夜が明けた時、叫んでいる王たちの、「準備せよ、準備せよ」という大声が聞こえた。（二一）バータラよ、法螺や太鼓の音、獅子吼（ししく）、馬の嘶き（いなな）きの音、戦車の音により、また象は鳴き戦士たちは叫び、それらの雄叫び、左腕を右手でたたくこと（挑戦の合図）、叫び声により、いたるところ騒々しかった。（二二―二三）大王よ、太陽が昇った時、クルとパーンダヴァの大軍は、残らず準備を整えて立ち上がった。あなたの息子たちとパーンダヴァたちの大軍は……。王中の王よ。（二四）そこでは、黄金で飾られた象や戦車がきらきら輝いて、稲妻をともなう雲のように見えた。（二五）おびただしい戦車隊は都城のように見えた。そこであなたの父（ビーシュマ）は、満月のようにこよなく輝いていた。（二六）兵士たちは弓、〔両刃の〕剣、刀、棍棒、槍、投槍などの輝く武器を持ち、各自の隊列に位置していた。（二七）王よ、象兵、戦車兵、歩兵、騎兵は、幾百幾千と、罠のような形をとって、待機していた。（二八）敵味方の多様な形の輝かしい軍旗が高く掲げられて、幾千となく認められた。（二九）幾千の王たちの旗は、黄金〔で飾られ〕、宝玉をちりばめ、燃え上がる火のようで、燃えるように輝いていた。（三〇）それらは大インドラの宮殿における、輝かしい大インドラの旗のようであった。それらのもとで、勇士たちが戦いを望んで準備を整えて、武器を振り上げているのが認められた。これらの雄牛のような眼をした華々しい王たちは、弓籠手（ゆごて）をつけ、箙（えびら）をつけて、軍隊の先頭にいた。（三一―三二）シャクニ・サウバラ、シャリヤ、シンドゥの王ジャヤドラタ、アヴァンティのヴィンダとアヌヴィンダ、カーンボージャのスダクシナ、カリンガのシュルターユダ、ジャヤトセーナ王、コーシャラのブリハドバラ、サートヴァタのクリタヴァルマン。

(三三―三四)以上の十名の軍団の長、人中の虎である勇士は、鉄棒のような腕を持ち、祭式を主催して、〔バラモンたちに〕多くの謝礼を出す。(三五)彼ら及びその他多数の政略に長けた強力な王と王子たちが、ドゥルヨーダナの支配下にある。(三六)彼らが具足をつけ、各自の部隊に立っているのが認められる。すべて黒鹿の皮をまとい、旗をつけ、ムンジャ草の輪を巻いていた。(三七)彼らはドゥルヨーダナのために、喜んで(異本による)〔死んで〕梵界に行くべく潔斎して、おびただしい十の軍団を統率して立っている。(三八)クル軍の第十一番目の大軍団はドゥルヨーダナのもので、すべての軍隊の前方にあった。そこではビーシュマが司令官であった。(三九)

大王よ、我らは白いターバンを巻き、白馬を用い、白い鎧をつけた、昇る月のような不滅のビーシュマを見た。(四〇)クルとパーンダヴァの人々は、黄金の棕櫚の旗をつけ、銀の戦車に立つ、白い雲の中の太陽のようなビーシュマを見た。(四一)軍隊の先頭にビーシュマを認め、パーンダヴァたちと、ドリシタデュムナに率いられたスリンジャヤの勇士たちは戦慄した。(四二)小さな獣たちがあくびをする大きな獅子を見ておののくように、ドリシタデュムナをはじめとするすべての人々は何度も戦慄した。(四三)パーラタよ、あなたには十一の美々しい軍団があった。またパーンダヴァたちには、偉大な人物(クリシュナ)に守られた七軍団があった。(四四)両軍は宇宙紀(ユガ)の終末にぶつかり合う、猛り狂ったマカラ(海豚または鰐)がいる、大鰐(または鮫)がうようよいる二つの海のように見えた。(四五)王よ、このように多くの軍隊が集結したことは、我々はかつて見たことも聞いたこともありません。(四六)

(第十六章)

戦場で死に赴くことが永遠の法である

サンジャヤは語った。——

尊者クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ・ヴィヤーサが告げたように、すべての王がこぞって集結していた。(一)その日、月はマガー星宿に位置していた。天空では七つの大惑星(九惑星からラーフとケートゥを除く)は輝きつつ集合した。(二)太陽は昇る時、二つになったかのように見えた。そしてすっかり天空に昇ると、焔を出して燃え上がって輝いた。(三)ジャッカルと鴉どもは燃え上がる諸方で鳴き叫んだ。彼らは肉と血を喰らいたいので、死体を待ち望んでいるのである。(四)パーンダヴァとクル族の老いた祖父(ビーシュマ)とパラドゥヴァージャの息子(ドローナ)は、二人とも敵を制する勇士であるが、毎日、朝に起床すると、感官を制し、「パーンドゥの息子たちに勝利あれ」と言った。しかしあの約定を守り、彼らはあなたのために戦っている。(五―六)一切の法(ダルマ)の特性を知る、あなたの父であるデーヴァヴラタ(ビーシュマ)は、王たちを召集して次のように言った。(七)

「王族(クシャトリヤ)たちよ、今や天界への大きな門が諸君に開かれた。それにより、インドラや梵天の住む世界へ行け。(八)これが諸君の先祖や更にその先の先祖たちによって踏まれた永遠の道である。精神を集中して戦いに専念せよ。(九)何となれば、ナパーガ、ヤヤーティ、マーンダートリ、ナフシャ、ヌリガはこのような行為によって成就し、最高の場所に達した。

〔一〇〕王族にとって、家で病死することは法にもとる。戦場で死に赴くことが彼にとって永遠の法である。〔一一〕」

バラタの雄牛よ、ビーシュマにこのように告げられて、諸王は最高の戦車で〔諸方を〕輝かせつつ各自の部隊に帰った。〔一二〕しかしカルナとその親類縁者たちは、ビーシュマが原因で、戦場で戦うことができなかった。バラタの雄牛よ。〔一三〕カルナを除いて、あなたの息子たちと王たちは、十方に獅子吼を轟かせて出陣した。〔一四〕その軍隊は、白い傘、旗や幡、象、馬、戦車、歩兵により輝いていた。〔一五〕種々の太鼓の音により、戦車の車輪の音により大地は震動した。〔一六〕偉大な戦士たちは、黄金の種々の腕輪や弓によって輝き、まるで動く山のように見えた。〔一七〕クル軍の長ビーシュマは、五つ星のついた大きな棕櫚の旗標を持ち、汚れない太陽のような姿で立っていた。〔一八〕

バラタの雄牛である王よ、あなたの軍の勇猛な王たちは、ビーシュマの指令に応じて行動した。〔一九〕ゴーヴァーサナ国のシャイビヤは、すべての王侯たちとともに、王にふさわしい、旗をつけた象王に乗って進軍した。また蓮(パドマ)の色をしたアシュヴァッターマンは、戦いの準備を整え、獅子の尾の旗を持ち、全軍の先頭に立って進軍した。シュルターユス、チトラセーナ、プルミトラ、ヴィヴィンシャティ、シャリヤ、ブーリシュラヴァス、偉大な戦士ヴィカルナという七人の勇士は、アシュヴァッターマンを先頭に立てて、すばらしい色と輝きを持つ車に乗り、ビーシュマの前方を行った。〔二〇―二二〕そして彼らの高くそびえる黄金作りの旗が最高の戦車を飾り、輝いているのが認められた。〔二三〕最高の師匠ドローナの旗標

は、黄金作りの祭壇で、水差しで飾られ、弓をともなっていた。〔二四〕幾百幾千の兵を率いるドゥルヨーダナの旗標は、宝玉作りの大きな象であった。〔二五〕彼の前に、パウラヴァ、カリンガ国王、カーンボージャのスダクシナ、クシェーマダンヴァン、スミトラという戦士たちが立った。〔二六〕マガダ国王は高価な戦車に乗り、雄牛の旗標をつけ、彼らを率いるかのように軍隊の先頭を進んだ。〔二七〕東部の軍隊は秋の雲の群のようであり、アンガ国王と偉大なクリパに守られていた。〔二八〕誉れ高いジャヤドラタは、その軍隊の先頭に立ち、銀の猪の最上の旗標により輝いていた。〔二九〕彼の指揮下には、一万の戦車兵と八千の象兵と六万の歩兵がいた。〔三〇〕王よ、そのシンドゥ国王に守られた前衛の強大な軍隊は、無数の戦車と象兵と騎兵を擁して輝いていた。〔三一〕全カリンガの国王はケートゥマットとともに、六万の戦車兵と一万の象兵を率いて進軍した。〔三二〕彼の山のような巨象は、器械(カタパルト?)、投槍、箙(えびら)、旗により飾られて輝いていた。〔三三〕カリンガ国王は樹木の最上の旗標により、そして白い傘、金の胸飾り、ヤクの尾の払子(ほっす)により輝いていた。〔三四〕王よ、ケートゥマットは、きらびやかな最高の鉤棒をともなう象に乗って戦場にいた。〔稲妻をともなう〕雲に乗る太陽のように。〔三五〕バガダッタ王はインドラのように、最高の象に乗り、その威光により輝いていた。〔三六〕アヴァンティ国のヴィンダとアヌヴィンダはバガダッタに匹敵するが、象の肩に乗り、ケートゥマットに従った。〔三七〕陣形は恐ろしい鳥の形で、戦車兵の区分(アニーカ)(拙訳『ニーティサーラ』二〇・二八訳注、『カウティリヤ実利論』一〇・五・八参照)を有し、象兵の部隊が頭で、騎兵が両翼で、全方位に向かって攻撃する。〔三八〕王よ、ドローナ、ビーシュマ、アシュヴァッターマン、バーフリー

カ、クリパがそのように布陣したのである。(三九)

（第十七章）

ユディシティラの布陣

サンジャヤは語った。――

大王よ、それからすぐに、戦おうとする兵たちがたてる心をふるわせる喧騒が聞こえた。(一)法螺や太鼓の音、象の叫び声、戦車の車輪の音により、大地は裂けるかのようであった。(二)馬はいななき、兵たちは喚声をあげ、空も諸方もたちまちその音で満たされた。(三)不可侵の人よ、あなたの息子たちとパーンダヴァたちの兵は合戦に臨んで戦慄した。(四)そこでは、黄金で飾られた象や戦車は輝き、稲妻をともなう雲のようであった。(五)王よ、あなたの軍の多様な形状の旗は、黄金の装飾で飾られ、燃火（ねんか）のように輝いていた。(六)バーラタよ、敵味方の〔それらの旗〕は、大インドラの宮殿における大インドラの旗のように輝かしく見えた。(七)勇士たちは火や太陽のように輝く黄金の鎧で武装し、きらめく惑星のように見えた。(八)雄牛のような眼をした偉大な戦士たちは、多彩な武器を振りかざし、弓籠手（ゆごて）をつけ、旗を持ち、軍隊の先頭で輝いていた。(九)

王よ、あなたの息子はビーシュマの背後を守っていた。ドゥフシャーサナ、ドゥルヴィシャハ、ドゥルムカ、ドゥフサハ、ヴィヴィンシャティ、チトラセーナ、偉大な戦士ヴィカルナ、サティヤヴラタ、プルミトラ、ジャヤ、ブーリシュラヴァス、シャラがいた。(一〇―一一)

そして二万の戦士が彼らにつき従っていた。アビーシャーハ、シューラセーナ、シビ、ヴァサーティ、(一二)シャールヴァ、マツヤ、アンバシタ、トリガルタ、ケーカヤ、サウヴィーラ、キタヴァ、東部と西部と北部のマーラヴァ、(一三)以上すべてで十二の国々の勇士たちは、命を捨てて、戦車の群により祖父（ビーシュマ）を守っていた。(一四)マガダ国王は、一万の強力な象兵によって、その戦車隊の後を進軍した。(一五)軍隊の中央に、戦車の車輪と象の足を守る六百万の兵士がいた。(一六)幾十万の歩兵が、弓と楯と刀を持ち、鉤爪と投槍で武装して先頭を進んだ。(一七)バラタ族の大王よ、あなたの息子には十一の軍団があった。それはヤムナー川に合流するガンガー（ガンジス）のように見えた。(一八)

（第十八章）

ドリタラーシトラはたずねた。

「十一の軍団が布陣したのを見て、ユディシティラはどのようにしてそれより少ない軍隊で対抗の陣形を整えたか。(一)人的・神的な陣形と、ガンダルヴァと阿修羅の陣形を知るユディシティラは、どのようにしてビーシュマに対して布陣したか。(二)」

サンジャヤは語った。――

徳性あるダルマ王ユディシティラは、布陣したドゥルヨーダナの軍隊を見て、ダナンジャヤ（アルジュナ）に告げた。(三)

「弟よ、大仙ブリハスパティの言葉として、次のように教えられている。少ない兵を凝縮して戦うべきである。多くの兵は望みのままにこれを拡大すべきである。（四）少ない軍隊が多数の軍隊と戦う場合は、針の先端のように布陣すべきである。そしてわが軍は敵軍と比べてより少ない。（五）アルジュナよ、この大仙の言葉を知って布陣せよ。」

ダルマ王の言葉を聞いて、アルジュナは答えた。（六）

「王よ、金剛杵（ヴァジュラ）を持つ者（インドラ）に創（つく）られた、『金剛』と呼ばれる最高にうち勝ちがたい不動の陣形がある。私はあなたのためにその布陣をします。（七）最高の戦士ビーマは疾風のようで、戦いにおいて敵たちは彼に対抗しがたい。その彼が我々の前方で戦うであろう。（八）戦いの手段に長けたその最高の男は、敵軍の威光を砕きつつ、我々の前衛の長として進軍するであろう。（九）ドゥルヨーダナに従うすべての王たちは、彼を見て動転して退却するだろう。小獣が獅子を見て逃げまどうように。（一〇）最高の戦士ビーマは、まったく危険のない城壁のようで、すべての人々は彼を頼りにするであろう。神々がインドラを頼りにするように。（一一）というのは、あの非常に恐ろしい行為をする人中の雄牛である狼腹（ビーマ）が怒った時、彼に対抗できるような男はこの世にいないから。（一二）ビーマセーナは金剛杵のように堅固な棍棒を振りまわし、非常に激しい勢いで攻撃し、海をも干涸（ひから）びさせるであろう。（一三）王よ、ケーカヤの人々、ドリシタケートゥ、強力なチェーキターナたちは、顧問たちとともにあなたを見ながら立っている。（一四）〔我々が〕ドリタラーシトラの相続人であると考えて。」

アルジュナは以上のように言った。彼が戦場でそう言った時、わが君よ、すべての兵はふ

さわしい言葉で彼を讃えた。（一五）

勇士アルジュナはこのように告げて、その通りにした。彼は速やかにその軍隊を布陣してから進軍した。（一六）パーンダヴァの大軍は、前進して来るクル軍を見つつ進み、満水で静かに流れるガンガーのように見えた。（一七）ビーマ、ドリシタデュムナ、ナクラとサハデーヴァ、強力なドリシタケートゥが彼らを率いていた。（一八）その後から、軍団に囲まれた王が鼓舞し（テクスト疑問）、弟たちとその息子たちに背後から守られていた。（一九）輝きに満ちたマードリーの二人の息子（ナクラとサハデーヴァ）はビーマの車輪を守った。ドラウパディーの息子たちと強力なアビマニユはその背後を守った。（二〇）パーンチャーラの偉大な戦士ドリシタデュムナは、彼の軍隊の勇士である最高の戦士プラバドラカ（「美しい者」という意。パーンチャーラ軍の一部）たちとともに彼らを守護した。（二一）またシカンディンは、アルジュナに守られてその後方を、ビーシュマを殺害することをめざして進軍した。バラタの雄牛よ。（二二）偉大な戦士ユユダーナ（サーティヤキ）は、アルジュナの背後を守った。またパーンチャーラのユダーマニユとウッタマウジャスは彼の車輪を守った。（二三）

クンティーの息子であるユディシティラ王は軍隊の中央に、動く山のような発情した（強力な）巨象たちとともにいた。（二四）パーンチャーラの気高いヤジュニャセーナ（ドルパダ）は、パーンダヴァのために勇武を発揮しようと、軍団を率いてヴィラータの後を進んだ。（二五）王よ、彼らの戦車には、太陽や月のように輝き、最上の黄金で飾られ、多様な紋章をつけた大きな旗がひるがえっていた。（二六）その後に、偉大な戦士ドリシタデュムナが、弟や息子たちと

ともに進み、ユディシティラを守った。（二七）敵味方の戦車に立った種々の旗を凌駕して、アルジュナの比類のない大猿の旗標がそびえ立っていた。（二八）

ビーマセーナを護衛して、その前を幾十万の歩兵が刀や槍や投槍を持って行進した。（二九）何万という勇猛な象は、発情してこめかみから分泌液を流し、黄金製の網で輝き、山のようであった。（三〇）それらは〔水を〕降らせる雲（または〔山〕）のようで、分泌液に濡れ、蓮の香を放ち、王の後に従って動く山のように進んだ。（三一）無敵で気高いビーマセーナは鉄棒のような恐ろしい棍棒を引き寄せ、大軍を率いていた。（三二）彼は光輪を有する熱い太陽のように見られがたく、近くにいる兵士たちはまったく彼を見つめることができなかった。（三三）それは金剛（ヴァジュラ）という陣形であり、破りがたく、一切の方角に向いており、弓という稲妻を旗標として恐ろしく、しかもアルジュナに守られていた。（三四）パーンダヴァたちはあなたの軍隊に対してその陣形をとっている。それは人間界において無敵であり、パーンダヴァたちに守られている。（三五）

軍隊は夜明けに、日の出を迎えていた。水滴を含む風が吹き、雲もないのに雷の音が聞こえた。（三六）恐ろしい強風が下方に向かって吹いて砂利を運び、舞い上がるほこりは闇で世界をおおった。（三七）バラタの雄牛よ、巨大な流星が東に向かって落ち、昇る太陽に衝突し、大きな音をたてて砕けた。（三八）バラタの雄牛よ、軍隊が準備した時、輝かない太陽が昇った。そして大地は音をたてて衝動した。そして音をたてて裂けた。バラタの最上者よ。（三九）王よ、すべての方角に多くの前兆があった。激しいほこりが立ち、何も見分けられなかった。（四〇）鈴の網が下がり、黄金の花輪がついて、小旗をともなう、太陽のように輝く大きな旗は、風に激しく揺られて、それらの音により、まるで棕櫚の森の中のように、あたり一面にジャンジャンという音が響いた。（四一―四二）

このように戦いを喜ぶ人中の虎パーンダヴァたちは、あなたの息子たちに対抗して布陣した。（四三）バラタの雄牛よ、兵士たちは棍棒を手にして前方に立っているビーマセーナを見て、その髄が落ちるかのように恐れた。（四四）（第十九章）

クリシュナがいる所に勝利がある

ドリタラーシトラはたずねた。

「サンジャヤよ、太陽が昇った時、この戦いにおいてどちらの人々が勇み立って戦いを求めたのか。サンジャヤよ、ビーシュマに率いられたわが軍か、それともビーマに率いられたパーンダヴァ軍か。（一）太陽と月と風は、どちらの側にとって不利であったか。肉食獣はどちらの軍隊に向かって吼えたか。どちらの若者たちの顔色が明るかったか。以上すべてをありのままに告げてくれ。（二）」

サンジャヤは語った。――

両軍とも等しく進軍した。両軍とも布陣して、喜び勇んでいた。王よ。両軍とも森の列の

ように多彩であった。両軍とも象と戦車と馬に満ちていた。(三) 両軍とも多大で恐ろしい姿であった。バーラタよ、両軍とも無敵であった。両軍とも天界を征服せんばかりに膨大であった。両軍とも善き男と貴人に守られていた。(四) ドリタラーシトラのクル軍は西を向き、パーンダヴァ軍は東を向き、戦おうとして対峙していた。クル軍は悪魔の王の軍、パーンダヴァ軍は神々の王の軍のようであった。(五) 清浄な風がパーンダヴァ軍の背後から吹いた。猛獣たちはクル軍に向かって吼えた。あなたの息子の象たちは、〔敵の〕巨象たちの激しい分泌液（マダ）の臭いに耐えることができなかった。(六)

ドゥルヨーダナは、蓮花の色をした、発情し強力な、黄金の腹帯をした象に乗り、クル軍の中央で、崇拝者（バンディン）や讃嘆者（マーガダ）たちに讃えられて立っていた。(七) 彼の傘は月光のように白く、黄金の花輪が頭上で輝いていた。ガーンダーラ国王シャクニは、山のようなガーンダーラ軍とともに、彼を全面的に守っていた。(八) 老いたビーシュマはすべての軍の先頭を進んだ。白い傘と白い弓と法螺貝を持ち、白いターバンを巻き、白い旗を持ち、白馬を戦車につなぎ、まるで白い山のようであった。(九) ドリタラーシトラのすべての息子たちは彼の軍にいた。バーフリーカ軍の一部であるシャラと、アンバシタと呼ばれる王族（クシャトリヤ）たち、シンドゥ軍、サウヴィーラ、パンチャナダ（五河地方、パンジャーブ）の勇士たちもそこにいた。(一〇) すべての王の誉れ高い師である、偉大な勇士ドローナは、赤い馬につないだ金の戦車に乗り、元気いっぱい、インドラのように、軍隊の後方を守った。(一一) 全軍の中央には、ヴァールッダクシャトリ、ブーリシュラヴァス、プルミトラ、ジャヤ、シャールヴァ国軍、マツヤ国軍、すべてのケー

カヤ軍、戦いの準備をした兄弟たちが、象軍とともにいた。(一二) めざましく戦うガウタマ姓の偉大な勇士クリパは、重責を担い（原文疑問）、シャカ、キラータ、ヤヴァナ、パフラヴァ族とともに、軍隊の北側を守った。(一三) 強力なクリタヴァルマンは、武器を持つアンダカ・ヴリシュニ、ボージャ、サウラーシトラ、ナイルリタたちに守られ、あなたの軍の南側を守った。(一四) 特攻隊（サンシャプタカ）の一万の戦車は、アルジュナの死か勝利のために結成されたものである。武器に通達した彼らは、アルジュナのいる所に行く。トリガルタの勇士たちも同様である。(一五)

バーラタよ、あなたには十万以上の象兵がいる。象兵ごとに百の戦車がつき、戦車ごとに百の騎兵がつく。(一六) 騎兵ごとに十の射手がつき、射手ごとに十の楯持ちがつく。バーラタよ、ビーシュマはこのようにあなたの軍を配陣した。(一七) 司令官であるビーシュマは、毎日のように、次々と人的、神的な陣形、ガンダルヴァと阿修羅の陣形をとった。(一八) ビーシュマによって布陣されたドリタラーシトラ軍は、膨大な大戦士の洪水で、満月時における海原のようであった。その陣は戦場で西を向いていた。(一九) 王よ、旗を掲げたあなたの恐るべき軍隊は無限である。パーンダヴァ軍はそれほど多くない。しかし私は彼らの軍が強大で、うち勝たれがたいと考える。クリシュナとアルジュナがその指導者であるから。(二〇)

（第二十章）

サンジャヤは語った。——
クンティーの息子ユディシティラ王は、ドリタラーシトラの息子たちの大軍を見て、とても破りがたいと考えて消沈した。(一) 彼はビーシュマにより作られた難攻の陣形を見て、意気消沈し、アルジュナに言った。(二)
「勇士ダナンジャヤ（アルジュナ）よ、戦闘において我々は、祖父（ビーシュマ）が指揮者である彼らの軍と戦うことはできない。(三) これは、敵を苦しめる、威光に満ちたビーシュマが、論書に示された規定に従って作りあげた、不動で難攻の陣形である。(四) 敵を苦しめる者よ、我らと兵たちは危機に陥った。どうしたら我々は、この強力な陣形から逃れられるか。(五)」
王よ、敵を殺すアルジュナは、あなたの軍を見て意気消沈したユディシティラに告げた。(六)
「より少数の兵が、より聡明で勇猛で美質をそなえた多数の兵に対しどのようにして勝利するか、王よ、それを聞きなさい。(七) 王よ、あなたは悪意がない（素直である）から、私はあなたにその方法を申し上げる。パーンダヴァよ、ナーラダ仙はそれを知っている。ビーシュマとドローナも知っている。(八)
かつて祖父はまさにこのことに関し、神々と阿修羅との戦闘において告げたという。(九)
『勝利を望む者は、腕力と勇武とによって勝つのではなく、真実と温情とにより、そして法と努力とにより勝つのである。(一〇) 非法と貪りと迷妄を捨て、ひたすら努力して、我執なく戦いなさい。法ある所に勝利がある。(一一)』

王よ、かくて戦いにおいて勝利は必ずや我らにあると確信しなさい。ナーラダが私に、『クリシュナがいる所に勝利がある』と告げましたから。(二二) 勝利はクリシュナの属性である。クリシュナの後からついて行く。勝利の他に、謙譲も彼の属性である。(二三) 無限の威光を持ち、最も永遠なる神人であるゴーヴィンダ（クリシュナ）は、敵の群の中で苦しむことはない。クリシュナのいる所に勝利がある。(二四) かつて彼は鈍ることのない矢を持つハリ・ヴァイクンタとして、神と阿修羅たちに『誰が勝利するか』と雷のような声で告げた。(二五) そこで『我々はクリシュナに従って勝利するであろう』と言った者たちが勝利した。インドラなどの神々は、彼の恩寵により三界を勝ち得たのだ。(二六) そこで今、あなたが苦しむようなことはまったくないと私は考える。バーラタよ。あの全世界を享受する神々の主が、まさにあなたの勝利を望んでいるのだ。(二七)」

（第二十一章）

クル家系の旗標ビーシュマ

サンジャヤは語った。——
バラタの雄牛よ、それからユディシティラ王はビーシュマの軍隊に対する布陣をして、自軍をかりたてた。(一) パーンダヴァ軍は指示されたように軍隊を布陣した。クルの末裔たちは、よい戦いによって最高の天を望んでいた。(二)
中央には、アルジュナに守られたシカンディンの軍隊がいた。そして、ビーマに守られた

ドリシタデュムナ自身の軍隊もいた。(三)王よ、栄光あるサートヴァタの長で、インドラのような弓取りであるユユダーナ（サーテイヤキ）は、南側の軍を守った。(四)ユディシティラは、大インドラの車のような、装備をほどこされ、黄金や宝石できらびやかで、黄金の馬具をつけた馬にひかれる戦車に乗り、象隊の中央にいた。(五)象牙の柄のある純白の傘は高くそびえ、この上なく輝いていた。偉大な聖仙たちは讃歌を唱え、右まわりにまわって王に敬意を表した。(六)司祭たちは敵の撲滅を祈願し、博識の長老の大仙たちは、祈禱と呪句と薬草により、〔王が〕すべてにおいて恙(つつが)ないように祝福した。(七)それから偉大なクルの最上者（ユディシティラ）は、衣服、牝牛、果実、花、金貨をバラモンに贈り、神々の王インドラ（異本による）のように進軍した。(八)

アルジュナの戦車は、白馬にひかれ、美しい車輪を持ち、百の鈴を持ち、高価なジャーンブーナダ金（最高の金）できらびやかで、千の太陽を持つ〔かのようで〕、焔の輪を持つ火のように輝いていた。(九)ガーンディーヴァ弓を持つ〔アルジュナ〕は、クリシュナに操縦される、猿の旗標のついたその戦車に乗っていた。彼に等しい弓取りは、この地上に存在しないし、またこれからも存在することは決してないであろう。(一〇)

ビーマはこよなく恐ろしい姿をし、あなたの息子の軍を殲滅するであろう。強力な彼は、戦場で武器なしでも、両腕で人や馬や象を灰にしてしまうであろう。(一一)そのビーマセーナ、狼腹は、双子（ナクラとサハデーヴァ）とともに、勇士（アルジュナを指すか）の戦車を守った。発情した雄牛や獅子のような足どりをした、この世における大インドラの像のような、軍隊の先頭を行く、無

敵で象王のように誇り高い狼腹を見て、あなたの兵士たちは、恐怖のあまり意気消沈し、泥濘にはまった駱駝のように狼狽した。(一二―一三)

クリシュナは軍隊の中にいる無敵の王子、バラタの最上者であるアルジュナに話しかけた。(一四)

ヴァースデーヴァ（クリシュナ）は言った。

「軍隊の中にいる、燃える守護者である、獅子のようにわが軍を見ているビーシュマは、クルの家系の旗標である。彼は三十の馬祀を行なった。(一五)雲が太陽をおおうように、あの軍隊は強力な彼をおおっている。勇士よ、あの軍隊を滅ぼし、あのバラタの雄牛との戦いを望みなさい。(一六)」

ドリタラーシトラはたずねた。

「サンジャヤよ、誰の兵士たちが喜び勇み、そこで真っ先に戦ったか。そこで誰が意気軒昂であり、誰が意気消沈したか。(一七)その心をふるわせる戦闘において、誰が最初に攻撃したか。わが軍か、それともパーンダヴァ軍か。サンジャヤよ、それを私に語ってくれ。(一八)どちらの大軍において、香と花輪〔の芳香〕が生じたか（吉兆とされる）。また、恐ろしい雄叫びをあげるどちらの兵士たちの言葉が吉兆を示していたか。(一九)」

サンジャヤは語った。――

そこでは、両軍の兵士たちとも喜び勇んでいた。花輪と香の芳香は両方に生じた。(二〇)
バラタの雄牛よ、集結した軍隊は陣形を整えて進んだ。その猛り立つ軍隊の衝突は壮大なものであった。(二一) 法螺と太鼓の音が混じる激しい楽器の音が響き、叫ぶ象や勇み立つ兵士たちの音声が轟いた。(二二)

(第二十二章)

バガヴァッド・ギーター

第一章

ドリタラーシトラはたずねた。
「神聖なる地、クルクシェートラに、戦おうとして集まった、我らの一族とパーンダヴァの一族とは、何をなしたか。サンジャヤよ。(一)」
サンジャヤは語った。——
その時ドゥルヨーダナ王は、布陣したパーンダヴァ軍を見て、師匠(ドローナ)に近づき、次のように告げた。(二)
「師匠よ、このパーンドゥの息子たちの大軍を見なさい。あなたの聡明なる弟子、ドルパダの息子によって配陣された……。(三)
そこには、戦いにおいてビーマやアルジュナに匹敵する勇士や、偉大な射手たちがいる。

サンジャヤは語った。——

私はこのように、ヴァースデーヴァと偉大なアルジュナとの、稀有の総毛立つ対話を聞いた。（七四）

私はヴィヤーサ仙の恩寵のおかげで、ヨーガの主クリシュナが自ら最高の秘密であるヨーガについて語った時、彼から直々にそれを聞いた。（七五）

王よ、クリシュナとアルジュナとの、この稀有で聖なる対話を想起するごとに、私は繰り返し歓喜する。（七六）

そしてまた、あのハリ（クリシュナ）の非常に稀有な姿を想起するごとに、私は大いに驚嘆し、繰り返し歓喜する。（七七）

ヨーガの主であるクリシュナがいる所、弓をとるアルジュナがいる所、そこには幸運があり、勝利があり、繁栄があり、確固たる政策がある。私はそう確信する。（七八）（第四十章）

(64) ビーシュマ殺害（第四十一章—第百十七章）

師匠たちに挨拶してまわるユディシティラ

サンジャヤは語った。――

それから、アルジュナが再びガーンディーヴァ弓と矢を持ったのを見て、偉大な戦士たちは大音声をあげた。（一）勇猛なパーンダヴァたち、ソーマカ（パーンチャーラ）、及び彼らの従者たちは、喜んで海から生じた法螺を吹いた。（二）それから、太鼓、種々の楽器、牛の角笛が激しく鳴らされ、そして大音響があがった。（三）王よ、神々、ガンダルヴァ、祖霊たち、シッダとチャーラナ（いずれも半神）の群が、見たいと願って集まって来た。（四）栄光ある聖仙たちは、インドラを先頭として、その大殺戮を見るために集まった。（五）

王よ、海のような両軍が戦闘準備をして何度も移動するのを見て、勇士ユディシティラは鎧を脱ぎ、すばらしい武器を捨て、急いで戦車から降り、合掌して徒歩で歩いた。（六―七）ダルマ王ユディシティラは、祖父（ビーシュマ）を見て、黙って敵軍に東面する場所に行った。（八）アルジュナは兄がそこへ行ったのを見ると、急いで戦車から降り、兄弟たちとともに彼に従って行った。（九）尊者クリシュナもその後ろからついて行った。そして、主要な王たちも（異本による）、好奇心から彼について行った。（一〇）

アルジュナは言った。

「王よ、あなたは我々を離れ、徒歩で敵軍に東面する所へ行ったが、あなたは何を決意した

のか。（一一）」

ビーマセーナは言った。

「王中の王よ、敵軍が武装しているのに、鎧と武器を捨てて、弟たちを捨てて、あなたはどこへ行くのか。（一二）」

ナクラは言った。

「バーラタよ、長兄であるあなたがこのような状態になったので、恐怖が私の心を悩ませる。言いなさい。あなたは一体どこへ行こうとするのか。（一三）」

サハデーヴァは言った。

「このような恐怖に満ちた多くの戦闘が行なわれようとしている時、王よ、あなたは敵に対面し、どこへ行こうとするのか。（一四）」

サンジャヤは語った。――

クルの王よ、弟たちにこのように話しかけられても、ユディシティラは何も答えずに、沈黙して歩き続けた。（一五）すると気高い大知者クリシュナは、「私は彼の意図を知っている」と笑いながら彼らに言った。（一六）

「この王はビーシュマ、ドローナ、クリパ、シャリヤ、及びその他の師匠（グル）たちに許可されてから敵と戦うのであろう。（一七）というのは、古い論書に次のように説かれている。――師匠たちの許可を得ないで戦うなら、その者は必ずや立派な人々に悪く思われるであろう。

(一八) しかし、論書に従い、立派な人々に許可されて戦うなら、戦いにおける彼の勝利は確実であろうと私は考える。(一九)」

クリシュナがこのように告げた時、ドゥルヨーダナの軍隊の間に「ああ、ああ」という大声があがった。しかし他の人々は無言であった。(二〇) ドゥルヨーダナの兵士たちは、遠くからユディシティラを見て、お互いに語り合った。

「彼は自制心を失った。一族の面汚しだ。(二一) あの王はきっと恐れてビーシュマのもとに行くのであろう。ユディシティラとその兄弟は庇護を乞うている。(二二) アルジュナ、ビーマ、ナクラ、サハデーヴァが守護者であるのに、(二三) 彼は確かに、地上において有名な王族(クシャトリヤ)の一族に生まれた者ではない。ユディシティラはどうして恐れて近づいて来るのか。臆病な彼の心は戦場において恐怖にかられたから。(二四)」

そこで彼らすべての王族はクル族を讃えた。彼らは満足して喜び、それぞれ衣服を振った。(二五) 王よ、それからそこにいるすべての兵士は、ユディシティラと弟たちとクリシュナの悪口を言った。(二六) クル軍はユディシティラを非難したが、すぐに再び沈黙した。王よ。(二七)

「あの王は何と言うだろう。ビーシュマは何と答えるだろう。戦いにおいて誉れ高いビーマは何と、クリシュナとアルジュナは何と言うだろう。(二八) 彼の意図は何か。」(二九)

王よ、その時ユディシティラに関し、このような非常に大きな疑問が両軍の間に生じた。

ユディシティラは弟たちに囲まれて、矢と槍に満ちた敵軍に入り、急いでビーシュマに近づいた。(三〇) それからユディシティラ王は両手でビーシュマの両足に触れて〔平伏して〕から、戦うべく近づいた彼に言った。(三一)

ユディシティラは言った。

「不可侵の方よ、あなたに御挨拶いたします。祖父様、私はあなたと戦うでしょう。祖父様、承認して下さい。そして祝福して下さい。(三二)」

ビーシュマは答えた。

「バラタ族の王よ、もし戦いに際し、そなたがこのように私のもとに来なかったら、大王よ、私はお前を呪って敗北させたであろう。(三三) わが子よ、私は満足した。パーンダヴァよ、戦って勝利を得るがよい。この戦いにおいて他にお前の望むことがあるなら、それを獲得せよ。(三四) プリターの息子よ、願いごとを選びなさい。我らから何を願うか。大王よ、もしそうすれば、お前は敗北することがない。(三五) 人間は財物(アルタ)の奴隷である。しかし財物は何者の奴隷でもない。大王よ、これは真実である。クル族は財物により私を拘束している。(三六) ユディシティラよ、そこで私は去勢者のようにお前に語る。私は財物により奪われて(拘束されて)いる。〔クル族のために戦わなければならぬ。しかし〕ユディシティラよ、戦いはさておき、その他にお前は何を望んでいるか。(三七)」

ユディシティラは言った。

「大知者よ、御教示下さい。あなたはいつも私の幸せを望んでいる。クル族のために戦いな

さい。これが常に私の念願です。（三八）」

ビーシュマは言った。

「ユディシティラ王よ、ここで私はそなたにどのような援助ができるか。確かに私はお前の敵のために戦うであろう。お前の意図を述べよ。（三九）」

ユディシティラは言った。

「私は戦いにおいて、どうして無敵のあなたに勝利することができるでしょうか。もしそれがよいとお考えなら、私に有益なことを御教示下さい。（四〇）」

ビーシュマは言った。

「クンティーの息子よ、戦場で私に対して戦い、勝つことのできる男は誰もいない。インドラ自身といえども。（四一）」

ユディシティラは言った。

「ああ、それ故あなたにたずねるのです。祖父よ、あなたに敬礼いたします。戦いにおいて敵があなた御自身に勝つ方法を教えて下さい。（四二）」

ビーシュマは言った。

「わが子よ、戦いにおいて私に勝つことのできる敵はいない。今は私の死の時ではない。また来なさい。（四三）」

サンジャヤは語った。――

クルの王よ、そこでユディシティラは、頭を下げてビーシュマの言葉を受け入れた。そして再び彼に挨拶してから、次にその勇士は弟たちとともに、すべての兵士が見ている中を、師匠（アーチャーリヤ）（ドローナ）の戦車に行った。（四四―四五）彼はドローナに挨拶し、右まわりにまわって敬意を表し、その不可侵の男に、自分に有益な言葉を述べた。（四六）

「尊者よ、あなたに御挨拶いたします。私は汚れを離れて戦います。バラモンよ、あなたのお許しを得れば、私はすべての敵に勝利します。（四七）」

ドローナは言った。

「戦いの決意をして、もしそなたが私のもとに来なかったら、大王よ、私はお前を呪って全滅させたであろう。（四八）それ故ユディシティラよ、私はお前に敬意を表されて満足した。非の打ち所のない者よ、私は承知した。戦いなさい。勝利を得なさい。（四九）私はお前の望みをかなえる。お前の望みを言いなさい。このような状況であるから、戦いはさておき、その他にお前は何を望むか。（五〇）人間は財物の奴隷である。しかし財物は誰の奴隷でもない。クル族は財物により私を拘束している。（五一）そこで我らは去勢者のようにお前に言う。戦いはさておき、その他にお前は何を望むか。私はクル族のために戦う。しかしお前の勝利を願っている。（五二）」

ユディシティラは言った。

「私の勝利を願って下さい。バラモンよ。私に有益なことを御教示下さい。あなたはクル族のために戦いなさい。私はこの願いを選びます。（五三）」

ドローナは言った。

「王よ、そなたの勝利は確実である。ハリ（ヴィシュヌ＝クリシュナ）がお前の顧問であるから。私はお前を承認する。お前は戦闘において敵に勝利するであろう。（五四）法ある所、そこにクリシュナがいる。クリシュナがいる所、そこに勝利がある。クンティーの息子よ、行って戦え。私にたずねなさい。何を述べようか。（五五）」

ユディシティラは言った。

「最高のバラモンよ、あなたにおたずねする。私の言おうとすることを聞きなさい。私は戦いにおいて、どうして無敵のあなたに勝つことができるでしょうか。（五六）」

ドローナは言った。

「私が戦場で戦っている間は、お前には勝利はない。お前は弟たちとともに、私を早く殺すことに努力せよ。（五七）」

ユディシティラは言った。

「おお、勇士よ、それでは御自身を殺す手段を教えて下さい。師匠よ、私はこの通り平伏してあなたにおたずねする。あなたに敬礼いたします。（五八）」

ドローナは言った。

「わが子よ、私が戦場に立ち、矢の雨を降らせて凄まじく戦う時、私を殺すことのできる敵はいない。（五九）ただし、王よ、私が死ぬ覚悟をして武器を捨て、意識がなくなった時、戦士たちのうちの〔誰かが〕私を殺すであろう。私はこの真実をお前に告げる。（六〇）そして

私は、信頼に値する言葉を述べる人から非常に悪い知らせを聞いた時、戦場で武器を捨てるであろう。私はこの真実をお前に告げる。（六一）」

サンジャヤは語った。——

大王よ、賢明なドローナからこのように聞くと、ユディシティラは師匠に別れを告げ、クリパのもとに行った。（六二）王はクリパに挨拶して、右まわりにまわって敬意を表してから、雄弁な彼はその不可侵の勇士に告げた。（六三）

「師よ、私はあなたに承諾していただきたい。私は汚れを離れて戦います。非の打ち所のない方よ、あなたのお許しを得れば、私はすべての敵に勝利します。（六四）」

クリパは言った。

「戦いの決意をして、もしそなたが私のもとに来なかったら、大王よ、私はお前を呪って全滅させたであろう。（六五）人間は財物の奴隷である。しかし財物は誰の奴隷でもない。大王よ、これは真実である。クル族は財物により私を拘束している。（六六）大王よ、私は彼らのために戦うべきであると思う。そこで私は去勢者のようにお前に告げる。戦いはさておき、その他にお前は何を望むか。（六七）」

ユディシティラは言った。

「おお、私はあなたにたずねます。師匠よ、それでは私の言葉を聞いて下さい。（六八）」

サンジャヤは語った。――
王はこのように言ったが、苦悩し茫然自失して沈黙していた。しかしガウタマ（クリパ）は彼の意図を知って彼に答えた。
「王よ、私は不死身である。戦って勝利を得よ。（六九）そなたが来てくれて私は嬉しい。王よ、私はいつも起床したら、お前の勝利を望むであろう。私はこの真実をお前に告げる。（七〇）」
大王よ、クリパの言葉を聞くと、王は彼に別れを告げ、マドラ王（シャリヤ）のいる所に行った。（七一）王はシャリヤに挨拶し、右まわりにまわって敬意を表してから、その不可侵の勇士に向かって、自分に有益な言葉を述べた。（七二）
「師よ、私はあなたに承諾していただきたい。私は汚れを離れて戦います。大王よ、あなたのお許しを得れば、私は敵に勝利します。（七三）」
シャリヤは言った。
「戦いの決意をして、もしそなたが私のもとに来なかったら、大王よ、私はお前を呪って、戦いにおいて敗北させたであろう。（七四）私はお前に敬意を表され、満足した。望みがあれば、それがお前に実現するように。私は承知した。戦って勝利を得よ。（七五）勇士よ、その他に何が必要か。お前に何を与えようか。このような状況であるから、戦いはさておき、その他にお前は何を望むか。（七六）人間は財物の奴隷である。しかし財物は誰の奴隷でもない。大王よ、これは真実である。クル族は財物により私を拘束している。（七七）妹（シャリヤはナクラとサハデーヴァの母マードリーの兄弟）の息子よ、お前の望んでいる願望をかなえてやろう。私は去勢者のように語る。戦いはさておき、その他にお前は何を望むか。（七八）」
ユディシティラは言った。
「偉大な王よ、常に私に最高に有益なことを助言して下さい。どうぞ敵のために戦って下さい。私はそうお願いします。（七九）」
シャリヤは言った。
「最高の王よ、言いなさい。この場合、私はそなたのためにどんな援助ができるか。確かに私はお前の敵のために戦う。クル族は財物により私を傭っている。（八〇）」
ユディシティラは言った。
「あなたが『努力』において私にかなえた恩寵（五・八・二五以下参照）がその通りになりますように。あなたが戦いにおいてカルナの力を弱めるという。（八一）」
シャリヤは言った。
「クンティーの息子よ、お前のその願いは望み通りにかなうであろう。行きなさい。安心して戦いなさい。私はそなたの勝利を約束する。（八二）」
サンジャヤは語った。――
ユディシティラは母方の伯父であるマドラの王（シャリヤ）の許可を得て、弟たちに囲まれて、敵の大軍から引き返した。（八三）

しかしクリシュナは、戦場でカルナのもとを訪れた。そして彼はパーンダヴァのために次のようにカルナに告げた。(八四)

「カルナよ、あなたはビーシュマに対する敵意から、戦わないと聞いた。カルナよ、ビーシュマが殺されない間、我らの側を選びなさい。(八五) しかしカルナよ、戦場でビーシュマが殺されたら、再びドゥルヨーダナを援助しに行きなさい。もしあなたが平等に見るならば。(八六)」

カルナは言った。

「クリシュナよ、私はドゥルヨーダナに不快なことはできない。私は命を捨ててドゥルヨーダナに有益なことを望むと知りなさい。(八七)」

サンジャヤは語った。――

バーラタよ、その言葉を聞くとクリシュナは引き返し、ユディシティラをはじめとするパーンダヴァたちと合流した。(八八)

その時、ユディシティラは敵軍の中で叫んだ。

「我々を選ぶ者を、私は盟友として選ぶ。(八九)」

するとユユツ（ドリタラーシトラがヴァイシャ女に生ませた息子）は彼らを見て、心から喜び、ユディシティラに次のように言った。(九〇)

「非の打ち所のない大王よ、もしあなたが私を選ぶなら、私はあなたのために、あなたの見

ている前で、戦場においてドリタラーシトラの息子たちと戦います。(九一)」

ユディシティラは言った。

「来なさい、来なさい。我々はみなして、あなたの愚かな兄弟たちと戦おう。ユユツよ、クリシュナも我々も、すべて次のように告げる。(九二)『勇士よ、私はあなたを選ぶ。私のために戦いなさい。ドリタラーシトラの祭餅（祖霊に捧げる団子）と（家系の）糸はあなたにかかっている。(九三) 光輝に満ちた王子よ、愛している我々を愛してくれ。愚かで非常に短気なドゥルヨーダナは生きながらえないだろう。(九四)』」

サンジャヤは語った。――

そこでクル族のユユツは、あなたの息子たちを捨て、太鼓の音を響かせながら、パーンドゥの息子たちの軍隊に行った。(九五) それから、ユディシティラ王は弟たちとともに、喜び勇んで、黄金に輝く鎧を再び身につけた。(九六) すべての人中の雄牛たちは、各自の戦車に乗り、再び前と同じように布陣した。(九七) 人中の雄牛たちは幾百の太鼓小鼓を鳴らし、種々の獅子吼をあげた。(九八) 人中の虎であるパーンダヴァの勇士たちが戦車に乗っているのを見て、ドリシタデュムナなどのすべての王たちは、大いに喜んだ。(九九) パーンドゥの息子たちが、敬われるべき人々に対して敬意を表した時、彼らの長上への尊敬を見て、その場の王たちはこの上なく称讃した。(一〇〇) 王たちは偉大な彼らの時にかなった友愛、優しさ、親族に対する最高の同情について語り合った。(一〇一)「善いかな、善いかな」という快い称

讃の声がいたるところであがった。それは誉れ高い彼らの心を喜ばせるものであった。（二〇二）蛮族もアーリヤ民族も、パーンドゥの息子たちの行動を見た人々、聞いた人々は、口ごもりながら泣いた。（二〇三）それから、その気高い勇士たちは喜び勇み、幾百となく種々の太鼓を打ち、牛乳のように白い法螺貝を吹き鳴らした。（二〇四）

（第四十一章）

パーンダヴァ軍とクル軍の激戦

ドリタラーシトラはたずねた。

「敵味方の軍隊がこのように布陣した時、どちらが先に攻撃したか。クル軍かパーンダヴァ軍か。（一）」

サンジャヤは語った。――

王よ、あなたの息子ドゥルヨーダナは、弟たちとともに、ビーシュマを先頭として、軍隊を率いて進軍した。（二）すべてのパーンダヴァたちも、ビーマセーナを先頭として、ビーシュマとの戦いを望んで、喜び勇んで進軍した。（三）獅子吼、「わあ、わあ」という叫び声、楽器の音、牛の角笛の音、種々の太鼓の音、馬や象の音が、両軍の間に起こった。それから敵軍はわが軍に襲いかかった。我々もそれに応えて雄叫びをあげ、大騒ぎとなった。（四―五）パーンダヴァ軍とクル軍の大軍は、大激戦において、法螺や太鼓の音によって震動した。森が風によりふるえるように。（六）その不吉な時刻に、諸王、象、馬、戦車に満ちた軍隊が会戦した時、その音は風に波立つ海の音のように凄まじかった。（七）

身の毛がよだつ喧騒があがった時、強力なビーマセーナは雄牛のように雄叫びをあげた。（八）ビーマセーナの叫び声は、法螺や太鼓の音や、象の鳴き声や、兵士たちの獅子吼を超えるものであった。（九）ビーマセーナの声は、全軍の幾千という嘶く馬の声をすべて超えるものであった。（一〇）轟く雷雲の、インドラの電撃のようなビーマの叫び声を聞いて、あなたの兵たちは戦慄した。（一一）その勇士の声により、すべての馬や象は大小便を流した。他の動物が獅子の声を聞いてそうするように。（一二）恐ろしい自分の姿を示しつつ、大雲のようになりつつ、あなたの息子たちを恐れさせつつ、ビーマはあなたの軍隊に襲いかかった。（一三）その勇士が襲いかかった時、〔あなたの息子などの〕兄弟たちはおびただしい矢を浴びせかけて、雲が太陽をおおうように、彼を食い止めた。（一四）すなわち、あなたの息子ドゥルヨーダナ、ドゥルムカ、ドゥフサハ、シャラ、超戦士ドゥフシャーサナ、ドゥルマルシャナ、ヴィヴィンシャティ、チトラセーナ、偉大な戦士ヴィカルナ、プルミトラ、ジャヤ、ボージャ、強力なソーマダッタの息子（ブーリシュラヴァス）である。（一五―一六）彼らは雲が稲妻を閃かせるように大弓を揺すり、脱皮した毒蛇のような矢をとって〔ビーマに浴びせかけた〕。（一七）

その時、ドラウパディーの〔五人の〕息子たち、偉大な戦士であるスバドラーの息子（アビマニユ）、ナクラとサハデーヴァ、ドリシタデュムナが、鋭い矢で苦しめつつ、ドゥルヨーダナの軍隊に対して進撃した。強烈な金剛杵で山々の峰を砕くように。（一八―一九）その恐ろしい弓

弦と弓籠手の音のする最初の合戦において、あなたの軍隊と敵軍のうちで、敵に後ろを見せる者は誰もいなかった。(二〇)
バラタの雄牛よ、私はドローナの弟子たちの手練の早業を見た。王よ、彼らはおびただしく矢を放ち、的を射貫いた。(二一) うなる弓の音はやむことなく、燃える矢は空から降る星のように飛び交った。(二二) バーラタよ、他のすべての王たちは、観衆のように、その美しくも恐ろしい親族の交戦を見ていた。(二三) 王よ、それからその偉大な戦士たちは、激しく相互に攻撃し合い、互いに競い合って戦いに専念した。(二四) 象と馬と戦車に満ちたクル軍とパーンダヴァ軍は、画布に描かれた絵のように、戦場でこの上なく輝いていた。(二五) それからすべての王たちは弓をとり、あなたの息子の命令により、兵士たちを率いて攻撃した。(二六) そしてユディシティラに命じられた幾千の王は、雄叫びをあげて、あなたの息子の軍を攻撃した。(二七) 両軍の兵士たちの間に激戦が行なわれた。軍隊のたてるほこりでおおわれ、太陽は見えなくなった。(二八) 軍隊は激しく戦い、撃破され、再び戦列にもどり、敵味方の区別はなくなった。(二九) そのような非常に恐ろしい激戦が行なわれている間、あなたの父（ビーシュマ）はすべての兵たちを超えて輝いていた。(三〇)

（第四十二章）

サンジャヤは語った。——
王よ、その恐ろしい日の午前中、諸王の生命を断つ非常に恐るべき戦闘が行なわれた。

(一) 戦いにおいて勝利を望むクル軍とパーンダヴァ軍の、獅子の鳴き声のような喚声が天地に響き渡った。(二) ワーワーという叫び声と、弓籠手や法螺貝の音があがり、互いに叫び合う勇士たちの獅子吼が聞こえた。(三) バラタの雄牛よ、弓籠手に当たる弓弦の音、歩兵たちの足音、馬たちの大きな鳴き声、象をかりたてる棒や鉤を振り下ろす音、種々の武器の音、相互に突進する象たちの鈴の音が聞かれた。(四—五) その身の毛がよだつ騒々しい音が生じた時、戦車の音は〔雷〕雨の音のようであった。(六) すべてのクル軍は生命を捨てて、情け容赦なく、旗を高く掲げて、パーンダヴァ軍を攻撃した。(七) 王よ、ビーシュマ自身も、戦場でカーラ（破壊神）の杖のような恐ろしい弓を持ち、アルジュナに対して突進した。(八) 威光あるアルジュナの方も、世に知られるガーンディーヴァ弓を持ち、戦いの最前線において、ビーシュマに襲いかかった。(九) 彼ら二人のクルの虎は相互に他を殺そうと望んだ。強力なビーシュマは、戦場でアルジュナを射たが、彼を揺がすことはできなかった。同様にアルジュナも、戦いにおいてビーシュマを揺がすことはできなかった。王よ。(一〇) 偉大な射手サーティヤキは、クリタヴァルマンを攻撃した。その両者の間に、身の毛がよだつ激戦が行なわれた。(一一) この両者は恐ろしい矢でお互いに攻撃し合い、サーティヤキはクリタヴァルマンを、クリタヴァルマンはサーティヤキをそれぞれ傷つけた。(一二) この強力な両雄は、全身矢でおおわれ、春に開花して、花で彩られたキンシュカ樹のようになった。(一三)
偉大な弓取りであるアビマニユはブリハドバラと戦った。王よ、それからコーサラ国王はその戦いにおいて、スバドラーの息子（アビマニユ）の旗を切り、その御者を倒した。(一四) 大王よ、

戦車の御者を倒されて、スバドラーの息子は怒り、九本の矢でブリハドバラを射た。（一五）そして敵を制する彼は、他の鋭い（異本による）二本の矢で旗を断ち、一本の矢で背後を〔守る者を〕、一本の矢で御者を貫いた（ニーラカンタ注による）。そして怒った両者は、鋭い矢でお互いに傷つけ合った。（一六）

あなたの息子ドゥルヨーダナは、戦いにおいて誇り高く、驕り、敵意に満ちた偉大な戦士であるが、ビーマセーナが彼と戦った。（一七）この人中の虎である二人の強力なクルの勇士は、戦場において、お互いに矢の雨を降らせた。（一八）バーラタよ、この偉大な二人の達人がめざましく戦っているのを見て、一切の生類に驚きが生じた。（一九）

ドゥフシャーサナは偉大な戦士ナクラを攻撃し、多くの急所を断つ鋭い矢により彼を貫いた。（二〇）ナクラの方は、笑って、彼の旗と弓矢を鋭い矢で断ち切った。バーラタよ。そして二十五のクシュドラカ（矢の種類）により彼を傷つけた。（二一）しかし不可侵なあなたの息子は、その激戦において、矢によってナクラの馬たちを（異本による）断ち切り、旗を倒した。（二二）ドゥルムカは強力なサハデーヴァを攻撃した。そしてその激戦において、奮戦しているサハデーヴァを矢の雨で射た。（二三）しかし勇士サハデーヴァは、その激戦において、非常に鋭い矢でドゥルムカの御者を倒した。（二四）両者は戦いに酔い、その戦場で互いに攻撃し合い、やられたらやり返そうと望み、おびただしい矢で相手を恐れさせた。（二五）

ユディシティラ王自身は、マドラ国王（シャリヤ）を攻撃した。マドラ国王は彼の弓を二つに断ち切った。わが君よ。（二六）そこでユディシティラは切られた弓を捨て、急いでより強力な

他の弓をとった。（二七）それから王は怒って「待て、待て」と言いながら、真っ直ぐの矢でマドラ国王をおおった。（二八）バーラタよ、ドリシタデュムナはドローナを攻撃した。ドローナは怒って、奮戦している彼の必殺の弓を三つに断ち切った。（二九）そしてドローナはその戦いにおいて、もう一つのカーラの杖のような非常に恐ろしい矢を放った。その矢はドリシタデュムナの身体に深々と刺さった。（三〇）一方ドリシタデュムナは戦場において、他の弓と十四本の矢をとってドローナに射返した。両者はお互いに怒って、激しく戦った。（三一）（三二―七九略）

その戦場で勇士たちはお互いに攻撃し合い、戦いは非常に恐ろしく、混沌としたものになった。（八〇）神仙やシッダとチャーラナ（いずれも半神の一種）たちがやって来て、その神々と阿修羅の戦いのような恐るべき戦争を見物した。（八一）わが君よ、それから幾千の象兵、幾千の戦車兵、騎兵の大群、歩兵の大群は逆方向に進んだ。（八二）人中の虎よ、戦車兵、象兵、歩兵、騎兵が繰り返し戦っているのがあちこちで認められた。（八三）

（第四十三章）

サンジャヤは語った。――

バラタ族の王よ、あちこちで絶えず幾十万の兵たちが常軌を逸して戦っているのを、あなたに報告しましょう。（一）そこでは息子は父を、父は実の息子を認めない。兄弟は兄弟を、叔父は甥を認めない。（二）甥は叔父を、友は友を認めない。パーンダヴァ軍は憑（つか）れたかのよ

うにクル軍と戦った。(三)ある人中の虎たちは、戦車により戦車兵を攻撃した。そして軛(くびき)により軛を破壊した。バラタの雄牛よ。(四)戦車の轅(ながえ)により轅を、戦車の連結軸により連結軸を破壊した。ある者たちは集結して、お互いに殺そうとして、集結した者たちと戦った。(五)幾台かの戦車は、他の戦車と衝突して動けなくなった。発情した巨大な象たちも、他の象たちと衝突して動けなくなった。(六)象たちは怒って、投槍や旗を搭載した敵の象たちと、牙でお互いに何度も傷つけ合った。(七)大王よ、猛烈な勢いの巨象たちに襲われ、牙で突かれた象たちはそこで非常に苦しんで、叫び声をあげていた。(八)象学により調教された発情した象(強い象)たちは、突き棒や鉤で打たれ、敵の発情した象たちに対して突撃した。(九)幾頭かの巨象は、発情した敵象たちにつかまって、クラウンチャ鳥のような声をあげてあちこち逃げまどった。(一〇)正しく調教された、こめかみが切れた(発情した)すばらしい象たちは、種々の投槍や矢で貫かれ、急所を断たれて咆哮し、息絶えて倒れた。またある象たちは、恐ろしい声をあげて叫び、諸方を走りまわった。(一一―一二)(一三―三三略)

ある人々は槍で切り裂かれ、また斧で断ち切られた。ある人々は象に踏みつぶされ、またある人々は馬に蹴散らされた。(三四)またある人々は戦車の車輪で切断され、あるいは鋭い矢で切られた。王よ、人々はあちこちで縁者を呼んで叫んだ。(三五)ある人々は戦場において息子を、ある人々は父を、あるいは兄弟や親族を呼んだ。ある人々は叔父を、甥を、あるいはその他の者たちを呼んだ。(三六)

パーラタよ、実に多くの人々が内臓をずたずたにされ、腿を砕かれ、腕を切られ(異本による)、

脇を裂かれ、渇き、生きることを求めて泣き叫んでいるのが認められた。(三七)王よ、ある者たちは気力も失せて、渇に苦しみ、戦場で地面に倒れ、水のみを求めていた。(三八)パーラタよ、ある人々は大量の血にまみれ、苦しみながら、自分自身を、そして同盟したあなたの息子たちをひどく非難した。(三九)他の勇猛な王族(クシャトリヤ)たちは、お互いに敵意を抱いて、決して武器を離さず、決して嘆かなかった。わが君よ。喜び勇んで、あちこちでお互いに威嚇し合っていた。(四〇)彼らは怒って自分の唇を歯で噛み、眉をひそめてお互いを見つめ合った。(四一)

ある強力な人々は、矢に傷つけられ、傷が痛み、苦しんでいたが、気を確かに持って沈黙していた。(四二)またある勇士たちは、戦闘において戦車を失い、他の者の戦車を求めていたが、倒れて巨象に踏みつけられた。大王よ、彼らは花をつけたキンシュカ樹のように輝いていた。(四三)その非常に恐ろしい最高の勇士の滅亡が進行している時、諸々の軍隊において、多くの恐ろしい音が生じた。(四四)その戦いで、父は息子を殺し、息子は父を殺した。甥は叔父を殺し、叔父は甥を殺した。(四五)王よ、友は友を殺し、親族は親族を殺した。そこでクル軍は、このようにパーンダヴァ軍と戦った。(四六)その常軌を逸した恐ろしい激戦が行なわれている間、パーンダヴァ軍はビーシュマに近づいて戦慄した。(四七)バラタの雄牛である王よ、その時、強力なビーシュマは、五つの星を持つ棕櫚のついた、高くそびえる銀の旗標により、月がメール山により輝くように輝いていた。(四八)

(第四十四章)

ビーシュマの勇武

サンジャヤは語った。――

その恐るべき日の午前がほとんど過ぎて、恐怖に満ちた偉大な勇士たちの死が進行していた時のことである。(二)ドゥルムカ、クリタヴァルマン、クリパ、シャリヤ、ヴィヴィンシャティは、あなたの息子にうながされて、ビーシュマに近づき、彼を守った。(三)バラタの雄牛よ、これら五名の超戦士に守られて、その偉大な戦士はパーンダヴァ軍の中に突入した。(三)バーラタよ、ビーシュマの棕櫚の旗標は、チェーディ、カーシ、カルーシャ、パーンチャーラの軍の間に、幾度もはためいて認められた。(四)ビーシュマはその時、真っ直ぐの高速な矢により、多くの敵の頭や武器を断ち切った。(五)バラタの雄牛よ、戦車が進むにつれ、踊るかのようなビーシュマの〔矢に〕急所を撃たれ、何頭かの象が悲痛な声をあげた。(六)

アビマニユ（アルジュナの息子）は大いに怒り、赤褐色の最高の馬たちをつないだ戦車に乗り、ビーシュマの戦車に向かって突進した。(七)彼は黄金できらびやかなカルニカーラ樹の旗標をひるがえし、ビーシュマと〔五名の〕最高の戦士たちに〔矢を〕雨降らせた。(八)その勇士は棕櫚の旗標を持つ〔ビーシュマ〕の旗を鋭い矢で射て、ビーシュマとその随行者たちと戦った。(九)彼は一本の矢でクリタヴァルマンを、五本の矢でシャリヤを射て、鋭い先の九本の矢で曾祖父（ビーシュマ）を傷つけた。(一〇)彼は引き絞って放った、見事に射た一本の矢で、黄金で飾られた旗を貫いた。(一一)そして、すべての防具を断ち切る真っ直ぐの矢で、ドゥルムカの御者の頭を胴体から切り離した。(一二)彼は黄金で飾られたクリパの弓を、鋭い先の矢で断ち切った。そしてその偉大な戦士は最高に怒り、踊るかのように、鋭い先の矢で他のすべての者たちを射た。彼の手練の早業を見て、神々ですら満足した。(一三―一四)ビーシュマをはじめとするすべての戦士たちは、アビマニユが正確に的を射るので、強力なアルジュナその人が現われたかのように考えた。(一五)手練の早業で引かれる彼の弓は、ガーンディーヴァ（アルジュナの弓）のような音をたてて、旋火輪のように輝き、諸方に向けられていた。(一六)敵の勇士を殺すビーシュマは、その戦闘において、非常に高速の九本の矢により、アルジュナの息子（アビマニユ）を速やかに射た。(一七)誓戒を守るビーシュマはまた、三本の矢で最高の力を持つアビマニユの旗を断ち切り、そして三本の矢で彼の御者を殺した。(一八)わが君よ、クリタヴァルマンとクリパとシャリヤもまた、マイナーカ山のようなアビマニユを射たが、彼を動揺させることはできなかった。(一九)勇士アビマニユはドリタラーシトラ側の偉大な戦士たちに囲まれたが、その五名の戦士に対して矢の雨を降らせた。(二〇)それから、彼らの強力な武器を矢の雨を放って防ぎ止め、ビーシュマに矢を注いで、強力なアビマニユは雄叫びをあげた。(二一)王よ、矢でビーシュマを苦しめてそこで奮戦している彼の腕力は絶大なものであった。(二二)彼が勇武を示している間、ビーシュマも矢を放った。しかし彼は、その戦いで、ビーシュマの弓から放たれた矢をすべて断ち切った。(二三)それからその的を外さぬ勇士は、その戦いにおいて、九本の矢でビーシュマの旗を断ち切った。そこで人々は喚声

をあげた。(二四)長い竿を持つ、銀製で黄金に飾られた棕櫚の旗標は、アビマニユの矢で切られて、地面に落ちた。バーラタよ。(二五)バラタの雄牛よ、アビマニユの矢により旗が落ちたのを見て、ビーマは喜んで叫び、アビマニユを喜ばせた。(二六)

その時、恐るべき勇士ビーシュマは、多くの神的な強力兵器を出現させた。(二七)そしてその限りなく高邁な曾祖父は、幾十万の真っ直ぐの矢をアビマニユに浴びせた。(二八)その時、パーンダヴァ軍の十名の偉大な戦士が、アビマニユを守るために、急いで戦車で駆けつけた。(二九)すなわち、ヴィラータとその息子、ドリシタデュムナ、ビーマ、(五名の)ケーカヤたち、サーティヤキである。王よ。(三〇)彼らが激しく攻撃する間、ビーシュマはその戦いにおいて、三本の矢でパーンチャーラの王子(ドリシタデュムナ)を傷つけ、鋭い矢(異本は「九本の矢」)でサーティヤキを傷つけた。(三一)そして、引き絞って放った一本の鋭い馬蹄形の先の矢で、ビーマセーナの旗を断ち切った。(三二)最高の人よ、ビーマセーナの黄金製の獅子の旗標は、ビーシュマに射られて戦車から落ちた。(三三)ビーマセーナはその戦いにおいて、三本の矢でビーシュマを射て、一本の矢でクリパを、八本の矢でクリタヴァルマンを貫いた。(三四)

(三五―四六節略)

それから勇士ビーシュマは、戦場で雷雲のように大声で叫んで、椰子(ターラ)ほど(あるいは、ターラは長さの単位)の弓をとって、シャンカ(ヴィラータの息子)を攻撃した。(四七)奮い立つ強力な勇士を見て、パーンダヴァの軍隊は激風に打たれた船のようにふるえた。(四八)そこでアルジュナは、今はシャンカをビーシュマから守るべきだと考え、急いでシャンカの前面に立った。それから戦闘が始

まった。(四九)戦場で戦っている戦士たちの間に、ワーワーという大声があがった。火が火の中に混じったようだと彼らは驚嘆した。(五〇)その時、シャリヤは棍棒を持ち、大戦車から降りて、シャンカの四頭の馬を殺した。バラタの雄牛よ。(五一)シャンカは刀を持ち、馬が殺された戦車から速やかに逃れ、アルジュナの戦車に達して心安らかになった。(五二)

それから、ビーシュマの戦車から矢継ぎ早に矢が発射され、それらの矢により空中と大地はすっかりおおわれた。(五三)そして最高の戦士ビーシュマは、パーンチャーラ、マツヤ、ケーカヤ、プラバドラカの兵たちを矢によって倒した。(五四)

その戦いで、ビーシュマはすぐにアルジュナを捨てて、軍隊に囲まれたパーンチャーラ国王のドルパダを攻撃した。王よ。そして親しい縁者である彼に多くの矢を浴びせた。(五五)寒季の終わりに森が火で燃やされるように、ドルパダの軍は矢で燃やされるかのように見えた。ビーシュマは戦場で、煙のない火のように立っていた。(五六)あるいは真昼に、その光輝で熱する太陽のようであった。パーンダヴァの兵士たちはビーシュマを見ることができなかった。(五七)パーンダヴァの兵たちは恐怖に戦慄(おのの)き、周囲を見まわした。しかし彼らは寒さに苦しむ牛たちのように、救済者を見出さなかった。(五八)軍隊が敗走し、粉砕されて気力を失った時、バーラタよ、パーンダヴァの兵たちの間に、「ああ、ああ」という大声があがった。(五九)それからもビーシュマは、常に弓を円形に引き絞り、猛毒の蛇のような燃える先端の矢を放った。(六〇)その誓戒を守る男は、たて続けに矢を射て、すべての方角に一筋の矢の道を作り、狙いを定めてはパーンダヴァの戦士たちを殺した。バーラタよ。(六一)

それから、パーンダヴァ軍がすっかり粉砕された時、太陽が西山に没し、何も見分けがつかなくなった。（六二）そしてパーンダヴァたちは、大激戦でビーシュマがめざましい働きをするのを見て、軍隊を引きあげた。バラタの雄牛よ。（六三）

（第四十五章）

ビーシュマに対抗し、クラウンチャの陣形をとる

サンジャヤは語った。――

バラタの雄牛よ、第一日目に軍隊が撤退し、戦いにおいてビーシュマが猛り立ち、ドゥルヨーダナが喜んだ時、ダルマ王（ユディシチィラ）はすべての弟たちとすべての国王をともない、速やかにクリシュナのもとに行った。（一―二）王よ、敗北について考え込み、ビーシュマの勇武を見て、彼は最高に悩んでクリシュナに告げた。（三）

「クリシュナよ、恐ろしく勇猛な勇士ビーシュマを見よ。夏に火が乾いた草木を燃やすように、彼は矢で私の軍隊を燃やす。（四）彼は火が供物を食うように私の軍隊を舐めまわす。どうしたらあの偉大な男に対抗することができるであろうか。（五）というのは、弓を持ち強力なあの人中の虎を見るや、私の軍隊は矢で射られて逃げ散るのである。（六）怒ったヤマ（閻魔）、金剛杵（ヴァジュラ）を手に持つ神（帝釈天）、輪縄を持つヴァルナ（水天）、棍棒を持つクベーラ（毘沙門天）には、戦って勝つことができよう。（七）しかし、大威光を持つ強力なビーシュマに勝つことはできない。そのようであるから、そこで私は船もなく、ビーシュマという深い海に沈み込んでいる

のだ。（八）クリシュナよ、私の不明の故にビーシュマを敵としたのだから、私は森へ行ってそこで暮らすほうがよい。（九）これらの王たちを、ビーシュマという死神に与えるよりは……。クリシュナよ、偉大な武器に通じたビーシュマは、私の軍隊を滅ぼすであろう。（一〇）蝗（いなご）が燃える火に飛び込むように、私の兵士たちも彼に向かって行って滅亡するのみ。（一一）クリシュナよ、私は王国を求めて武勇に訴えて滅亡する。私の勇猛な弟たちも、矢に痛めつけられて苦しんでいる。（一二）私のせいで、彼らは兄への愛情から、王権から堕ち、幸福を奪われている。（一三）私は生命が大事であると考える。今や生命は得られがたいから。私は余生において、なしがたい苦行を行なおう。戦いにおいてあれらの友たちを殺すのはやめよう。クリシュナよ。（一四）

強力なビーシュマは神的な武器により、絶えず私の幾千の最強の戦士を殺す。（一五）どのようにしたら私の目的は成就するだろうか。クリシュナよ、すぐに言ってくれ。この戦いにおいて、アルジュナは中立を保っているように見える。（一六）大力のビーマのみが、腕力だけを頼りに、力の限り戦っている。彼は王族の法（クシャトラダルマ）（武士道）を大切にしているのだ。（一七）この誇り高い男は、勇士を殺す棍棒により、気力の限り、敵の象兵と騎兵と歩兵に対して、なしがたい働きをしている。（一八）しかし貴君よ、彼は真っ当な戦いによっては、敵の軍隊を滅亡させることはできない。百年かかってもできない。勇士よ。（一九）ただ、そこにいる武器に通じたあなたの友（アルジュナ）のみができる。しかし彼は、我々がビーシュマや偉大なドローナに燃やされていても、我々を見過ごしている。（二〇）ビーシュマと偉大なドローナの神的な

武器は、繰り返し用いられて、すべての王族（クシャトリヤ）を燃やすであろう。(二一) クリシュナよ、「ビーシュマは猛り立って、すべての王とともに、必ずや我々を滅ぼすであろう。彼の勇武はそのようである。(二二) ヨーギンの主よ、雨雲が森火事を鎮めるように、戦いにおいてビーシュマを鎮めることができるような強力な勇士を見つけなさい。(二三) クリシュナよ、あなたの恩寵により、パーンダヴァは敵を殺し、自らの王国を取りもどして、親族とともに楽しむであろう。(二四)」

気高いユディシティラはこのように言うと、長いこと嘆き、悲しみで意気消沈し、考え込んでいた。(二五) ユディシティラが悲嘆に暮れ、意気消沈しているのを知り、クリシュナはすべてのパーンダヴァを喜ばせて次のように告げた。(二六)

「バラタの最上者よ、嘆いてはいけない。嘆くには及ばない。というのは、あなたの弟たちは勇猛で、全世界に知られる弓取りではないか。(二七) 王よ、そして私はあなたに有益なことをする。偉大な戦士サーティヤキも、老いたヴィラータとドルパダも、ドリシタデュムナも同様である。(二八) 最高の王よ、また軍隊を率いるすべての王たちも、あなたに忠誠を抱き、あなたの恩寵を求めている。(二九) 軍司令官になった、ここにいる強力なドリシタデュムナは、いつもあなたの幸せを望み、有益なことに専念している。強力な人よ、シカンディンはビーシュマ殺害（の原因）であるという。(三〇)」

それを聞くと、ユディシティラ王はその集会において、クリシュナが聞いている前で、偉大な戦士ドリシタデュムナに告げた。(三一)

「ドリシタデュムナよ、貴君、私の言うことを聞きなさい。私が述べる言葉に背くべきではない。(三二) あなたはクリシュナが認めた、私の軍司令官だ。かつてカールッティケーヤ（カスダン）が常に神々の軍司令官であったように、あなたもパーンダヴァ軍の軍司令官である。人中の雄牛よ。(三三) 人中の虎よ、そこであなたは勇武を発揮してクル軍を殺しなさい。貴君、私もビーマもクリシュナも、あなたについて行くであろう。(三四) マードリーの双子、武装したドラウパディーの息子たち、そしてその他の主立った王たちもだ。人中の雄牛よ。(三五)」

すると、すべての人々を喜ばせつつ、ドリシタデュムナは言った。

「プリターの息子よ、私はかつてシヴァにより、ドローナの殺害者と定められた。(三六) 王よ、私は今や戦場でビーシュマ、ドローナ、クリパ、シャリヤ、ジャヤドラタたち、すべての誇り高い者たちと戦うであろう。(三七)」

敵を殺す王中の王ドリシタデュムナが立ち上がった時、戦いに酔うパーンダヴァの勇士たちは雄叫びをあげた。(三八) それからユディシティラは、軍司令官ドリシタデュムナに告げた。

「クラウンチャールナ（クラウンチャは鳥の名）という陣形はすべての敵を滅ぼす。(三九) 神々と阿修羅（の戦い）において、ブリハスパティ（神々の師）はそれをインドラに教えた。敵軍を滅ぼすその陣形を正しく整えなさい。クル軍とともに諸王はそのかつて見られたことのない陣形を見よ。(四〇)」

インドラによりヴィシュヌが言われたように、その神のような人によりそのように言われたドリシタデュムナは、夜明けに、アルジュナを全軍の先頭に置いた。(四一) 太陽の道（天空）にひるがえる、驚異的で魅力的な彼の軍旗は、インドラの命令によりヴィシュヴァカルマン（一切造者）に作られたものである。(四二) インドラの武器（虹）に似た色をした小旗で飾られ、空中を飛ぶ鳥のようであり、ガンダルヴァの都城（蜃気楼）のようであり、戦車の行く道にそって踊っているかのように見える。わが君よ。(四三) アルジュナは宝石で飾ったガーンディーヴァ弓を持っていた。スメール（須弥山）が太陽とともにあるように（異本による）。(四四) 大軍に囲まれたドルパダ王は〔その陣形の〕頭であった。クンティボージャとチェーディ国王（ドリシタケートゥ）は両眼であった。王よ。(四五) ダシャールナ軍とプラヤーガ軍とダーシェーラカ衆と、湿地帯の住民とキラータ族たちは首のところにいた。バラタの雄牛よ。(四六) 王よ、そしてユディシティラは、パタッチャラ、フーナ、パウラヴァカ、ニシャーダとともに背中の部分にいた。(四七) ビーマセーナ、ドリシタデュムナ、ドラウパディーの息子たち、アビマニユ、偉大な戦士サーティヤキは両翼にいた。(四八) ピシャーチャ、ダラダ、プンドラ、クンディーヴィシャ、マダカ、ラダカ、タンガナ、パタンガナ、(四九) バーフリーカ、ティッティラ、チョーラ、パーンディヤ。これらの部族は右翼にいた。バラタ族の王よ。(五〇) アグニヴェーシャ、ジャガットゥンダ、パラダ、シャバラ、トゥンブパ、ヴァッサ、ナークラ、ナクラとサハデーヴァは左翼にいた。(五一) 両翼には一万の戦車、頭には十万、背中には一億二万、首には十七万がいた。(五二) 王よ、両翼の先端（ふくらんだ部分）と末端と、両翼の末尾には、〔兵士に〕囲まれた動く山のような象たちが進んだ。(五三) ヴィラータはケーカヤ軍とともに殿を守った。カーシ国王とシャイビヤ（シビ国王）も同様である。三万の戦車を率いていた。(五四) バーラタよ、このように強力な陣形を布いて、パーンダヴァ軍は戦闘のために武装して太陽が昇るのを待っていた。(五五) 太陽のような色の、清らかで大きい白傘が、彼らの象や戦車の上で輝いていた。(五六)

（第四十六章）

サンジャヤは語った。——

それからわが君よ、無量の威光を持つユディシティラによって、クラウンチャという難攻で非常に恐ろしい陣形が布かれたのを見て、あなたの息子は、師匠（ドローナ）、クリパ、シャリヤ、ソーマダッタの息子（ブーリシュラヴァス）、ヴィカルナ、アシュヴァッターマン、ドゥフシャーサナなどの弟たち、その他、戦いのためにそこに集結した多くの勇士たち全員に、次のような時宜にかなった言葉を述べた。彼らを喜ばせつつ。バーラタよ。

「諸君はすべて種々の武器に通じ、種々の武器で武装している。(一―四) あなた方はみな偉大な戦士で、それぞれ一人で戦いにおいてパーンドゥの息子たちと彼らの軍隊を殺すことができる。いわんや結束したらなおさらである。(五) ビーマに守られたあの軍は我々に匹敵しない。しかるに、ビーシュマに守られたわが軍は彼らに匹敵する（異本にもとづく。六・二三・一〇参照）。(六) サンスターナ、シューラセーナ、ヴェーニカ、クックラ、アーレーヴァカ、トリガルタ、マドラ

カ、ヤヴァナの軍、シャトルンジャヤ、ドゥフシャーサナ、勇士ヴィカルナ、ナンダとウパナンダカ、チトラセーナ、パーニバドラカの軍は、ともに軍隊を率いて、まさにビーシュマを守れ。（七—九）」

わが君よ、それからドローナとビーシュマとあなたの息子は、パーンダヴァの陣形に対抗して強力な陣形を布いた。（二〇）ビーシュマは大軍にぐるりと囲まれて、神々の王のように、大軍団を率いて進軍した。（二一）王よ、栄光ある偉大な射手バラドゥヴァージャの息子（ドローナ）は、クンタラ、ダシャールナ、マガダの軍とともに彼に従った。（二二）（二三—三〇略）

（第四十七章）

ビーシュマとアルジュナの戦い

ドリタラーシトラはたずねた。

「このようにわが軍と敵軍が布陣した時、最高の戦士たちはどのように合戦を開始したか。（一）」

サンジャヤは語った。——

軍隊が等しく布陣した時、戦士たちは武装して、美しい旗を掲げた。海のような無限の軍隊を眺めて、あなたの息子ドゥルヨーダナ王は、彼らの中に立ち、「諸君は鎧をつけて戦え」とあなたの全軍に告げた。（二—三）彼らはすべて高く旗を掲げ、強固な心をして、命を捨てて、パーンダヴァ軍を攻撃した。（四）それから、敵味方の間で、戦車や象が入り乱れる、身の毛がよだつ激戦が行なわれた。（五）戦車兵から放たれた、金の羽根のついた、切っ先の鋭い、よく研磨された矢が、象や馬たちの上に落ちた。（六）

こうして戦いが始まった時、老いたクルの祖父である、恐ろしく勇猛な勇士ビーシュマは、鎧をつけ、弓をかざして襲いかかり、アビマニユ、ビーマセーナ、勇士サーティヤキ、ケーカヤ国王、ヴィラータ、ドリシタデュムナ、チェーディとマツヤの勇士たちに対し、矢の雨を降らせた。（七—九）その勇士が攻撃して来た時、〔パーンダヴァの〕強力な陣形は動揺した。そしてすべての兵士たちの間で激しい応酬があった。（一〇）パーンダヴァ軍は軍旗を断たれ象を倒され、主要な騎兵を殺され、歩兵は逃げ出した。（一一）

人中の虎アルジュナは、偉大な戦士ビーシュマを見て、いきり立ってクリシュナに言った。

「祖父のいる所へ行ってくれ。（一二）あのビーシュマは、ドゥルヨーダナのために専念し、明らかに私の軍隊を滅ぼすであろう。（一三）そしてクリシュナよ、あのドローナ、クリパ、シャリヤ、ヴィカルナと、ドゥルヨーダナをはじめとするドリタラーシトラの息子たちは、そろって、この剛弓の勇士に守られて、パーンチャーラ軍を滅ぼすであろう。そこでクリシュナよ、私はわが軍のためにビーシュマに立ち向かうであろう。（一四—一五）」

ヴァースデーヴァ（クリシュナ）は彼に言った。

「アルジュナよ、油断するな。勇士よ、私はあなたを祖父の戦車の方に連れて行く。（一六）」

クリシュナはそう言うと、世に知れわたったその戦車をビーシュマの戦車の方に近づけた。(二七) アルジュナの戦車は、多くの旗がひるがえり、鶴のような色の馬をつなぎ、非常に恐ろしく吠える猿の旗標を高く掲げ、雷雲のような大きな音をたて、太陽のような色をしていた。(二八) アルジュナはその戦車に乗り、クル軍とシューラセーナ軍を粉砕し、友軍の憂いを晴らして、矢を放ちながら速やかに進撃した。(二九) 彼は発情した象のように、戦場で勇士たちを恐れさせ、矢で彼らを倒しつつ、激しく攻撃した。(三〇) ビーシュマはシンドゥ軍をはじめとする軍隊、東部地方、サウヴィーラ、ケーカヤの軍に守られ、そのアルジュナに対して激しく反撃した。(三一)(三二―四〇略)

その戦いにおいて、ガンガーの息子(ビーシュマ)は九本の矢でアルジュナを傷つけた。アルジュナは急所を貫く十本の矢で彼を攻撃した。(四一) それから、戦いにおいて誉れ高いアルジュナは、見事に射られた千本の矢で、ビーシュマの周囲をおおった。(四二) しかしビーシュマは、アルジュナの矢の群を、自分の矢の群によって防いだ。(四三) 両者は最高に勇み立ち、両者は戦いに歓喜し、お互いに対抗しようと望み、互角に戦った。(四四) ビーシュマの弓から放たれたおびただしい矢の群が、アルジュナの矢により断ち切られるのが認められた。(四五) 同様に、アルジュナに放たれた矢の群は、ビーシュマの矢に射られて一本ずつ大地に落ちた。(四六) アルジュナは二十五本の鋭い矢でビーシュマを傷つけた。ビーシュマもまた、その戦いにおいて、三十本の矢でアルジュナを貫いた。(四七) 敵を制する二人の非常に強力な勇士は、お互いの馬を射て、そして旗を射て、戦車の轅と車輪を射て、遊び戯れた。

(四八) 大王よ、それから最高の戦士ビーシュマは怒り、三本の矢でクリシュナの胸の間を射た。(四九) 王よ、ビーシュマの弓に放たれた矢に貫かれて、クリシュナは花咲くキンシュカ樹のように戦場で輝いた。(五〇) それからアルジュナは、クリシュナが射られたのを見てひどく怒り、戦場において三本の矢でビーシュマの御者を射た。(五一) しかし二人の勇士がお互いに相手を殺そうといくら努力しても、戦いにおいて相手を凌駕することができなかった。(五二) 双方の御者は手練の早業を発揮したので、両者は多様に、美しい円形を描き、一進一退を繰り返した。(五三) 王よ、二人の偉大な戦士は攻撃する隙をうかがって、繰り返し相手の弱点を探していた。(五四) 両雄は獅子吼をするとともに法螺を吹き鳴らし、弓の音を響かせた。(五五) 両者の法螺の音と車輪の音により、大地は突然に裂け、震動し、反響した。(五六) バラタの雄牛よ、しかし二人のうちのどちらも相手の隙を見出せなかった。両雄とも戦いにかけて強力で、お互いに同等であった。(五七) クル軍は旗標のみによりビーシュマを見分けた。またパーンドゥの息子たちも旗標のみによりアルジュナを見分けた。(五八) バラタ族の王よ、その二人の最高の勇士のそのような勇武を見て、戦場におけるすべての生類は驚嘆した。(五九) バーラタよ、誰も戦いにおける二人の弱点を見出さなかった。法を守る人に過失をまったく見出さないように。(六〇) 二人とも戦場において、矢の群により見えなくなった。しかしすぐに再び明瞭になった。(六一) 神々とガンダルヴァとチャーラナと聖仙たちは、二人の勇武を見て、お互いに語り合った。(六二)

「神々、阿修羅、ガンダルヴァを含む世界の者たちは、戦いにおいて怒ったこの偉大な二人

の戦士に勝つことは決してできない。(六三)この非常に驚嘆すべき戦闘は、諸世界における驚異である。このような戦いはこれからも決してないであろう。(六四)英邁なアルジュナが弓を持ち戦車に乗って戦って、戦場で矢を浴びせても、ビーシュマを破ることはできない。(六五)またビーシュマも、神々にも破りがたい弓を持つアルジュナを、戦いにおいてうち破ることができない。(六六)」

王よ、ビーシュマとアルジュナを讃えるこのような声が戦場のあちこちであがるのが聞かれた。(六七)バーラタよ、その二人がそこで勇武を示している間に、あなたの軍隊とパーンダヴァ軍とは、戦場でお互いに殺し合っていた。(六八)鋭い刃の刀、磨き上げられた斧、矢、その他多種多様な武器により、双方の軍隊の勇士たちはお互いに戦場で斬り合っていた。(六九)このように非常に恐ろしい戦闘が繰り広げられていた時、王よ、ドローナとパーンチャーラの王子との間に大激戦が行なわれた。(七〇)

(第四十八章)

ドローナとドリシタデュムナの戦い

ドリタラーシトラは言った。

「勇士ドローナとパーンチャーラの王子ドリシタデュムナとは、互いに奮戦し、どのようにして戦場で相対したか。サンジャヤよ、それを私に話してくれ。(一)サンジャヤよ、運命は人間の努力に勝ると私は思う。シャンタヌの息子ビーシュマも、戦いにおいてパーンドゥの

息子を越えなかったのだから。(二)というのは、怒ったビーシュマは戦場において動不動のすべての者たちを殺せる。その彼が、どうして戦いにおいて力によりパーンドゥの息子を越えなかったのか。(三)」

サンジャヤは語った。——

王よ、気を確かに持ってこの非常に恐ろしい戦闘について聞きなさい。インドラを含む神々といえども、パーンドゥの息子に勝つことはできない。(四)

ところでドローナは、鋭い矢でドリシタデュムナに立ち向かい、彼の御者を一矢により戦車の座席から射落とした。(五)それからその名手は怒り、四本の最高の矢でドリシタデュムナの馬たちを苦しめた。わが君よ。(六)すると勇士ドリシタデュムナは笑い、「待て、待て」と言いながら九本の鋭い矢でドローナを射た。(七)それから、限りなく高邁で栄光あるドローナは、怒れるドリシタデュムナを矢でおおった。(八)そして彼を殺そうとして恐ろしい矢をとった。それはインドラの雷電のように強力で、あたかも死神の杖のようであった。(九)バーラタよ、ドローナが戦場でその矢をつがえたのを見て、全軍の間に「ああ、ああ」という大声があがった。(一〇)そこで我々はドリシタデュムナの驚異的な勇猛さを見た。その勇士は一人で、山のように不動で戦場に立っていた。(一一)自分を殺すべく飛来する燃え上がる恐ろしいその矢を、彼は断ち切った。そしてドローナに矢の雨を注いだ。(一二)すべてのパーンチャーラ軍とパーンダヴァ軍は、ドリシタデュムナがその非常になしがたい行為をす

るのを見て喚声をあげた。(一三)その勇士は、ドローナを殺すことを望んで、黄金と瑠璃で飾られた槍を猛烈な勢いで投げた。(一四)その黄金で飾られた槍が高速で飛来した時、ドローナは戦場で笑いながらそれを三つに切った。(一五)栄光あるドリシタデュムナは、槍が破壊されたのを見て、ドローナめがけて矢の雨を降らせた。王よ。(一六)すると誉れ高いドローナは、その矢の雨を防いで〔射返し〕、ドルパダの息子の弓を真中で断ち切った。(一七)その戦いで弓を切られ、誉れ高い勇士は鉄製の重い棍棒をドローナに投じた。(一八)ドローナを殺そうとして投げられたその棍棒は高速で飛んだ。そこで我々はドローナの驚異的な勇武を見た。(一九)彼は手練の業でその黄金で飾られた棍棒を防いだ。棍棒を防いでから、彼はドリシタデュムナに向けて、石でよく研いだ、金の羽根のついた鋭い矢を放った。その戦いにおいて、それらの矢は相手の鎧を貫いてその血を飲んだ。(二〇—二一)そこで誇り高いドリシタデュムナは、他の弓をとってドローナを攻撃し、五本の矢で彼を射貫いた。(二二)王よ、人中の雄牛である両雄は血まみれになり、春の季節に花をつけるキンシュカ樹のように輝いた。(二三)

王よ、それからその軍隊の最前線において、ドローナは怒って攻撃し、ドルパダの息子の弓を再び断ち切った。(二四)そして、限りなく高邁なドローナは、弓を断たれた相手に、真っ直ぐの矢を注いだ。雲が山に雨を注ぐように。(二五)そして相手の御者を一矢で戦車の座席から射落とした。更にその四頭の馬を四本の鋭い矢で倒した。そしてドローナは戦場で獅子吼した。それから、他の矢で、〔相手のとった別の〕弓を相手の手から断ち切った。(二六—二七)ドリシタデュムナは弓を断たれ、戦車を失い、馬と御者を殺されたが、非常な勇猛さを発揮し、棍棒を手に飛び下りた。(二八)しかし彼が戦車から降りないうちに、ドローナは彼の棍棒を速やかに矢で射落とした。パーラタよ、それは奇蹟のようであった。(二九)(三〇—三四略)

それから、強力な勇士ビーマは、その戦いにおいて、偉大なドリシタデュムナを援助しようとして急いで進撃した。(三五)王よ、彼は七本の鋭い矢でドローナを射貫いた。そしてその時、彼は速やかにドリシタデュムナを別の戦車に乗せた。(三六)そこでドゥルヨーダナ王は、カリンガ国王に、大軍を率いてドローナを守るようにうながした。(三七)王よ、それからあなたの息子の命令により、カリンガの大軍は速やかにビーマを攻撃した。(三八)一方、最高の戦士ドローナは、パーンチャーラの王子をうち捨てて、いっしょにいる老いたヴィラータとドルパダを相手に戦った。またドリシタデュムナは、戦場でダルマ王（ユディシティラ）のもとに行った。(三九)それから、戦場において、カリンガ軍と偉大なビーマとの、身の毛がよだつ激戦が始まった。世界を滅亡させる、凄まじくも恐ろしい戦いであった。(四〇)

（第四十九章）

ビーマセーナ、カリンガ国王を殺す

ドリタラーシトラはたずねた。

「そのように命じられたカリンガ国王は、その軍隊とともに、どのようにして驚異的な行為の強力なビーマセーナと戦ったのか。杖（ダンダ）を手にした死神（アンタカ）のような、棍棒を持って戦場を動きまわるあの勇士と。（一―二）」

サンジャヤは語った。——

王中の王よ、あなたの息子にそのように言われて、その勇士は大軍に守られ、ビーマの戦車めざして進撃した。（三）戦車と象兵と騎兵に満ちたカリンガの大軍が、強力な武器をとって激しく襲来した時、バーラタよ、ビーマセーナはチェーディ軍とともに、襲来するカリンガ軍とニシャーダ国のケートゥマットに襲いかかった。（四―五）それから怒ったシュルターユスが、ケートゥマット王とともに、戦場で布陣したチェーディ軍の中にいるビーマを攻撃した。（六）カリンガの王は幾千の戦車により、ケートゥマットはニシャーダ軍とともに一万の象により、戦場でビーマセーナをすっかり取り囲んだ。王よ。（七）チェーディとマツヤとカルーシャの軍は、ビーマセーナを先頭として、諸王とともにニシャーダ軍を激しく攻撃した。（八）それから凄まじくも恐ろしい戦闘が始まった。兵士たちはお互いに殺そうと望み、〔敵も〕味方もわからなくなった（異本による）。（九）ビーマと敵の激戦は凄まじいもので、インドラと悪魔の大軍の戦いのようであった。大王よ。（一〇）バーラタよ、戦場で戦っている軍隊のたてる音は非常に大きいもので、うなる海の音のようであった。（一一）王よ、両軍の兵たちはお互いに斬り合い、すべての地面を肉と血でまみれさせた（異本の読みを参照した）。（一二―一七略）

偉大な射手カリンガ国王と、その息子のシャクラデーヴァという勇士は、矢でビーマを攻撃した。（一八）強力なビーマは、愛用の弓を揺すって（用いて）、自分の腕力を頼りにカリンガ軍と戦った。（一九）その戦いでシャクラデーヴァは多くの矢を放ち、それでビーマセーナの馬たちを殺した。そして彼は、夏の終わり（雨季）の雲が雨を降らせるように、矢の雨を降らせた。（二〇）

強力なビーマは、馬を殺された戦車に立ち、すべて鋼鉄製の棍棒をシャクラデーヴァめがけて投げた。（二一）王よ、カリンガ国王の息子はそれで撃たれ、軍旗と御者もろとも地面に落下した。（二二）カリンガ国王は息子が殺されたのを見て、幾千の戦車でビーマの周囲を取り囲んだ。（二三）そこで強力なビーマは、恐るべき行為をなそうと欲して、重い大きな棍棒を捨てて刀を振り上げた。（二四）人中の雄牛である王よ、そして彼は雄牛の皮で作った無比の楯をもとった。それは黄金でできた星や半月で飾られていた。（二五）一方カリンガ国王は怒り、弓の弦をさすり、蛇の毒のような恐ろしい一矢をとり、殺そうとしてビーマセーナに放った。（二六）その放たれた鋭い矢が飛来した時、王よ、ビーマセーナは大きな刀でそれを両断した。そして彼は喜び勇み、敵軍を恐れさせつつ大声で叫んだ。（二七）

〔その後もビーマはめざましく戦う（二八―六〇略）〕

バラタの雄牛よ、それからビーマセーナは、カリンガ軍の先頭にシュルターユス（カリンガの王）を見つけ、彼に襲いかかった。（六一）ビーマセーナが襲って来るのを見て、限りなく高邁な

カリンガ国王は、九本の矢でビーマの胸の間を射た。（六一）ビーマはカリンガ国王の矢で射られて、突き棒で突かれた象のようになり、怒りで燃え上がった。火が薪により燃え上がるように。（六二）

その時、ビーマの御者のアショーカ（ニーラカンタ注は固有名詞にとらない）が、黄金で飾られた戦車をもたらして、ビーマを戦車に乗せた。（六四）敵を殺すビーマは速やかにその戦車に乗り、「待て、待て」と言ってカリンガ国王に襲いかかった。（六五）そこでシュルターユスはいきり立ち、手練の業を示して、ビーマに鋭い矢を放った。（六六）王よ、カリンガ国王が最高の弓から放たれた鋭い矢で手ひどく撃った時、誉れ高いビーマは棒で打たれた蛇のように激怒した。（六七）最強の勇士ビーマは、怒って弓を強く引き絞り、七本の鉄製の矢でカリンガ国王を殺した。（六八）そして二本の矢で、カリンガ国王の戦車の車輪を守る二人の勇士、サティヤデーヴァとサティヤとを、ヤマ（閻魔）の住処(すみか)に送った。（六九）それからまた、限りなく高邁なビーマはその戦いにおいて、三本の鋭い矢で、ケートゥマットをヤマの住処に送った。（七〇）

（七一―七六略）

それから、強力な勇士ビーマは法螺貝を吹き鳴らした。すべてのカリンガ軍の心をふるえさせて。（七七）敵を苦しめる者よ、カリンガ軍に迷妄が入り込んだ。そして、兵士や象馬たちはすっかりふるえ上がった。（七八）王よ、ビーマは象王のように、戦場いたるところで、多くの道を歩きまわり、あちこち走りまわり、何度も飛び上がり、〔敵を〕混乱に陥らせた。（七九）敵軍はビーマセーナを恐れて、大きい湖が鰐によって一面にかき乱されるようにふるえた。（八〇）

ビーマセーナの驚異的な働きにより勇士たちが戦慄し、全カリンガ軍が群をなして逃走し、再び引き返した時、パーンダヴァの軍司令官（ドリシタデュムナ）は、自軍の兵士たちに「戦闘開始」と命じた。（八一―八二）軍司令官の言葉を聞いて、シカンディンをはじめとする軍団は、戦車隊の戦士たちとともに、ビーマセーナに近づいた。（八三）ダルマ王ユディシティラは、雲のような色をした象の大軍を背後に従えて、彼らすべてを統括していた。（八四）このようにドリシタデュムナは、自軍をすべてかりたてて、立派な人物にふさわしく、ビーマセーナの背後を守った。（八五）というのは、パーンチャーラの王（ドリシタデュムナ）にとって、この世でビーマとサーティヤキ（ヤーダヴァ族の勇士）ほど大切な者は他に誰もいなかったから。（八六）敵の勇士を殺すドリシタデュムナは、カリンガ軍の間を動きまわっている、敵を殺す勇士ビーマセーナを見た。（八七）王よ、敵を苦しめる彼は、喜び勇んで何度も叫んだ。そして戦場で法螺貝を吹き、獅子吼をした。（八八）ビーマセーナも、鳩の〔ように白い〕馬にひかれた彼の、黄金で飾られた戦車の上に、コーヴィダーラ樹の旗標を見て元気づいた。（八九）限りなく高邁なドリシタデュムナは、カリンガ軍に攻撃されているビーマセーナを救うために、戦闘を開始した。（九〇）

サーティヤキは遠くから、気高い勇士ドリシタデュムナとビーマが戦場でカリンガ軍に対して戦っているのを見た。（九一）人中の雄牛である最高の勝利者サーティヤキは、急いでそこに行き、その両者の背後を守った。（九二）彼は弓を持ち、忿怒の相を示して殺戮し、戦場

で敵たちを攻撃した。(九三) ビーマはそこで、カリンガ軍とパーンダヴァ軍の間に、カリンガ軍により、肉と血にまみれた流血の川を作り出した。そして強力なビーマは、非常に渡りがたいその川を渡った。(九四―九五) 王よ、そのようなビーマセーナを見て、あなたの兵たちは叫んだ。

「ビーマの姿をとってカーラ（破壊神）がカリンガ軍と戦っているのだ。(九六)」

それから、シャンタヌの息子ビーシュマは、戦場でその叫びを聞いて、いたるところで陣形を整え、急いでビーマに向かって進撃した。(九七) サーティヤキ、ビーマセーナ、ドリシタデュムナは、黄金で飾られたビーシュマの戦車を襲撃した。(九八) 彼らはすべて、戦場で速やかにビーシュマを取り囲み、直ちに三本ずつの恐ろしい矢でビーシュマを傷つけた。(九九) あなたの父デーヴァヴラタ（ビーシュマ）も、努力している勇士たちすべてに、三本ずつ矢を射返した。(二〇〇) そしてこれらの偉大な戦士たちを、千本の矢で抑止して、黄金の装備をつけたビーマの馬たちを射殺した。(二〇一) しかし栄光あるビーマセーナは、馬の殺された戦車の上に立ち、ビーシュマの戦車に向けて勢いよく槍を投じた。(二〇二) あなたの父デーヴァヴラタは、戦場において、その槍がとどく前に三つに切断した。槍は地面に散らばった。(二〇三) それから強力なビーマセーナは、鋼鉄製の重い棍棒を持って、速やかに戦車から飛び下りた。人中の雄牛よ。(二〇四) そこでサーティヤキは、ビーマによかれと願い、急いでクルの長老（ビーシュマ）の御者を矢で倒した。(二〇五) 最高の戦士ビーシュマは、その御者が殺されたので、風のように疾走する馬たちにより、戦列を離れ運び去られた。(二〇六)

王よ、大誓戒を守るビーシュマが戦列を離れた時、ビーマセーナは燃え盛る火が乾いた草木を焼くように燃え上がった。(二〇七) 彼はすべてのカリンガ軍を殺して、軍隊の中央に立っていた。バラタの雄牛よ、あなたの兵たちは誰も彼に太刀打ちできなかった。(二〇八) 最高の戦士ドリシタデュムナは、彼を自分の戦車に乗せて、すべての兵士たちが見ている前で、その誉れ高い男を連れて行った。(二〇九) バラタの雄牛よ、パンチャーラ軍とマツヤ軍に敬意を表され、彼はドリシタデュムナを抱擁し、それからサーティヤキに近づいた。(二一〇) するとヤドゥ（ヤーダヴァ族）の虎である、不屈の勇者サーティヤキは、ドリシタデュムナの見ている前で、ビーマセーナを喜ばせつつ言った。(二一一)

「幸いなことに、カリンガ国王と王子ケートゥマットとカリンガのシャクラデーヴァとカリンガ軍は、戦闘において殺された。(二一二) あなたは一人で、自分の腕力によって、象と馬と戦車に満ちたカリンガの大軍を粉砕した。(二一三)」

このように告げて、敵を制する強力なシニの孫（サーティヤキ）は、戦車から戦車に乗り移って、ビーマを抱きしめた。(二一四) それからその偉大な戦士は、再び自分の戦車にもどり、ビーマを力づけつつ、怒ってあなたの兵士たちを殺した。(二一五)

（第五十章）

孫と孫との戦い

サンジャヤは語った。――

バーラタよ、その日の午後がほとんど過ぎ、戦車兵、象兵、騎兵、歩兵が多大に死滅した時、パーンチャーラの王子（ドリシタデュムナ）は、ドローナの息子（アシュヴァッターマン）、シャリヤ、偉大なクリパという、三人の勇士たちと交戦していた。（二）強力なパーンチャーラの王子は、十本の鋭い矢で、ドローナの息子の世に名高い馬たちを殺した。（三）ドローナの息子は馬を殺されて、速やかにシャリヤの戦車に乗り、パーンチャーラの王子に矢の雨を注いだ。（四）

バーラタよ、ドリシタデュムナがドローナの息子と交戦しているのを見て、スバドラーの息子（アビマニユ）は、鋭い矢を撒き散らしながら速やかに攻撃した。（五）彼は二十五本の矢でシャリヤを、九本の矢でクリパを、八本の矢でアシュヴァッターマンを射貫いた。人中の雄牛よ。（六）一方、ドローナの息子はすぐに一矢でアルジュナの息子を射貫いた。シャリヤは十二本の矢で、クリパは三本の鋭い矢で射た。（七）

あなたの孫ラクシュマナは、喜び勇み、立ちはだかるあなたの孫（アビマニユ）を攻撃した。それから戦闘が始まった。（八）王よ、ドゥルヨーダナの息子（ラクシュマナ）は怒って、戦いにおいて九本の矢でスバドラーの息子を射た。それは奇蹟のようであった。（九）バラタの雄牛である王よ、手練の早業のアビマニユは怒り、五百本の矢で従兄弟を射た。（一〇）大王よ、ラクシュマナの方も一矢を射て、アビマニユの弓を握りのところで断ち切った。そこで人々は喚声をあげた。（一一）そこで敵の勇士を殺すアビマニユは、切られた弓を捨てて、別の美しい剛弓をとり上げた。（一二）人中の雄牛である両雄は、その戦いにおいて、喜び勇んで応酬することを望み、お互いに鋭い矢で撃ち合った。（一三）

それからドゥルヨーダナ王は、偉大な戦士である息子（ラクシュマナ）があなたの孫（アビマニユ）に苦しめられているのを見て、その場所へ行った。（二四）あなたの息子がそこへ向かった時、すべての王たちは戦車団でアルジュナの息子（アビマニユ）をぐるりと取り囲んだ。（二五）王よ、クリシュナのように勇猛なアビマニユは、戦いにおいてそれらの無敵の勇士に囲まれても苦にしなかった。（二六）

そこでアビマニユが戦っているのを見て、アルジュナは怒り、自分の息子を救おうとして駆けつけた。（二七）するとビーシュマとドローナを先頭とする王たちが、戦車と象兵と騎兵により、一斉にアルジュナを攻撃した。（二八）象兵、騎兵、戦車兵により、たちまち猛烈な土ぼこりが上がり、空中に達するのが認められた。（二九）それらの幾千の象、幾百の王は、アルジュナの矢の道に入るや、まったく進めなくなった。（三〇）（三〇—三二略）

バーラタよ、あなたの兵士たちのうちで、アルジュナに何とかして立ち向かえる男は誰もいなかった。（三三）王よ、戦場でアルジュナに立ち向かった者は誰でも、鋭い矢によりあの世に送られた。（三四）あなたの兵たちがすべて逃走した時、アルジュナとクリシュナは最高の法螺貝を吹き鳴らした。（三五）敗走する自軍を見て、あなたの父デーヴァヴラタ（ビーシュマ）は、戦場で微笑しながらドローナに言った。（三六）

「あのパーンドゥの息子である強力な勇士アルジュナは、クリシュナとともに、わが軍に対し、彼にふさわしいやり方で（または、「火」のように）行動している。（三七）今、戦いにおいて彼に勝つことは決してできない。彼の姿は、終末をもたらすヤマ（閻魔）のように見える。（三八）この大軍

を引き返させることはできない。見よ、わが軍はお互いに見ながら逃げて行く。(三九) あそこに太陽は、最高の山アスタ（西山）にかかっている。全世界の者たちの姿をすっかり回収するかのように。(四〇) 人中の雄牛よ、軍を引きあげる時が来たと私は考える。我々の兵士たちは疲れ、恐れ、決して戦おうとしないであろう。(四一)」

偉大な戦士ビーシュマは最高の師匠ドローナにこのように告げると、あなたの軍を引きあげさせた。(四二) バーラタよ、それから太陽が沈み、黄昏になった時、あなたと彼らの軍隊は引きあげた。(四三)

（第五十一章）

ガルダ陣と半月陣

サンジャヤは語った。——

バーラタよ、夜が明けた時、ビーシュマは軍隊に出動を命じた。(一) クルの祖父ビーシュマは、あなたの息子たちの勝利を願って、ガルダ陣という強力な陣形を布いた。(二) ガルダ鳥の嘴には、あなたの父デーヴァヴラタ（ビーシュマ）自身が位置した。両眼には、ドローナとクリタヴァルマンがいた。(三) 誉れ高いアシュヴァッターマンとクリパは、トリガルタ、マツヤ、カイケーヤ、ヴァータダーナの軍とともに頭のところに位置した。(四) わが君よ、ブーリシュラヴァス、シャラ、シャリヤ、バガダッタ、マドラカ、シンドゥ、サウヴィーラ、パンチャナダの軍、ジャヤドラタは、首のところに位置した。背中にはドゥルヨーダナ王が弟たちや従者たちとともにいた。(五―六) アヴァンティのヴィンダとアヌヴィンダ、カーンボージャとシャカの軍とシューラセーナの軍はすべて尾のところにいた。大王よ。(七) マガダ軍、カリンガ軍、ダーシェーラカ衆は武装して、その陣形の右翼にいた。(八) カーナナ軍、ヴィクンジャ軍、ムクタ軍、プンドラ軍（テクスト疑問）、ブリハドバラは左翼に位置した。(九)

敵を苦しめるアルジュナは、敵軍が布陣したのを見て、ドリシタデュムナとともに、それに対して、非常に恐ろしい半月の戦闘陣形を布いた。(一〇) ビーマセーナは右の角に位置して、種々の武器を持つ諸国の王たちに囲まれて輝いていた。(一一) 彼に続いて、偉大な戦士であるヴィラータとドルパダがいた。彼らに続いて、ニーラがニーラーユダ軍とともに控えていた。(一二) ニーラの次に勇士ドリシタケートゥが、チェーディ、カーシ、カルーシャ、パウラヴァに囲まれていた。(一三) ドリシタデュムナ、シカンディン、パーンチャーラ軍、プラバドラカ軍は、戦いの準備をして、大軍の中央にいた。(一四) またダルマ王（ユディシティラ）も、象兵に囲まれてそこにいた。それから王よ、サーティヤキ、ドラウパディーの五人の息子が続いた。(一五) それから、アビマニユとイラーヴァット（アルジュナの息子）が速やかに続いた。王よ、それからビーマセーナの息子（ガトートカチャ）と、ケーカヤの勇士たちが続いた。(一六)

それから、左側〔の角〕には、全世界の守護者であるクリシュナがその守護者であるところの、最高の人間（アルジュナ）がいた。(一七)

パーンダヴァ軍はこのように、あなたの息子たちと彼らの味方を滅ぼすために、対抗してこの強力な布陣をした。(一八) それから敵味方がお互いに殺し合い、戦車や象が入り乱れる

戦闘が始まった。(一九) 王よ、騎兵の群や戦車兵の群が、相互に殺し合い、あちこちで交戦しているのが認められた。(二〇) 戦車の群がお互いに攻撃し、走りまわっている時、太鼓の音と混じった騒々しい音が生じた。(二一) バーラタよ、その非常に騒がしい激戦において、お互いに殺し合う敵味方の叫び声は天にもとどくほどであった。(二二)

(第五十二章)

サンジャヤは語った。──

バーラタよ、敵味方の軍が布陣した時、超戦士ダナンジャヤ(アルジュナ)は、戦場において、矢で戦車の隊長たちを倒し、あなたの戦車兵たちを殺した。(一) 宇宙紀(ユガ)の終末のカーラ(破壊神)のようなアルジュナに殺されつつも、ドリタラーシトラの軍は、輝かしい名声を求め、退却は死であるとして、戦場でパーンダヴァ軍に対して奮起して戦った。(二) 王よ、彼らはパーンダヴァ軍に対して、一意専心して、戦いにおいて何度もうち破り、またうち破られた。(三) パーンダヴァ軍もクル軍も、逃走し、うち破られ、引き返し、何も見分けられなくなった。(四) 太陽をおおって土ぼこりが上がった。ありとあらゆる方角は判別しがたくなった。(五) 王よ、戦場のいたるところで、推量や符牒(合言葉)や姓名を頼りに戦いが行なわれた。(六) クル軍の陣形は信義を守る英邁なドローナに守られ、決して破られなかった。(七) また、パーンダヴァの強力な陣形も、アルジュナとビーマによく守られて、破られなかった。(八)

(八—二〇略)

肉と血にまみれた大地は、大激戦において倒れた人や馬や象によって通行できなくなった。(二一) 土ぼこりは戦場の血に濡れて鎮まり、すべての方角は明瞭になった。王よ。(二二) いたるところで無数の胴体(首なし死体)が立ち上がった。これは世界の滅亡の徴(しるし)である。(二三) その非常に恐ろしくも凄まじい戦いが行なわれている時、戦車兵たちがいたるところで駆けまわっているのが認められた。(二四) それから、ドローナ、ビーシュマ、シンドゥ国王ジャヤドラタ、プルミトラ、ヴィカルナ、シャクニたち、獅子のように勇猛で戦いにおいて無敵の者たちが、繰り返しパーンダヴァ軍をうち破った。(二五—二六) バーラタよ、同様に、ビーマセーナ、羅刹ガトートカチャ、サーティヤキ、チェーキターナ、ドラウパディーの息子たちは、すべての王たちとともに、戦場においてあなたの軍と息子たちを敗走させた。神々が悪魔たちを敗走させるように。(二七—二八) 戦場でお互いに殺し合う王族(クシャトリヤ)の雄牛たちは、血にまみれ恐ろしい姿をして、悪魔のように輝いていた。(二九) 両軍の勇士たちは敵をうち破って、天空における主要な惑星のように見えた。(三〇) それから、あなたの息子ドゥルヨーダナは、千の戦車により、パーンダヴァたちと羅刹ガトートカチャに対して進撃した。(三一) また敵を制するすべてのパーンダヴァも、大軍を率いて、ドローナとビーシュマの両雄に対して進撃した。(三二) またアルジュナも怒って、有能な最高の王たちを襲った。アルジュナの息子(アビマニュ)とサーティヤキは、シャクニの軍に向かった。(三三) それから、お互いに戦いにおいて勝利を願う敵味方の軍隊の間で、身の毛がよだつ戦いが再び始まった。(三四)

(第五十三章)

サンジャヤは語った。――

それから王たちは怒って、戦場でアルジュナを見て、幾千の戦車によりぐるりと取り囲んだ。(一) パーラタよ、そして戦車の群で囲んで、いたるところから幾千の矢を注いだ。(二) 彼らは戦場で怒って、鋭い曇りのない槍、棍棒と鉄棒、投槍、斧、槌、杵をアルジュナの戦車に投じた。(三) 蝗(いなご)の飛来のような、それらの武器の雨を、アルジュナは黄金で飾られた矢ですっかり防ぎ止めた。(四) アルジュナの超人的な手練の業を見て、神々、魔類、ガンダルヴァ、ピシャーチャ鬼、蛇、羅刹たちは、「見事、見事」と言ってアルジュナを讃えた。王中の王よ。(五) (六―二三略)

王よ、それからアルジュナは怒り、あなたの軍隊に矢の雨を降らせた。雲がどしゃぶりの雨を降らせるように。(二四) 戦場でアルジュナの矢で殺されて行くクル軍は、嘆きと恐怖にふるえて逃走した。(二五) 偉大な戦士のビーシュマとドローナは、逃げる彼らを見て怒り、ドゥルヨーダナのためを思って制止した。(二六) そしてドゥルヨーダナも、いたるところで逃走するその軍隊を励まし、制止した。王よ。(二七) パーラタよ、あなたの息子を見ると、あらゆる場合、すべての王族の勇士たちは引き返した。(二八) そして彼らが引き返すのを見て、王よ、他の人々も廉恥心から、われ先に踏みとどまった。(二九) 王よ、再び引き返す彼らの勢いは、月が昇り始める時の海の勢いのようであった。(三〇) スヨーダナ(ドゥルヨーダナ)王は、

彼らが引き返したのを見て、急いでビーシュマの所へ行って、次のように言った。(三一)

「バラタ族の祖父よ、私が申し上げることを聞きなさい。クルの勇士よ、あなたが生きている限り、最高に武器に通じたドローナとその息子と我々の親しい人々、そして偉大な射手クリパが生きている限り、わが軍は逃走するはずはないと私は思う。(三二―三三) 王よ、パーンダヴァたちは戦いにおいて、あなたやドローナやその息子やクリパに、決して太刀打ちできない。(三四) 祖父よ、きっとあなたはパーンドゥの息子たちに好意をかけているのだろう。わが軍が殺されても許しているのだから。勇士よ。(三五) 王よ、あなたは前にこの私に告げるべきだ。『私は戦場でパーンダヴァたちと戦わない。ドリシタデュムナやサーティヤキとも戦わない』と。(三六) あなたや師匠(ドローナ)やクリパから、そのような言葉を聞いて、その時に対策を講じたであろうに。(三七) もし私がこの戦いにおいて、あなた方二人に捨てらるべきでないなら、ふさわしい勇武により戦いなさい。人中の雄牛たちよ。(三八)」

ビーシュマはこの言葉を聞くと、何度も笑い、怒りで眼をつり上げて、あなたの息子に言った。(三九)

「王よ、私は何度も真実で有益な言葉を述べた。インドラをはじめとする神々も、戦いにおいてパーンダヴァたちに勝つことはできない。(四〇) しかし、最高の王よ、老いた私にできることを力の限りやるであろう。今お前は、縁者たちとともに見るがよい。(四一) 今日、この私は全世界の者たちが見ている前で、縁者たちとともに、パーンドゥの息子たちとその多くの兵士たちを食い止めるであろう。(四二)」

王よ、ビーシュマがこのように告げた時、あなたの息子たちは喜んで、高らかに法螺貝を吹き太鼓を打ち鳴らした。(四三) 王よ、パーンダヴァ軍もその大きな音を聞いて、法螺貝を吹き、種々の太鼓を鳴らした。(四四)　(第五十四章)

ビーシュマとアルジュナの戦い

ドリタラーシトラはたずねた。

「サンジャヤよ、その非常に恐ろしい戦いにおいて、ビーシュマがそう約束した時、私の悩める息子によってひどく怒らされたビーシュマは、パーンダヴァたちに対してどのようにしたか。またパーンチャーラ軍は祖父に対してどのようにしたか。サンジャヤよ、それを私に語ってくれ。(一―二)」

サンジャヤは語った。――

バーラタよ、その日の午前がほとんど終わり、偉大なパーンダヴァたちが勝利して喜んでいた時のことである。(三) 一切の法(ダルマ)の特性を知る、あなたの父デーヴァヴラタ(ビーシュマ)は、駿足の馬たちに運ばれて、パーンダヴァ軍に向かって進撃した。彼はあなたのすべての息子たちと大軍に守られていた。(四) それから、わが軍とパーンダヴァ軍との間に、身の毛がよだつ激戦が始まった。バーラタよ、これはあなたの無策のせいだ。(五) そこでは弓がうなり、

弓籠手(ゆごて)に弓弦があたり、山が裂ける時のような大音響があがった。(六)「待て」、「私はここにいる」、「この者を知れ」、「引き返せ」、「動くな」、「私は待っている」、「戦え」。このような声がいたるところで聞かれた。(七) 黄金の鎧、王冠、軍旗は、岩山に落ちた石のような音をたてた。(八) 頭や飾られた腕が幾百幾千と落下し、地面に達して転がった。(九) 幾人かの最高の戦士たちは、頭を切り取られても、弓を引き絞り、武器を持ったままで立っていた。(一〇) 激しい流れの血の川ができた。その川は肉や血で汚れ、象の死体という岩でおぞましかった。(一一) それはすばらしい馬や人や象の体から生じ、禿鷲やジャッカルを喜ばせ、他界という海に向かう。(一二) バラタ族の王よ、あなたの息子たちの、このような戦いは、いまだかつて見られたことも聞かれたこともなかった。(一三)(一四―一八略)

その戦いで、シャンタヌの息子ビーシュマは、常に弓を円形に引き絞り、猛毒の蛇のような燃える先端の矢を放った。(一九) バーラタよ、その誓戒を守る男は、たて続けに矢を射て、すべての方角に一筋の矢の道を作り、狙いを定めてはパーンダヴァの戦士たちを殺した。(二〇) 王よ、彼が戦車の座席で踊るかのように手練の業を示し、あちこちで旋火輪のように動いているのが見られた。(二一) 戦場でその勇士は一人なのに、その早業の故に、パーンダヴァ軍やスリンジャヤ軍には、彼が幾百幾千いるかのように見えた。(二二) そこにいる人々は、ビーシュマが幻術で姿を現わしていると考えた。東の方角に見たかと思うと、西の方角に見たからである。(二三) また北の方角に彼を見たと思うと、南の方角に彼を見たからである。王よ。勇士ビーシュマが戦場でこのように働くのが認められた。(二四) パーンダヴァ軍

のうちには、彼をまともに見ることのできる者は誰もいなかった。ただビーシュマの弓から放たれた多くの矢だけが見えた。（二五）あなたの父が戦場でこのような超人的な姿で働いて、パーンダヴァ軍を殺戮しているのを見て、勇士たちは多様に嘆きの叫びをあげた。（二六）王たちは運命にかりたてられて、蝗（いなご）のように、ビーシュマという猛り立つ火の中に飛び込んで、幾千となく身を滅ぼした。（二七）（二八―三九略）

　自軍がビーシュマにうち破られるのを見て、クリシュナは最高の戦車を止めて、アルジュナに言った。（四〇）

「アルジュナよ、今やあなたが望んでいた時が来た。人中の虎よ、彼を討て。さもなくば、あなたは愚かしさにより迷うことになる。（四一）勇士よ、あなたは前に、諸王の集まりにおいて言ったではないか。『ビーシュマとドローナをはじめとするすべてのドゥルヨーダナの兵士が、戦場で戦うなら、私は彼らを従者もろとも殺すであろう』と。敵を制するアルジュナよ、その言葉を真実のものとせよ。（四二―四三）アルジュナよ、見よ。わが軍はいたるところでうち破られ、ユディシティラの軍隊のすべての王たちは逃げまわっている。（四四）彼らは戦場で、口を大きく開けた死神（アンタカ）のようなビーシュマを見て、恐怖に苦しんで度を失っている。小動物が獅子に対するように。（四五）」

　このように言われて、アルジュナはクリシュナに答えた。

「この軍隊の海に飛び込んで、ビーシュマのいる所へ馬をかりたてなさい。（四六）」

　王よ、そこでクリシュナは、太陽のように見られがたいビーシュマの戦車のいる所へ向けて、銀白色の馬たちをかりたてた。（四七）強力なアルジュナがビーシュマに戦いを挑むのを見て、ユディシティラの大軍は引き返した。（四八）それからクルの最上者ビーシュマは、何度も獅子吼をして、速やかにアルジュナの戦車に矢の雨を注いだ。（四九）たちまち彼の戦車は、馬や御者もろとも、激しい矢の雨におおわれて明瞭でなくなった。（五〇）しかし、気力あるクリシュナは、うろたえることなく、平静さを保って、ビーシュマの矢に射られた馬たちをかりたてた。（五一）そしてアルジュナは、雷雲のような音をたてる神聖な弓を持って、三本の矢でビーシュマの弓を切断して下に落とした。（五二）あなたの父ビーシュマは弓を切断されたが、一瞬のうちに、別の大弓に弦を張った。（五三）そして雷雲のような音をたてるその弓を、両腕で引き絞った。しかしアルジュナは怒って、その弓をも断ち切った。（五四）ビーシュマは彼のその手練の業を称讃した。

「勇士アルジュナよ、見事だ。おお、パーンドゥの息子よ、見事だ。（五五）ダナンジャヤよ、このような大なる勲（いさおし）はお前にふさわしい。私は非常に嬉しい。わが子よ、私と戦いなさい。（五六）」

　その勇士はこのようにアルジュナを称讃してから、別の大弓をとり、戦場でアルジュナの戦車に向けて幾本も矢を放った。（五七）今度はクリシュナが馬の操縦に関し最高の力を発揮した。彼は高速で円形に動き、ビーシュマの矢を無駄にさせたのである。（五八）しかしビーシュマは鋭い矢で、クリシュナとアルジュナの全身を激しく貫いた。わが君よ。（五九）二人の人中の虎は、ビーシュマの矢に傷ついて、角で傷つけられて唸る二頭の雄牛のように輝い

ていた。(六〇) 怒り激するビーシュマは、更にまたその戦いにおいて、真っ直ぐの矢で、クリシュナとアルジュナを一面におおった。(六一) 怒ったビーシュマは、鋭い矢により、クリシュナを戦慄させた。ビーシュマは何度も苦しめて(異本による)、大声で笑った。(六二)

クリシュナ、大いに怒る

強力なクリシュナは、戦場のビーシュマの勇武を見て、そしてアルジュナが手加減して戦っているのを見た。(六三) ビーシュマは両軍の中央で、戦場において熱する太陽のように絶えず矢の雨を放っていた。(六四) そしてビーシュマは、パーンドゥの息子の有力な兵たちを次々と殺し、ユディシティラの軍隊に宇宙紀(ユガ)の終末をもたらすかのようであった。(六五) 限りなく高邁な、敵の勇士を殺す尊者クリシュナは、我慢できなくなって、ユディシティラの軍隊は滅びてしまうと考えた。(六六)

「実にビーシュマは一日で、戦いにおいて〔すべての〕神々と魔類を滅ぼすであろう。いわんや、パーンドゥの息子とその軍隊と従者を戦いにおいて滅ぼすのは容易なことである。(六七) 偉大なパーンダヴァの大軍は逃走する。あのクル軍は、ソーマカ軍がうち破られたのを見て、喜んで速やかに戦いに馳せ参じ、祖父(ビーシュマ)を喜ばせる。(六八) そこで私は鎧をつけ、今日、パーンダヴァのためにビーシュマを殺そう。偉大なパーンダヴァたちのこの重荷を取り除こう。(六九) アルジュナの方は、戦いにおいて鋭い矢で撃たれても、ビーシュマを尊敬しているので、戦場においてなすべきことを知らない。(七〇)」

クリシュナがこのように考えていた時、祖父(ビーシュマ)は更に怒って、アルジュナの戦車に向けて矢を放った。(七一) それらの矢は非常に多かったので、すべての方角は矢でおおわれた。そして虚空も方角も大地も、光輪を持つ太陽も認められなかった。煙をともなう激風が吹いた。すべての方角は振動した。(七二) ドローナ、ヴィカルナ、ジャヤドラタ、プーリシュラヴァス、クリタヴァルマン、クリパ、アンバシタの領主シュルターユス王、ヴィンダとアヌヴィンダ、スダクシナ、西部地方の人々、すべてのサウヴィーラの部族(ガナ)、ヴァサーティの軍、クシュドラカとマーラヴァの軍は、ビーシュマの命令に従い、急いでアルジュナを攻撃した。(七三―七四)

シニの孫(サーティヤキ)は、アルジュナが幾百幾千の騎兵、歩兵、戦車の群、象隊の主力に囲まれているのを見た。(七五) そして、最強の戦士であるアルジュナとクリシュナとが、歩兵と象兵と騎兵と戦車にすっかり〔囲まれて〕攻撃されているのを見て、シニの勇士は急いで駆け寄った。(七六) 偉大な弓取りであるシニの勇士は敵軍に速やかに襲いかかり、アルジュナに助勢をした。ヴィシュヌがヴリトラを殺す〔インドラ〕に助勢をしたように。(七七) ユディシティラ軍は、ビーシュマによりすべての戦士は戦慄し、象と馬と戦車と軍旗の群は破壊され、逃走しようとしていたが、それを見てシニの勇士は彼らに告げた。(七八)

「王族(クシャトリヤ)たちよ、どこへ行くのか。これはかつて古人に説かれた善き人々の法(ダルマ)ではない。勇士たちよ、自分の誓約を捨ててはいけない。自らの勇士の法を守れ。(七九)」

ヴァーサヴァ（インドラ）の弟（クリシュナ）は、いたるところ味方の主立った王たちが逃走しているのを見て、またアルジュナが手加減して戦っているのを見て、またビーシュマが戦場で猛り立っているのを見て、そしてまた偉大なクル族の人々が一斉に攻撃して来るのを見て、我慢できなくなり、サーティヤキを讃えて言った。（八〇―八一）

「シニの勇士よ、去る者たちは去るがよい。サーティヤキよ、とどまる者たちも去ってもよい。見よ、私は今、戦いにおいてビーシュマを、そしてドローナとその眷属を、戦車から落としてやる。（八二）サーティヤキよ、戦場で私が怒る時、逃れることのできるクル軍の戦士はいない（異本による）。それ故、私は円盤をとり、偉大な誓戒を守る〔ビーシュマ〕の生命を奪うであろう。（八三）シニの孫よ、私は戦いにおいて、ビーシュマとその眷属、及び勇猛な戦士ドローナを殺し、アルジュナと王とビーマとアシュヴィン双神（ナクラとサハデーヴァ）を喜ばせるであろう。（八四）ドリタラーシトラの息子たちと、その味方をする主立った王たちを殺して、今日、喜んでユディシティラに王国を得させるであろう。（八五）」

それからヴァスデーヴァの息子（クリシュナ）は、馬たち〔の手綱〕を放し、戦車から飛び下り、腕で円盤をとり上げた。それは美しい轂（こしき）（車輪の中心）を持ち、美しく輝き、金剛杵（ヴァジュラ）のような威力を持ち、剃刀のような縁をしていた。（八六）そして偉大なクリシュナは、その歩みで大地を震動させて、戦場において速やかにビーシュマの方に進んで行った。猛り立った獅子が、分泌（マダ）液で眼が見えなくなった巨象を殺そうとして近づくように。（八七）破壊者である大インドラの弟（クリシュナ）は怒って、敵軍の中でビーシュマを襲撃した。その黄色い衣の端がたれ下が

り、彼はまるで空中における稲光におおわれた雲のように輝いていた。（八八）クリシュナのスダルシャナという蓮のような円盤は、彼の見事な太い腕を茎とし、まるでナーラーヤナ（ヴィシュヌ）の臍から生じた、朝日のような色をした原初の蓮のように輝いていた。（八九）その蓮はクリシュナの怒りという朝日に目覚めさせられ、剃刀のような〔円盤の〕縁という鋭い先端の美しい葉を持ち、彼自身の身体という大湖に生じ、彼の腕という茎を持って輝いていた。（九〇）怒った大インドラの弟が円盤を持ち、大声で叫んでいるのを見て、クル族の滅亡だと考え、すべての生類は大きな嘆声をあげた。（九一）その円盤を持つクリシュナは、生類の世界を破壊するかのようであった。世界の師（グル）（クリシュナ）は燃え上がって生類を焼いている終末の火のようであった。（九二）最強の人間であり神である彼が、円盤を持って近づいて来るのを見て、ビーシュマは弓矢を手にして戦車に立ち、慌てることなく言った。（九三）

「さあ、来なさい。神の中の神よ。宇宙を住処とする者よ。シャールンガ弓と円盤を手にする者よ。あなたに敬礼する。世界の主よ、戦いにおいて、力ずくで私を最上の戦車から落とせ。生類の寄る辺である者よ。（九四）クリシュナよ、私があなたに殺されれば、この世とあの世において私に至福がある。アンダカとヴリシュニの主である勇士よ、あなたが攻撃して来ることにより、私は三界の者たちに尊敬される。（九五）」

それから、長く太い腕を持つアルジュナも、戦車から飛び下りて、急いでヤドゥの勇士クリシュナに近づき、太くて最高に大きい腕を持つ彼を両腕でつかんだ。（九六）本初の神、ヴィシュヌであるヨーギン（クリシュナ）はひどく怒っていたので、つかまれても、アルジュナを引

つぽって、急いで進んで行った。大風が一本の樹を引きずるように。(九七) しかしアルジュナは、ビーシュマのもとに急いで駆け寄るクリシュナを、力をこめてその両足を持ち、十歩目で、何とかして力ずくで制止した。王よ。(九八) そして、黄金のきらびやかな華鬘（けまん）をつけたアルジュナは喜んで、止まったクリシュナに平伏して言った。

「怒りを鎮めて下さい。ケーシャヴァよ、あなたはパーンダヴァたちの寄る辺である。(九九) 約束した仕事を決して捨てることはない。ケーシャヴァよ、私は息子たちや兄弟たちにかけて誓う。インドラの弟よ、あなたとともに私はクル族を滅ぼす。(一〇〇)」

彼の誓約を聞いて、クリシュナは満足した。そしてクル族の最上者（アルジュナ）を喜ばせようとして、円盤を持って再び戦車に乗った。(一〇一) 敵を殺すクリシュナは再び手綱をとると、法螺貝をとり上げて吹き、そのパーンチャジャニヤの音を諸方に響かせた。(一〇二) 金の胸飾りと腕飾りと耳環をつけ、清らかな歯をし、その眼の上のカーブしたまつ毛はほこりにまみれたクリシュナが、法螺をとったのを見て、クルの勇士たちは大声で叫んだ。(一〇三) 様々な太鼓の音や車輪の音と、獅子吼とで、クルのすべての軍の間に、恐ろしい音が生じた。(一〇四) アルジュナの雷鳴のようなガーンディーヴァ弓の音は、大空と諸方に達した。そしてアルジュナの弓から放たれた清浄な矢は、すべての方角に達した。(一〇五)(一〇六―一二〇略)

それからアルジュナは、鋭い矢の群により、戦場に非常に恐ろしい川を現出させた。その川は、人の体の刀傷から出る血という水をたたえ、人間の脂肪という泡を浮かべ（異本による）ていた。(一二一) その川の流れは非常に広く激しかった。恐ろしい音をたて恐ろしい外観をとって流れる（原文疑問）。死んだ象や馬の体という土手を有する。人間の内臓と髄に満ちた肉という泥を有する。(一二二) その川には多くの羅刹の群という生き物が住み、頭蓋骨に生えた乱れ髪という草が生えている。人体の群で（分けられ）幾千の流れとなっている。散乱する種々の鎧という波に満ちている。(一二三) 人と馬と象の骨という砂利がある。その川は滅亡という地底界（パーターラ）を有し、恐怖をもたらすものである。その川岸の付近には、鷺（カンカ）の輪、狼（異本による）、禿鷲、鶴（異本では「猫」）、肉食動物の群、ハイエナたちがいる。その大ヴァイタラニー（地獄の川）のように酷たらしい川は、アルジュナの矢の群により生じ、脂肪と髄と血をたたえ、こよなく恐ろしいものである。チェーディ、パーンチャーラ、カルーシャ、マツヤ、そしてすべてのパーンダヴァの軍は、その川をすっかり見て、そろって喚声をあげた。アルジュナとクリシュナは、獅子が他の獣の群をおどすように、クル軍の指導者たちの軍隊を恐れさせて、この上なく喜んで雄叫びをあげた。(一二四―一二六)

それから、太陽は光輝の網を収めた。（アルジュナの）インドラの武器は、宇宙紀（ユガ）の終末のように耐えがたく、非常な猛威を発揮していた。ビーシュマ、ドローナ、ドゥルヨーダナ、バーフリーカをはじめとするクル軍は、それを見て退却した。すでに黄昏になり、夜は太陽の赤い光線に染まっていた。(一二七―一二八) アルジュナの方も、敵をうち破り、世間の名声と栄誉を得て仕事を完了し、兄弟と諸王とともに、夜、陣営に帰った。それから、夜の始めに、クル軍の間に、非常に恐ろしい、けたたましい叫び声が起こった。(一二九)

「アルジュナは戦闘において、一万の戦車兵を殺し、七百の象兵を殺した。西部の人々、サ

ウヴィーラ衆、クシュドラカとマーラヴァの人々はすべて殺された。アルジュナは他の誰もできないような偉大な仕事をした。(三〇)王よ、アンバシタ国王シュルターユス、ドゥルマルシャナ、チトラセーナ、ドローナ、クリパ、シンドゥ国王、バーフリーカ、ブーリシュラヴァス、シャリヤ、シャラ、ビーシュマを、世界的勇士であるアルジュナは、自分の腕力によりうち破った。(三一)」

バーラタよ、あなたの側の兵士の群はこのように言いながら、すべて陣営に帰った。よく燃え上がる千の松明により、そして輝く灯明により照らされて、すべての兵士がアルジュナを恐れるクルの軍隊は陣営に入った。(三二)

（第五十五章）

ビーシュマとアルジュナの一騎打ち

サンジャヤは語った。——

バーラタよ、夜が過ぎた時、偉大なビーシュマは怒り、バラタの軍隊の先頭で、全軍に囲まれ、敵に対して進軍した。(一)ドローナ、ドゥルヨーダナ、バーフリーカ、ドゥルマルシャナ、チトラセーナ、強力なジャヤドラタ、及びその他すべての王たちが彼に従って行った。(二)最高の王よ、それら大勢の威光あり強力で偉大な戦士である主要な王たちに囲まれ、ビーシュマは神々に囲まれるインドラのように輝いていた。(三)その軍隊の先頭に諸々の大きな旗が立ち、激しく揺れていた。それらは美しい赤色、黄色、黒色、白色であり、巨象の背

中にあって輝いていた。(四)その軍隊は、王者ビーシュマと、偉大な戦士たちと、象や馬たちにより輝いていた。雨季が来て雲が生じ、稲光をともなう雷が轟く（異本による）空のようであった。(五)それから、ビーシュマに守られた非常に恐るべきクルの軍隊は、戦いを求め、激しく流れる川のようにアルジュナに対して激しく進撃した。(六)

猿王の旗標を持つ偉大なアルジュナは、遠くからその大雲のような陣形を見た。その陣形は種々の精鋭軍を隠し（読みを少し変える）、象と騎兵と歩兵と戦車の群を両翼としていた。(七)その人中の雄牛は、白馬をつなぎ旗をそなえた戦車により進撃した。その偉大な男は、軍隊の先頭で戦車に乗り、すべての敵の若者を殺そうと決意していた。(八)美しく装備され、最良の車の部品をそなえ、ヤドゥの雄牛（クリシュナ）に操縦された、猿を旗標とする〔戦車〕を戦場で見て、あなたの息子をはじめとするクル軍は意気消沈した。(九)パーンダヴァ軍の陣は、武器を振り上げて〔敵を〕苦しめる世界的な勇士アルジュナに守られ、四千頭ずつの象で満ちていた（原文疑問）。あなたの兵たちはその王者のような陣形を見た。(一〇)チェーディの指導者たちは、パーンチャーラの指導者たちとともに、前日にユディシティラが配陣した通りの場所に行って立っていた。(一一)それから、非常に激しく打たれる幾千の太鼓が戦場に鳴り響いた。そしてすべての兵士の間に、法螺貝の音と、太鼓の音と、獅子吼が響いた。(一二)それから、勇士たちが引く弓と矢は大音響をたて、また法螺貝も大きな音をたて、それらは種々の太鼓の音を聞こえなくした。(一三)その法螺貝の音におおわれた空は、立ち上る土ぼこりのヴェールが広がり、大天蓋でおおわれたかのようであった。勇士たちはそれを見てから、激しく

攻撃し合った。（一四）（一五—一九略）

象と馬と戦車が動揺し、乗り手や歩兵の若者に大なる恐怖が生じた時、ビーシュマは勇士たちに囲まれている猿を旗標とする〔アルジュナ〕を見た。（二〇）五本の棕櫚を旗標とするビーシュマは駿馬にひかれ全速力で進み（テクスト疑問）、強力な矢という雷電で道を輝かせるアルジュナに対して進撃した。（二一）同様に、ドローナをはじめ、クリパ、シャリヤ、ヴィヴィンシャティ、ドゥルヨーダナ、ソーマダッタの息子たちも、インドラのように強力な（異本による）インドラの息子（アルジュナ）を攻撃した。（二二）それから、すべての武器に通じたアルジュナの息子である勇士アビマニユが、黄金のきらびやかな鎧を着て、戦車隊の先頭から離れて彼らに近づき、激しく攻撃した。（二三）そして、手練の業のクリシュナの甥（アビマニユ）は、それらの偉大な戦士たちの強力な武器を無効にさせ、強力な呪句（マントラ）とともに供物を投じられた、祭場にある焔の輪を持つ聖火のように輝いていた。（二四）

ビーシュマは速やかに戦場で（異本による）、敵の血という水と泡をたたえる川を作ってから、勇士アビマニユを見過ごして、元気いっぱいアルジュナに立ち向かった。（二五）するとアルジュナは笑って、驚異的な力のガーンディーヴァ弓から放たれた鋭い大矢の群により（異本による）、〔ビーシュマの放った〕強力な武器の群を無効にさせた。（二六）猿の旗標を持つ、手練の業をした偉大なアルジュナは、最高の戦士ビーシュマに対し、速やかに矢の群と、汚れない半月形の先の矢を雨降らせた。（二七）クル族とスリンジャヤのすべての人々は、気力旺盛な最高の人物であるビーシュマとアルジュナとの間の、弓が恐ろしく鳴り響くこのような一騎打ちを見た。（二八）

（第五十六章）

サンジャヤは語った。――

わが君よ、ドローナの息子、プーリシュラヴァス、シャリヤ、チトラセーナ、サーンヤマニの息子は、スバドラーの息子（アビマニユ）と戦った。（一）獅子の子が五頭の象と戦うように、彼が一人で、非常に威光ある五名の人中の虎と戦っているのを人々は見た。（二）勇猛果敢さ、武術、手練の業の見事さにかけて、誰もクリシュナの甥（アビマニユ）に匹敵する者はいなかった。（三）敵を制する自分の息子が、戦いにおいて努力し（異本による）勇武を発揮しているのを見て、アルジュナは戦場で獅子吼した。（四）王中の王よ、あなたの孫（アビマニユ）が自軍を悩ませているのを見て、あなたの軍隊は彼をぐるりと取り囲んだ。（五）敵を滅ぼすアビマニユはその威光と力により、元気いっぱいドリタラーシトラの息子たちの軍に向かって行った。（六）戦場において敵と戦う彼の、手練の業で引かれる、太陽のように輝く大弓が認められた。（七）彼は一矢によりドローナの息子を、五本の矢によりシャリヤを射た。そして八本の矢でサーンヤマニの旗を切断した。（八）ソーマダッタの息子（プーリシュラヴァス）は、金の柄のついた蛇のような大槍を投じたが、アビマニユは鋭い一矢によりそれを破壊した。（九）その戦いで、シャリヤは非常に恐ろしい幾百の矢を放ったが、アルジュナの息子はそれらを防ぎ、その馬たちを殺した。（一〇）そしてプーリシュラヴァス、シャリヤ、ドローナの息子、サーンヤマニ、シャラ（サーンヤマニと同一視する説もある）たちは、アビマニユの力を恐れて、攻撃できなくなった。（一一）

王中の王よ、それから、あなたの息子にうながされた、トリガルタ、マドラ、ケーカヤの、弓のヴェーダ（兵学）に通じた無敵の二万五千名の勇士が、アルジュナとその息子を殺そうとして取り囲んだ。(二一—二三) 王よ、その時、軍司令官である、敵を滅ぼすパーンチャーラの王子（ドリシタデュムナ）は、戦士の雄牛である父（アルジュナ）と息子（アビマニユ）が〔敵に〕囲まれているのを見た。(二四) 彼は幾千の象兵と戦車の群に守られ、十万の騎兵と歩兵に守られていた。(二五) 敵を苦しめる彼は、怒って弓を引き、軍隊をうながして、マドラとケーカヤの軍に立ち向かった。(二六)(二七—二〇略)

サーンヤマニの息子は三十本の矢で、戦いに酔い痴れるパーンチャーラの王子を射て、十本の矢でその御者を射た。(二一) ひどく射られたその勇士は口の端を舐めまわし（戦いを前に勇み立つしぐさ）、非常に鋭い矢で相手の弓を断ち切った。(二二) 王よ、すると〔ドリシタデュムナは〕速やかに二十五本の矢で彼を射て、馬たちと両端の馬を御す二人の御者を射た。(二三) バラタの雄牛よ、サーンヤマニの息子は、馬を殺された戦車の上に立ち、偉大なドリシタデュムナを見た。(二四) そして彼は非常に恐ろしい鉄製の最上の刀を持ち、速やかに徒歩で、戦車の上のドリシタデュムナに襲いかかった。(二五) パーンダヴァたちとドリシタデュムナは、大激流のように、または空から降る蛇のように向かって来る彼を見た。彼は楯と刀を振りまわし、カーラ（時間、破壊神）に送り出された死神（アンタカ）のようであった。刀の光により燃えるかのようで、発情した象（強い象）のように勇猛であった。(二六—二七) 鋭い刀を手に持ち、楯を持つ彼が、風のように速く襲撃して、戦車の近くに来た時、軍司令官ドリシタデュムナは怒り、すぐさま棍棒で

彼の頭を打ち砕いた。(二八—二九) 王よ、彼が殺されて倒れた時、彼の楯と輝く刀は速やかにその手から地面に落ちた。(三〇) 恐ろしく勇猛なパーンチャーラの偉大な王子は、棍棒で彼を殺して最高の名声を得た。(三一)

わが君よ、強力な勇士である王子が殺された時、あなたの軍隊に「ああ、ああ」という大きな嘆声があがった。(三二) それからサーンヤマニは、息子が殺されたのを見て怒り、戦いに酔い痴れるパーンチャーラの王子に激しく襲いかかった。(三三) クルとパーンダヴァのすべての王たちは、最高の戦士である二人の勇士がその戦場で交戦するのを見た。(三四) それから、敵の勇士を殺すサーンヤマニは怒って、三本の矢でドリシタデュムナを射た。〔御者が〕突き棒で巨象を打つように。(三五) めざましく戦うシャリヤも怒って、勇士ドリシタデュムナの胸を射た。それから、また戦いが繰り広げられた。(三六)

(第五十七章)

ビーマとその息子の活躍

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、私は人間の努力よりも運命の方がより強力であると思う。私の息子の軍隊はパーンダヴァの軍隊に殺されているではないか。(一) 友よ、そなたはいつも私の戦士たちが殺されていることばかり語る。そしていつもパーンダヴァたちが動揺せず喜び勇んでいることを語る。(二) サンジャヤよ、そなたは今日、わが軍が雄々しさを欠き、倒れたこと、倒

されていること、殺されたことのみを語る。(三) 彼らは力の限り戦い、勝利に向けて努力しているのに。いつもパーンダヴァ軍が勝利し、わが軍は負けてばかりいる。(四) 友よ、この私はいつもドゥルヨーダナにとって強い苦しみとなること、多くの耐えがたいことを聞く。(五) サンジャヤよ、パーンダヴァ軍が敗れ、わが軍が戦いに勝つような方策を私は見出せない。(六)」

サンジャヤは語った。——

王よ、気を確かに持って、人間の身体の死滅、象兵や騎兵や戦車兵の滅亡を聞きなさい。これはあなたの非常に悪い政策である。(七)

シャリヤは九本の矢でドリシタデュムナを苦しめた。後者は怒り、鉄の矢でマドラ国王（シャリヤ）を苦しめた。(八) そこで我々はドリシタデュムナの驚異的な勇武を見た。彼はめざましく戦うシャリヤを速やかに制止したのである。(九) 誰も戦場で激して戦う二人の相違を見なかった。両者の戦いはほんの一瞬のようで、互角のようであった。(一〇) 大王よ、それからシャリヤは、その戦いにおいて、よく鍛えられた鋭い矢で、ドリシタデュムナの弓を断ち切った。(一一) バーラタよ、そして彼を矢の雨でおおった。雨季が来た時、水を含む雲が山をおおうように。(一二)

ドリシタデュムナが苦しめられていた時、アビマニユは怒って、急いでマドラ国王の戦車に駆け寄った。(一三) それから、限りなく高邁で、非常に気性の荒いアビマニユは、マドラ国王の戦車に達して、三本の矢でシャリヤを射た。(一四) 王よ、あなたの軍隊は、戦場でアルジュナの息子に立ち向かおうと望み、急いでマドラ国王の戦車を囲んで立っていた。(一五) ドゥルヨーダナ、ヴィカルナ、ドゥフシャーサナ、ヴィヴィンシャティ、ドゥルマルシャナ、ドゥフサハ、チトラセーナ、ドゥルムカ、サティヤヴラタ、プルミトラたちは、戦場でマドラ国王の戦車を守って立っていた。バーラタよ、あなたに幸あらんことを。(一六—一七) そして王よ、怒ったビーマセーナ、ドリシタデュムナ、ドラウパディーの〔五名の〕息子たち、アビマニユ、ナクラとサハデーヴァは、種々の武器を放ちながら、喜び勇んで彼らに立ち向かった。彼らは互いに相手を殺そうと望んで交戦した。王よ、これもあなたの悪しき政策のせいだ。(一八—一九)(二〇—四一略)

マガダ国王は、戦場でアビマニユの戦車に向けて、アイラーヴァタ（インドラの象）にも似た象をかりたてた。(四二) 敵の勇士を滅ぼす勇猛なアビマニユは、マガダ国王の最高の象が襲って来るのを見て、一矢でもってそれを殺した。(四三) そして敵の都城を征服するアビマニユは、象を失ったマガダ国王の頭を、銀の羽根のついた矢で切り取った。(四四)

一方、ビーマセーナは、敵の象隊に突入し、象たちを粉砕しながら戦場を歩きまわった。インドラが山々を砕くように。(四五) 我々はその戦場で、象たちがビーマセーナに一撃のもとに殺されるのを見た。山々が金剛杵（ヴァジュラ）に砕かれるように。(四六)(四七—五二略) 怒ったビーマセーナに粉砕されて、象たちは苦しみ（異本による）、あなたの軍隊を踏みにじって急いで逃走した。(五三) その勇士が戦っていた時、アビマニユをはじめとする勇猛な戦士たちは彼を守ってい

た。神々がインドラを守るように。（五四）ビーマセーナは象の血を浴び、血まみれの棍棒を持ち、恐ろしい死神（クリターンタ）のように見えた。（五五）バーラタよ、あらゆる方角において彼が棍棒で奮闘し、踊っている〔かのようである〕のが見えたが、それはあたかも、踊るシャンカラ（シヴァ）のようであった。（五六）大王よ、我々は彼の恐ろしい人殺しの重い棍棒を見た。それはヤマ（閻魔）の杖（ダンダ）のようであり、インドラの雷電のような音をたてた。（五七）それは毛髪や髄にまみれ、血まみれであり、あたかも獣（パシュ）たちを殺している怒ったルドラ（シヴァ）のピナーカ槍のようであった。（五八）ちょうど牛飼が畜牛の群を杖でかりたてるように、ビーマは象の群を棍棒でかりたてた。（五九）あなたの象たちはいたるところで棍棒で殺され、〔その他の兵に〕矢で殺され、自軍の兵たちを踏みつぶして逃走した。（六〇）ビーマは、強風が雲を吹き払うように象たちを粉砕し、その喧噪の中に立っていた。シヴァが火葬場に立つように。（六一）

（第五十八章）

サンジャヤは語った。——

象隊が壊滅した時、あなたの息子ドゥルヨーダナは、すべての兵に「ビーマセーナを殺せ」と命令した。（一）そこで全軍はあなたの息子の命令により、恐ろしい叫び声をあげているビーマセーナに突撃した。（二）（三―七略）最高の戦士ビーマは、それらの軍隊の群を棍棒で食い止めて、その喧噪の中で、メール山のように不動に立っていた。（八）そのこよなく恐ろしい、凄まじい喧噪の時において、ビーマの兄弟と息子たち、ドリシタデュムナ、ドラウパディーの息子たち、アビマニユ、偉大な戦士シカンディンたちは、危険が生じても、強力なビーマセーナを捨てなかった。（九―一〇）ビーマは鋼鉄製の重くて大きい棍棒を持って、杖を持つ死神（アンタカ）のように、あなたの兵たちを殺した。そして強力な彼は、戦車の群や騎兵の群を粉砕した。（一一）強力なビーマは宇宙紀（ユガ）の終末の火のように戦場を歩きまわった。宇宙紀の終末のカーラ（破壊神）のように戦場ですべてを殺しながら。（一二―二〇略）

狼腹（ビーマ）が大きな棍棒を持って、恐ろしい働きをしているのを見て、ビーシュマは急いで彼に近づいた。（二一）雷雲のような大きな音をたて、太陽のような戦車に乗り、彼は雨を降らせる雲のように、矢の雨でビーマをおおった。（二二）口を開けた死神のようなビーシュマが近づいて来るのを見て、短気な勇士ビーマはそちらに向かって行った。（二三）ちょうどその時、信義を守るシニの勇士サーティヤキが祖父（ビーシュマ）を襲撃した。強い弓で敵を殺し、あなたの息子の軍隊を戦慄させつつ。（二四）彼が銀色に輝く馬たちにひかれ、強い弓で矢を放ちつつ進む時、バーラタよ、あなたのすべての軍隊は彼を食い止めることができなかった。（二五）最高の王よ、リシャシュリンガの末裔の（異本は、「羅刹の」）アランブサは、鋭い矢で彼を射た。シニの孫である勇士は、四本の矢で彼を射貫いてから、戦車で進撃した。（二六）ヴリシュニの最上者（サーティヤキ）は敵の中を動きまわり、クルの雄牛たちを敗走させせつつ（異本による）、戦場で何度も雄叫びをあげながらやって来た。その真昼の燃える太陽のような最強の

男を見て、それを誰も止めることはできなかった。王よ、ソーマダッタの息子を除いて、すべての者たちが意気消沈した。(二七－二八) バーラタよ、ソーマダッタの息子ブーリシュラヴァスは、自軍の戦士が駆逐されるのを見て、戦いを望んでサーティヤキに対して進撃した。(二九)

(第五十九章)

サンジャヤは語った。――

王よ、それからブーリシュラヴァスはひどくいきり立って、九本の矢でサーティヤキを貫いた。突き棒で巨象を刺激するように。(一) 限りなく高邁なサーティヤキは、すべての人々が見ている中で、真っ直ぐの矢をクルの勇士に注いだ。(二) それからドゥルヨーダナ王が、弟たちに囲まれて、戦場で奮闘して、サーティヤキをすっかり取り巻いた。(三) 同様に、非常に強力なすべてのパーンダヴァたちも、急いでその戦闘に加わり、サーティヤキをすっかり囲んで守っていた。(四)

バーラタよ、ビーマセーナは怒り、棍棒を振り上げて、ドゥルヨーダナをはじめとするあなたのすべての息子たちを攻撃した。(五) あなたの息子ナンダカは忿怒にかられ、鷲(カンカ)の羽根のついた、よく研いだ鋭い六本の矢で、強力なビーマセーナを貫いた。(六) またドゥルヨーダナも怒り、その戦いにおいて、三本の鋭い矢で強力なビーマセーナの胸を撃った。(七) そこで非常に強力な勇士ビーマは、最高の戦車に乗り、〔御者の〕ヴィショーカに告げた。(八)

「ドリタラーシトラの息子であるこれらの偉大な戦士たち、強力な勇士たちは、非常に怒って、戦場でまさに私を殺そうと努力している。(九) 今日、あなたの見ている前で、私は必ずや彼らを殺すであろう。それ故、御者よ、戦場で私の馬たちを注意深く制御しなさい。(一〇)」

ビーマはこのように言って、あなたの息子ドゥルヨーダナを、黄金で飾られた十本の鋭い矢で貫いた。そして、ナンダカの胸の間を三本の矢で貫いた。(一一) ドゥルヨーダナは六本の矢で強力なビーマを射て、他の鋭い三本の矢でヴィショーカを射た。(一二) 王よ、ドゥルヨーダナ王は戦場で笑うかのように、鋭い三本の矢で、ビーマの輝く弓をその握りのところで切断した。(一三) そしてビーマは、その戦いにおいて弓を持つあなたの息子が鋭い矢で御者のヴィショーカを苦しめているのを見た。(一四) そこで彼は怒り、我慢できず、あなたの息子を殺すために神的な弓をとった。バラタの雄牛である大王よ。(一五) ビーマは怒って、美しい羽根のついた、馬蹄形の先の矢をとり、それで王の最高の弓を断ち切った。(一六) 王は怒りで燃えるかのようになり、断たれた弓を捨て、直ちにより強い弓をとった。(一七) そして怒った王は、死神のように輝く恐ろしい矢をつがえ、ビーマセーナの胸の間を撃った。(一八) ビーマは深く貫かれ、苦しみ、戦車の座席に座りこんだ。そして戦車の座席に座って、彼は気を失った。(一九) ビーマが苦しんでいるのを見て、アビマニユをはじめとする勇猛なパーンダヴァの偉大な戦士たちは我慢できなくなった。(二〇) そこで彼らは一心不乱になって、あなたの息子の頭に、鋭利な武器の雨を激しく降らせた。(二一)

それから強力なビーマセーナは意識を取りもどし、ドゥルヨーダナを三本の矢で貫き、そしてまた五本の矢で貫いた。（二二）そして勇士ビーマは、シャリヤを金の羽根のついた二十五本の矢で貫いた。シャリヤは射貫かれて、戦場から退却した。（二三）

〔ドリタラーシトラの十四名の息子がビーマに殺され、残りは逃げ出す（二四―三三略）〕

それからビーシュマは、すべての偉大な戦士たちに告げた。

「あそこにいる恐るべき弓取りのビーマは、戦場で怒り、集結したドリタラーシトラの息子である勇士たちを、主要な順、年齢順、勇猛な順に倒している。王たちよ、彼を殺せ。（三四―三五）」

このように言われて、すべてのドゥルヨーダナの兵士たちは怒って、強力なビーマセーナに襲いかかった。（三六）王よ、バガダッタは発情した象（強い象）に乗り、ビーマのいる所を急襲した。（三七）彼はビーマセーナに戦いを挑み、よく研いだ矢で〔おおって〕、戦場で彼を見えなくした。雲が太陽を隠すように。（三八）自分の腕力を頼む、アビマニユをはじめとする勇士たちは、その戦いでビーマが〔矢で〕おおわれたことに我慢できなかった。（三九）彼らはバガダッタを矢の雨によりすっかりおおった。そして彼の象を矢の雨でいたるところ貫いた。（四〇）王よ、バガダッタの象は、矢の雨に撃たれ、二倍の速度で走った。種々の標がつき、鋭い切っ先をした矢により、血が吹き出し、その象は戦場で見られるべきものであった。太陽の光線で貫かれた大雲のように。（四一―四二）分泌液を流すその象は、バガダッタにかりたてられ、カーラ（時間、破壊神）に送り出された死神のように、すべての者たちを駆け抜けた。二倍の速度をとって、その足で大地を震動させて。（四三）その雄姿を見て、すべての偉大な戦士たちは、耐えがたく思って元気を失った。（四四）人中の虎よ、それからバガダッタ王は怒り、真っ直ぐの矢でビーマセーナの胸の間を射た。（四五）その強力な勇士は王に射貫かれ、全身麻痺して、旗竿によりかかった。（四六）敵軍が恐れ、ビーマセーナが気絶したのを見て、栄光あるバガダッタは大声で雄叫びをあげた。（四七）

王よ、それから恐ろしい羅刹のガトートカチャ（ビーマの息子）は、ビーマがそのような状態であるのを見て怒り、その場で姿を消した。（四八）彼は臆病者の恐怖を増させる恐ろしい幻影を作り出して、次の瞬間に恐るべき姿をとって現われた。（四九）自らは幻力で作り出したアイラーヴァタ（インドラの象）に乗り、他の方位の象たちがその後につき従った。（五〇）すなわち、アンジャナ、ヴァーマナ、美しく輝くマハーパドマという三頭の巨象であり、それぞれに羅刹たちが乗っていた。（五一）王よ、それらは巨大な体をし、多量の分泌液を三様（筋三）に流し、威光と気力と体力をそなえ、強力で勇猛であった。（五二）それからガトートカチャは、象に乗る勇士バガダッタを殺そうとして、自分の象をかりたてた。（五三）その他の四牙の象たちも、それぞれ強力な羅刹たちにかりたてられ、猛り立って、その牙でバガダッタの象を苦しめ、四方から攻撃した。（五四）その象はすでに矢で苦しめられていたが、それらの象たちに傷つけられ、苦痛に悩み、インドラの雷電にも似た、非常に大きな叫び声をあげた。（五五）鳴き叫ぶ象のこよなく恐ろしい猛烈な音を聞いて、ビーシュマはドローナとスヨーダナ（ドゥルヨーダナ）

王に言った。(五六)
「あそこで勇士バガダッタが、邪悪なヒディンバーの息子(ガトートカチャ)と戦い、苦境に陥っている。(五七)羅刹は強力な幻力を有する。そしてあの王は非常に短気である。両者とも非常に強力で、まるで死神のようである。(五八)喜んでいるパーンダヴァ軍の大喚声が聞こえる。恐れた〔バガダッタの〕象の大きな叫び声が聞こえる。(五九)どうかお願いだ。王を守るためにあそこに行こう。この戦いにおいて、彼を守らなければ、彼はすぐに生命を捨てるであろう。(六〇)強力な者たちは急げ。どうして我々はぐずぐずできよう。身の毛がよだつ恐ろしい大戦争が行なわれている。(六一)あの軍司令官は忠誠あり、良家の生まれで、勇士である。不滅の人々よ、我々は彼を救うべきである。(六二)」

このビーシュマの言葉を聞いて、ドローナをはじめとするすべての王たちは、こぞってバガダッタを救うために、大急ぎで彼のいる所へ行った。(六三)

ユディシティラをはじめとするパーンチャーラとパーンダヴァの軍は、敵軍が進軍するのを見て、彼らの後について行った。(六四)それらの軍隊を見て、栄光ある羅刹の王(ガトートカチャ)は、落雷のような非常に大きな声で叫んだ。(六五)その雄叫びを聞いて、そして戦っている象たちを見て、シャンタヌの息子ビーシュマは再びドローナに告げた。(六六)

「私は邪悪なヒディンバーの息子と戦いたくはない。彼は今、体力と気力にめぐまれ、仲間がいる。(六七)金剛杵(ヴァジュラ)を持つ〔インドラ〕自身といえども、彼と戦って勝つことはできない。彼は的を外すことなく攻撃する。そして我々の象や馬は疲れている。そして我々はパーンチャーラやパーンダヴァの軍にさんざん痛めつけられている。(六八)そこで私は、勝ち誇るパーンダヴァ軍と戦いたくはない。そこで今日は撤退すると布告し、明日になったら我々は敵と戦おう。(六九)」

ガトートカチャに対する恐怖にかられていたクル軍は、祖父(ビーシュマ)の言葉を聞いて、それを口実として、言われた通りに退却した。(七〇)クル軍が退却した時、勝ち誇るパーンダヴァ軍は、獅子吼をして、法螺貝や笛を吹き鳴らした。(七一)バラタの雄牛よ、ガトートカチャをはじめとするパーンダヴァ軍とクル軍のその日の戦いは以上のようであった。(七二)

王よ、それから夜になって、パーンダヴァ軍に敗れたクル族の人々は恥じ入りつつ自分の宿舎に帰った。(七三)そして強力なパーンドゥの息子たちは、矢で傷ついた身体ではあったが、その日の戦いに満足して宿舎に帰った。(七四)大王よ、彼らはビーマセーナとガトートカチャを先頭として、お互いに讃え合いながら、最高の喜びを味わっていた。(七五)彼らは様々な叫び声をあげ、それらに楽器の音が入り交じった。そして法螺の音とともに獅子吼をした。(七六)わが君よ、その偉大な者たちは大地を震動させて雄叫びをあげ、あなたの息子の急所を衝いた。その敵を苦しめる勇士たちも、夜中、宿舎に引きあげた。(七七)一方ドゥルヨーダナ王は、弟たちを殺されて、涙を流し悲嘆に暮れ、しばらくの間考えこんでいた。(七八)それから、軍営のすべての作法を規定通りに行なって、弟たちの不幸を悼んで、悲嘆に暮れて沈思していた。(七九)

(第六十章)

梵天、ヴァースデーヴァの本性を明かす

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、パーンドゥの王子たちの、神々によってもなされがたい行為を聞いて、私に非常に大きな恐怖と驚きが生じた。（一）そしてサンジャヤよ、息子たちの敗北をすっかり聞いて、スータ（吟誦者）よ、私に大きな心配が生じた。どのようになるだろうかという。（二）確かにヴィドゥラの言葉は私の心を焼くであろう。サンジャヤよ、今まで見られたように、すべては運命の計らいである。（三）パーンダヴァの勇猛な戦士たちは、ビーシュマをはじめとする勇士たち、武器に通じた最高の戦士たちに対して戦っている。（四）偉大で強力なパーンドゥの息子たちは、いかなるわけで殺されないのか。友よ、誰に恩寵を与えられたのか。彼らはいかなる知識を得たのか。滅亡に赴かないとは。天空の星の群のように。（五）わが軍が繰り返しパーンダヴァたちに殺されたことに、私は耐えられない。運命の計らいにより、最高に恐ろしい杖（ダンダ）が私にのみ落ちる。（六）パーンドゥの息子たちが殺されず、私の息子たちが殺されるわけを、ありのまますべて私に言ってくれ。サンジャヤよ。（七）私はどうしてもこの苦しみの彼岸を見出すことはない。大海を両腕で泳いで渡る人のように。（八）確かに非常に恐ろしい災禍が息子たちに訪れたと私は思う。疑いもなくビーマは私のすべての息子を滅ぼすであろう。（九）戦いにおいて私の息子たちを守ることができる勇士を私は見出さない。

サンジャヤよ、必ずや私の息子たちは戦場において滅亡する。（一〇）そこでスータよ、私は特にこの原因と理由をたずねる。今、私にすべてをありのままに告げてくれ。（一一）自軍が戦場で退却したのを見て、ドゥルヨーダナはどのようにしたか。またビーシュマ、ドローナ、クリパ、シャクニ、ジャヤドラタ、偉大な射手であるドローナの息子、強力なヴィカルナはどのようにしたか。（一二）大知者サンジャヤよ、私の息子たちが退却した時、それら偉大な人々の決意はどのようであったか。（一三）」

サンジャヤは語った。——

王よ、注意深く聞きなさい。聞いてから考察して下さい。これは何かの呪句（マントラ）のせいでも、そのような幻術でもない。王よ、パーンダヴァたちが何かの恐怖を作り出しているのでもない。（一四）能力を有する彼らは、この戦いにおいて、正々堂々と戦っている。バーラタよ、プリターの息子たちは、大なる名声を望んで、常に法（ダルマ）に従ってすべての讃えられる行為を企てる。（一五）強力な彼らは法を守り、戦いから退くことはない。最高の繁栄にめぐまれている。法があるところ勝利がある。王よ、それ故パーンダヴァたちは戦いにおいて殺されることなく、勝利にめぐまれているのだ。（一六）あなたの息子たちは邪悪で、常に悪事に専念している。残忍で卑しい行為をする。それ故、彼らは戦いに敗れる。（一七）王よ、あなたの息子たちは、卑しい人々のように、パーンダヴァたちに対し、非常に多くの卑劣なこと、邪悪なことをした。（一八）しかしパーンドゥの兄よ、パーンダヴァたちはあなたの息子たちの

すべての罪過をものともせず、いつもそれらを暴くことはなかった。王よ、だがあなたの息子たちは彼らを尊敬することはなかった。（二九）いつもなされるその悪業の、キンパーカの実のように〔苦い〕、こよなく恐ろしい果報が訪れた。（二〇）王よ、親しい人々とともに、それを味わいなさい。大王よ、あなたは息子たちや親しい人々に止められても、あなたは目覚めなかったのだから。ヴィドゥラ、ビーシュマ、偉大なドローナ、そして私は、何度も止めたが、あなたは有益で道にかなった言葉を受け入れなかった。人間が有益な薬草を飲まぬように。あなたは息子たちの意見に従って、パーンダヴァたちは征服されたも同然と考えた。（二一—二二）

バラタの最上者よ、あなたはパーンダヴァたちが勝利する真の原因を私にたずねた。そこで私は、聞いた通りにあなたに語ろう。敵を制する者よ。（二三）ドゥルヨーダナは、戦いにおいて非常に強力なすべての弟たちが敗れたのを見て、祖父（ビーシュマ）に次のようにたずねた。（二四）あなたの息子が夜中に、悲しみで心迷い、大知者である祖父に礼儀正しく近づいて告げたことを私から聞きなさい。王よ。（二五）

ドゥルヨーダナは言った。

「あなたとドローナ、シャリヤ、クリパ、ドローナの息子、フリディカの息子クリタヴァルマン、カーンボージャ族のスダクシナ、ブーリシュラヴァス、ヴィカルナ、強力なバガダッタ。以上は名家に属し、身命を賭して戦う偉大な戦士と呼ばれます。（二六—二七）彼らは三界〔すべての者〕に匹敵すると私は思います。しかし彼らすべては、パーンダヴァたちの勇武

に敵いません。（二八）そこで私に疑惑が生じました。おたずねします。私に答えて下さい。パーンダヴァたちは何に依存して繰り返し我々に勝つのですか。（二九）」

ビーシュマは語った。――

クル族の王よ、私がお前に言う言葉を聞きなさい。私は何度もお前に告げたのに、お前は私の言う事を聞かない。（三〇）バラタの最上者よ、パーンダヴァたちと和平を結びなさい。王よ、地上とお前とにとって、それがよいことだと私は思う。（三一）王よ、弟たちとともに幸せにこの大地を享受せよ。すべての邪悪な者たちを苦しめ、親族を喜ばせて。（三二）私は前にそのことを力説したが、わが子よ、お前はそれを聞かなかった。あなたはパーンダヴァたちを軽んじたから、このような結果になった。（三三）不屈の彼らが殺されない理由を言うから、それを聞きなさい。王よ。（三四）クリシュナに守られたパーンダヴァを戦いにおいてうち破る者は、世間にいないし、いなかったし、将来にもいないであろう。（三五）ところで法（ダルマ）を知るわが子よ、かつて心の清い聖者（ムニ）たちが私に語った古詩を、ありのままに聞きなさい。（三六）

昔、ガンダマーダナ山において、すべての神々と聖仙たちは集まって、祖父（梵天）に仕えていた。（三七）彼らの中央に座った造物主（梵天）は、空中に最高の天車がとどまっているのを見た。それは光輝により燃えるように輝いていた。（三八）梵天は瞑想によりそれを観察して、一心に合掌して、最高に喜んで、至高の主（ヴィシュヌ）に敬礼した。（三九）すべての聖仙たちや

神々は、梵天が立ち上がったのを見て、大なる奇蹟を眺めながら合掌して立っていた。（四〇）ブラフマンを知る者たちの最上者であり、世界の創造者であり、最高の法(ダルマ)を知る梵天は、彼をふさわしく敬ってから告げた。（四一）

「あなたは一切に情け深く、一切を体とし、一切の主であり、その勢力は遍在し、一切を造った者（ヴィシュヴァカルマン）であり、自己を制御している。一切の主であり、ヴァースデーヴァである。それ故、ヨーガを本性とする神であるあなたに私は帰依する。（四二）一切である偉大な神よ、万歳。世界の利益に専念する者よ、万歳。ヨーギンの主、遍在者よ、万歳。ヨーガのすべてである者よ、万歳。（四三）蓮花蔵(パドマガルバ)よ、広大な眼の者よ、世界の主の中の主よ、万歳。過去・未来・現在の主よ、柔和な者よ、息子のうちの息子よ、万歳。（四四）（四五―五九略）

私はあなたの恩寵により、地上におけるこのようなものを創造した。蓮花が臍から生じた者よ、広大な眼を持つ者よ、クリシュナよ、悪夢を滅する者よ。（六〇）あなたは万物の寄る辺である。あなたは導き手であり、世界中を向いている。神々の主よ、あなたの恩寵により神々は常に幸福である。（六一）神よ、あなたの恩寵により大地は常に恐怖がない。広大な眼を持つ者よ、それ故、ヤドゥ族の家系に生まれなさい。（六二）法を確立するために、悪魔たちを殺すために、世界を維持するために、私がお願いしたことを実行して下さい。主よ。（六三）主よ、あなたの恩寵により、この最高の秘密がある。ヴァースデーヴァよ、私はそれを適切に歌った。（六四）クリシュナよ、自ら自己(アートマン)により自己をサンカルシャナ神（バララーマ）に作って、自己より生じたプラデュムナ（クリシュナの息子）を自己により創造した。（六五）あなたはプラデュムナからアニルッダを作った。アニルッダは不滅のヴィシュヌとして知られる。アニルッダは私、すなわち世界を支持する梵天を作った。（六六）そこで私はヴァースデーヴァよりなり、あなたにより創造された。主よ、自己を部分に分けて、人間界に行きなさい。（六七）そこで、全世界の人々の幸福のために、阿修羅を殺し、法を確立し、名声を得て、あなたは真にヨーガを達成するであろう。（六八）無量の勇武を持つ者よ、この世の梵仙や神々は、それぞれの名前で、最高我であるあなたを信愛して歌うであろう。（六九）美しい腕をした方よ、すべての生類の群はあなたに依存し、願いをかなえるあなたに寄る辺を求める。バラモンたちは、あなたのことを、始めと真中と終わりを持たない者、無限のヨーガ、世界の堤(セートゥ)（橋）と呼ぶ。（七〇）」

（第六十一章）

ビーシュマは語った。――

それから、世界の最高の主である尊い神は、優しく重々しい声で梵天に次のように答えた。（一）

「友よ、私はヨーガによりあなたの願いをすべて知っていた。その通りになるであろう。」

このように告げて、彼はその場で消えた。（二）それから神々や聖仙やガンダルヴァ（半神の一種）たちは最高に驚嘆した。一同は好奇心にかられて、祖父（梵天）にたずねた。（三）

「主よ、尊いあなたが敬礼して、最高の言葉で讃えたあの方は一体誰ですか。

我々はそれを聞きたいです。（四）」

このように言われて、祖父は優しい声で、すべての神や梵仙やガンダルヴァたちに答えた。（五）

「彼はタット（それ）であり、至高者であり、未来・現在・過去（テクスト疑問）である。彼は生類の本体（アートマン）であり、主であり、ブラフマンであり、最高の境地である。（六）神々の雄牛よ、私は恵み深い彼と会話をしていた。私は世界を益するために世界主に要請した。（七）ヴァスデーヴァの息子として人間界に住めと。そして、阿修羅たちを殺すために地上に生まれよと。（八）強力で恐ろしい姿のダイティヤとダーナヴァ（類魔）と羅刹たちが、戦闘において殺されて、人間に生まれた。（九）強力な尊い神は、ナラとともに、彼らを殺すために、人間の胎内に宿り、地上で活動するであろう。（一〇）この無量の光輝を有する、古（いにしえ）の最高の聖仙であるナラとナーラーヤナは、そろって人間界に生まれる。（一一）その両者がそろうと、戦いにおいて神々にもうち破られることはない。しかし愚者はこのナラとナーラーヤナという聖仙を知らない。（一二）全世界の主である私、梵天（ブラフマー）は、彼の息子である。全世界の偉大な主であるヴァースデーヴァ（クリシュナ）は汝らに敬われるべきである。（一三）最高の神々よ、その法螺貝と棍棒を持つ強力な者は、これは人間であると軽蔑されるべきではない。（一四）それは最高の秘密であり、それは最高の境地である。それは最高のブラフマンであり、それは最高の栄光である。（一五）それは不滅であり、非顕現であり、それは永遠の大（マハット）なるものである。それはプルシャ（人神）と呼ばれて歌われ、知られることはない。（一六）それは最高の威光であり、それは最高の楽であり、それは最高の真実であると、ヴィシュヴァカルマン（一切造者）に讃えられる。（一七）それ故、インドラなどのすべての神々と世の人々は、無量の勇武を有する主ヴァースデーヴァを、彼は人間だと言って軽蔑すべきではない。（一八）クリシュナのことを軽蔑して、『彼は人間にすぎない』と言うような非常に愚かな者は最低の人間であると呼ばれる。（一九）彼は偉大なヨーギンであり、人間の体に入った者である。そのヴァースデーヴァを軽蔑する者を、人々は暗質的（ターマサ）な者と呼ぶ。（二〇）実は彼は動不動〔の一切〕を本性とする神であり、シュリーヴァッツァ（卍）の印を持ち、美しい光輝を有する。臍から蓮花が生じた者である。その彼を知らない者を、人々は暗質的な者と呼ぶ。（二一）王冠とカウストゥバ宝珠をつけ、友たちに無畏をもたらす偉大な彼を軽蔑する人は、恐ろしい暗黒（タマス）に沈みこむ。（二二）最高の神々よ、全世界の者たちは以上のように真実を知って、世界の主の中の主であるヴァースデーヴァに敬礼すべきである。（二三）」

かつて、全世界の本体（アートマン）である尊い神は、このように告げると、すべての神の群と別れ、自分の住処に帰った。（二四）そして、神々、ガンダルヴァ、聖者、天女たちも、梵天に告げられたその言葉を聞いて喜び、天界に帰って行った。（二五）

わが子よ、浄らかな心をした聖仙たちが、集会において古（いにしえ）のヴァースデーヴァについて語っている時、私は以上のことを聞いた。（二六）聖典に通じた者よ、ジャマダグニの息子ラーマ、知性あるマールカンデーヤ、ヴィヤーサとナーラダから私は聞いた。（二七）

このことを理解して、そして全世界の父である梵天がその息子である不滅の主、偉大なヴ

アースデーヴァ、世界の主の中の主について聞いて、どうしてこのヴァースデーヴァが人々に尊崇され崇拝されるべきでないだろうか。(二八―二九) わが子よ、お前はかつて、ヴェーダに通じた聖者たちに止められた。知性あるヴァースデーヴァと戦ってはならぬ、パーンダヴァたちと戦ってはならぬと。お前は迷妄によりそのことを理解しない。(三〇) 私はお前のことを残忍な羅刹であると考える。そしてお前は暗質におおわれている。お前はクリシュナとアルジュナを憎んでいるから。他の人はナラとナーラーヤナの両神を憎みはしない。(三一) それ故王よ、私はお前に告げる。実に彼は永遠で不滅である。全世界よりなり、常住で、配置者であり、支持者であり、恒久である。(三二) 彼は三つの世界を支える。動不動の生類の最上者であり、主である。戦士であり、勝利であり、勝利者であり、一切の本性であり、主宰神である。(三三) 王よ、彼は純質よりなり、暗質と激情を離れている。クリシュナがいる所に法があり、法がある所に勝利がある。(三四) 彼の偉大性により、そして彼自身のヨーガにより、パーンドゥの息子たちは支持されている。王よ、彼らに勝利があるであろう。(三五) 彼は常にパーンダヴァたちに、善と結びついた知性をもたらす。戦いにおいては常に力をもたらし、恐怖から守る。(三六) 彼は永遠なる神であり、一切の秘密よりなり、吉祥である。バーラタよ、お前が私にたずねたのは、そのヴァースデーヴァであると知るべきである。(三七) バラモン、王族、実業者、従僕たちは、それぞれの特徴をそなえ、常に自分の仕事に専心し、崇拝して彼に仕える。(三八) ドゥヴァーパラ・ユガの終わり、カリ・ユガの初めに、〔信者たちは〕サートヴァタの儀軌によって、彼とサンカルシャナとを〔讃えて〕

歌う。(三九) 彼がまさしくヴァースデーヴァである。彼は一切の阿修羅と人間の世界、海に囲まれる諸都市、人間の住む地を、宇宙紀ごとに、繰り返し創り出す。(四〇)（第六十二章）

ヴァースデーヴァの由来と栄光

ドゥルヨーダナはたずねた。

「全世界において、ヴァースデーヴァは偉大な存在と言われる。祖父よ、彼の由来と栄光について知りたいです。(一)」

ビーシュマは語った。――

ヴァースデーヴァは偉大な存在である。一切の神のうちの神である（異本による）。蓮弁の眼をした彼よりも優れた者は見られない。バラタの雄牛よ。マールカンデーヤはゴーヴィンダ（クリシュナ）について語る。大なる奇蹟であると。(二) 一切万物であり、生類の本体であり、偉大な最高のプルシャ（神人）であると。彼は水、風（気空）、火という三を造った。(三) 全世界の主である主宰神、偉大な最高のプルシャは、地を造ってから、水上に寝た。すべての水よりなる神は、ヨーガにより、そこで眠った。(四) 彼は口から火を造った。気息から風を造った。不滅の彼は、その意から、言語（サラスヴァティー）と諸ヴェーダを造った。(五) 彼はまず諸世界と、神々と、聖仙の群を造った。そして不滅の本源である彼は、生類の帰滅と死を創造した。

(六) 彼は法であり、法を知る者であり、恩寵を与える者、すべての願望をかなえる者である。彼は作る者であり、作られる対象であり、本初の神であり、自ら主宰する者である。(七) ジャナールダナ(ヴィシュヌ)はまず過去と現在と未来を創造した。二つの薄明と諸方位と虚空と誓戒を創造した。(八) ゴーヴィンダは、次に聖仙たちと苦行を創造した。不滅で偉大な主は、世界の創造者をも創造した。(九) 彼は万物のうちで最初に生じたサンカルシャナを創造した。彼は、生類と山々をともなうこの大地を支えている神聖なシェーシャ竜、アナンタと呼ばれるシェーシャ竜を創造した。(一〇) バラモンたちは瞑想のヨーガにより、彼をマハウジャサ(非常に強力な者)と呼ぶ。(一一) 耳漏から生じたマドゥという恐るべき大阿修羅は、恐ろしい行為をし、恐ろしいことを考えたが、最高のプルシャは、梵天を敬って、その彼を殺した。(一二) わが子よ、マドゥを殺したことにより、神々や魔類や人間、そして聖仙たちは、ジャナールダナのことをマドゥスーダナ(マドゥの殺戮者)と呼んだ。彼は猪、獅子であり、三歩で三界を闊歩した主である(猪などはヴィシュヌの化身)。(一三) ハリ(ヴィシュヌ)は一切の生類の母であり父である。その蓮の眼の神を凌駕する者はなかったし、今後もないであろう。(一四) 彼はその口からバラモンを、両腕から王族を、両腿から実業者を、両足から従僕を創造した。一切の生類の拠り所である神(異本による)、ブラフマンである者、ヨーガである者、ケーシャヴァに対し、苦行により自己を制し、新月と満月の日に奉仕する人は、大なる存在(ブラフマン)に達するであろう。(一五―一六) ケーシャヴァは最高の威光であり、全世界の祖父である。王よ、聖者たちはフリシーケーシャ(クリシュナ)についてこのように述べる。(一七) このように、彼を師匠、父、長上と知れ。クリシュナがその人に満足すれば、その人は不滅の諸世界を勝ち取る。(一八) 恐怖がある場合、ケーシャヴァに庇護を求める人は、常にこの〔文章〕を読誦し、繁栄して、幸福になるであろう。(一九) クリシュナに帰依した人々は迷うことはない。彼らが大きな危険に沈んだ時も、常にジャナールダナが守護する。(二〇) バラタ族の王よ、ユディシティラはこのことを正しく知り、世界主である偉大なケーシャヴァ、ヨーガの主である主宰神に対し、全身全霊で帰依している。(二一)

(第六十三章)

ビーシュマは語った。——

大王よ、かつて地上の梵仙たちや神々が語った、ブラフマンと同一〔である神〕の讃歌を私から聞きなさい。(一)

ナーラダはあなたについて、サーディヤ神たちの主、神のうちの神の主、世界創造者の状態を知ると述べた。またマールカンデーヤはあなたについて、過去であり現在であり未来であり、祭祀のうちの祭祀であり、苦行のうちの苦行であると述べた。また尊者ブリグはあなたについて、神々のうちの神、本初における恐ろしい姿(テクスト疑問)と述べた。ヴィシュヌよ、生類の主よ。(二―三) ドゥヴァイパーヤナはあなたについて、ヴァス神たちのうちのヴァースデーヴァ、シャクラ(インドラ)を立ち上がらせる者、神々のうちの神の神であると述べた。(四) かつて、生類の創造において、〔聖者たちはあなたを〕造物主ダクシャと呼ぶ。そこでアン

ギラスは、あなたを万物の創造者と呼ぶ。(五) アシタ・デーヴァラは、非顕現(アヴィヤクタ)はあなたの身体から生じ、顕現(ヴィヤクタ)はあなたの意(こころ)に存し、神々は言葉から生ずると述べた。(六) あなたの頭により天空は遍(あまね)く満たされている。両腕により大地は支えられている。あなたの腹は三界である。あなたは永遠のプルシャである。(七) 人々は苦行により浄められてあなたのことを知る。あなたはアートマン(真我)を見て満足した聖仙たちのうちの最高者である。(八) マドゥスーダナよ、戦いにおいて退くことのない、すべての法(ダルマ)に専念する高貴な王仙たちにとって、あなたは寄る辺である。(九)

わが子よ、以上、ケーシャヴァについて、詳細に、そして簡潔に、真実に即してお前に説いた。ケーシャヴァに好意を抱きなさい。(一〇)

サンジャヤは語った。——

大王よ、あなたの息子(ドゥルヨーダナ)は、この神聖な言葉を聞いて、ケーシャヴァとパーンダヴァの勇士たちを尊敬した。(一一) 大王よ、ビーシュマは再び彼に語りかけた。

「王よ、お前は偉大なケーシャヴァとナラの偉大性(讃嘆)を私にたずね、それをありのままに聞いた。そして、ナラとナーラーヤナが人間に生まれたわけも聞いた。(一二―一三) その両雄が何故に戦いにおいて無敵であるか、そしてパーンダヴァたちが何故に戦いにおいて誰にも敗れないかということも。王よ。(一四) クリシュナは誉れ高いパーンダヴァたちに、非常に好意を抱いている。王中の王よ、それ故に私は言う。パーンダヴァたちと講和せよと。

(一五) 強力な弟たちとともに、自制して、大地を享受せよ。ナラとナーラーヤナの両神を軽蔑すれば、お前は身を滅ぼすであろう。(一六)」

王よ、あなたの父はこのように告げてから沈黙した。そして王を帰らせて、寝所に入った。(一七) 王の方は、偉大なビーシュマに対し平伏してから宿舎に行った。そして白い寝台に臥してその夜を過ごした。バラタの雄牛よ。(一八)

(第六十四章)

マカラ陣と鷹陣の死闘

サンジャヤは語った。——

大王よ、その夜が過ぎ、太陽が昇った時、両軍は戦うべく対峙した。(一) 彼らはすべて戦場に会し、互いに相手を見て、各々勝利を願い、いきり立って互いに攻撃し合った。(二) 王よ、あなたの悪しき政策により、パーンダヴァ軍とドゥルヨーダナ軍の勇士たちは、それぞれ陣形を整え、猛り立って戦闘を開始した。(三) 王よ、ビーシュマは全面的にマカラ(摩竭、海豚または鰐)陣を布(し)いた。そして王よ、パーンダヴァ軍も自らの陣を布いた。(四) それから大王よ(異本による)、あなたの父である最高の戦士デーヴァヴラタ(ビーシュマ)は、戦車の大部隊に囲まれて進軍した。(五) そしてその他の戦車兵、歩兵、象兵、騎兵も、それぞれの部署について、次々と進撃した。(六) 彼らが戦闘準備をしたのを見て、誉れ高いパーンダヴァたちは、戦いにおいて不落の、陣形の王である鷹(シェーナ)陣によった。(七) その陣形の口のところで、強力なビーマセ

ーナが輝いていた。両眼には無敵のシカンディンと、ドリシタデュムナがいた。（八）その頭には、不屈の勇気を持つ勇士サーティヤキがいた。首のところには、ガーンディーヴァ弓を揺するアルジュナがいた。（九）その戦いにおいて、左翼には、栄光ある偉大なドルパダが息子とともに、一軍団を率いて（異本による）いた。（一〇）右翼には、軍団の長であるケーカヤの王、その後ろにドラウパディーの息子たち、強力なスバドラーの息子（アビマニユ）がいた。（一一）その尾には、栄光ある聡明なユディシティラ王自身が双子の弟たちとともにいた。（一二）

さて、その戦いにおいて、ビーマは〔敵の〕マカラ陣の口のところから侵入し、ビーシュマに近づいて多くの矢で彼をおおった。（一三）バーラタよ、それからビーシュマは、激戦において、パーンドゥの息子たちの布陣した軍隊を混乱させつつ、諸々の強力な武器を放った。（一四）自軍が混乱した時、アルジュナは戦いの最中、千本の矢でビーシュマを貫いた。（一五）そして彼は、ビーシュマに放たれた武器を防御して、喜び勇む自軍の兵とともに、戦闘の準備をした。（一六）それから最も強力な勇士ドゥルヨーダナ王は、自軍が酷たらしく殺戮されるのを見て、そして前日の戦いで弟たちが殺されたのを思い出して、バラドゥヴァージャの息子（ドローナ）に言った。（一七）

「非の打ち所のない師匠（アーチャーリヤ）よ、あなたはいつも私の幸せを願ってくれる。我々は実にあなたと祖父ビーシュマに依存すれば、疑いもなく、戦いにおいて神々にも勝つことを望み得る。いわんや、力と勇武の点で劣るパーンドゥの息子たちなど問題ではない。（一八―一九）」

わが君よ、あなたの息子にこう言われたドローナは、サーティヤキが見ている前で、パーンダヴァ軍を分断して侵入した。（二〇）一方サーティヤキは、ドローナを食い止めた。バーラタよ。それから、身の毛がよだつ激戦が始まった。（二一）

ドローナの息子（アシュヴァッターマン）は戦場でいきり立ち、笑うかのように、鋭い矢でシニの孫（サーティヤキ）の鎖骨の部分を射た。（二二）王よ、そこでビーマセーナは、最強の戦士ドローナからサーティヤキを守ろうとして、いきり立ってドローナを射た。（二三）わが君よ、するとドローナとビーシュマとシャリヤは怒り、戦場でビーマセーナを矢でおおった。（二四）わが君よ、そこで怒ったアビマニユとドラウパディーの息子たちは、武器を振りかざしたすべての敵兵を鋭い矢で射た。（二五）

強力なビーシュマとドローナがいきり立って攻撃した時、偉大な射手シカンディンはその両雄を迎え撃った。（二六）その強力な勇士は、雷雲のような音をたてる弓を持ち、速やかに矢の雨を降らせ、太陽をおおい隠した。（二七）バラタ族の祖父（ビーシュマ）は、戦場でシカンディンに遭遇し、彼が女であったことを思い出して、彼を避けた。（二八）そこで大王よ、あなたの息子にうながされたドローナは、ビーシュマを守るべく、シカンディンに戦いを挑んだ。（二九）しかしシカンディンは、宇宙紀（ユガ）の終末の火のように強力な、最高の戦士ドローナと対峙して、戦うことを避けた。（三〇）それから王よ、あなたの息子は大軍を率いて、大きな名声を得ることを望んで、ビーシュマの所に行って彼を守った。（三一）王よ、そしてパーンダヴァたちも、アルジュナを先頭として、勝利しようと堅く決意して、ビーシュマに襲いかかった。（三二）こうして互いに勝利と名声を望む者たちの間に、神々と悪魔たちの間の戦いの

ような、最高に驚異的な恐ろしい戦いが行なわれた。(三三)

(第六十五章)

サンジャヤは語った。——

その時、ビーシュマはビーマセーナの危険からあなたの息子たちを守ろうと望み、激しく戦った。(一)その午前中に、クルとパーンダヴァの諸王の非常に恐ろしい戦いが行なわれた。それは主立った勇士たちを滅ぼすものであった。(二)その非常に恐ろしい激戦が行なわれている間、大喧騒は天空に達するほどであった。(三)咆哮する巨象や嘶く(いなな)馬たちにより、太鼓や法螺貝の音により、大騒動となった。(四)勝利のために戦いを求める勇猛な人々は、牛舎にいる巨大な雄牛たちのように、お互いに雄叫びをあげた。(五)バラタの雄牛よ、戦闘において鋭い矢で切られて頭がころがり落ち、空中に岩石の雨が降るかのようであった。(六)バラタの雄牛よ、耳飾りとターバンをつけ、黄金で輝く頭が落ちているのが見られた。(七)矢で切断された体の部分——弓を持ち手の飾りをつけた腕やその他の部分——により大地はおおわれた。(八)鎧をつけた胴体、飾られた手、美しいまなじりの赤い眼をした、月のような顔により……。(九)王よ、象と馬と人間のあらゆる体の部分により、すべての大地はたちまちおおい尽くされた。(一〇)もうもうたる砂塵は雲のようであり、武器は稲光のように輝き、諸々の武器の音は雷鳴のようであった。(一一)バーラタよ、このようにクル族とパーンダヴァたちの間に、血の川が流れる恐ろしい激戦が行なわれた。(一二)非常に恐ろしい、身の毛

がよだつ凄まじい激戦において、戦いに酔い痴れた王族(クシャトリヤ)たちは矢の雨を降らせた。(一三)

(一四—二〇略)

それからドゥルヨーダナ王は、戦場でカリンガの大軍に囲まれ、ビーシュマを先頭にして、パーンダヴァ軍を攻撃した。(二一)そしてすべてのパーンダヴァ軍も、狼腹(ビーマ)を囲んで、高速の乗物を用いて、ビーシュマに戦いを挑んだ。(二二)

(第六十六章)

サンジャヤは語った。——

ダナンジャヤ(アルジュナ)は、兄弟や他の諸王がビーシュマと戦っているのを見て、武器を振りかざしてビーシュマに襲いかかった。(一)パーンチャジャニヤ(法螺の名)とガーンディーヴァ弓の音を聞き、そしてアルジュナの旗を見て、我々すべてに恐怖が入り込んだ。(二)大王よ、我々はアルジュナの旗を見た。それは樹々にひっかかることがなく、出現した彗星(ドゥーマケートゥ)のようであり、多彩な色をし、きらびやかで、神聖であり、猿の標がついていた。(三)そして戦士たちは大きな戦車の中にガーンディーヴァ弓を見た。その背は黄金で飾られ、それは大空で、雲の中にある稲妻が輝いているかのようであった。(四)アルジュナがあなたの軍を滅ぼす時、我々はインドラの叫びのような彼の雄叫びを聞いた。そして非常に恐ろしい両手(弓籠手と弓懸)の音を聞いた。(五)激しい風をともない、稲光と雷鳴をともなう雲のように、彼は矢の雨によりすべての方角をすっかりおおった。(六)そして、恐るべき武器を持つアルジ

ユナは、ビーシュマに襲いかかった。我々は武器に幻惑されて、西も東もわからなくなった。(七)バラタの雄牛よ、あなたの兵士たちは矢も尽き、武器も破壊され、狼狽して逃げまどい、お互いに押し合った。(八)そしてあなたのすべての息子とともに、ビーシュマに寄る辺を求めた。その戦いにおいて、ビーシュマは彼らの苦境における拠り所であった。(九)
(一〇―一八前半略)

ビーシュマは大軍を率いてアルジュナと戦った。(一八)アヴァンティ国王はカーシ国王と、シンドゥ国王はビーマセーナと戦った。ユディシティラは息子や顧問たちとともに、誉れ高いマドラ国の雄牛シャリヤと戦った。(一九)ヴィカルナはサハデーヴァと、チトラセーナはシカンディンと戦った。マツヤ軍は、ドゥルヨーダナとシャクニを攻撃した。王よ。(二〇)ドルパダとチェーキターナと勇士サーティヤキは、偉大なドローナとその息子に対して戦った。クリパとクリタヴァルマンは、ドリシタケートゥを攻撃した。(二一)

このように両軍は、馬をかりたて、象や戦車は走りまわり、全面的に戦闘に専念していた。(二二)雲もないのに稲妻が生じ、諸方はほこりでおおわれた。大きな流星が現われ、突風が吹いた。王よ。(二三)強風が吹き、ほこりの雨が降った。軍隊のたてるほこりにおおわれ、天空の太陽が隠れた。(二四)すべての生類は、ほこりに悩まされ、涙に苦しみ、この上なくうろたえた。(二五)勇士の腕が放つ矢の群は、すべての鎧を貫通し、騒々しい衝突音をたてた。(二六)バラタの雄牛よ、最高の腕に振り上げられた武器は星々のように汚れなく、虚空を明るくした。(二七)雄牛の皮でできた、黄金の網でおおわれたきらびやかな楯がいたるところに落ちていた。バラタの雄牛よ。(二八)太陽のような色をした刀に切り落とされた身体や頭が、いたるところに認められた。(二九)あちこちで、大きな戦車が破壊されて地面に倒れていた。その車輪や車軸や座席は壊れ、大きな旗は倒されていた。(三〇)ある馬たちは、車上の戦士が殺された時、戦車を引きずっていたが、武器で傷ついて倒れた。(三一)〔戦車に〕綱でつながれた最上の馬たちは、矢で撃たれて身体を切られ、あちこちで軛(くびき)を引きずっていた。バーラタよ。(三二)王よ、一頭の強力な象が、御者や馬や車上の戦士もろとも、諸々の戦車を破壊するのが見られた。(三三)(三四―三九略)〔戦車を〕引きずるそれらの象たちの姿は、池に生えた蓮の群を引きずる象たちの姿のようであった。(四〇)このようにその大きな戦場は、騎兵、歩兵、旗をともなう偉大な戦車兵たちにおおわれていた。(四一)

(第六十七章)

サンジャヤは語った。——

王よ、シカンディンはマツヤ国王ヴィラータとともに、無敵の勇士ビーシュマを速やかに攻撃した。(一)そしてアルジュナは、その戦いにおいて、いずれも強力な勇士であるドローナ、クリパ、ヴィカルナ、及びその他の勇猛な多くの王たちを攻撃した。(二)更に、勇士であるシンドゥ国王とその顧問と親族、そして西部と南部の諸王をも攻撃した。王中の雄牛よ。(三)ビーマセーナはその戦いにおいて、あなたの息子である短気な勇士ドゥルヨーダナとド

ウフサハを攻撃した。（四）サハデーヴァはシャクニと勇士ウルーカという、偉大な射手である無敵の父子を攻撃した。（五）大王よ、あなたの息子に欺かれた勇士ユディシティラは、その戦いにおいて、〔クル軍の〕象隊を攻撃した。（六）また戦いにおいてインドラのようであるマードリーの息子、パーンダヴァの勇士ナクラは、トリガルタ軍の最上の戦車と戦った。（七）戦いにおいて無敵のサーティヤキとチェーキターナと勇士アビマニユは、シャールヴァとケーカヤの軍を攻撃した。（八）そして戦いにおいて無敵のドリシタケートゥと羅刹のガトートカチャは、あなたの息子たちの戦車の部隊を攻撃した。（九）王よ、限りなく高邁な軍司令官である強力なドリシタデュムナは、戦場において、インドラのような働きをするドローナと対戦した。（一〇）以上のように、あなたの軍の偉大な射手である勇士たちは、パーンダヴァと戦場で見え、交戦した。（一一）太陽が中天に達し（正午）、空が〔光線で〕いっぱいになった時、クル軍とパーンダヴァ軍はお互いに殺し合った。（一二）（一三―一九略）

最高の戦士ビーシュマは怒って、すべての兵が見ている前で、強力なビーマセーナの行く手をはばんだ。（二〇）その戦いにおいて、ビーシュマに放たれた、金の羽根のついた、石でよく研ぎ、油で磨かれた、切っ先の鋭い矢は、ビーマを射貫いた。（二一）強力なビーマセーナは、怒った毒蛇のような高速の槍を相手に向けて放った。バーラタよ。（二二）黄金の柄がついた、抗しがたいその槍が激しく飛来した時、ビーシュマは戦場において、真っ直ぐの矢でその槍を切断した。（二三）それから別のよく鍛えられた鋭い矢により、ビーマセーナの弓を二つに切った。バーラタよ。（二四）

そこでサーティヤキは、戦場において速やかにビーシュマに近づき、多くの矢であなたの父（ビーシュマ）を射た。王よ。（二五）するとビーシュマは、最高に恐ろしい鋭い矢を用いて、サーティヤキの戦車から御者を射落とした。（二六）王よ、戦車の御者が殺された時、彼の馬たちは暴走し、思考か風のような速さであちこち走りまわった。（二七）それから、すべての軍隊のたてる音はけたたましいものになった。偉大なパーンダヴァ軍に、「ああ、ああ」という声があがった。（二八）「急げ。馬たちをつかまえろ。制御せよ。走れ」と、サーティヤキの戦車について人々は大声で叫んだ。（二九）

その間、ビーシュマはインドラが阿修羅の軍を殺すようにパーンダヴァ軍を殺した。（三〇）パーンチャーラ軍とソーマカ軍は、ビーシュマに殺されつつも、戦おうと気高く決意して、ビーシュマに襲いかかった。（三一）ドリシタデュムナをはじめとするパーンダヴァ軍は、戦いにおいてあなたの息子の軍隊をうち破ろうと望んで、ビーシュマを攻撃した。（三二）王よ、ビーシュマとドローナをはじめとするあなたの軍も、同様にして激しく敵を攻撃した。かくて戦闘が続行された。（三三）

（第六十八章）

サンジャヤは語った。——

その時、勇士ヴィラータは三本の矢で勇士ビーシュマを攻撃し、三本の矢で彼の馬たちを射貫いた。（一）手練の偉大な射手である強力なビーシュマは、金の羽根のついた十本の矢を

彼に射返した。(二) 恐るべき弓取り、偉大な戦士である剛腕のドローナの息子(アシュヴァッターマン)は、六本の矢でアルジュナの胸の間を射た。(三) 敵の勇士を殺すアルジュナは、鋭い矢で彼の弓を切断し、そして手ひどく彼を貫いた。(四) アシュヴァッターマンは怒りにかられ、戦場でアルジュナに弓を切断されたことに我慢できず、急いで他の弓をとった。(五) そして王よ、九十本の鋭い矢でアルジュナを射て、七十本の最上の矢でクリシュナを射貫いた。(六) そこでアルジュナは怒りで赤い眼をし、クリシュナとともに、長く熱い息を吐き、何度も考えこんだ。(七) それから、敵を苦しめるアルジュナは、怒って、左手で弓を握りしめ、真っ直ぐの鋭い矢、必殺の恐るべき矢をとり上げた。(八) そしてそれらの矢で、戦場において、彼は速やかに最強のドローナの息子を射貫いた。それらの矢は、相手の鎧を貫通して、その血を飲んだ。(九) しかしドローナの息子は、アルジュナに射貫かれてもひるまなかった。彼は動揺することなく、平然として矢の雨を注いでいた。王よ、彼は偉大な誓戒を守る〔ビーシュマ〕を守ろうとして、戦場に立っていた。(一〇) 人中の雄牛たちは、彼のその非常にめざましい働きを称讃した。というのは、彼はその戦いにおいて、二人のクリシュナ(アルジュナとクリシュナ)がそろっているのに、引けをとらなかったからである(テクスト疑問)。(一一) 実に彼は、ドローナから得がたい武器の使用法とその回収法を学び、常に軍隊の中で恐れることなく戦っていたのである。(一二)

「彼は私の師匠の息子である。ドローナの非常に愛しい息子である。そしてバラモンであり、私により特別に敬われるべきである。(一三)」

敵を苦しめる最高の戦士である勇士アルジュナはそう考えて、ドローナの息子に対して憐れみをかけた。(二四) それから、敵を苦しめる勇猛なアルジュナは、ドローナの息子と戦うことをやめて、速やかにあなたの軍隊を殺しつつ戦い続けた。(二五)(二六―三六略)

かくて、非常に恐ろしい激戦が行なわれていた時、兵士たちは互いに相手の死を望み、相手をうち破ろうとして攻撃し合った。(三七) あなたの軍の勇士たちとパーンダヴァの勇士たちは、お互いに相手を殺そうとして、戦場で生命を火中に焼べた(犠牲にした)。(三八) スリンジャヤ(パーンチャーラ)軍は、髪は乱れ、鎧も戦車も失い、弓も切断されても、素手でクル軍と戦い続けた。(三九) 強力なビーシュマは怒り、神聖な武器によって、偉大なパーンダヴァの軍を殺した。(四〇) 殺された巨象や、倒された人や馬により、戦車兵や騎兵により、大地はすっかりおおわれた。(四一)

(第六十九章)

サーティヤキの息子たち、戦死する

サンジャヤは語った。——

王よ、強力なサーティヤキは、戦いに酔い痴れ、戦場で、大きな成果をあげる最高の弓を引き絞り、毒蛇のような矢を放ち、めざましい手練の早業を明らかに示した。(一) 彼は弓を引き絞って、矢をとってつがえ、更に他の矢をとってつがえ、次々と矢を連射した。(二) 戦場で矢を放って敵を殺している彼の姿は、どしゃぶりの雨を降らせる雲のように見えた。

(四)ドゥルヨーダナ王は猛り立つ彼を見て、一万の戦車を彼に向けて発進させた。バーラタよ。(五)しかし最高の射手である強力な不屈の勇者サーティヤキは、神的な武器を用いて、それらの勇士を殺した。(六)弓をとる勇士サーティヤキは、恐ろしい仕事をしてから、戦場において、ブーリシュラヴァスのそばに行った。(七)クル族の誉れを高めるブーリシュラヴァスは、自軍がサーティヤキに倒されるのを見て、怒ってサーティヤキに襲いかかった。(八)彼はインドラの弓(虹)に似た色をした大弓を引いて、金剛杵(ヴァジュラ)のような、毒蛇のような幾千の矢を、手練の早業を示して放った。大王よ。(九)サーティヤキに従う兵士たちは、死神のような矢に耐えられず、戦場で戦いに酔うサーティヤキを捨てて、一斉に逃げ出した。(一〇)サーティヤキの十人の強力な息子たちが父の状況を見た。彼らは、偉大な戦士として有名であり、多彩な鎧と武器と旗を持っていた。(一一)彼らはすべて、その激戦において、ブーリシュラヴァスに近づき、怒って、その祭柱を旗標とする勇士に告げた。(一二)「おいおい、カウラヴァの一族の者よ、強力な者よ、さあ、我々と戦え。全員とでも一人一人とでも。(一三)戦いにおいて我々をうち破って、名声を得よ。あるいは、我々が汝をうち破れば、父を喜ばせるだろう。(一四)」(一五―一一略)

十名の勇士は強力なブーリシュラヴァスを取り囲んで、矢の雨を放って殺そうとした。(二二)しかし偉大な戦士であるソーマダッタの息子(ブーリシュラヴァス)は怒り、十本の矢で瞬くうちに彼らの弓を切断した。(二三)それから、弓を切られた彼らの頭を、真っ直ぐの鋭い矢で断ち切った。王よ、彼らは殺されて、雷に砕かれた樹々のように地面に倒れた。(二四)

王よ、サーティヤキは強力な勇士である息子たちが戦死したのを見て、叫び声をあげ、ブーリシュラヴァスに襲いかかった。(二五)強力な二人の勇士は、戦場において、お互いに戦車で相手の戦車を攻撃し、お互いに相手の戦車の馬たちを殺した。二人の勇士は馬を失うと、二人とも戦車から飛び下りた。(二六)人中の虎である二人は、太刀を持ち、最高の楯を持ち、戦うべく決意して輝いていた。(二七)王よ、その時ビーマセーナは、急いで最高の刀を持つサーティヤキに近づき、戦車に乗せた。(二八)王よ、あなたの息子も、その戦いにおいて、すべての弓取りが見ている前で、速やかにブーリシュラヴァスを戦車に乗せた。(二九)バラタの雄牛よ、このように戦闘が続いていた時、パーンダヴァたちは怒り、勇士ビーシュマと戦った。(三〇)そして太陽が赤くなった時、アルジュナは速やかに二万五千の偉大な戦士たちを殺した。(三一)実は彼らはドゥルヨーダナに、アルジュナを殺すように命じられたのだが、蝗(いなご)が火に飛び込むように滅びたのである。(三二)それから、マツヤとケーカヤの弓のヴェーダ(兵学)に通じた兵士たちが、偉大な戦士であるアルジュナとその息子を〔守るために〕取り囲んだ。(三三)

ちょうどその時、太陽は西山に沈んだ。そしてすべての兵士たちは活気を失った。(三四)大王よ、あなたの父デーヴァヴラタ(ビーシュマ)は、黄昏の時に、乗物も疲労し、軍隊を撤退させた。(三五)パーンダヴァ軍とクル軍は、お互いに戦い合ってひどく興奮して自分たちの宿舎に帰った。(三六)パーンダヴァ軍とスリンジャヤ、及びクル軍は、規定に従い、自己の陣営に行って休んだ。バーラタよ。(三七)

(第七十章)

マカラ陣とクラウンチャ陣

サンジャヤは語った。——

王よ、それからクル軍とパーンダヴァ軍は、ともに休息して、夜が明けた時、再び戦うために出動した。(一)敵味方の主要な戦車兵が戦闘準備をし、象兵が準備し、歩兵や騎兵が準備した時、その物音は非常に大きかった。バーラタよ。そしていたるところで、法螺貝や太鼓の騒がしい音がした。(二―三)その時、ユディシティラ王はドリシタデュムナに言った。

「勇士よ、敵を苦しめるマカラ陣を布け。(四)」

大王よ、ユディシティラにこのように言われて、最高の戦士である勇士ドリシタデュムナは戦士たちに指示を与えた。(五)ドルパダとアルジュナはその陣の頭に位置した。サハデーヴァと勇士ナクラは両眼であった。大王よ、強力なビーマセーナはその口であった。(六)アビマニュ、ドラウパディーの息子たち、羅刹のガトートカチャ、サーティヤキ、ダルマ王(ユディシティラ)は、その陣形の首のところに位置した。(七)大王よ、将軍ヴィラータはドリシタデュムナとともに、大軍に囲まれて、その背中にいた。(八)五名のケーカヤの兄弟は左脇(左翼)にいた。人中の虎ドリシタケートゥと強力なカラカルシャは右翼にいて、その陣を守っていた。(九)大王よ、栄光ある勇士クンティボージャとシャターニーカは、大軍に囲まれてその両足にいた。(一〇)偉大な射手である強力なシカンディンとイラーヴァットは、ソーマカ軍に囲まれ、マカラ陣の尾のところに位置していた。(一一)バラタ族の大王よ、パーンダヴァ軍はこのように強力な陣形を布いて、太陽が昇った時、再び戦闘準備をした。(一二)彼らは象兵と騎兵と戦車兵と歩兵により、多彩な旗を高く掲げ、汚れない鋭利な武器を持ってクル軍に向けて速やかに進撃した。(一三)

王よ、あなたの父デーヴァヴラタ(ビーシュマ)は、敵軍の陣形を見て、それに対抗し、自軍を強力なクラウンチャ(帝釈鴫、鶴)陣に布陣した。(一四)その嘴のところで、偉大な射手ドローナが輝いていた。アシュヴァッターマンとクリパは、眼のところにいた。王よ。(一五)すべての弓取りの最上者であるクリタヴァルマンは、カーンボージャ、アーラッタ、バーフリーカの軍とともに、その頭のところにいた。(一六)わが君よ、シューラセーナとあなたの息子ドゥルヨーダナは、多数の王たちに囲まれ、その首のところにいた。大王よ。(一七)プラーグジョーティシャの王(バガダッタ)は、マドラとサウヴィーラとケーカヤの軍とともに、大軍に囲まれて、その胸のところにいた。(一八)プラスタラの王スシャルマンは、鎧を着て、自分の軍隊とともに、左翼に位置していた。(一九)トゥシャーラ、ヤヴァナ、シャカ、チューチュパの軍は、その陣形の右翼のところにいた。(二〇)わが君よ、シュルターユス、シャターユス、ソーマダッタの息子は、その陣形の殿(しんがり)にいて、相互に守護していた。(二一)

やがてパーンダヴァ軍はクル軍に戦いを挑んだ。大王よ、そして太陽が昇った時、激しい戦闘が行なわれた。(二二)(二三―二七略)

勇猛なビーマセーナはドローナを見て、駿足の馬たちにより、ドローナの軍を攻撃した。

(二八) その戦いにおいて、強力なドローナは怒ってビーマの急所を狙い、九本の矢でビーマを射た。王よ。(二九) ビーマはその戦いでひどく傷ついたが、ドローナの御者をヤマ(閻魔)の住処に送った。(三〇) そこで栄光あるドローナは、自ら馬たちを制御し、火が綿の山を焼くように、パーンダヴァの軍隊を殺戮した。(三一) 最高の人よ、ドローナとビーシュマに殺されて、スリンジャヤの軍はケーカヤ軍とともに一目散に逃げた。(三二) 同様に、あなたの軍も、ビーマとアルジュナにうち破られ、酔った美女のように、いたるところで気を失っていた。(三三) やがて両軍の陣形は破られた。敵味方とも有力な勇士たちを失い、その被害は恐るべきものであった。バーラタよ。(三四) 私は驚異的な光景を見た。あなたのすべての軍は、ひたすら敵軍と戦っていた。バーラタよ。(三五) 王よ、パーンダヴァとクル族の勇士たちは、お互いに相手の武器を抑止して戦った。(三六)

(第七十一章)

ドリタラーシトラは言った。

「我々の軍はこのように多くの美質をそなえ、多様であり、最上である。このように論書に従って布陣し、必ず目的を達する。サンジャヤよ。(一) 我々によく養われ、常に我らに愛情を抱いている。柔順で、悪徳を離れ、前もって勇猛さが知られている。(二) 〔兵たちは〕あまり老年でも若年でもない。痩せても太ってもいない。敏速であり、背が高く、頑丈な体をし、健康である。(三) 鎧と武器を持ち、多くの武器に通じ、刀の戦い、格闘、棍棒戦に巧みである。(四) 戦いにおいて、槍、刀、投槍その他(中略)の武器に巧みであり、拳闘などにも巧みである。(五―六) 学術にも通じ、運動に努力する。そしてありとあらゆる武術に熟達している。(七) 〔象などに〕乗ること、飛び下りること、進むこと、その間に跳躍すること、正しく攻撃すること、行進、後退に巧みである。(八) 象と馬と戦車に乗ることに関し、何度もよく試験されている。よく調査されて、適切に給料を払われている。(九) 交際、追従、縁故、友情により、また妻の家柄が悪いなどという根拠で給料を払うべきでない。(一〇) 強力で(異本による)高貴であり、親族が厚遇されて満足している。我々から大きな好意をかけられている。名声あり思慮深い。(一一) 友よ、この軍隊は、主要な行為を行なう主要な人々によく守護されている。その人々は、勝利を収め、世界守護神のようであり、世界的に有名である。(一二) この軍隊は、地上において世の人々に敬われる多くの王族(クシャトリヤ)に守られている。彼らは自分の意志により、自分の軍隊を率い、従者を連れ、我らのもとに来た人々である。(一三) わが軍は、いたるところ河川が注いで満水の海のようである。それは翼を持たない鳥のような(異本による)戦車や、象(海にかかる文脈では「鰐」)に満ちている。(一四) その海は様々な兵士という水をたたえ、恐ろしく、象や馬という波で波立っている。それは櫂のような刀、棍棒、槍、矢、投槍に満ちている。(一五) そこには旗と飾りがひしめき、宝物や布で満ちている。動きまわる象や馬により、強風で揺れるように揺れている。(一六) このように、わが軍は岸のない轟く大海のようである。それはドローナ、ビーシュマ、クリタヴァルマンに守られている。(一七) そして、クリパとドゥフシャーサナ、ジャヤドラタなどの人々、バガダッタとヴィカルナ、ドローナの息子とシャクニとバーフリーカたちに守られている。(一八) このような偉大で強力な世界的勇

士たちに守られている。その軍隊が戦いにおいてうち破られるとは、これは前もって定められた運命である。(一九)サンジャヤよ、人々も古の気高い聖仙たちも、地上においてこのような軍事行事を見たことがない。(二〇)しかし、種々の武器を完備したこのような大軍が戦場で殺されるとは、他ならぬ運命の計らいによるものである。(二一)サンジャヤよ、すべては逆になってしまった。このような恐るべき軍隊が、戦闘においてパーンダヴァ軍を破れないとは。(二二)あるいはサンジャヤよ、パーンダヴァのために神々がそこに集まって戦い、わが軍を殺したのか。(二三)サンジャヤよ、ヴィドゥラは実に有益で道にかなったことを述べた。しかし私の愚かな息子ドゥルヨーダナはそれを受け入れなかった。(二四)友よ、前にヴィドゥラが予見したようになったということは、一切知である偉大な彼は予め洞察していたと私は思う。(二五)あるいはサンジャヤよ、すべてあの方に定められたものだ。かつて創造主が創造した通りになり、別様にはならない。(二六)」

(第七十二章)

敵を失神させる武器

サンジャヤは語った。——

王よ、御自身の過失によりこのような災禍が訪れた。というのは、バラタの雄牛である王よ、法の混乱が引き起こされた時にあなたが予見したことを、ドゥルヨーダナは見なかったから。(一)王よ、前にあなたの過失によってあの賭博が起こった。あなたの過失により、パーンダヴァたちとの戦争が起こった。御自身で罪を犯して、今、まさにあなたがその果報を受けなさい。(二)というのは、自分によってなされた業は、まさに、自分自身によって享受されるのであるから。王よ、この世かあの世において、あなたはまさしくそれを得る。(三)それ故、王よ、気を確かに持って、この大きな災禍を受け入れ、戦争についてありのまま報告する私の言葉を聞きなさい。わが君よ。(四)

勇士ビーマセーナは、鋭い矢で大軍をうち破り、ドゥルヨーダナのすべての弟たちを攻撃した。(五)ドゥフシャーサナ、ドゥルヴィシャハ、ドゥフサハ、ドルマダ、ジャヤ、ジャヤトセーナ、ヴィカルナ、チトラセーナ、スダルシャナ、チャールチトラ、スヴァルマン、ドゥシュカルナ、カルナ、及びその他の近くにいる多くの勇士たちよりなる、怒ったドゥルヨーダナ軍を見て、強大なビーマは、戦場で、ビーシュマに守られた大軍に侵入した。(六—八)そこで彼ら王たちはお互いに声をかけ合った。

「そこに狼腹がやって来た。我々は彼の生命を奪ってやろう。(九)」

〔ドゥルヨーダナの〕弟たちは決意を固め、ビーマを取り囲んだ。生類の帰滅の時に、恐ろしい諸々の大惑星が太陽を取り囲むように。(一〇)ビーマは敵陣の中に達したが、恐怖が彼に入り込むことはなかった。ちょうど神と阿修羅の戦いにおいて、大インドラが悪魔たちの中に入っても、恐怖が彼に入り込まなかったように(異本による)。(一一)それから王よ、幾万の戦士がいたるところから襲いかかり、一騎の彼を恐ろしい矢でおおった(異本による)。(一二)勇士ビ

ーマはその戦いにおいて、ドリタラーシトラの息子たちをものともせずに、象や馬や戦車に乗る彼らの最高の戦士たちを殺した。（一三）誇り高いビーマセーナは、彼を殺そうと望む彼らの決意を知り、彼らをみな殺しにしようと考えた。（一四）それからビーマは戦車を捨て、棍棒を持って、ドリタラーシトラの息子たちの海のような大軍を殺した。（一五）

ビーマセーナが敵軍の中に入った時、ドリシタデュムナはドローナと戦うのをやめて、シャクニのいる所へ急いで行った。（一六）その人中の雄牛は、あなたの大軍を切り開いて、戦場にとどまっているビーマセーナの空の戦車に達した。（一七）大王よ、ドリシタデュムナは、戦場でビーマセーナの御者のヴィショーカを見て、嘆き、途方に暮れた。（一八）彼は涙にかき暮れ、嘆いて口ごもりながらたずねた。

「私の生命よりも愛しいビーマはどこにいるか。（一九）」

するとヴィショーカは手を合わせてドリシタデュムナに答えた。

「栄光ある強力なビーマは、私をここにとどめて、ドリタラーシトラの息子たちの大海のような軍隊に入って行きました。人中の虎よ、その際に彼は上機嫌で、私に言いました。（二〇―二一）

『御者よ、しばらくの間馬を止めて私を待て。私を殺そうと努力している連中を殺して、すぐにもどって来るから。（二二）』

それから、強力な彼が棍棒を持って走っているのを見て、すべての軍隊の間に衝突が生じました。（二三）その恐ろしい激戦が行なわれていた時、王よ、あなたの友は強力な敵陣を破

って入り込みました。（二四）」

強力なドリシタデュムナは、ヴィショーカの言葉を聞くと、御者に答えた。（二五）

「御者よ、今日、私はもう生きている必要はない。パーンダヴァたちとの友情を忘れ、戦場でビーマセーナを見捨てたら……。（二六）もし私がビーマなしで帰ったら、王族は私のことを何と言うだろうか。私が戦場にいるのに、ビーマだけが敵陣に入った時に……。（二七）人が友を捨てて無事に家に帰るなら、アグニ（神火）をはじめとする神々は彼を祝福しない。（二八）強力なビーマは私の友であり、親類である。彼は私を愛し私もあの勇士を愛している。（二九）そこで私は、あの狼腹がいる所へ行こう。インドラが悪魔たちを殺すように、私が敵どもを殺すのを見よ。（三〇）」

バーラタよ（異本による）、その勇士はこのように言うと、ビーマセーナの棍棒で粉砕された象の死体をたどって敵中を進んだ。（三一）やがて彼は、敵軍を焼き尽くしているビーマを見出した。風が力まかせに樹々を砕くように、彼は戦場で諸王を粉砕していた。（三二）戦車兵、騎兵、歩兵、象兵たちは、戦場で殺されて、大きなうめき声をあげて叫んだ。（三三）わが君よ、めざましく戦う敏腕のビーマセーナに殺されている間に、あなたの軍隊に「ああ、ああ」という声が生じた。（三四）

それから、武器に通じたすべての恐れを知らぬ戦士が、狼腹を取り囲み、いたるところから武器の雨を浴びせた。（三五）強力なドリシタデュムナは、世界的勇士である（異本による）最強の戦士ビーマセーナが、集結した恐るべき軍隊に攻撃されるのを見た。（三六）ビーマセーナは

徒歩で、棍棒を持ち、その身体は矢で傷つき、怒りの毒を吐いて、終末の時のカーラ（時間、破壊神）のようであった。ドリシタデュムナはその彼を励ましながらそばに近づいた。（三七）そしてその偉大な男は、速やかにビーマセーナを自分の戦車に乗せ、その矢を抜き、彼をしっかりと抱いて、敵中で彼を激励した。（三八）

その激戦が繰り広げられていた時、あなたの息子は弟たちに近づいて告げた。

「あのドルパダの邪悪な息子が、ビーマセーナとともにやって来た。お前たちはみなでそろって彼を殺しに行け。敵がお前たちの軍を攻撃しないように。（三九）」

この言葉を聞いて、ドリタラーシトラの息子たちは、兄の命令にかりたてられて我慢できなくなった。宇宙紀の終末の彗星のように恐ろしい彼らは、武器を振りかざし、相手を殺すために出撃した。（四〇）勇士たちは多彩な弓をとり、弓弦と車輪の音を響かせて、雲が大地に多量の水を注ぐように、ドルパダの息子に矢の雨を注いだ。しかし、戦場においてめざましく戦う彼は、非常に鋭い矢で彼らを射て、ひるむことはなかった。（四一）偉大な戦士である若いドルパダの息子は、戦場であなたの勇猛な息子たちがいきり立って近くに立っているのを見て、彼らを殺そうとして、恐ろしいプラモーハナ・アストラ（「失神させる武器」という意）を用いた。王よ、大インドラが戦場で悪魔に対して怒るように、彼はあなたの息子たちに対してひどく怒ったのである。（四二）それから、勇士たちはプラモーハナ・アストラによりその知性と勇気を奪われ、戦場で茫然自失した。あなたの息子たちが、命運が尽きたかのようになって、正気を失い、失神したのを見て、騎兵・象兵・戦車兵を含むすべてのクル軍はいたるところ

で逃亡した。（四三）

ちょうどその時、最高の戦士ドローナは、ドルパダに近づき、恐ろしい三本の矢で射貫いた。（四四）ドルパダ王は、その戦いにおいて、ドローナにひどく傷つけられ、以前の恨みを思い出しつつ退却した。（四五）栄光あるドローナは、ドルパダをうち破って、法螺貝を吹いた。すべてのソーマカ軍は、その法螺の音を聞いてふるえあがった。（四六）その時、最強の戦士である威光あるドローナは、あなたの息子たちがプラモーハナ・アストラにより戦場で意識を失っていることを聞いた。（四七）大王よ（異本による）、そこでドローナは急いで彼のいた戦場から離れそこへ行った。栄光ある勇士ドローナは、そこでドリシタデュムナとビーマが激戦において活躍しているのを見た。（四八）そしてその偉大な戦士は、あなたの息子たちが意識を失っているのを見た。そこで彼はプラジュニャー・アストラ（「覚醒の武器」という意）を用いて、（プラ）モーハナ・アストラを無効にした。（四九）偉大な戦士であるあなたの息子たちは、意識を取りもどし、再びビーマとドリシタデュムナと戦うために戦線に復帰した。（五〇）

それからユディシティラは、自軍の兵士たちを召集して告げた。

「戦場でビーマとドリシタデュムナのたどった道を、可能な限り進んで行け。（五一）スバドラーの息子（アビマニユ）をはじめとする、武装した十二名の勇猛な戦士は活動を開始せよ。彼らのことが気がかりだから。（五二）」

このように命令されて、勇敢に戦う、雄々しさを誇るすべての勇士たちは、「承知した」と言って、太陽が中天に達した時、一斉に出動した。（五三）（五四―五九略）

勇猛なパーンチャーラの王子（ドリシタデュムナ）は、自分の師（ドローナ）が突然やって来たのを見て、あなたの息子たちを殺すことを諦めた。（六〇）そして狼腹（ビーマ）を〔そこに駆けつけた〕ケーカヤの王の戦車に乗せ、非常に猛り立って、射撃に通達したドローナに襲いかかった。（六一）彼が急襲した時、敵を殺す栄光あるドローナは怒り、矢で彼の弓を断ち切った。（六二）そしてドローナは、主君の禄を食んだことを思い出し、ドゥルヨーダナのために、その他幾百という矢をドリシタデュムナに向けて放った。（六三）敵の勇士を殺すドリシタデュムナは、別の弓をとり、砥石で研いだ、金の羽根のついた七十本の矢でドローナを射た。（六四）敵を苦しめるドローナは、再び彼の弓を切断した。それからその勇士は、四本の最高の矢で、彼の四頭の馬をヤマ（閻魔）の恐ろしい住処に送った。そして彼の御者をも、矢で死神のもとに送った。（六五―六六）強力な勇士（ドリシタデュムナ）は、馬を殺されて、戦車から急いで飛び下り、アビマニユの大戦車に乗った。（六七）

それから、ビーマセーナとドリシタデュムナが見ている前で、戦車と象兵と騎兵よりなる〔パーンダヴァ〕軍は〔ドローナによって〕震撼させられた。（六八）無量の威光を持つドローナによってうち破られた軍隊を見ても、すべての勇士たちはそれを制止することができなかった。（六九）ドローナによって鋭い矢で殺されるその軍隊は、揺れ動く海のようにあちこち逃げ惑った。（七〇）そのような敵軍を見て、あなたの軍隊は喜んだ。そして、猛り立って敵軍を殺している師匠（ドローナ）を見て、戦士たちはいたるところで「いいぞ、いいぞ」と叫んだ。バーラタよ。（七一）

（第七十三章）

サンジャヤは語った。――

それからドゥルヨーダナ王は意識を取りもどし、再び不屈のビーマに矢を浴びせた。（一）偉大な戦士であるあなたの息子たちも、戦場でまた一致団結し、奮起してビーマと戦った。（二）一方、強力なビーマセーナは戦場で再び自分の戦車を見出して乗り、あなたの息子のいる場所に行った。（三）そして、敵の生命を奪う強力で頑丈な美しい弓をとると、その戦いにおいて、あなたの息子を数本の矢で射た。（四）それからドゥルヨーダナ王は、鋭い鉄矢により、強力なビーマセーナの急所を手ひどく撃った。（五）その勇士は、弓を持つあなたの息子に射貫かれて、怒りで眼を赤くして、急いで弓をとり上げた。（六）そして三本の矢でドゥルヨーダナの両腕と胸を射た。その王はこのように射られても、山の王のように不動であった。（七）

ドゥルヨーダナの弟たちは、すべて生命を捨てて戦う勇士であったが、戦場で怒ってお互いに攻撃し合っている二人を見て、以前、その恐るべき行為をする〔ビーマ〕を迫害するために色々と謀をめぐらしたことを思い出し、彼を制圧する決意を固めた。（八―九）大王よ、彼らが戦場で攻撃した時、強力なビーマセーナは、象が敵の象を攻撃するように、彼らに対して反撃した。（一〇）

大王よ、誉れ高く威光あるビーマはひどく怒り、あなたの息子のチトラセーナを鉄矢で射

た。(一一) そしてバーラタよ、その他のあなたの息子たちに対しては、戦場でビーマは金の羽根のついた非常に高速な多様な矢で射た。(一二)

それからダルマ王(ユディシティラ)は、自分の軍隊をすべて戦場に整列させ、アビマニュをはじめとする十二名の偉大な戦士を、ビーマセーナの足跡に従って行くようにと派遣した。大王よ、彼らは強力なあなたの息子たちに対抗して進んで行った。(一三―一四)(一五―一七略)

さてアビマニュは戦場でビーマセーナとドリシタデュムナに合流した。あなたの軍隊におけるドゥルヨーダナなどの偉大な戦士たちはそれを見て、弓を持ち、非常に高速な馬たちにより、それらの戦士たちがいる場所に行った。(一八―一九) そしてバラタ族の王よ、その日の午後、強力なあなたの軍と敵軍との間に激戦が繰り広げられた。(二〇)(二一―三六略)(第七十四章)

サンジャヤは語った。——

太陽が赤くなった時、ドゥルヨーダナ王は戦いに熱中し、ビーマを殺そうと望んで襲撃した。(一) その激しい敵意を抱く勇士が来るのを見て、ビーマセーナは怒って次のように言った。(二)

「今や長年の間待っていた時が訪れた。もしお前が戦うことをやめなければ、今日、私はお前を殺すであろう。(三) 今日、お前を殺して、クンティーとドラウパディーの苦痛、森の生活〔の苦しみ〕をすっかり取り除くであろう。(四) お前は賭博をして、パーンダヴァたちを

侮辱した。ガーンダーリーの息子よ、見よ。その悪行の〔報いとして〕災いがやって来た。(五) 以前、お前はカルナとシャクニの意見に従い、パーンダヴァたちのことを考慮せず、欲望により欲するがままにふるまった。(六) そしてお前は、クリシュナが要請しても、迷妄により彼を軽んじた。また、お前は喜んでウルーカに〔パーンダヴァ暗殺の〕指示を与えた。(七) 今日、私は従者や縁者もろともお前を殺すであろう。そしてお前が以前にした悪事を償わせてやろう。(八)」

ビーマはこのように言うと、恐ろしい弓を引き絞り、何度も揺すり、大きな雷電のように輝く恐ろしい矢をとった。(九) そして彼は怒って、速やかにスヨーダナ(ドゥルヨーダナ)に向けて、燃え上がる火焔のようであり、金剛杵(ヴァジュラ)のような二十六本の矢を放った。(一〇) それからビーマは二本の矢で相手の弓を断ち、また二本の矢で御者を射貫いた。そして四本の矢で駿足の馬たちをヤマ(閻魔)の住処に送った。(一一) それから敵を粉砕するビーマは、その戦いにおいて、強く引いた〔弓から放った〕二本の矢で、その王の最高の戦車から傘(王者の標)を断ち切った。(一二) そして三本の矢で、彼の燃えるような最高の旗を断ち、あなたの息子の見ている前で、ビーマは高らかに雄叫びをあげた。(一三) 種々の宝石で飾られたその美しい旗は、雲から落ちる稲妻のように、突然戦車から地面に落下した。(一四) その旗標は、太陽のように燃える、宝玉で作られた美しい象であった(六・一七・二五参照)。すべての王は、そのクルの王の旗が切られるのを見た。(一五) その時、勇士ビーマは、その戦いにおいて、笑うかのように、十本の矢で彼を射た。御者が突き棒によって巨象を打つように。(一六) それから最高の戦士で

あるシンドゥの王ジャヤドラタは、勇猛な兵士たちに囲まれて（異本による）ドゥルヨーダナを後援した。（二七）そして最高の戦士クリパは、無量の力を持つ短気なドゥルヨーダナを戦車に乗せた。王よ。（二八）

〔その後、両軍の間に激戦が続く（二九―五六略）〕

それから、シャンタヌの息子ビーシュマは怒り、真っ直ぐの矢によって、偉大なパーンダヴァの軍を滅ぼした。そしてパーンチャーラの軍隊を矢でヤマの住処に送った。（五七）その偉大な射手は、このようにパーンダヴァ軍を破ってから、軍隊を引きあげさせ、自分の陣営に帰った。王よ。（五八）ダルマ王も、ドリシタデュムナと狼腹（ビーマ）を見て、二人の頭に接吻して、喜んで陣営に帰った。（五九）

（第七十五章）

輪円陣（マンダラ）と金剛陣（ヴァジュラ）

サンジャヤは語った。――

大王よ、互いに攻撃し合った勇士たちは、血にまみれて、自分の陣営に引きあげた。（一）彼らが適切に休息を取り、お互いに称讃してから、再び戦闘を望んで、具足をつけているのが認められた。（二）王よ、それからあなたの息子はもの思いにふけり、滴る血にまみれた身体で、祖父（ビーシュマ）にたずねた。（三）

「我々の軍は猛々しく恐ろしい。正しく陣形を整え、多くの旗を持つ。しかしパーンダヴァ軍の勇士たちは、戦車の群を擁し、速やかにわが軍を破り、兵たちを殺し、圧迫した。（四）名声ある彼らは、戦いにおいてすべての人々を狼狽させた。それからビーマは、あの金剛杵（ヴァジュラ）のようなマカラ陣に侵入し、死神の杖にも似た恐ろしい矢によって私を苦しめた。（五）王よ、怒った彼を見て、私は恐怖にかられ、今も平静になれない。約束を守る方よ、私はあなたの恩寵により勝利し、パーンダヴァたちを殺すことを望む。（六）」

彼にそのように言われて、最高の戦士である賢明で偉大なガンガーの息子（ビーシュマ）は、ドゥルヨーダナが不安になったと知り、落胆することなく笑いながら彼に答えた。（七）

「王子よ、私は最高の努力により、全身全霊で敵軍に突入し、お前に勝利と幸福を与えたいと思う。私はお前のために、自分自身を隠しはしない。（八）この戦いでパーンダヴァ側に味方する者たちは偉大な戦士で、猛々しく、多数である。誉れ高く、武器に通達した最高の戦士である。疲れを克服し、怒りの毒を吐く。（九）彼らは気力旺盛で、お前に怨みを抱いており、容易にはうち破れない。しかし王よ、私は全身全霊で、生命を捨てて、彼らすべてと戦うであろう。勇士よ。（一〇）威厳に満ちた者よ、この戦争で、お前のためなら、今や私にとって生命すらそれほど大切なものではない。私はお前のために、神や魔類を含む全世界の者たちを燃やすであろう。いわんやお前の敵どもはなおさらである。（一一）王よ、私はパーンダヴァたちと戦うであろう。お前のために、ありとあらゆる好ましいことをするであろう。」

ドゥルヨーダナはそれを聞くやいなや、最高に喜び満足した。（一二）それから彼は喜び勇

み、すべての軍隊、すべての王たちに「出動せよ」と命じた。彼の命令により、何万という戦車兵・騎兵・歩兵・象兵は出動した。(二三) 王よ、象兵・騎兵・歩兵を含むあなたの大軍は、喜び勇み、種々の武器を持って戦場に立ち、いたるところで輝いていた。(二四) 巧みに操縦される象隊は、群をなして立ち、いたるところで輝いていた。(二五) 正しく誘導されて戦場を進む戦車兵・歩兵・象兵・騎兵の群がたてるほこりは朝日の色をし、太陽の光線を遮って輝いていた。(二六) 王よ、その戦場で戦車や象に立つ旗は、多彩な色で、いたるところ風に吹かれてひるがえり、雲をともなう天空の稲妻のようであった。(二七) その時、弓を引く王たちがたてる非常に恐ろしい喧噪は、最初の宇宙紀(ユガ)(クリタ・ユガ)に、神と大阿修羅の群に攪拌される海の音のようであった。(二八) そしてその時、あなたの息子たちの敵軍を殺す軍隊は恐ろしい音をたて、様々な形と色をし、このように盛り上がり、宇宙紀の終末に出現する雲の群のようであった。(二九)

(第七十六章)

サンジャヤは語った。——

バラタ族の最上者であるビーシュマは、再びもの思いにふけったあなたの息子に、元気づける言葉を述べた。(一)

「私とドローナ、シャリヤ、サートヴァタ族のクリタヴァルマン、アシュヴァッターマン、ヴィカルナ、ソーマダッタ、シンドゥ国王、アヴァンティ国のヴィンダとアヌヴィンダ、パーフリーカとバーフリーカ軍、強力なトリガルタ国王、無敵のマガダ国王などの勇士たちが(中略)、お前のために戦おうと努力している。(二―六) 彼ら及びその他の多くの人々はお前のために生命を捨て、戦いにおいて神々をもうち破ることができると私は思う。(七) しかし王よ、私は是非とも、常にお前に有益なことを言わなければならない。インドラを含む神々ですら、パーンダヴァたちをうち破ることはできない。彼らは大インドラのように勇猛で、ヴァースデーヴァ(クリシュナ)を協力者としている。(八)

だが王中の王よ、私はあらゆる場合、お前の言葉に従う。戦いにおいて私がパーンダヴァたちに勝利するか、それとも彼らが私に勝利するかだ。(九)」

ビーシュマはこのように言うと、傷を癒やす強力な良薬を彼に与えた。そこで彼の傷は癒えた。(一〇)

それから、汚れなき黎明に、陣形に通じた強力なビーシュマは、自軍を編成して、自ら陣形を布(し)いた。(一一) 最高の人よ、それは輪円陣(マンダラ)で、種々の武器に満ち、主要な戦士、象、歩兵に満ちていた。(一二) それは幾千という戦車にすっかり囲まれていた。そして、刀や槍を持つ大勢の騎兵の群に囲まれていた。(一三) 象兵ごとに七の戦車兵がつき、戦車ごとに七の騎兵がついた。一騎兵の後ろに十人の射手がつき、一射手につき七人の楯持ちがついた。(一四) 大王よ、あなたの軍は偉大な戦士たちによりこのように布陣し、ビーシュマに守られて、大きな戦闘に備えて戦場に立っていた。(一五)(一六―二〇略)

非常に恐るべき輪円陣を見て、ユディシティラ王は自ら金剛陣(ヴァジュラ)を布いた。(二一) こうして

軍隊が布陣した時、戦車兵や騎兵はそれぞれ適切な位置につき、そして獅子吼をした。(二一) 両軍の勇猛な戦士たちは、それぞれ軍隊を率いて、お互いに相手の陣形を破ろうとして、戦いを望んで出陣した。(二二)(二四—三一 略)

やがて幾千の王たちが、多様な武器を手に持ち、ダナンジャヤ(アルジュナ)を取り囲んだ。(三二) そこでアルジュナは大いに怒り、クリシュナに次のように言った。

「マーダヴァよ、見よ。戦場においてドゥルヨーダナの軍は、陣形に通じた偉大なビーシュマによって陣形を整えられている。(三三) マーダヴァよ、見よ。勇士たちは武装して、戦いを望んでいる。ケーシャヴァよ、兄弟たちとともにいるトリガルタの王を見よ。(三四) ジャナールダナよ、今日あなたが見ている前で、彼らを倒すであろう。戦場で私と戦うことを望む人々を。ヤドゥの最上者よ。(三五)」

アルジュナはこのように言ってから、弓の弦を引き、諸王の群に向けて矢の雨を降らせた。(三六) 彼ら最高の射手たちも彼に矢の雨を浴びせた。雨季に雲が池に大雨を注ぐように。(三七) 王よ、その激戦において、二人のクリシュナ(アルジュナとクリシュナ)がすっかり矢でおおわれているのを見て、あなたの軍隊に、「わあ、わあ」という大声があがった。(三八) 神々、神仙、ガンダルヴァ、大蛇は、二人のクリシュナがそのような状態でいるのを見て、最高に驚嘆した。(三九) それから王よ、怒ったアルジュナは、インドラの武器を呼び起こした(使用した)。そこで我々は、アルジュナの驚異的な勇武を見た。(四〇) 彼は敵たちに放たれた武器の雨を矢の群により防衛した。王よ、幾千の王、騎兵、象兵のうちで傷つかない者は誰もいなかった。ア

ルジュナは二、三本の矢でその他の者たちを殺した。わが君よ。(四一—四二) アルジュナに殺されつつ、彼らはビーシュマに救いを求めた。その時ビーシュマは、底知れぬ深みに沈み行く者たちの救済者であった。(四三) 大王よ、攻撃する彼らにうち破られたあなたの軍隊は動揺した。風により大海が動揺するように。(四四)

(第七十七章)

サンジャヤは語った。——

このように戦いが始まり、スシャルマン(トリガルタの王)が退却し、勇士たちが偉大なアルジュナにうち破られ、あなたの軍隊は海のように激しく動揺し、ビーシュマはアルジュナに対して急いで反撃した。(一—二) 王よ、その時ドゥルヨーダナは、戦場でアルジュナの武勇を見て、急いで近づいて、全軍の中央において、すべての王たちと、彼らの先頭にいる強力な勇士スシャルマンとをこよなく元気づけて、次のように告げた。(三—四)

「そこでクルの最上者ビーシュマは、アルジュナと戦おうと望み、自分の生命を捨てて、全身全霊で、全軍を率いて敵軍に進撃する。すべての諸君は戦闘準備をして、祖父を守れ。(五—六)」

大王よ、諸王の軍隊はすべて、「承知した」と答えて、祖父の所へ行った。(七) それからビーシュマは、速やかにアルジュナに近づき、向かって来るその強力な勇士を攻撃した。(八) 強力な馬たちをつなぎ、恐ろしい猿の旗標をつけた、雷雲のような音をたてる大戦車によっ

て、アルジュナは輝いていた。(九) 戦場でアルジュナが近づいて来るのを見て、すべての兵士たちは恐れて大騒ぎした。(一〇) そして、手綱（「光線」の意味もある）を持つ、正午の太陽のようなクリシュナを見て、彼らは戦場で見返すことができなかった。(一一) 同様にパーンダヴァ軍は、白馬にひかれ、白い弓を持つ、昇った白い惑星（金星）のようなビーシュマを見ることができなかった。(一二) 彼は偉大なトリガルタ軍、あなたの息子である兄弟たち、その他の偉大な戦士たちにぐるりと取り巻かれていた。(一三)

その戦いにおいて、ドローナは矢でマツヤ国王（ヴィラータ）を射た。そして一矢により彼の旗と弓を切断した。(一四) 軍司令官ヴィラータは、切られた弓を捨て、急いで別の堅固な強弓と、毒蛇のような燃える矢をとった。(一五) そして三本の矢でドローナを射て、四本の矢で彼の馬たちを、一矢で旗を、五本の矢で御者を、一矢で弓を射貫いた。そこでバラモンの雄牛（ドローナ）は大いに怒った。(一六) そこでドローナは、真っ直ぐの八本の矢で相手の馬たちを殺し、一矢で御者を殺した。バラタの最上者よ。(一七) 最高の戦士ヴィラータは馬と御者を殺された戦車から飛び下り、急いでシャンカ（ヴィラータの息子）の戦車に乗った。(一八) それからその父と息子は、戦車に乗り、矢の大雨を降らせて、力ずくでドローナを食い止めた。(一九) そこでドローナは怒り、その戦いにおいて、毒蛇のような矢をシャンカに対して速やかに射かけた。王よ。(二〇) その矢は戦場で彼の心臓を射貫き、血を飲んで、血に濡れて輝き、地面に達した。(二一) 彼はドローナの矢で射られて、弓矢を放り出し、他ならぬ父の面前で戦車から速やかに落ちた。(二二) ヴィラータは自分の息子が殺されたのを見て、恐怖のあまり逃げ出した。口を開いた死神（アンタカ）のようなドローナを戦場に残して。(二三) それからドローナは、戦場で、パーンダヴァの大軍を幾百幾千と粉砕した。(二四)

大王よ、その戦いにおいてシカンディンはドローナの息子（アシュヴァッターマン）に近づいて、高速の三本の矢で彼の眉間を射た。(二五) その人中の虎は、額に刺さった三本の黄金造りの矢により、高くそびえる三峰により輝くメール山のように輝いていた。(二六) そこでアシュヴァッターマンは怒り、一瞬の半分のうちに、その戦いにおいて、シカンディンの御者と旗と馬たちと武器を、多くの矢で射落した。(二七) 敵を苦しめる最高の戦士シカンディンは、馬を殺された戦車から飛び下り、鋭い刀と汚れない楯を持ち、怒って鷹のように動きまわった。(二八) 大王よ、ドローナの息子は、刀を持って戦場で動きまわる彼の隙を見つけられなかった。それは奇蹟のようであった。(二九) バラタの雄牛よ、それからドローナの息子は最高に怒り、戦場で幾千本もの矢を射た。(三〇) 非常に恐ろしい矢の雨が戦場において落下している時、その最強の戦士は鋭い刃の刀によりそれを切った。(三一) やがてドローナの息子は、その戦いにおいて、百の月で飾られた魅力的で汚れない彼の楯を断ち、その刀を切断した。そして非常に多くの鋭い矢で彼を射貫いた。王よ。(三二) シカンディンは相手の矢で切断された、燃える蛇のような刀を振りまわして勢いよく投げた。(三三) ドローナの息子は戦場で手練の早業を示して、終末の火のように輝くその高速で飛来する［刀の断片］を切り、多くの鉄製の矢でシカンディンを射た。(三四) 王よ、シカンディンは鋭い矢でしたたか撃たれ、すぐに偉大なサーティヤキの戦車に乗った。(三五) (三六―五〇略)

クリタヴァルマンはその戦いにおいて、勇士ビーマを矢で攻撃し、大雲が太陽をおおうように彼をおおった。(五一) 敵を苦しめるビーマセーナは戦場で笑い、そして怒ってクリタヴァルマンに諸々の矢を送った。(五二) それらに苦しめられても、武器に巧みなサートヴァタの超戦士はひるまなかった。大王よ。そして鋭い矢でビーマをおおった。(五三) 強力なビーマセーナは彼の四頭の馬を殺し、御者を射落し、美しく飾られた旗を射落とした。(五四) そして敵の勇士を殺すビーマは、多様な矢で彼を射た。彼は全身傷だらけになり、ヤマアラシのように見えた。(五五) あなたの義兄弟(シャリヤ)とあなたの息子が見ている前で、彼は馬を殺された戦車から、速やかにヴリシャカ(スバラの息子)の戦車に移った。大王よ。(五六) ビーマセーナの方は怒って、あなたの軍隊を攻撃して、杖(ダンダ)を持つ怒った死神(アンタカ)のように殺戮した。(五七)

(第七十八章)

互角の混戦

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、パーンダヴァ軍とわが軍との、多くの華々しい一騎打ちについてそなたが語るのを聞いた。(一) しかしサンジャヤよ、そなたはわが軍に属する者が喜んだという例をまったく報告しない。常にパーンドゥの息子たちが喜び、勝利することを述べる。(二) そして、戦いにおいてわが軍の人々が敗れ、意気阻喪し、気力を失うことを述べる。サンジャヤ

よ、疑いもなくこれは運命である。(三)」

サンジャヤは語った。——

人中の雄牛よ、あなたの軍の人々は、戦いにおいて、能力に応じて最高の勲(いさおし)を発揮して、力の限り気力の限り活躍した。(四) 神の川ガンガー(ガンジス)の美味な水は、海の属性と交わると塩辛くなる。(五) 王よ、それと同様に、偉大なあなたの軍の人々の勲は、勇猛なパーンドゥの息子たちと交戦すると無効になる。(六) クル軍は力の限り努力し、なしがたい行為を行なっているのであるから、クルの最上者よ、あなたはクル軍を非難することはできない。(七) 王よ、このヤマ(閻魔)の国土の人口を増大させる、恐ろしい地上の大帰滅は、あなたと息子たちの過失から生じた。(八) 王よ、自分の過失により生じたことを嘆くのはよろしくない。王というものは必ずしも(異本による)生命を守らないものだ。(九) 諸王は戦いにおいて、善行者たちの世界を望む。常に天界を最高の目標として、敵軍に入って戦う。(一〇) 大王よ、その日の午前中、大勢の人々が死んだ。神々と阿修羅の〔戦い〕のような戦いについて、私の語ることを一心に聞きなさい。(一一)(一二―四一略)

マドラ国王(シャリヤ)は、戦場で双子(ナクラとサハデーヴァ)と対戦した。この二人は彼の妹(または姉)とパーンドゥの間にできた息子である。彼はその双子を矢の洪水でおおった。(四二) 一方サハデーヴァは、戦場で母方の伯父が襲って来るのを見て、雲が太陽をおおうように、矢の洪水で彼をおおった。(四三) シャリヤは〔甥の〕矢の洪水におおわれて、最高に喜んでいた。そして、

母の〔兄弟〕ということで、双子の喜びも無比であった。（四四）王よ、それから偉大な戦士シャリヤは笑って、その戦いにおいて、四本の最高の矢により、ナクラの四頭の馬をヤマの住処に送った。（四五）偉大な戦士ナクラは、馬を殺された戦車から速やかに飛び下り、誉れ高い兄弟の戦車に乗った。（四六）一つの戦車に同乗した二人の勇士は怒り、強固な弓を引き、〔矢で〕マドラ国王を速やかにおおった。（四七）しかしその人中の虎は、妹の二人の息子によって、多くの真っ直ぐの矢でおおわれても、山のように動揺することはなかった。彼は笑って、矢の雨で双子を射た。（四八）それから、強力なサハデーヴァは怒り、矢をつがえて、マドラ国王に向けて放った。バーラタよ。（四九）その彼に放たれた矢は、ガルダ鳥のように高速で飛び、マドラ国王を貫通して、大地に落下した。（五〇）大王よ、その偉大な戦士はひどく傷つき、苦しんで、戦車の座席に座り込み、意識を失った。（五一）御者は戦場において、彼が意識を失って倒れたのを見て、戦いにおいて双子に苦しめられた彼を戦車で運んで行った。（五二）マドラ国王の戦車が退却したのを見て、すべてのドリタラーシトラ軍は意気消沈し、彼はもう生存しないと考えた。（五三）偉大な戦士である、マードリーの二人の息子は、母方の伯父を戦場で破って、喜んで法螺貝を吹き、獅子吼をした。（五四）王よ、彼ら二人は喜んで、あなたの軍隊を攻撃した。王よ、インドラとウペーンドラ（ヴィシュヌ）の両神が悪魔の軍隊を攻撃するように。（五五）

（第七十九章）

サンジャヤは語った。――

それから太陽が中天に達した時、ユディシティラ王はシュルターユスを見かけて、馬たちをかりたてた。（一）そして王は敵を制するシュルターユスを攻撃し、九本の鋭い真っ直ぐの矢で射た。（二）その偉大な射手である王は、戦場で、ダルマの息子に放たれた矢を防ぎ、七本の矢を彼に向けて放った。（三）それらの矢は、戦場で彼の鎧を貫通し、彼の血を飲んだ。偉大な彼の体の中で生気を探し求めているかのように。（四）ユディシティラ王はその戦いにおいて、偉大なシュルターユス王によってひどく傷つけられたが、猪耳（矢の種類）によってその王の心臓を貫いた。（五）そしてその最高の戦士であるユディシティラは、他の矢によって、その偉大な男の旗を、速やかに戦車から地面に射落とした。（六）シュルターユス王は旗が落ちるのを見て、鋭い七本の矢でユディシティラを射た。王よ。（七）それから、ダルマ王ユディシティラは、宇宙紀（ユガ）の終末に生類を燃やす火のように、怒りで燃え上がった。（八）怒ったパーンダヴァを見て、神々とガンダルヴァと羅刹たちは戦慄し、世界は動揺した。大王よ。（九）そして一切の生類は、「この王は怒って、今日、三界を燃やすであろう」と考えた。（一〇）王よ、パーンダヴァが怒った時、聖仙と神々は、世界の平安のために、盛大な吉祥の祈願をした。（一一）ユディシティラは怒りにかられ、口の端を舐めまわし、宇宙紀の終末の太陽のような恐ろしい姿をしていた。（一二）パラタ族の王よ、あなたの軍のすべての兵士たちは生きる希望を失った。（一三）しかし、誉れ高い彼は、平常心により怒りを抑制し、シュルターユスの大弓を握りのところで断ち切った。（一四）そして王は、戦場ですべての兵が見ている

前で、弓を切られた相手の胸の間を矢で射貫いた。(二五)そして王よ、その非常に強力な男は、すぐに偉大な敵の馬たちを矢で殺し、更に御者を速やかに殺した。(二六)シュルターユスはその戦いにおいて、王の勲を見て、馬を殺された戦車を捨て、急いで逃げ出した。(二七)王よ、戦いにおいて、その偉大な射手がダルマの息子にうち破られた時、すべてのドゥルヨーダナの軍隊は退却した。(二八)大王よ、ダルマの息子ユディシティラはこの武勲を立ててから、口を開いたカーラ(時間、破壊神)のようにあなたの軍の兵士たちを殺した。(二九)

(二〇—三八略)

アビマニユ(アルジュナの息子)と敵の戦士たちとの間に、恐ろしい戦闘が行なわれた。王よ。身体と、ヴァータとピッタとカパの三〔体質〕との戦いのような。(三九)王よ、その人中の虎は、激戦においてあなたの息子たちの戦車を使えなくしたが、〔自分が殺すと誓った〕ビーマの言葉を思い出して、彼らを殺さなかった。(四〇)

ビーシュマは戦場において、象や馬や戦車に乗る幾百の王たちに囲まれ、神々によってもうち破られなかった。(四一)彼はあなたの息子たちを救出するために、一人でいる少年の勇士アビマニユに対して速やかに進撃した。それを見て、白馬にひかれたアルジュナは、クリシュナに次のように言った。(四二)

「クリシュナよ、多くの戦士がいる場所に向けて馬たちを急がせよ。あの武器に通達し、戦いに酔う、多くの勇士たちがわが軍を殺さないように、クリシュナよ、馬を急がせよ。(四三)」

無量の力を持つアルジュナにこのように言われたクリシュナは、白馬をつないだ戦車を戦場に導いた。(四四)わが君よ、戦場で怒ったアルジュナがあなたの軍隊に向かって進撃した時、あなたの軍隊に大きな叫び声があがった。(四五)王よ、一方アルジュナは、ビーシュマを守っている王たちに近づいて、スシャルマンにこう言った。(四六)

「私は戦いにおいて最上の勇士であるお前が、以前から非常な敵意を抱いていることを知っている。見よ。今日、その因縁の恐ろしい結果が訪れた。今日お前を先祖たちと会わせてやろう。(四七)」

敵を滅ぼすアルジュナがこのように言った時、戦車隊の長スシャルマンは彼の荒々しい言葉を聞いても、彼によいことも悪いことも何も言わなかった。(四八)彼は多くの王たちに囲まれて、勇猛なアルジュナに近づき、前方から、後方から、両側から、いたるところアルジュナを包囲した。そして戦場で、あなたの息子たちとともに、雲によって太陽をおおうように、矢によってアルジュナをおおった。(四九—五〇)それから、あなたの軍とパーンダヴァ軍との間に、戦場で流血の大戦闘が繰り広げられた。バーラタよ。(五一)

(第八十章)

サンジャヤは語った。――

ダナンジャヤ(アルジュナ)は多くの矢で撃たれて、足で蹴られた強力な蛇のように息を吐き、

戦場において力まかせに次から次へと矢を放ち、偉大な戦士たちの弓を切断した。(一) 偉大なアルジュナは、戦場において、それらの強力な王たちの弓を瞬時にして断ち切ってから、彼らを全滅させようと考えて、矢で彼らを同時に射貫いた。(二) 王よ、インドラの息子に撃たれて、彼らは血にまみれて戦場に倒れた。四肢は切られ、頭は落ち、息絶え、体につけた鎧は切られていた。(三) 彼らはアルジュナの力に圧倒され、多様な姿をして地面に横たわり、同時に死滅した。戦いにおいてそれらの王子が殺されたのを見て、すぐにトリガルタの王（スシャルマン）が進み出た。(四) そしてそれらの戦士の後方を守っていた、他の三十二名がアルジュナに襲いかかった。彼らも同様にアルジュナを取り囲み、大音響をたてる弓を引き絞り、矢の大雨を降り注いだ。雲が山に大雨を注ぐように。(五) 矢の大雨に悩まされ、アルジュナは怒り、その戦いにおいて、油で磨いた六十本の矢で、その後方を守る者たちをも殺した。(六)（七—一六略）

偉大なユディシティラ王は、シカンディンがビーシュマにより武器を切断されたのを見て怒り、戦場でシカンディンに告げた。(一七)

「あなたは父上の前で、『私があの大誓戒を守るビーシュマを、汚れなき太陽のような色の矢の洪水で殺す。私はこの真実を述べる』と私に告げて、誓約をした。(一八) しかしあなたはその誓約を履行していない。戦いでデーヴァヴラタ（ビーシュマ）を殺さないのだから。勇士よ、誓約を違えてはならぬ。法と一族と名誉を守れ。(一九) ビーシュマを見よ。彼は戦いにおいて猛烈であり、私のすべての軍団を苦しめている。彼は非常に鋭い矢の大洪水で、カーラ（破壊神）のように、瞬時にしてすべてを死滅させる（テクスト疑問）。(二〇) あなたは弓を切られ、戦場を捨て、王者ビーシュマにうち負かされた。親族と兄弟を捨て、どこへ行くのか。それはあなたにふさわしくない。(二一) 無限の力を持つビーシュマを見て、敗れてこのように逃げる軍隊を見て、きっとあなたは恐れたのであろう。ドルパダの息子よ。顔色が冴えないから。(二二) 勇士よ、アルジュナは命じられて（異本による）激戦に専念しているのに、地上において名高いあなたが、今日、どうしてビーシュマを恐れるのか。(二三)」

王よ、偉大なシカンディンは、ダルマ王の荒々しいが道理にかなった（異本による）言葉を聞いて、〔適切な〕苦言であると考え、急いでビーシュマを殺そうと決意した。(二四) シカンディンが全速力でビーシュマに襲いかかった時、シャリヤがうち勝ちがたい恐るべき武器で彼を制止した。(二五) しかし王よ、大インドラのように威力のあるドルパダの息子は、宇宙紀の終末の火のように輝く、振り上げられた武器を見てもひるまなかった。(二六) 偉大な弓取りであるシカンディンは、諸々の矢でその武器を防ぎつつ、その場に立っていた。その時、シカンディンは〔シャリヤの武器を〕迎え撃つために、別のヴァルナ（水天）の武器（ヴァールナ）という恐ろしい武器をとり上げた。天空にいる神々と王たちは、武器が武器によって破壊されるのを見た。(二七)

王よ、ところで偉大な勇士ビーシュマは、その戦いにおいてユディシティラ王の美々しい弓と旗を断ち切って雄叫びをあげた。(二八) それからビーマセーナは、恐怖にかられたユディシティラを見て、弓矢を捨てて棍棒を持ち、戦場において徒歩でジャヤドラタに襲いかか

った。（二九）ビーマセーナが棍棒を持って全速力で襲って来た時、ジャヤドラタはヤマ（閻魔）の杖（ダンダ）にも似た恐ろしい五百本の鋭い矢で、いたるところビーマを射貫いた。（三〇）強力な狼腹（ビーマ）はそれらの矢をものともせず、怒りで心がいっぱいになり、戦場で、シンドゥ国王（ジャヤドラタ）のアーラッタ（パンジャーブの北東。良馬の産地として有名）産のすべての馬を殺した。（三一）

それから、神々の王にも似た、無量の力を持つあなたの息子（チトラセーナ）は、ビーマセーナを見て、彼を殺すために、武器を振り上げて近づいて行った。（三二）ビーマも叫んで、棍棒で威しながら彼の方に急いで向かって行った。ヤマの杖にも似た棍棒が振り上げられるのを見て、クル軍はすべて、あなたの息子を捨て、棍棒の恐るべき落下を避けようとして、人を錯乱させる凄まじい激戦の中を逃走した。バーラタよ。（三三―三四）しかしあなたの息子チトラセーナはうろたえることなく、落下する巨大な棍棒を見て、戦場で戦車を捨てて徒歩になった。（三五）一方その棍棒は、戦場の美々しい戦車と馬たちと御者を破壊し、天空から地上に落ちる燃える大流星のように地面に落ちた。（三六）バーラタよ、あなたの軍のすべての兵は、この大奇蹟を見て喜び、こぞって一斉に叫び、あなたの息子を讃えた。（三七）（第八十一章）

サンジャヤは語った。——

あなたの息子ヴィカルナは、戦車を失った気高いチトラセーナに近づき、自分の戦車に彼

を乗せた。（一）そのように猛烈に激しい混戦が行なわれていた時、ビーシュマは速やかにユディシティラを襲撃した。（二）そこで、戦車兵と象兵と騎兵を擁するスリンジャヤ軍は戦慄し、ユディシティラは死神の口に入ったと考えた。（三）しかしユディシティラ王は、双子とともに、人中の虎である勇士ビーシュマに立ち向かった。（四）それからパーンダヴァはその戦いにおいて、幾千の矢を放って、雲が太陽をおおうようにビーシュマを矢でおおった。（五）バーラタよ、彼が見事に射た矢の群を、ビーシュマは幾百幾千と受け止めた。（六）わが君よ、同様にビーシュマに放たれた矢の群は、虚空を飛ぶ鳥の群のように見えた。（七）ビーシュマはその戦いにおいて、一瞬間の半分のうちに、次々と放つ矢の群によりユディシティラを見えなくさせた。（八）そこでユディシティラ王は怒り、偉大なビーシュマに、毒蛇のような鉄矢を放った。（九）王よ、しかし彼の弓から発せられた矢が届かないうちに、偉大な戦士ビーシュマは、戦場で、馬蹄形の先の矢でそれを断ち切った。（一〇）ビーシュマはその戦いで、ユディシティラのカーラ（破壊神）のような矢を断ち切ってから、その黄金で飾られた馬たちを殺した。（一一）ダルマ王ユディシティラは馬と戦車を捨て、速やかに偉大なナクラの戦車に乗った。（一二）

敵の都市を征服するビーシュマは怒り、戦場で双子に近づき、諸々の矢で彼らをおおった。（一三）大王よ、その二人がビーシュマの矢で苦しめられるのを見て、ユディシティラはビーシュマの死を望み、この上なく考えこんだ。（一四）そしてユディシティラは、従う諸王や友の群を、「みな、シャンタヌの息子ビーシュマを殺せ」と言ってうながした。（一五）それから、

すべての王はユディシティラの言葉を聞いて、戦車の大群で祖父を取り囲んだ。(一六) あなたの父デーヴァヴラタ（ビーシュマ）は完全に包囲されたが、偉大な戦士たちを倒しつつ、弓で遊び戯れた。王よ。(一七) パーンダヴァたちは、森で鹿の中に入って動きまわる若獅子のような、戦場で動きまわるビーシュマを見た。(一八) 戦場において矢で勇士たちを威し、恐れさせる彼を見て、鹿の群が獅子を見て恐れるように彼らは恐れた。大王よ。(一九) 王族(クシャトリヤ)たちはその戦いにおいてそのバラタの獅子の足跡を見た。それは草木を燃やそうとする、風をともなう火の足跡のようであった。(二〇) ビーシュマは戦場で戦士たちの頭を落とした。その様は、巧みな男が椰子から熟した実を落としているようであった。(二一) 大王よ、地面に落ちる頭により、落下する石のような騒がしい音が生じた。(二二) その非常に恐ろしい激戦が行なわれていた時、すべての軍隊に大混乱が生じた。(二三) 諸々の陣形は破れ、王族たちはお互いに一人ずつ呼び合って、戦うために近寄った。(二四)

さて、シカンディンはバラタ族の祖父を見かけて、急いで走り寄り、「待て、待て」と呼びかけた。(二五) しかしビーシュマは、シカンディンは女であったと考え、シカンディンとの戦いを避け、猛り立ってスリンジャヤ軍に対して進撃した。(二六) スリンジャヤ軍は偉大な戦士ビーシュマを見て喜び勇み、多様な獅子吼をし、法螺貝を吹いた。(二七) 王よ、それから太陽が西方に達してとどまる時、戦車と象の入り乱れた戦闘が展開した。(二八)

その時、パーンチャーラの王子ドリシタデュムナと偉大な戦士サーティヤキは、槍や投槍の雨によりひどくあなたの軍を苦しめて、戦場で多くの武器によりあなたの兵たちを殺した。(二九) 人中の雄牛よ、あなたの兵士たちは、戦いにおいて殺されても、戦いに関し気高い誓いをたてて、戦闘を捨てなかった。偉大な戦士である彼らは、気力の限り、戦場において人々を殺した。(三〇) 王よ、あなたの偉大な兵士たちが戦場で偉大なドリシタデュムナに殺されていた時、大喚声があがった。(三一)(三二―五〇略)

大王よ、このようにして夜になった時、敵を苦しめるあなたの軍隊はパーンダヴァ軍とともに〔戦いをやめて〕引きあげた。(五一) そしてパーンダヴァ軍もクル軍も自分の陣営に帰り、お互いに称讃しながらそこに入った。大王よ。(五二) 勇士たちは自己の守りを整え、規定に従って軍営を配置し、矢を除去して種々の水で入浴した。(五三) すべての誉れ高い人々は、贖罪の儀式を受け、崇拝者(バンディン)たちに讃えられ、歌と器楽の音により楽しんだ。(五四) しばらくの間、すべては天界のようであった。偉大な戦士たちは、そこではまったく戦いの話をしなかった。王よ、人は疲れ、象と馬に満ちた両軍が眠った時、それは一見に値する光景であった。(五六)

（第八十二章）

ビーシュマはドリタラーシトラの七人の息子を殺す

サンジャヤは語った。——

クルとパーンダヴァの王たちは、その夜を過ごしてから、再び戦うために出陣した。(一) 両軍が戦場に出て行く時、海のような大きな音がした。(二) それから、ドゥルヨーダナ王、

チトラセーナ、ヴィヴィンシャティ、最高の戦士ビーシュマ、パラモンのドローナ等、クル族の大軍は、武装して、一丸となり、よく準備を整え、パーンダヴァ軍に対して陣形を布いた。王よ。(三―四) 王よ、あなたの父ビーシュマは、強力な陣形を作った。それは恐ろしい海のような陣形で、象馬という波で揺れていた。(五) 全軍の先頭を、シャンタヌの息子ビーシュマが、マーラヴァの軍、南部地方の軍、アヴァンティの軍とともに進んだ。(六) その後に、栄光あるドローナが、プリンダ、パーラダ、クシュドラカとマーラヴァの軍とともにいた。(七) ドローナの次に、準備を整えた栄光あるバガダッタが、マガダとカリンガの軍、ピシャーチャ軍とともにいた。王よ。(八) バガダッタの後に、コーサラ国王ブリハドバラが、メーカラ、トリプラ、チッチラとともにいた。(九) ブリハドバラの次に、トリガルタの勇士であるプラスタラの王(スシャルマン)が、多くのカーンボージャ軍、幾千のヤヴァナ軍とともにいた。(一〇) バーラタよ、トリガルタの次に、強力で勇猛なドローナの息子(アシュヴァッターマン)が、獅子吼により大地を響かせつつ進んだ。(一一) ドローナの息子の次に、ドゥルヨーダナ王が、弟たちに囲まれて、すべての軍隊とともに進んだ。(一二) ドゥルヨーダナの次に、シャラドヴァットの息子クリパが進んだ。このように、海のように強力な軍陣が進んで行った。(一三) 王よ、そこで軍旗や白い傘(王者の標)や、〔王たちの〕美々しい腕環や、高価な弓が輝いていた。(一四)

偉大な戦士ユディシティラは、あなたの軍の強力な陣形を見て、速やかに最高軍司令官ドリシタデュムナに言った。(一五)

「偉大な射手よ、海のような陣形が布かれたのを見よ。ドリシタデュムナよ、すぐに対抗の陣形を布きなさい。(一六)」

大王よ、そこで勇猛なドリシタデュムナは非常に恐るべき陣形を布いた。それはシュリンガータカという、敵陣を滅ぼす陣形であった。(一七) 二つの角のところに、ビーマセーナと勇士サーティヤキが、幾千の戦車兵と騎兵と歩兵とともにいた。(一八) その両者の次に、白馬にひかれ、猿の旗標を持つ最高の人(アルジュナ)がいた。中央にはユディシティラ王とマードリーの二人の息子(ナクラとサハデーヴァ)がいた。(一九) そして他の、陣形の論書に通じた偉大な射手たちが、軍隊を連れて、その陣形を満たしていた。(二〇) その後方には、アビマニユと偉大な戦士ヴィラータと、喜び勇むドラウパディーの息子たちと、羅刹のガトートカチャがいた。(二一) バーラタよ、パーンダヴァの勇士たちはこのように強力な陣形を布いて、戦いを望み勝利を欲して戦場に立っていた。(二二) 法螺貝の音、雄叫び、腕をたたく音(挑戦の合図)、呼び合う音と混じった、騒々しい太鼓の音は、すべての方角に凄まじく〔響いた〕。(二三) 王よ、それから勇士たちは戦場に集結し、猛り立ち、お互いに瞬きひとつしないで見つめ合った。(二四) 王よ、戦士たちはお互いにまず決意して、それから互いに呼び合って戦闘を始めた。(二五) それから、あなたの軍と敵軍とは相互に殺し合い、恐怖を催させるおぞましい戦闘が繰り広げられた。(二六)(二七―三六略)

それからビーシュマは、戦場において戦車の音を響かせて、弓の音で敵軍を狼狽させつつ、パーンダヴァたちに襲いかかった。(三七) ドリシタデュムナをはじめとするパーンダヴァの戦士たちは、戦闘の準備をし、凄まじい声で叫びながら襲いかかった。(三八) バーラタよ、

それからあなたの軍と敵軍との間に、歩兵と騎兵と戦車兵と象兵がお互いに入り乱れた戦闘が展開した。(三九)

(第八十三章)

サンジャヤは語った。——

ビーシュマが戦場で怒り、いたるところで敵を苦しめていた時、パーンダヴァ軍は熱する太陽を見られないように、彼を見ることができなかった。(一) それから、ダルマの息子(ユディシティラ)の命令により、鋭い矢で敵を粉砕しているビーシュマに対し、すべての敵軍が襲いかかった。(二) しかし、戦いにかけて誉れ高いビーシュマは、ソーマカ、スリンジャヤ、パーンチャーラの勇士たちを矢で倒した。(三) パーンチャーラとソーマカの軍は、ビーシュマに殺されながらも、死の恐怖を捨てて、ビーシュマに襲いかかった。(四) 王よ、勇士ビーシュマはその戦いにおいて、それらの戦士の腕や頭を激しく断ち切った。(五) あなたの父デーヴァヴラタ(ビーシュマ)は、戦車兵たちの戦車を奪い、騎兵たちの頭を馬から射落とした。(六) 大王よ、ビーシュマの矢により、山のような象が乗り手を失い、気絶して横たわっているのを我々は見る。(七) 王よ、パーンダヴァ軍のうちでは、強力な最高の戦士であるビーマセーナを除いて、誰も〔ビーシュマに対抗できるものは〕いなかった。(八) 実にビーマはその戦いにおいてビーシュマに近づいて攻撃した。それから、ビーシュマとビーマセーナの交戦において、恐ろしい喧噪が生じた。(九) すべての兵士たちの間に、凄まじくも恐ろしい〔戦闘〕

が行なわれた。パーンダヴァ軍は喜び勇み、獅子吼をした。(一〇)

ドゥルヨーダナ王は弟たちに囲まれて、人々を死滅させる戦闘が行なわれている間、ビーシュマを守った。(一一) 敵を殺す最高の戦士ビーマはビーシュマの御者を殺し、馬が驚いて戦車がいたるところ走りまわっている間に、矢で速やかにスナーバ(ドリタラーシトラの息子)の頭を断ち切った。(一二) 彼は鋭い馬蹄形の先の矢で殺されて、地面に倒れた。大王よ、あなたの息子である勇士が戦場で殺された時、彼の七人の兄弟は我慢できなかった。(一三) すなわち、アーディティヤケートゥ、バフヴァーシン、クンダダーラ、マホーダラ、アパラージタ、パンディタカ、無敵のヴィシャーラークシャである。(一四) 敵を砕く彼らは、多彩に武装し、美々しい鎧をつけ、旗を持ち、戦場で戦うことを望んで、ビーマに襲いかかった。(一五) その戦いにおいて、マホーダラは金剛杵に似た九本の矢でビーマを射た。インドラがナムチ(悪魔の名)を金剛杵で撃ったように。(一六) アーディティヤケートゥは七本の矢で、バフヴァーシンは五本の矢で、クンダダーラは九十本の矢で、ヴィシャーラークシャは七本の矢で射た。(一七) 大王よ、敵に勝利する勇士アパラージタは、多くの矢で強力なビーマセーナを射た。(一八) その戦いで、パンディタカは三本の矢で彼を射た。しかしビーマは、戦場で敵に殺されることに耐えられなかった。(一九) その敵を悩ます勇士は、左手で弓を握りしめ、その戦いにおいて、真っ直ぐの矢で、アパラージタの頭を切った。ビーマにうち破られたあなたの息子の、美しい鼻を持つ頭は地面に落ちた。(二〇—二一) そして、すべての人々が見ている前で、ビーマは他の矢により勇士クンダダーラを死神の世界に送った。(二二) バーラタよ、それか

ら限りなく高邁なビーマは、戦場で再び弓に矢をつがえ、パンディタ〔カ〕に対して発射した。(二三) その矢はパンディタ〔カ〕を殺して、地面に入った。ちょうど、カーラ（時間、破壊神）にかりたてられた蛇が人を殺して地面に入るように。(二四) そして元気いっぱいのビーマは、昔の苦しみを思い出し、三本の矢でヴィシャーラークシャの頭を切り、地面に落とした。(二五) 王よ、それからビーマは、勇士マホーダラの胸の間を射貫いた。戦場で彼は殺されて、地面に倒れた。(二六) そして敵を殺すビーマは、その戦いでアーディティヤケートゥの旗を矢で断ち切り、非常に鋭い矢でその首を切った。(二七) それからビーマは怒り、真っ直ぐの矢で、バフヴァーシンをヤマ（閻魔）の住処に送った。(二八)

王よ、それから他のあなたの息子たちは、ビーマが集会場で誓った言葉を思い出して逃げ出した。(二九) ドゥルヨーダナ王は弟たちの不幸に苦しみ、あなたの軍の兵士たちに、「戦いにおいてあのビーマを殺せ」と命じた。(三〇)

王よ、かくてあなたの息子である勇士たちは、兄弟たちが殺されたのを見て、大知者のヴィドゥラが告げた有益で幸せをもたらす言葉を思い出した。あの天眼をそなえたヴィドゥラの言葉が今や実現したのだと。(三一―三二) 王よ、あなたは息子を愛するあまり、貪りと迷妄にかられ、以前にはそれを理解しなかった。あの偉大な言葉は真実であったのだ。(三三) あの強力なパーンダヴァの勇士がクルの軍を殺している有様からすると、きっと彼はあなたの息子たちを殺すために生まれたのである。(三四)

わが君よ、それからドゥルヨーダナ王はビーシュマの所に行き、大きな苦悩にとりつかれ、

非常に嘆き悲しんで言った。(三五)

「私の勇猛な弟たちは、戦いでビーマセーナに殺された。他のすべての兵士たちも、努力したのだが殺された。(三六) しかしあなたは、中立者のようにふるまって、いつも我々をなおざりにする。そこで私は迷い道に踏みこんだ。見よ、これが私の運命である。(三七)」

あなたの父デーヴァヴラタ（ビーシュマ）は、その乱暴な言葉を聞いて、眼に涙をためてドゥルヨーダナに告げた。(三八)

「私は以前にこのことを言った。ドローナ、ヴィドゥラ、誉れあるガーンダーリーも言った。しかしわが子よ、お前はそれを理解しなかった。(三九) 敵を苦しめる者よ、私は前に誓約した。私もドローナも、戦いにおいて決して生きながらえないと。(四〇) 実にビーマが戦場でドリタラーシトラの息子たちのうちの誰かを見ると、彼は一人一人を戦いにおいて殺すであろう。私は必ずそうなるとお前に告げる。(四一) 王よ、そこでお前は気を確かに持って、戦いの決意を固め、天界を最終目的として、戦場でパーンダヴァたちと戦いなさい。(四二) インドラを含む神々や阿修羅たちといえども、パーンダヴァたちに勝利することはできない。それ故、戦いの決意を固めて戦いなさい。バーラタよ。(四三)」

（第八十四章）

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、私の多くの息子たちがビーマ一人に殺されたのを見て、ビーシュマとドロ

ーナとクリパは戦場で何をしたか。(一)サンジャヤよ、毎日のように私の息子たちは死滅する。サンジャヤよ、すべからく彼らは運命により手ひどく打ちのめされたと私は思う。(二)私の息子たちがすべて敗れ、勝利しないとは。ビーシュマ、ドローナ、偉大なクリパ、ソーマダッタの勇猛な息子（ブーリシュラヴァス）とバガダッタの両者、アシュヴァッターマン、その他の偉大な勇士たち。友よ、私の息子たちはこれらの勇士たちの中にいるのに、戦いにおいて殺されたとは。運命以外の他の何であろうか。(三―五)友よ、以前、愚かなドゥルヨーダナは、私やヴィドゥラに止められても、言われたことを理解しなかった。(六)いつも彼のためを思うガーンダーリーも前に彼を止めたが、愚かな彼は迷妄により目覚めなかった。彼にこのような果報が訪れたのだ。(七)ビーマセーナは怒り、分別を失った私の息子たちを毎日のように戦場でヤマの住処に送っている。(八)」

サンジャヤは語った。――

ヴィドゥラの最高の言葉が今やその通りになったのである。王よ、あの時、有益な言葉が述べられたのに、あなたはそれを理解しなかった。(九)「息子たちが賭博をするのを止めなさい。パーンダヴァたちを陥れてはいけない」という、あなたのためを思う親しい人々の言葉を、あの時あなたは聞かなかった。死すべき者が適切な薬を服用しないように。あの時、正しく告げられた言葉があなたに降りかかって来たのだ。(一〇―一一)ヴィドゥラとドローナとビーシュマと、ためを思うその他の人々の有益な言葉に従わないで、クル一族は滅亡に赴く。(一二)王よ、もう取り返しがつかない。それ故、戦争がどのように展開したか、ありのままに私から聞きなさい。(一三)正午ごろ、戦闘は非常に凄まじいものになり、多くの人々が死んだ。王よ、それを語るから聞きなさい。(一四)

ダルマの息子（ユディシティラ）の命令により、すべての兵たちは激して、まさにビーシュマを殺そうとして攻撃した。(一五)大王よ、ドリシタデュムナとシカンディンと勇士サーティヤキは、軍隊を率いて、ただビーシュマのみに襲いかかった。(一六)アルジュナ、ドラウパディーの息子たち、チェーキターナは、その戦いにおいて、ドゥルヨーダナに指令されるすべての王を攻撃した。(一七)同様に、勇士アビマニユ、偉大な戦士であるヒディンバーの息子（ガトートカチャ）、怒ったビーマセーナも、クル軍を攻撃した。(一八)その戦いにおいて、三つに分かれたパーンダヴァ軍によりクル軍は殺された。王よ、そして敵軍も戦いにおいてクル軍に殺された。(一九)(二〇―三四略)

バーラタよ、シャンタヌの息子ビーシュマと最高の戦士ドローナが怒った時、パーンダヴァ軍に損害が出た。(三五)また、アシュヴァッターマンとクリパとクリタヴァルマンが怒った時も同様であった。そして相手側（パーンダヴァの勇士たち）が怒った時、あなたの軍に損害が出た。(三六)

（第八十五章）

アルジュナの息子イラーヴァットの死

サンジャヤは語った。――

王よ、最高の勇士を滅ぼす戦闘が行なわれている間、栄光あるスバラの息子シャクニは、パーンダヴァ軍に襲いかかった。(一)王よ、同様に敵の勇士を殺すサートヴァタのフリディカの息子(クリタヴァルマン)もパーンダヴァ軍に戦いを挑んだ。(二)

カーンボージャ産の最高の馬、河川(パンジャーブか)の生まれの馬、アーラッタ産の馬、マヒー産、シンドゥ産の馬、ヴァナユー産の白い馬、山岳に住む馬たちがいたるところにいた(テクスト疑問)。そして、その他、ティッティラ産の風のように速い駿馬がいた。(三―四)黄金で飾られ、鎧をつけ、よく装備された、風のように速いこれらの優れた馬たちにより、アルジュナの敵を苦しめる強力な息子は、喜び勇んでクル軍を攻撃した。(五)そのアルジュナの強力な息子はイラーヴァットという名で、叡知あるアルジュナと竜王の娘の間に生まれた。(六)夫がスパルナ(ガルダ鳥)に殺されて、その憐れな竜女は悲嘆に暮れていたが、偉大なアイラーヴァタ(竜王の名)はその子供のいない女を〔アルジュナに〕託したのである(息子を作らないうちに未亡人となった場合、他の男を指定して子種をもらう)。(七)アルジュナは、愛欲に支配された彼女を妻として受け入れた。こういうわけで、そのアルジュナの息子は、他の男の田地(妻)に生まれた。(八)彼は竜の世界において、母に守られて成長した。しかし、父方の邪悪な叔父(アシュヴァセーナ)は、アルジュナを憎んだので、彼を捨てた。(九)

彼は容姿と力にめぐまれ、美質をそなえた不屈の勇者である。アルジュナがインドラの世界に行ったと聞いて、彼も急いでそこへ行った。(一〇)彼は不屈の勇士である偉大な父のもとに行き、穏やかに合掌し、礼儀正しく挨拶した。

「私はイラーヴァットです。御機嫌よう。主よ、私はあなたの息子です。(一一)」

そして彼は、父が母と会った状況をすべて父に語った。アルジュナは起こったことをすべてありのままに思い出した。(一二)アルジュナは美質の点で自分に似た息子を抱きしめ、喜んで神々の王の住処に滞在した。(一三)バラタ族の王よ、勇士アルジュナはその時、神々の世界において、満足して彼に自分のなすべきことについて命じた。

「王子よ、戦争の時には、お前は我々の味方をせよ。(一四)」

彼は「承知しました」と答えた。そして王よ、戦争の時に、願望のように速い(異本による)多くの馬に囲まれて馳せ参じた。(一五)それらの馬は黄金の環で飾られ、種々の色をして、思考のように速い。王よ、海上におけるハンサ(鵞鳥の一種)のように速やかに飛び上がった。(一六)彼らはあなたの高速の馬の群に襲いかかり、胸や鼻面をぶつけ合った。そして王よ、彼らは猛烈さに圧倒されて、激しく地面に倒れた。(一七)相互に倒れるそれらの馬の群により、スパルナ(ガルダ鳥)の降下のような恐ろしい音が聞こえた。(一八)そして大王よ、それらの馬に乗る者たちも、相互に交戦し、お互いに酷たらしく殺し合った。(一九)そのように非常に激しい混戦が行なわれている間に、両軍の騎兵の群はすっかり消滅した。(二〇)勇士たちは矢も尽

き、馬も殺され、疲労に苦しみ、互いに傷つけ合って、滅亡した。(二一)
バーラタよ、それから騎兵が減少し、わずかが残るだけになった時、サウバラ(シャクニを指すか。しかし、以下ではスバラとなっている)の息子である勇士たちが戦いの最前線に出た。(二二) 彼らは突風のように激しい男たちで、風のように激しく適齢で良質な最高の馬に乗っていた。(二三) すなわち、ガジャ、ガヴァークシャ、ヴリシャカ、チャルマヴァット、アルジャヴァ、シュカの六名である。強力な彼らは猛烈な勢いで出て行った。(二四) 彼らは戦いに長け、恐ろしい姿をし、強力で、武装し、シャクニと自軍の強力な戦士たちに囲まれていた。(二五) 強力な者よ、その時その戦いに酔うガーンダーラの戦士たちは、偉大な力をそなえ、天界を求めて勝利を願い、最高に難攻の軍隊を破って、喜び勇んで侵入した。(二六) 彼らが侵入したのを見て、強力なイラーヴァットは戦場で、多彩な装飾と武器を持つ戦士たちに告げた。(二七)
「あのドゥルヨーダナの戦士たちが、従者や乗物とともに、すべて戦場で殺されるように、そのように攻略を講ずべきである。(二八)」
イラーヴァットのすべての戦士たちは、「承知した」と言って、戦いにおいて敵に破られがたい敵軍を殺した。(二九) スバラの息子たちはみな、自軍が戦いにおいて敵軍に倒されるのを見て、我慢できなくなり、イラーヴァットに戦いを挑み、ぐるりと取り囲んだ。(三〇) 勇士たちはお互いに鋭い投槍で攻撃し合い、挑発し合って、大騒ぎをして走りまわった。(三一)
さて、イラーヴァットは偉大な戦士たちに投槍で刺されて、流れる血にまみれ、突き棒で

刺された象のようになった。(三二) 一人の彼は、多数により胸と背中と両脇をひどく撃たれたが、平静さを失うことはなかった。王よ。(三三) その時、敵の都市を滅ぼすイラーヴァットは怒り、その戦いにおいて、鋭い矢で貫いて、全員を失神させた。(三四) 敵を制する彼は、自分の身体からすべての槍を引き抜き、まさにそれらにより、戦場でスバラの息子たちを撃った。(三五) それから彼は鋭い刀を抜き、楯を持ち、その戦いでスバラの息子たちを殺そうとして、徒歩で速やかに進んで行った。(三六) それから、すべてのスバラの息子たちは意識を取りもどし、怒りにかられて再びイラーヴァットに襲いかかった。(三七) 一方、力を誇るイラーヴァットは、刀により手練の早業を示しつつ、すべてのスバラの息子たちに襲いかかった。(三八) スバラの息子たちはみな駿馬によって行動したが(異本による)、迅速に動く彼の隙を見出すことはできなかった。(三九) しかし彼らは、戦場で彼が徒歩で地面に立っているのを見て、みなでぐるりと取り囲み、彼を捕えようとした。(四〇) ところが敵を苦しめる彼は、彼らが近くに来た時、刀で彼らの身体を切った(テクスト疑問)。(四一) そして全員の武器と飾られた腕を断ち切った。彼らは身体を切られ、息絶えて地面に倒れた。(四二) 大王よ、しかしヴリシャカはひどく傷つきながらも、その勇士を切りきざむ非常に恐ろしい戦闘から逃れることができた。(四三)
ドゥルヨーダナは彼らすべてが倒れたのを見て恐れ、怒って恐ろしい姿の羅刹に言った。(四四) この羅刹はリシャシュリンガの息子である偉大な射手で、幻力(マーヤー)をそなえ、敵を制する勇士であった。バカを殺されたことで、かねてよりビーマセーナを恨んでいた。(四五)

「勇士よ、見よ。あの幻力をそなえた、強力なアルジュナの息子は、私の軍を滅ぼすという恐ろしく不愉快なことをした。(四六) 友よ、あなたは望みのままに行くことができ、幻術(マーヤー)の武器(アストラ)に通達している。あなたはプリターの息子に恨みを持っている。それ故、戦場にいるあいつを殺せ。(四七)」

その恐ろしい姿の羅刹は、「承知した」と答えて、獅子吼をして、若いアルジュナの息子がいる所に行った。(四八) 彼は勇猛な戦士たちをともなっていた。彼らは見事に乗物に乗り、戦闘に巧みで、汚れない槍で戦う勇士たちであった。彼は自軍に囲まれて、戦いで強力なイラーヴァットを殺そうと望んでいた。(四九) 敵を滅ぼす勇猛なイラーヴァットも怒り、自分を殺そうと望む羅刹を急いで迎え撃った。(五〇) 非常に強力な羅刹は彼が襲って来るのを見て、急いで幻術を用いようと企てた。(五一) 彼は槍や矛を持つ恐ろしい羅刹たちが乗る多くの馬を幻術で作り出した。(五二) 彼ら二千の戦士たちは、怒って〔相手の軍と〕交戦したが、すぐにお互いに死神の世界に送り合った。(五三) その軍隊が殺された時、彼ら両者は戦いに酔い、ヴリトラとインドラのように、戦場で対峙していた。(五四)

戦いに酔う羅刹が襲って来るのを見て、強力なイラーヴァットは怒りにかられて彼を迎え撃った。(五五) 戦場で邪悪な羅刹が近づいた時、彼は刀で相手の弓を速やかに切った（異本によるも、テクスト疑問）。(五六) 羅刹は弓が切られたのを見て、急いで空に飛び上がった。そして怒ったイラーヴァットを幻術で惑わした。(五七) それからイラーヴァットも空中に飛び上がり、幻術により羅刹を惑わした。そして、すべての急所を知り、望みのままの姿をとる無敵の彼は、矢で相手の身体を切断した。(五八) 大王よ、しかしその最高の羅刹は、矢で何度も切断されても再生し、若返った。(五九) というのは、彼らにとって幻力は生まれつきのもので、思いのままの年齢や姿をとれるからである。このようにして、羅刹の身体は切られても切られても再生した。(六〇) イラーヴァットは怒り、その強力な羅刹を鋭い斧で何度も切った。(六一) 勇猛な羅刹は樹木のように、強力な彼に切られて、恐ろしい声で吼えた。その声は凄まじいものであった。(六二) 斧で切られた羅刹は多量の血を流した。そして強力な彼は怒り、激しく戦った。(六三) それから、リシャシュリンガの息子は、戦いで敵が気力旺盛なのを見て、恐ろしい巨大な姿をとって、激戦のさなか、みなが見ている前で、彼をつかまえようとした。(六四) 偉大な羅刹のそのような幻力を見て、イラーヴァットも怒り、幻影を作り出そうとした。(六五) 彼が怒りにかられて、戦場において一歩も退かなかった時、ある母方の一族が彼に近づいた。(六六) 王よ、その竜は戦場で竜たちにすっかり幾重も取り囲まれて、アナンタ竜のような巨大な姿をしていた。それから彼は多種多様な竜により、羅刹をおおった。(六七) その羅刹の雄牛は、竜〔蛇〕たちにおおわれて考えこみ、スパルナ〔ガルダ〕の姿をとって蛇たちを食べた。(六八) 幻力により母方の一族が食われた時に困惑したイラーヴァットを、羅刹は刀で殺した。(六九) 羅刹は耳飾りと冠をつけ、蓮花や月のように輝くイラーヴァットの頭を地面に切り落とした。(七〇) アルジュナの息子であるその勇士が羅刹に殺された時、ドリタラーシトラの息子たちと諸王は憂いが晴れた。(七一)(七二―八六略)

（第八十六章）

ガトートカチャとドゥルヨーダナの戦い

ドリタラーシトラは言った。

「イラーヴァットが殺されたのを知って、パーンダヴァの勇士たちは戦場において何をしたか。サンジャヤよ、それを私に語ってくれ。(一)」

サンジャヤは語った。——

ビーマセーナの息子である羅刹ガトートカチャは、戦いにおいてイラーヴァットが殺されたのを見て、大声で吼えた。(二) 王よ、その時、吼える彼の声により、海を衣服とし山と森をともなう大地はひどく揺れ動いた。空と四方四維も揺れた。(三) パーラタよ、その大音声を聞いて、あなたの兵士たちはふるえ、汗を出し、その腿は硬直した。(四) 王中の王よ、あなたのすべての兵士は元気をなくし、すべからく獅子を恐れる象のようにふるまった(異本による)。(五) その羅刹は燃える槍を振り上げ、恐ろしい姿をし、雷のような大音声で雄叫びをあげた。(六) 彼は種々の武器を持つ恐ろしい羅刹の雄牛たちに囲まれ、大いに怒って、終末のヤマ(閻魔)のように進んだ。(七) 恐ろしい姿のガトートカチャが怒って襲来し、自軍の大部分が恐れて退却するのを見て、ドゥルヨーダナ王は、大きな弓を持ち、獅子のように何度も吼え、彼に走り寄った。(八—九) 彼の後ろに、〔こめかみから分泌液を〕流した、山のような一万頭の象とともに、ヴァンガ国王その人がつき従った。(一〇) 大王よ、あなたの息子が象隊に囲まれて襲来するのを見て、その夜行の者(ガトートカチャ)は猛り立った。(一一) 王中の王よ、かくて羅刹たちとドゥルヨーダナ軍との間に、身の毛がよだつ激戦が展開した。(一二)

(一三—一六略)

大王よ、象兵が粉砕されて滅んだ時、ドゥルヨーダナは羅刹たちを攻撃した。(一七) 強力な彼は怒りにかられ、自分の生命を捨てて、羅刹たちに鋭い矢を放った。(一八) パラタの最上者よ、あなたの息子である勇士ドゥルヨーダナは猛り立ち、そこで主立った羅刹たちを殺した。(一九) その〔弓に〕巧みな勇士は、四本の矢で、ヴェーガヴァット、マハーラウドラ、ヴィディユッジフヴァ、プラマーティンという羅刹たちを殺した。(二〇) パラタの最上者よ、その限りなく高邁な男は、夜行の者(羅刹)の軍隊に対して、抗しがたい矢の雨を放った。(二一) わが君よ、あなたの息子のその偉業を見て、強力なビーマセーナの息子(ガトートカチャ)は怒りに燃えた。(二二) 彼はインドラの雷電に似た音をたてる大弓を引き絞り、敵を制するドゥルヨーダナに激しく襲いかかった。(二三) カーラ(時間、破壊神)が造った死神のような彼が襲来するのを見ても、大王よ、あなたの息子のドゥルヨーダナは恐れなかった。(二四)

その時、猛々しいガトートカチャは怒って眼を赤くして、彼に言った。

「パーンダヴァたちは残酷なお前によって、長年の間追放されていた。王よ、彼らはいかさま賭博で敗れたのだ。(二五) 邪悪な奴め、お前は一衣のみを身につけた、生理期間中のドルパダの娘クリシュナーを集会場に連れこんで、さんざん苦しめた。(二六) 邪悪なシンドゥの

王（ジャヤドラタ）はお前に気に入られようと望み、私の父（ビーマ）たちを蔑ろにして、隠棲所に住む彼女を悩ませた。（二七）一族のうちの最低な奴め、今日こそ、このような、そしてその他の侮蔑のかたをつけてやろう。もしお前が戦いを放棄しなければ……。（二八）」

ヒディンバーの息子はこのように言うと、歯で唇を噛みしめ、口の端を舐めまわし、大きな弓を引き絞り、矢の大雨をドゥルヨーダナに注いだ。雨季に雲が大雨を山に注ぐように。（二九―三〇）

（第八十七章）

サンジャヤは語った。――

その戦いにおいて、王中の王（ドゥルヨーダナ）は、巨象が雨に耐えるように、魔類によっても耐えがたい矢の雨に耐えた。（一）バラタの雄牛よ、それからあなたの息子は、怒りにかられ蛇のように息を吐いていたが、最高の危機に陥った。（二）彼は二十五本の鋭い矢を放った。王よ、それらはその羅刹の雄牛の上に激しく落下した。怒った毒蛇がガンダマーダナ山に落下するように。（三）その肉食鬼（羅刹）は、それらに射貫かれて血を流し、こめかみから分泌液を出す象のようになった。そして彼は王を殺そうと思い、山々をも裂くような大槍をとった。（四）強力な彼はあなたの息子を殺そうと望み、インドラが雷電を振り上げるように、その燃え上がる巨大な流星のように輝く槍を振り上げた。（五）

ヴァンガ国の王は、槍が振り上げられたのを見て、急いでその羅刹に対して、山のような象をかりたてた。（六）彼は強力で駿足の最高の象によって、戦場で、ドゥルヨーダナの戦車がいる道に行き、あなたの息子の戦車を象によって防御した。（七）大王よ、賢明なヴァンガ国王によって道が塞がれたのを見て、ガトートカチャは怒りで眼を赤くして、振り上げたその大槍をその象に投げつけた。（八）王よ、彼が腕で投じたその槍に撃たれて、象は血を流して苦しみ、倒れて死んだ。（九）その象が倒れた時、強力なヴァンガ国王は、急いで地面に飛び下りた。（一〇）

ドゥルヨーダナは最高の象が倒され、自軍が壊滅したのを見て、最高に苦悩した。（一一）しかし、王族の法（クシャトリヤダルマ）と自尊心とにより、自軍が退却しても、王は不動の山のように立っていた。（一二）彼は最高に怒り、終末の火のように燃える鋭い矢をつがえて、その恐るべき羅刹に向けて放った。（一三）インドラの雷電のように輝く矢が飛来するのを見て、巨体のガトートカチャは迅速な動きによりそれをかわした。（一四）

恐ろしい羅刹は、怒りで眼を赤くして、宇宙紀（ユガ）の終末の雲のように、再び吼えて一切の生類を恐れさせた。（一五）その恐るべき羅刹の凄まじい叫びを聞いて、ビーシュマは師匠（ドローナ）に近づいて言った。（一六）

「羅刹があげる恐ろしい叫びが聞こえるが、きっとヒディンバーの息子がドゥルヨーダナ王と戦っているのだ。（一七）いかなる生き物も戦いにおいて彼に勝つことはできない。どうかあなたはあそこへ行って、邪悪な羅刹に攻撃されている気高い王を守って下さい。敵を苦しめる者たちよ、これは我らすべての最高の義務であるから。（一八―一九）」

祖父（ビーシュマ）の言葉を聞いて、偉大な戦士たちは急いで、クルの王のいる所へ全速力で行った。(二〇) ドローナ、ソーマダッタ、バーフリーカ、ジャヤドラタ、クリパ、ブーリシュラヴァス、シャリヤ、ヴィヴィンシャティ、アシュヴァッターマン、ヴィカルナ、アヴァンティ国王、ブリハドバラ、そして彼らに従う幾千の戦士が、攻撃されているあなたの息子ドゥルヨーダナを守ろうとした。(二一—二二)

強力な最高の羅刹は、世界最強の者たちに守られた無敵の軍隊が来るのを見ても、マイナーカ山のように、動揺することはなかった。(二三) 彼は大きな弓を持ち、槍や槌や、その他諸々の武器を持つ親族たちに囲まれていた。(二四) それから、羅刹たちとドゥルヨーダナ軍の主力との間に、身の毛がよだつ激戦が行なわれた。(二五)

（ここでガトートカチャはクル軍の勇士を次々と苦しめる（二六—三八略））

（第八十八章）

サンジャヤは語った。——

バラタの最上者よ、羅刹（ガトートカチャ）は、その戦いにおいて、あなたの軍隊をすべて撃退してから、ドゥルヨーダナを殺そうとして攻撃した。(一) 彼が激しく王を攻撃するのを見て、あなたの戦士たちは戦いに酔い、彼を殺そうとして攻撃した。(二) 強力な勇士たちは、棕櫚（ターラ）ほどの長さの弓を引き絞り、獅子の群のように吼え、ただ彼のみを攻撃した。(三) そして矢の雨で彼をすっかりおおった。雨季に（異本による）雲が大雨で山をおおうように。(四) 彼は深々と

貫かれ、突き棒で苦しめられた象のように苦しみ、突然（異本による）ガルダ鳥のように空中に飛び上がった。(五) そして彼は、秋の雲のように、空と四方四維を響かせて、大音声を響かせた。(六) バラタの最上者よ、ユディシティラ王は羅刹の声を聞いて、ビーマセーナに次のように言った。(七)

「きっとあの羅刹がドリタラーシトラ軍の勇士たちと戦っているのだろう。彼が吼えている恐ろしい声が聞こえるから。弟よ、彼には荷が重過ぎると私は考える。(八) 怒った祖父（ビーシュマ）はパーンチャーラ軍を殺そうと企て、アルジュナは彼らを助けるために敵と戦っている。(九) 勇士よ、これを聞いたら、二つの仕事が控えている〔ことがわかる〕。行ってヒディンバーの息子を守れ。彼は最大の危機に陥っている。(一〇)」

狼腹（ビーマ）は兄の言葉を聞いて、獅子吼によりすべての王を驚かせつつ急いで行った。月相の変わり目の海のように猛烈な勢いで。(一一)（一二—一六略）

大王よ、彼らが進撃して来る音を聞いて、あなたの軍はビーマセーナに対する恐れで意気消沈し、顔色を変え、ガトートカチャを捨てて退却した。(一七)（一八—四一略）

（第八十九章）

ガトートカチャの幻術による勝利

サンジャヤは語った。——

ドゥルヨーダナ王は自軍が殺されるのを見て怒り、自ら敵を制するビーマセーナに襲いか

かった。(一) 彼はインドラの雷電のような音をたてる大弓を持って、矢の大雨をビーマに注いだ。(二) 彼は猛り立ち、羽根のある半月形の先の非常に鋭い矢を用いて、ビーマセーナの弓を断ち切った。(三) そしてその直後に、その強力な勇士は状況を見定めて、急いで、山をも裂くような鋭い矢をつがえて、それでビーマセーナの胸を射た。(四) 威光あるビーマは深々と射貫かれて苦しみ、口の端を舐めまわし、黄金で飾られた旗をつかんだ。(五) ガトートカチャはそのようにビーマセーナが苦しむのを見て、すべてを燃やそうとする火のように、怒りで燃え上がった。(六) そして、アビマニユを先頭とするパーンダヴァ軍の勇士たちは、興奮して、雄叫びをあげながら、ドゥルヨーダナ王に襲いかかった。(七) 彼らが興奮して攻撃するのを見て、ドローナはあなたの軍の勇士たちに告げた。(八)

「どうか急いで行ってくれ。王を守れ。彼は最大の危機に陥り、災禍の海に沈んでいる。(九) パーンダヴァ軍の強力な勇士たちは、ビーマセーナを先頭にして、怒ってドゥルヨーダナを攻撃している。(一〇) 彼らは勝利に専念し、多様な武器を放ち、この大地を恐れさせつつ、恐ろしい叫びをあげている。(一一)」

師匠(ドローナ)の言葉を聞くと、ソーマダッタをはじめとして、あなたの軍隊はパーンダヴァ軍を攻撃した。(一二) クリパ、ブーリシュラヴァス、シャリヤ、ドローナの息子、ヴィヴィンシャティ、チトラセーナ、ヴィカルナ、シンドゥ国王、ブリハドバラ、偉大な射手であるアヴァンティの二人の王が、クルの王を取り巻いていた。(一三) パーンダヴァ軍とドリタラーシトラ軍は、お互いに勝利を望み、二十歩進んで合戦を開始した。(一四)

勇士ドローナは、前のように告げると、大弓を引き絞り、ビーマに向けて二十六本の矢を放った。(一五) そして更に、その勇士は速やかに彼に矢を浴びせた。雨季に(異本による)雲が山に大雨を注ぐように。(一六) しかし、強力な勇士ビーマセーナは、速やかに、十本の矢でドローナの左脇を射貫いた。(一七) バーラタよ、年老いたドローナは深く傷ついて苦しみ、意識を失って、突然戦車の座席に座りこんだ。(一八)

師が苦しんでいるのを見て、ドゥルヨーダナ王自身とドローナの息子(アシュヴァッターマン)は、怒ってビーマセーナを攻撃した。(一九) カーラ(破壊神)か死神(アンタカ)かヤマ(閻魔)のような二人が襲って来るのを見て、勇士ビーマセーナは急いで棍棒をとり、速やかに戦車から飛び下り、戦場で、ヤマの杖(ダンダ)のような重い棍棒を振り上げて、不動の山のように立っていた。(二〇―二一)

カイラーサ山のようなビーマが棍棒を振り上げているのを見て、クルの王とドローナの息子は協力して攻撃した。(二二) 最高に強力な二人が協力して速やかに襲来した時、狼腹(ビーマ)は急激に攻撃した。(二三) 怒って恐ろしい姿の彼が攻撃するのを見て、クル軍の勇士たちは速やかに彼に襲いかかった。(二四) 彼らはドローナを先頭に、すべてビーマセーナを殺そうと望み、種々の武器をビーマの胸に投下した。一同はそろって、ビーマをすっかり痛めつけた。(二五)

その勇士が苦しめられ、危機に陥ったのを見て、アビマニユをはじめとするパーンダヴァの勇士たちは、彼を守ろうとして、捨てがたい生命をも捨てる覚悟で駆けつけた。(二六) アヌーパ(湿地帯、または海岸？)の王である勇士ニーラは、ビーマの親友であり、黒い雲(ニーラ)のように怒ってド

ローナの息子を攻撃した。というのは、この勇士はいつもドローナの息子と張り合っていたのである。(二七) 彼は大弓を引き絞り、矢でドローナの息子を射貫いた。大王よ、昔時インドラが悪魔ヴィプラチッティを射貫いたように。この悪魔は難攻であり、神々を恐れさせ、自分の威光により怒って三界を恐れさせていた。(二八―二九) ニーラにより、鋭い先端の矢で傷つけられて、ドローナの息子は血を流して苦しみ、怒りにかられた。(三〇) 知性ある人々のうちの最上者である彼は、インドラの雷電のような音をたてる美しい弓を引き絞り、ニーラを殺そうと考えた。(三一) それから、研師に磨かれた汚れない矢をつがえて、四頭の馬を殺し、旗を落とした。(三二) そして第七の矢でニーラの胸を射た。ニーラは深々と射貫かれ、苦しんで戦車の座席に座りこんだ。(三三)

雲の群にも似たニーラ王が失神したのを見て、ガトートカチャは怒り、同胞たちに取り巻かれ、戦場で輝くドローナの息子に激しく襲いかかった。同様に、戦いに酔う他の羅刹たちも攻撃した。(三四―三五) 恐ろしい姿の羅刹が襲来するのを見て、威光あるドローナの息子は彼を迎え撃った。(三六) 羅刹たちが怒って、ガトートカチャの先駆けとして襲って来たが、ドローナの息子は猛り立って、恐ろしい姿の羅刹たちを殺した。(三七) ドローナの息子が放つ矢によって彼らが退却するのを見て、ビーマセーナの息子である巨大なガトートカチャは怒った。(三八) 彼は恐ろしい姿の、非常に恐ろしい偉大な幻影（マーヤー）を出現させた。幻力ある羅刹王は、その戦いにおいてドローナの息子を惑わせた。(三九) それから、あなたの軍の兵たちはみな、幻影によって退却させられた。彼らが切られて地面に動かずに倒れ、血にまみれて哀

れな状態でいるのが認められた。(四〇) ドローナ、ドゥルヨーダナ、シャリヤ、アシュヴァッターマンというクル軍の主要な勇士たちも、ほとんど退却した。(四一) すべての戦車兵は壊滅し、象兵は倒され、馬と騎兵は幾千となく断ち切られた。(四二) それを見て、あなたの軍の兵たちは陣営に向かって逃げた。王よ、私とデーヴァヴラタ（ビーシュマ）は叫んだ。(四三)

「戦え。逃げてはいけない。これはガトートカチャが戦いにおいて用いた羅刹の幻術である。」

しかし彼らは惑わされて足を止めなかった。我々二人がそのように告げても、彼らは恐れて、我々の言葉を信じなかったのである。(四四) 彼らが逃げるのを見て、パーンダヴァ軍は勝利し、ガトートカチャとともに獅子吼をした。そして法螺貝と太鼓の大きな音が一斉に鳴り響いた。(四五) このように、あなたのすべての軍隊は、日没ごろ、邪悪なヒディンバーの息子によって破られ、諸方に逃げ去った。(四六)

（第九十章）

サンジャヤは語った。――

その激戦が〔終わった〕時、ドゥルヨーダナ王はビーシュマに近づき、礼儀正しく敬礼し、(一―二) 王よ、無敵の彼は何度もため息をついて語り、そしてクルの祖父ビーシュマに言った。(三)

「敵がクリシュナを頼りにするように、主よ、私はあなたを頼りにして、パーンダヴァたち

と恐ろしい戦争を始めた。(四) 名高い私の十一の軍団は、私とともに、あなたの命令に従う。敵を苦しめる者よ。(五) バラタの虎よ、しかしビーマセーナをはじめとするパーンダヴァたちは、戦いにおいてガトートカチャを拠り所にして私をうち破った。(六) そのことが私の肢体を燃やす。火が乾いた木を燃やすように。敵を苦しめる栄光ある祖父よ、そこで私はあなたの恩寵により、あなたに依存して、あの無敵の羅刹の奴を自ら殺したいと思う。あなたは私にそうさせることができる。(七―八)」

バラタの最上者よ、王の言葉を聞くと、ビーシュマはドゥルヨーダナに次のように告げた。(九)

「クル族の王よ、私の言葉を聞きなさい。お前がどのように行動したらよいか話すから。敵を苦しめる大王よ。(一〇)

わが子よ、敵を制する者よ、戦場ではあらゆる場合、自己を守るべきである。非の打ち所のない者よ、お前は常にダルマ王と戦うべきである。(一一) あるいはアルジュナと、双子と、ビーマセーナと戦うべきである。王は王の法(ダルマ)を前提として王を攻撃する。(一二) 私とドローナとクリパと、ドローナの息子、サートヴァタのクリタヴァルマン、シャリヤ、ソーマダッタの息子(ブーリシュラヴァス)、勇士ヴィカルナ、ドゥフシャーサナをはじめとするお前の勇猛な弟たち……。我々はお前のためにあの強力な羅刹と戦うであろう。(一三―一四) もしあの恐ろしい羅刹の王に対してお前がひどく心配するなら(異本による)、邪悪な彼と戦わせるためにあの男を戦場に派遣しなさい。戦いにおいてインドラに等しいバガダッタ王だ。(一五)」

雄弁なビーシュマは王に以上のように告げると、王の目前でバガダッタに次のように言った。(一六)

「大王よ、戦いに酔うヒディンバーの息子に対して、速やかに進撃せよ。すべての弓取りが見ている前で、努力してあの恐ろしい行為の羅刹を撃退せよ。かつてインドラがターラカ(悪魔の名)を撃退したように。(一七) あなたには神的な武器と勇武とがある。敵を苦しめる者よ。あなたはかつて多くの阿修羅たちと交戦した。(一八) 王中の虎よ、あなたは激戦においてあの羅刹に対抗する者である。王よ、自軍に囲まれてあの羅刹の雄牛を殺せ。(一九)」

軍司令官ビーシュマの言葉を聞いて、彼は獅子吼をして、急いで敵軍に向かって行った。(二〇) 轟く雷雲のような彼が襲来するのを見て、パーンダヴァ軍の勇士たちは猛り立ち、彼を攻撃した。(二一) わが君よ、すなわち、ビーマセーナ、アビマニユ、羅刹ガトートカチャ、ドラウパディーの息子たち、サティヤドゥリティ、クシャトラデーヴァ、チェーディの主、ヴァスダーナ、ダシャールナの王である。バガダッタの方も、スプラティーカという象に乗り、彼らを攻撃した。(二二―二三) それから、パーンダヴァ軍とバガダッタとの間に、凄まじくも恐ろしい戦闘が行なわれた。それはヤマ(閻魔)の王国の人口を増大させた。(二四)(二五―八一略)

(第九十一章)

ビーシュマ、敵軍の殺戮を約する

サンジャヤは語った。――

ところでダナンジャヤ（アルジュナ）は、息子のイラーヴァットが殺されたことを（ビーマから）聞いて、大そう悲嘆に暮れ、蛇のように息を吐いた。（一）王よ、そして戦いの最中、クリシュナに次のように告げた。

「確かに大知者ヴィドゥラは前もってこのことを予見していた。（二）クル族とパーンダヴァたちとの恐ろしい滅亡を。そこであの大知者はドリタラーシトラ王を制止したのだ。（三）この戦争においては、殺されるべきでない多くの勇士たちがクル軍によって殺された。同様に彼らも、我々によって戦場で殺された。（四）最高の人よ、実利（アルタ）のために非難される行為が行なわれた。そのためにこのように親族が滅亡するなら、実利など馬鹿気ている。（五）親族を殺すより無一物で死んだ方がましだ。クリシュナよ、集結した親族を殺して我々は何を得るであろうか。（六）ドゥルヨーダナとシャクニの過失により、またカルナの悪しき助言により、王族（クシャトリヤ）たちは死に赴く。（七）勇士クリシュナよ、王がスヨーダナに王国の半分、あるいは五つの村を要求したのはよいことだったと、私は今にしてわかった。しかしあの邪悪な男はそれに従わなかった。（八）

勇猛な王族たちが大地に横たわっているのを見て、私は大そう自責の念にかられた。王族の職業など馬鹿気ていると。（九）ただ、戦場においてあれらの王族たちが、私のことを無能だと思う（とよくないので）、私はあれらの親族と戦うべきなのだ。クリシュナよ。（一〇）すぐに馬たちをドゥルヨーダナ軍の方へかりたてよ。私は両腕により、この渡りがたい戦いの海を渡るであろう。クリシュナよ、決して時間を無駄にしてはいけない。（一一）」

敵の勇士を殺すクリシュナは、アルジュナにこのように言われて、風のように速い白馬たちをかりたてた。（一二）バーラタよ、その時あなたの軍隊の立てる音は大きかった。月相の変わり目に、風に激しく波立つ海の音のように。（一三）

大王よ、午後になって、ビーシュマとパーンダヴァたちの間で、雨雲のように大音響をあげる戦闘が行なわれた。（一四）王よ、それからその戦いにおいて、あなたの息子たちは、ヴァス神たちがヴァーサヴァ（インドラ）を囲むようにドローナを囲んで、ビーマセーナを攻撃した。（一五）そしてシャンタヌの息子ビーシュマ、最高の戦士クリパ、バガダッタ、スシャルマンは、アルジュナを攻撃した。（一六）そしてクリタヴァルマンとバーフリーカは、サーティヤキを攻撃した。アンバシュタカ王はアビマニユを迎え撃った。（一七）大王よ、そしてその他の者たちはその他の敵の勇士たちを攻撃した。それから、凄まじくも恐ろしい戦闘が展開した。（一八）

王よ、戦場でビーマセーナはあなたの息子を見て怒り、火が供物（バター）により燃え上がるように燃え上がった。（一九）あなたの息子たちは矢でビーマをおおった。雨季に雲が雨で山をおおうように。（二〇）王よ、あなたの息子たちに幾度も矢でおおわれながらも、その虎の

ような誇り高い勇士は、口の端を舐めまわしていた。（二一）王よ、それからビーマは、非常に鋭い馬蹄形の先の矢で、〔あなたの息子〕ヴィユードーラスカを倒した。彼は息絶えた。（二二）そして、別のよく鍛えられた鋭い矢で、クンダリンを倒した。獅子が小動物を倒すように。（二三）わが君よ、更によく鍛えられた鋭い矢をつがえて、彼は速やかにあなたの七名の息子を射た。（二四）剛弓を使うビーマセーナに放たれたそれらの矢は、非常な勇士であるあなたの息子たちを戦車から射落した。（二五）すなわちアナードリシティ、クンダベーダ、ヴァイラータ、ディールガローチャナ、ディールガバーフ、スバーフ、カナカドゥヴァジャ〔が殺された〕。（二六）バラタの雄牛よ、彼ら勇士たちは落下しながら、春に倒れた花で彩られたマンゴーのように輝いていた。（二七）王よ、それからその他のあなたの息子たちは、強力なビーマセーナをカーラ（破壊神）のように考えて逃げ出した。（二八）

その勇士が戦場であなたの息子を燃やしていた時、ドローナは矢ですっかり彼をおおった。雲が大雨により山をおおうように。（二九）そこで我々は、クンティーの息子の驚異的な勇猛さを見た。彼はドローナに制止されながらも、あなたの息子たちを殺したのである。（三〇）雄牛が空から降る雨を受け止めるように、ビーマはドローナに放たれた矢の雨を受け止めた。（三一）大王よ、狼腹（ビーマ）はそこで奇蹟を行なった。その戦いにおいてあなたの息子たちを殺し、同時にドローナと戦ったのである。（三二）大王よ、アルジュナの兄は、あなたの勇猛な息子たちの間で戯れた。強力な虎が鹿たちの間で戯れるように。（三三）あるいは、狼が獣たちの真中にいて獣たちを走らせるように、狼腹も戦場であなたの息子たちを逃走させた。

（三四）（三五—七五略）

バーラタよ、あなたの軍とパーンダヴァ軍は、相互に戦場で攻撃し合って、双方の大軍がそこで壊滅した。（七六）バーラタよ、彼らが疲れ、うち破られ、粉砕された時、恐ろしい夜が来て、それから戦いは見えなくなった。（七七）そして、凄まじくも恐ろしい夜が始まった時、クル側とパーンダヴァ側は軍隊を引きあげさせた。（七八）クル軍とパーンダヴァ軍は、ともに引きあげてから、適切な時刻に、自分たちの陣営に帰った。（七九）

（第九十二章）

サンジャヤは語った。——

大王よ、それからドゥルヨーダナ王、シャクニ、あなたの息子ドゥフシャーサナ、無敵の御者（スータ）の息子（カルナ）は集まって、戦いにおいてパーンドゥの息子たちとそれに従う者たちを、どのようにしたらうち破ることができるかということについて協議をした。（一—二）ドゥルヨーダナ王はカルナと強力なシャクニに向かって話しながら、すべての顧問たちに言った。（三）「ドローナ、ビーシュマ、クリパ、シャリヤ、ソーマダッタの息子は、何故だか理由はわからないが、戦いにおいてパーンダヴァたちに対抗できない。（四）彼らは殺されることなく、私の軍隊を滅ぼしている。カルナよ、戦いにおいて私の軍隊は減少し、武器も減少した。（五）神々によってすら殺されないパーンダヴァの勇士たちは私を侮辱した。そこで私はどのようにして戦いに勝利するかと、疑惑に陥っている。（六）」

大王よ、カルナは彼に告げた。

「バラタの最上者よ、嘆いてはならぬ。私はあなたによいことをしよう。(七) すぐにビーシュマを戦線から引きあげさせなさい。バーラタよ、ビーシュマが武器を収めて戦いから退去すれば、私は戦場でビーシュマの見ている前で、すべてのソーマカ軍とともにパーンダヴァたちを殺すであろう。王よ、私は真実にかけてあなたに誓う。(八―九) 王よ、ビーシュマはいつもパーンダヴァに情けをかけている。ビーシュマは戦いにおいてあの勇士たちをうち破ることはできない。(一〇) ビーシュマは戦いに自信があり、いつも戦いを好む。そこで彼は、どうして戦いにおいて集結したパーンダヴァたちをうち破るであろうか（戦いが終わってしまうから。しかし、テクスト疑問）。(一一) バーラタよ、そこであなたは、すぐにビーシュマの陣営に行き、彼を説得して、武器を収めさせよ。(一二) ビーシュマが武器を収めた時、パーンダヴァたちが殺されるのを見よ。王よ、私一人で戦って、友の群や縁者たちとともに彼らを殺すであろう。(一三)」

カルナにこのように言われて、あなたの息子ドゥルヨーダナは、弟のドゥフシャーサナに告げた。(一四)

「ドゥフシャーサナよ、すべての随行の仕度を、すべからく速やかに整えよ。(一五)」

王よ、王はこのように告げてから、カルナに言った。

「これから私は最高の人であるビーシュマを承知させて、すぐにあなたのもとにもどる。敵を制する人中の虎よ。それからあなたは戦いに勝利するであろう。(一六―一七)」

王よ、それからあなたの息子は、すべての弟たちとともに速やかに出発した。インドラが

神々と行くように。(一八) その時、弟のドゥフシャーサナは、虎のように勇猛なその王中の虎を素早く馬に乗せた。(一九) 大王よ、ドゥルヨーダナ王は腕環をつけ、冠を被り、腕の飾りをつけて、大インドラのように輝いていた。(二〇) 彼はパーンディーの花のような色の、最高に高価で芳香を放つ、金色の栴檀香を塗っていた。(二一) 王は無垢の衣服を着て、獅子が戯れて歩くような足どりで、秋に汚れない光を放つ太陽のように輝いていた。(二二)

(二三―三二略)

それから王は、ビーシュマのすばらしい宿舎に着くと、馬から下りてビーシュマに会った。(三三) そして彼はビーシュマに挨拶してから、最高の座席に座った。その座席は黄金製で、方陣の形（全方位超勝）で、高価な被いにおおわれていた。王は涙で喉をつまらせ、眼に涙を浮かべて、合掌してビーシュマに言った。(三四)

「敵を殺す者よ、我々はこの戦いであなたを拠り所にして、インドラをはじめとする神々や阿修羅たちと戦っても勝利することができる。(三五) いわんや、パーンドゥの息子である勇士たちや、その友の群や縁者たちなど問題ではない。ビーシュマよ、私に情けをかけて下さい。王よ。勇猛なパーンドゥの息子たちを殺して下さい。大インドラが悪魔たちを殺すように。(三六) 勇士よ、あなたは以前にこう言った。私はパーンダヴァたちとともにソーマカ（パンチャーラの一部族）、パーンチャーラ、カルーシャの軍を殺すであろうと。バーラタよ。(三七) その約束を実行して下さい。集結したパーンダヴァたち、ソーマカの勇士たちを殺しなさい。バーラタよ、約束を実行しなさい。(三八) 王よ、もしあなたが［パーンダヴァに対する］憐憫から、

または私に対する憎しみから、あるいはまた私の不運から、パーンダヴァたちを殺さずにいるなら、せめて戦いにおいて輝くカルナが戦うことをお許し下さい。彼は戦場において、パーンダヴァたちとその友の群と縁者たちに勝利するでしょう。(三九―四〇)」

あなたの息子であるドゥルヨーダナ王は、恐ろしく勇猛なビーシュマにこのように告げてから沈黙した。(四一)

(第九十三章)

サンジャヤは語った。——

祖父(ビーシュマ)はあなたの息子によって言葉の槍に深く傷つけられ、大きな苦悩に入り込まれて、ほんのわずかの不快な言葉も言わなかった。(一)彼は非常に長い間考えこんで、苦悩と怒りに満ち、先が尖った棒に刺激された蛇のように息を吐いていた。(二)バーラタよ、その世界を知る人々の最上者は両眼を上げ、神や阿修羅やガンダルヴァを含む世界を、怒りから燃やすかのようであったが、あなたの息子に対して、なだめるような言葉を述べた。(三)

「ドゥルヨーダナよ、どうしてそのように言葉の槍で私を刺すのか。私は力の限り努力し、お前のためになることをしているのに。お前によかれと願って、戦いにおいて生命を投げ出しているのに。(四)(五―一〇略)

何人(なんぴと)が戦いにおいて力ずくでアルジュナを破ることができるか。スヨーダナよ、お前は迷妄により、言うべきことと言うべきでないことを知らない。(一一)死のうとしている人はすべての樹を黄金でできていると見る。ドゥルヨーダナよ、同様にお前もすべてをあべこべに見る。(一二)お前は自らパーンダヴァやスリンジャヤ(パーンチャーラの一部族)たちと激しい怨恨を作り出したから、今、彼らと戦場で戦え。我々は見ている。男らしくなれ。(一三)人中の虎よ、私は集結したすべてのソーマカとパーンチャーラの軍を殺すであろう。ただし、シカンディンは除く。(一四)私は戦いで彼らに殺されてヤマ(閻魔)の住処に行くか、あるいは彼らを殺してお前に喜びを与えるか、どちらかである。(一五)以前、シカンディンは女性として王宮に生まれた。その女性のシカンディニーが、願いをかなえられて男になったのである。(一六)バーラタよ、私は生命を捨てても彼女を殺さない。彼は前に女性のシカンディニーとして創造神に創(つく)られたのだから。(一七)ドゥルヨーダナよ、安楽に眠りなさい。明日、私は激しい戦いをするであろう。大地が存続する限り、人々が語りつぐような。(一八)」

王よ、あなたの息子はこのように言われて退出した。彼は頭を下げて目上(グル)におじぎをして、自分の宿舎に引きあげた。(一九)帰ってから王は、大勢の従者を去らせ、すぐに宿舎に入った。そして敵を滅ぼす王は宿舎に入ってその夜を過ごした。(二〇)

(第九十四章)

全方位超勝(サルヴァトーバドラ)の陣形

サンジャヤは語った。——

翌日、夜が明けた時、王は起床して、王の軍隊に「戦闘の準備をせよ」と告げた。

「今日、ビーシュマは戦いにおいて怒り、ソーマカ軍を殺すであろう。(一)」

王よ、夜にドゥルヨーダナがひどく嘆いているのを聞いたので、ビーシュマはそれが自分に対する命令であるかのように考えた。(二)ビーシュマはこの上ない厭離にとらわれたが、他人に〔臆病だと〕非難されることを厭い、戦場でアルジュナと戦うことを望んで長いこと考え込んでいた。(三)大王よ、ビーシュマが考えていることをその素振りにより知り、ドゥルヨーダナはドゥフシャーサナをうながした。(四)

「ドゥフシャーサナよ、ビーシュマを守る戦車を速やかに準備せよ。二十二のすべての軍隊を急がせよ。(五)今や長年の間考えて来たことが実現する。パーンダヴァ軍の滅亡と、王国が我らに帰するということが。(六)その場合、まさにビーシュマを守ることがなすべきことだと私は考える。彼は我々に守られたら幸せをもたらし、戦いにおいてパーンダヴァたちを殺すであろう。(七)その心の清い人が言った。

『私はシカンディンを殺さないであろう。彼は以前、女として生まれたから。それ故、私は戦いに際し彼を避ける。(八)勇士よ、父に喜ばれようとして私はかつて繁栄する王国を捨て、妻女を娶ることをやめた。そのことは世の人々が知っている。(九)最高の人よ、そして私は決して戦いにおいて女性を殺さないし、前に女性であった者を殺さない。私はこの真実をお前に述べる。(一〇)王よ、このシカンディンは前に女性であった。お前も聞いたであろう。戦争の前〔「努力」の巻〕において語ったように、彼女はシカンディニーとして生まれた。(一一)彼女は娘であったが、男性となった。バーラタよ、彼は戦うであろうが、私は彼に向かって決し

て矢を放たない。(一二)わが子よ、戦場でパーンダヴァの勝利を願う王族たちが、私の矢の射程に入ったら、私はすべてを殺すであろう。(一三)』

教典を知るバラタの最上者ビーシュマは私にこのように告げた。そこで全身全霊でビーシュマを守るべきだと私は考える。(一四)何となれば、大森林において、獅子といえども守られなければ、狼はこれを殺すであろう。狼のようなシカンディンによって、虎のようなビーシュマを殺させてはならぬ。(一五)母方の叔父シャクニ、シャリヤ、クリパ、ドローナ、ヴィヴィンシャティたちはビーシュマを守れ。彼が守られたら勝利は確実である。(一六)」

王たちはドゥルヨーダナの言葉を聞くと、戦車の群でビーシュマをすっかり取り囲んだ。(一七)あなたの息子たちはビーシュマを取り巻いて喜んで進軍した。天地を震動させ、パーンダヴァ軍を戦慄させて。(一八)勇士たちは鎧を着て、装備を整えた戦車や象たちによってビーシュマを囲んで、戦場に立っていた。(一九)神々と阿修羅たちの戦いにおいて、神々がインドラを守るように、彼らはすべてその勇士を守りつつ立っていた。(二〇)

それから、ドゥルヨーダナ王は再び弟に言った。

「ユダーマニユがアルジュナの戦車の左の車輪を、ウッタマウジャスが右の車輪を守っている。(二一)一方アルジュナはシカンディンを守っている。ドゥフシャーサナよ、シカンディンがアルジュナに守られ、我々に放置されて、ビーシュマを殺すことのないようにしてくれ。(二二)」

あなたの息子ドゥフシャーサナは、兄のその言葉を聞くと、ビーシュマを先頭にして、軍

隊とともに進んだ。（二三）戦車群に囲まれたビーシュマを見て、最高の戦士アルジュナはドリシタデュムナに言った。（二四）

「人中の虎よ、非の打ち所のないパーンチャーラの王よ、今日はシカンディンをビーシュマに立ち向かわせよう。私は彼を守る。（二五）」

それから、ビーシュマは軍隊とともに出撃した。彼はその戦いにおいて、全方位超勝（サルヴァトーバドラ）（陣方）という強力な陣形を布いた。（二六）クリパ、クリタヴァルマン、偉大な戦士シビ国王、シャクニ、シンドゥ国王、カーンボージャの王スダクシナは、バーラタよ、ビーシュマとあなたの息子たちとともに、全軍の先頭、陣形の前衛にいた。（二七—二八）わが君よ、ドローナ、ブーリシュラヴァス、シャリヤ、バガダッタは、鎧を着て、その陣形の右翼にいた。（二九）アシュヴァッターマン、ソーマダッタ、アヴァンティの二名の勇士は、大軍を率いて、左翼を守っていた。（三〇）バラタ族の大王よ、ドゥルヨーダナは、トリガルタの軍にすっかり囲まれて、その陣形の中央にいてパーンダヴァ軍に対峙していた。（三一）最高の戦士アランブサと勇士シュルターユスは鎧を着て、その陣形の〔後衛〕、全軍の殿（しんがり）にいた。（三二）バーラタよ、あなたの軍隊は武装し、このように陣形を整えて、燃え上がる火のように見えた。（三三）

一方、パーンダヴァのユディシティラ王、ビーマセーナ、マードリーの双子であるナクラとサハデーヴァは鎧を着て、その陣形において全軍の先頭にいた。（三四）敵軍を滅ぼすドリシタデュムナ、ヴィラータ、勇士サーティヤキは、大軍とともにいた。（三五）シカンディン、

ヴィジャヤ、羅刹ガトートカチャ、強力なチェーキターナ、強力なクンティボージャは、戦場において、大軍に囲まれていた。大王よ。（三六）勇士アビマニユ、偉大な戦士ドルパダ、ケーカヤの五人の兄弟は、鎧を着て戦闘の準備をしていた。（三七）わが君よ、このようにパーンダヴァの勇士たちも、戦場で、うち破りがたい強力な陣形を布いて、戦闘の準備をしていた。（三八）

王よ、あなたの軍の諸王は軍隊を率いて、努力して戦い、ビーシュマを先頭にしてパーンダヴァたちに襲いかかった。（三九）王よ、同様にパーンダヴァたちも、ビーマセーナを先頭として、戦いを望むビーシュマを戦場でうち破りたいと望んだ。（四〇）（四〇—四三略）

それから、戦士たちはお互いに駆け寄って交戦した。そして大音響によって大地は震動した。（四四）鳥たちは非常に恐ろしい叫び声をあげて飛びまわった。昇った時は輝いていた太陽も、その輝きを失った。（四五）非常に大きな危険を告げる激風が吹いた。大王よ、恐ろしいジャッカルどもが、来るべき大殺戮を告げて、恐ろしい声で叫んだ。（四六）王よ、諸方は燃え上がり、ほこりの雨が降った。また、血が混じった骨の雨が降った。（四七）王よ、泣く象や馬の眼から涙が落ちた。王よ、それらの動物はもの思いにふけり、糞尿を垂れ流した。（四八）バラタの雄牛よ、恐ろしい叫びをあげている人食い羅刹たちの大声が聞こえるが、声の主たちの姿は見えなかった。（四九）ジャッカル、鷲（バカ）（異本では「禿鷲」）、鴉、犬たちが多様な声で鳴いて、そこに集まっているのが認められる。（五〇）燃え上がる大流星が太陽に衝突し、激しく地面に落下した。それは大なる危険を告げるものである。（五一）大戦争において、パーンダ

ヴァ軍とドゥルヨーダナ軍との会戦において、両方の大軍は、法螺や太鼓の音によって戦慄していた。森々が風によってふるえるように。(五二) 諸王と象と馬に満ちた軍隊が、不吉な刻限に対決する時、その音は凄まじいものであった。風で波立つ海の音のように。(五三)

(第九十五章)

アビマニユ、羅刹アランブサを破る

サンジャヤは語った。——

威光ある最高の戦士アビマニユは、褐色の最上の馬たちにひかれ、雲が大雨を降らせるように矢の雨を注ぎつつ、ドゥルヨーダナの大軍に襲いかかった。(一) その敵を殺すアビマニユが怒って、武器の激流を持つ無尽の軍隊の海に飛び込んだ時、戦場で、あなたの側のクルの雄牛たちは彼を制止することもできなかった。(二) 王よ、戦場で彼に放たれる、敵を殺す矢は、勇猛な王族たちを死王の住処に送った。(三) アビマニユは猛り立って、その戦いにおいて、ヤマ(閻魔)の杖(ダンダ)のように恐ろしい、燃火(ねんか)か毒蛇のような矢を放った。(四) アルジュナの息子(アビマニユ)は速やかに、戦車から戦車兵を、馬の背から騎兵を射落とし、また象に乗る象兵を射落とした。(五) アビマニユが戦場においてその偉大で驚異的な行為を行なっていた時、諸王は喜んで彼を称讃した。(六)(七—二〇略)

わが君よ、月相の変わり目に、風に激しく波立つ海の音のような、あなたの軍隊の恐ろし

い嘆声を聞いて、ドゥルヨーダナ王はリシャシュリンガの息子(羅刹アランブサ)に告げた。(二一)

「あのアビマニユはもう一人のアルジュナのように、怒ってわが軍を敗走させる。ヴリトラが神軍を敗走させるように。(二二) 最高の羅刹よ、戦いにおいて彼を鎮める有効な薬は、一切の術に通じたあなた以外には認められない。(二三) そこで急いで行って、戦いにおいて勇士アビマニユを殺せ。我々はビーシュマとドローナを先頭に立て、プリター(クンティー)の息子たちを殺すであろう。(二四)」

栄光ある強力な羅刹王はこのように言われて、あなたの息子の命令を受けてすぐに戦場に行った。雨季の雲のように、大声で叫びながら。(二五) 王よ、彼の大音声により、パーンダヴァの大軍は満潮の海のように一面に動揺した。(二六) 王よ、そして多くの人々が、彼の叫び声に戦慄し、愛しい生命を捨てて大地に倒れた。(二七)

アビマニユの方も喜び勇み、弓をとって、戦車の座席で踊るかのように、その羅刹に襲いかかった。(二八) それからその羅刹は怒り、戦場でアビマニユに近づき、彼の近くに立って、彼の軍隊を敗走させた。(二九) パーンダヴァの大軍は、戦場で殺されつつも、その羅刹に対し反撃した。神軍がバリに反撃するように。(三〇) わが君よ、その戦いで恐ろしい姿の羅刹に殺される彼の軍隊の損失は非常に大きいものであった。(三一) それからその羅刹は、戦場で勇武を披露し、幾千もの矢でパーンダヴァの大軍を敗走させた。(三二) パーンダヴァ軍の兵士たちは、そのように恐ろしい姿の羅刹に殺されつつ、恐れて戦場を逃げまわった。(三三)

その羅刹は、象が蓮池を潰すように敵軍を粉砕してから、強力なドラウパディーの（五名の）息子たちに戦いを挑んだ。(三四) ドラウパディーの息子である勇猛な戦士たちは怒り、五惑星が太陽を襲うように、みなして羅刹を攻撃した。(三五) その最高の羅刹は、強力な彼らに苦しめられた。恐ろしい宇宙紀の終末に、月が五惑星に苦しめられるように。(三六) それから強力なプラティヴィンディヤが先の尖った鉄製の鋭い矢で速やかに羅刹を射貫いた。(三七) その最高の羅刹は、それらの矢で鎧を貫かれ、太陽の光線で貫かれた大雲のように輝いていた。(三八) 王よ、黄金で飾られた矢が刺さり、リシャシュリンガの息子（アランブサ）は、燃える峰々を持つ山のように輝いていた。(三九)

それから、五名の兄弟は、その激戦において、黄金で飾られた鋭い矢で羅刹王を射貫いた。(四〇) 王よ、怒った蛇のような恐ろしい矢で貫かれたアランブサは、竜王のようにひどく怒った。(四一) わが君よ、勇士たちに長く苦しめられ、ひどく傷つけられて、彼はしばらくの間気を失っていた。(四二) 大王よ。それから彼は意識を取りもどし、怒りを倍加させ、矢で彼らの旗と弓を断ち切った。(四三) そして勇士アランブサは、戦車の座席で踊るかのように、笑うかのように、三本の矢で一人一人を射た。(四四) そしてその強力な羅刹は怒り狂い、速やかに偉大な彼らの馬と御者を殺した。(四五) そして更に、彼は喜び勇んで、幾百幾千の多様な形の鋭い矢によって彼らを貫いた。(四六) その夜行の羅刹は勇士たちの戦車を破壊してから、彼らを殺そうと考えて、激しく襲いかかった。(四七)

彼らが邪悪な羅刹に苦戦しているのを見て、アルジュナの息子（アビマニユ）はその羅刹に戦いを挑んだ。(四八) 両者の間に、ヴリトラとインドラとの戦いのような戦いが行なわれた。あなたの軍とパーンダヴァ軍のすべての勇士たちはそれを見物した。(四九) 大王よ、その強力な両者は激戦において対峙し、お互いに怒りに燃え、怒りで眼を赤くして、終末の火のように戦場で睨み合っていた。(五〇) 両者の交戦は恐ろしく猛烈で、神々と阿修羅たちの戦いにおける、インドラとシャンバラの交戦のようであった。(五一)

（第九十六章）

ドリタラーシトラはたずねた。

「サンジャヤよ、戦場で勇士を殺す勇猛なアルジュナの息子（アビマニユ）に対し、アランブサはどのように対抗して戦ったか。(一) そして、敵の勇士を殺すアビマニユは、どのようにしてアランブサに対して戦ったか。戦場において起こった通りに、それをありのままに私に告げてくれ。(二) そしてサンジャヤよ、アルジュナは私の軍隊に対してどのように行動したか。また、最高の強者ビーマは、あるいは羅刹のガトートカチャは……。(三) またナクラとサハデーヴァは、勇士サーティヤキは……。以上をすべて私に語ってくれ。サンジャヤよ、そなたは巧みに語るから。(四)」

サンジャヤは語った。――

おお、わが君よ、羅刹王とアビマニユとの間の、身の毛がよだつ戦闘について、私はあな

たに語るであろう。(五)そして、パーンダヴァのアルジュナ、ビーマセーナ、ナクラ、サハデーヴァが、戦場でどのような勇武をなしたかを。(六)そしてまた、ビーシュマとドローナをはじめとするあなたの軍のすべての戦士たちが、恐れることなく、どのようなめざましい驚異的な働きをしたかを。(七)

ところでアランブサは、戦場で非常に大きな雄叫びをあげて、繰り返し勇士アビマニユを威してから、「待て、待て」と言って激しく襲いかかった。(八)王よ、アビマニユも戦場で何度も獅子吼して、父の宿敵である勇士アランブサを攻撃した。(九)それから、最高の戦士である人間と羅刹は、神と悪魔のように、戦車によって速やかに交戦した。最高の羅刹は幻力(マーヤー)をそなえ、アルジュナの息子は神的な武器に通じていた。(一〇)大王よ、それからアビマニユは、その戦いにおいて、三本の鋭い矢でアランブサを貫いて、更に五本の矢で射貫いた。(一一)アランブサも怒り、九本の矢でアビマニユの胸を激しく射貫いた。〔御者が〕突き棒で巨象を突くように。(一二)バーラタよ、それからその手練の早業の羅刹は、その戦いにおいて、幾千の矢でアルジュナの息子を苦しめた。(一三)そこでアビマニユは怒り、九本の鋭い真っ直ぐの矢で、羅刹王の広い胸を射貫いた(異本による)。(一四)それらの矢は、速やかに彼の身体を切り開いて、急所に入った。王よ、その最高の羅刹は、全身を矢で貫かれ、花咲くキンシュカ樹におおわれた山のように輝いていた。(一五)その強力な最高の羅刹は、金の羽根のある矢を帯びて、燃え上がる山のように輝いていた。(一六)大王よ、それから強力なアランブサは怒り、大インドラのようなアビマニユを矢でおおった。(一七)彼に放たれたヤマ(閻魔)の杖(ダンダ)のような鋭い矢は、アビマニユを貫通して大地に入った。(一八)同様に、アビマニユに放たれた、黄金で飾られた矢は、アランブサを貫通して大地に入った。(一九)しかるに、アビマニユはその戦いにおいて、真っ直ぐの矢によって相手を退却させた。戦場でインドラがマヤ(阿修羅の名)を退却させたように。(二〇)それから、敵を苦しめる羅刹は退却し、戦場で敵に攻撃されつつも、闇(タマス)をもたらす偉大な幻力(マーヤー)を現わした。(二一)王よ、それからすべての者は闇におおわれ(異本による)、アビマニユも、敵味方も見分けられなかった。(二二)しかし、アビマニユはその恐ろしい大いなる闇を見て、非常に恐ろしい太陽の武器を現出させた。(二三)王よ、それから全世界は再び明るくなった。こうして彼は邪悪な羅刹の幻術を消滅させた。(二四)そしてその強力な最高の男は怒り、その戦いにおいて、羅刹王を真っ直ぐの矢でおおった。(二五)その羅刹は多様な幻術を用いたが、すべての武器に通じた限りなく高邁なアビマニユはそれらを抑止した。(二六)幻術を破られた羅刹は、矢で撃たれ、その場で戦車を捨て、恐怖にかられて逃げ出した。(二七)その詐術により戦う羅刹がうち破られた時、アビマニユは戦場で速やかにあなたの軍隊を粉砕した。〔発情してこめかみから〕液を流して眼が見えなくなった森の象王が、蓮池を粉砕するように。(二八)

それからビーシュマは、自軍が敗走するのを見て、戦車の大集団でアビマニユを取り囲んだ。(二九)ドリタラーシトラ軍の大勢の勇士たちは、その一人の勇士を取り囲み、戦場において、矢でひどく傷つけた。(三〇)しかしその勇士は、父(アルジュナ)に等しく勇猛で、勇武と力にかけてクリシュナに等しかった。すべての戦士のうちの最高者である彼は、敵の戦士たち

に対し、戦場において、父と母方の叔父との両者にふさわしい多くの働きをした。(二一―二二)王よ、それからアルジュナは、あなたの軍の兵士たちを殺しつつ、戦場で息子を探し求め、猛り立ってビーシュマに近づいた。(二三)王よ、そしてあなたの父デーヴァヴラタ(ビーシュマ)もまた、戦場でアルジュナに近づいた。ラーフ(日食、月食を起こす悪魔)が太陽に近づくように。(二四)王よ、それからあなたの息子は、戦車兵と象兵と騎兵を率いて、戦場でビーシュマを取り巻き、ぐるりとまわりを固めた。(二五)王よ、同様に武装したパーンダヴァ軍もアルジュナを取り巻き、激しい戦いに専念した。バラタの雄牛よ。(二六)(二七―五七略)(第九十七章)

パーンダヴァ軍の優勢

ドリタラーシトラはたずねた。

「偉大な射手ドローナとパーンドゥの息子のアルジュナという二人の勇士は、戦場でどのように交戦したか。サンジャヤよ、それを私に語ってくれ。(一)というのは、アルジュナは常に聡明なドローナにとって愛しく、師匠(ドローナ)も常にアルジュナにとって愛しいから。サンジャヤよ。(二)その二人の戦士は腕自慢で、獅子のように強力である。そのドローナとアルジュナは、戦場でどのように交戦したか。(三)」

サンジャヤは語った。――

ドローナは戦場では、アルジュナが自分にとって愛しいとは考えない。またアルジュナも、王族(クシャトリヤ)の法(ダルマ)を前提として、戦場で師のことを愛しいとは思わない。(四)王よ、王族というものは、戦いにおいては、お互いに相手を例外とすることはない。例外なく、父や兄弟たちとも戦う。(五)

バーラタよ、その戦いにおいて、アルジュナは三本の矢でドローナを射た。しかしドローナは戦場で、それらの矢がアルジュナの弓から放たれたとは考えなかった。(六)アルジュナはその戦いにおいて、再びドローナを矢の雨でおおった。ドローナは森で燃え上がる火のように怒りで燃え上がった。(七)バラタ族の王中の王よ、それから直ちにドローナは戦場において、真っ直ぐの矢でアルジュナをおおった。(八)王よ、それからドゥルヨーダナ王は、その戦いにおいてドローナを後援するようにスシャルマンをうながした。(九)そのトリガルタの王は、非常に猛り立って弓を引き絞り、戦場において、鉄の鏃(やじり)を持つ矢でアルジュナをおおった。(一〇)偉大な王よ、その両者によって放たれた矢は、秋空におけるハンサ(鵞鳥の一種)のように、空中で輝いていた。(一一)王よ、すべての矢はアルジュナに達して体内に入った。鳥たちが果実の重みでたわむ美味の樹木に達して入り込むように。(一二)最高の戦士アルジュナは戦場で雄叫びをあげて、トリガルタの王とその息子を矢で射貫いた。(一三)終末のカーラ(破壊神)のようなアルジュナに撃たれながらも、彼らは決死の覚悟で、アルジュナのみを攻撃した。そしてアルジュナの戦車に向けて矢の雨を降らせた。(一四)王中の王よ、しかしアルジュナは矢の雨によってその矢の雨を受け止めた。山が雨を受け止めるように。(一五)

そこで我々はアルジュナの驚異的な手練の早業を見た。というのは、彼は一人で、大勢の勇士が放った抗しがたい矢の雨を制止したのである。風が雲の群を制するように。アルジュナのその行為によって、神々や魔類は喜んだ。(一六―一七)

バラタ族の大王よ、怒ったアルジュナは、その戦いの最中、トリガルタ軍に向けてヴァーユ(神風)の武器(ヴァーヤヴィヤ)を放った。(一八)すると風が生じて、虚空を動揺させ、多くの樹木を倒し、兵士たちを殺害した。(一九)大王よ、ドローナは非常に恐るべきヴァーユの武器を見て、シャイラ(「山」という意)という別の恐ろしい武器を放った。(二〇)その激戦において、ドローナがその武器を放った時、風は鎮まり、諸方は清明になった。(二一)それから勇猛なパーンドゥの息子は、トリガルタの戦車兵の群の気力を失わせ、勇猛さを失わせ、戦場から退却させた。(二二)(二三―二七略)

勇猛な狼腹ビーマは襲来する象軍を見て、森の中の獣王のように口の端を舐めまわした。(二八)その激戦においてその最高の戦士は棍棒を持ち、速やかに戦車から飛び下りて、あなたの軍の兵士たちを恐れさせた。(二九)棍棒を手にしたビーマセーナを見て、戦場においてあなたの象兵たちは身構えて、彼のまわりをすっかり取り囲んだ。(三〇)象たちに取り巻かれて、ビーマは輝いた。雲の大群の中にある太陽のように。(三一)それからパーンダヴァの雄牛は、棍棒によって象兵を粉砕した。あたかも風が広がる比類なき雲の大群を吹き散らすように。(三二)象たちは強力なビーマセーナに殺されつつ、雲が轟くように、戦場で悲痛な叫び声をあげた。(三三)あなたの象たちによって多くの傷を負ったビーマは、その激戦にお

いて、花咲くキンシュカ樹のように輝いていた。(三四)彼は象の牙をつかんで、象から牙を奪い取った。そしてその牙で象の額の隆起を撃って、戦場において象を倒した。彼はさながら杖(ダンダ)を持った死神(アンタカ)のようであった。(三五)彼は血にまみれた棍棒を持ち、脂肪と髄で輝き、朱(あ)けに染まり(異本による)、ルドラのように見えた。(三六)王よ、あなたの巨象たちはこのようにして殺され、生き残ったものたちは、自軍を踏みつぶして諸方に逃げた。(三七)バラタの雄牛よ、巨象たちが全面的に逃走したので、ドゥルヨーダナの全軍は再び退却した。(三八)

(第九十八章)

ビーシュマの活躍

サンジャヤは語った。――

大王よ、正午ごろビーシュマとソーマカ軍との間に、世界を滅ぼすような恐ろしい戦闘が行なわれた。(一)最高の戦士ビーシュマは、幾百幾千の鋭い矢で、パーンダヴァ軍の兵士たちを殺した。(二)あなたの父デーヴァヴラタ(ビーシュマ)は、牛の群が切られた穀物の堆積を粉砕するように敵軍を粉砕した。(三)ドリシタデュムナ、シカンディン、ヴィラータ、ドルパダは、勇士ビーシュマに戦いを挑み、矢で攻撃した。(四)それからビーシュマはドリシタデュムナとヴィラータを三本ずつの矢で射て、ドルパダに対して鉄矢を放った。(五)王よ、敵を悩ますビーシュマに射られて、勇士たちは、足で蹴られた蛇のように怒った。(六)シ

カンディンはバラタ族の祖父を射た。しかし不屈な男（ビーシュマ）は、相手は女性だと考えて彼を攻撃しなかった。（七）一方ドリシタデュムナは、戦場で怒って火のように燃え、三本の矢で祖父の両腕と胸を射た。（八）ドルパダは二十五本の矢、ヴィラータは十本の矢、シカンディンは二十五本の矢によりビーシュマを射貫いた。（九）大王よ、ビーシュマはその戦いにおいて、偉大な者たちにひどく傷つけられて、春に花が咲き乱れる赤いアショーカ樹のように輝いた。（一〇）ビーシュマは真っ直ぐに飛ぶ三本ずつの矢を彼らに射返した。そして半月形の先の矢でドルパダの弓を切断した。わが君よ。（一一）ドルパダは他の弓をとり、五本の矢でビーシュマを射た。そしてその激戦において、三本の鋭い矢で御者を射た。（一二）それから大王よ、ビーマ、ドラウパディーの五人の息子たち、ケーカヤの五人の兄弟、サートヴァタのサーティヤキは、ドリシタデュムナを先頭として（異本による）、ユディシティラのためになることを願い、パーンチャーラ国王（ドルパダ）を守ろうと望んで、ビーシュマに戦いを挑んだ。（一三―一四）王よ、同様にあなたのすべての戦士も、ビーシュマを守るべく身構えて、軍隊を率いてパーンダヴァの軍隊を攻撃をした。（一五）かくてあなたの軍と彼らの軍の間に、人間と馬と戦車と象が入り乱れた大激戦が行なわれた。それはヤマ（閻魔）の王国の人口を増大させるものであった。（一六）（一七―三八略）

そこで王族（クシャトリヤ）たちはその大殺戮を見て叫んだ。

「ドゥルヨーダナの過失によりクル族は滅びる。（三九）貪欲に迷った邪悪なドゥルヨーダナ王は、どうして美質に満ちたパーンドゥの息子たちに敵意を抱いたのか。（四〇）」

バーラタよ、このようにパーンダヴァを讃えあなたの息子たちに手厳しい多様な言葉が聞かれた。（四一）その時、すべての兵士が発する言葉を聞いて、全世界に罪を犯すあなたの息子は、ビーシュマ、ドローナ、クリパ、シャリヤに告げた。バーラタよ。

「我執なく戦いなさい。どうしてぐずぐずしているのか。（四二―四三）」

それから、クル軍とパーンダヴァ軍との間に戦闘が行なわれた。王よ、それは賭博がもたらした、滅亡を引き起こす非常に恐ろしい戦いである。（四四）あなたはかつて偉大な人々に制止されてもやめなかった。ヴィチトラヴィーリヤの息子よ、見よ。その結果がこのようになったのだ。（四五）王よ、パーンドゥの息子たちは、その兵士たち、従者たちとともに、この戦いにおいて命を惜しまない。クル族の人々も同様である。（四六）それ故に恐ろしい殺人が行なわれている。運命により、またあなたの悪い政策により。人中の虎である王よ。（四七）

（第九十九章）

サンジャヤは語った。――

人中の虎よ、アルジュナはスシャルマンに従う諸王を、鋭い矢で死王の住処に送った。（一）それからスシャルマンは、その戦いにおいて、矢でアルジュナを射貫いた。彼は七本の矢でクリシュナを、九本の矢でアルジュナを射た。（二）インドラの息子である勇士は、矢の群によりそれらを抑止して、その戦いでスシャルマンの戦士たちをヤマ（閻魔）の住処に送っ

た。(三) 王よ、宇宙紀(ユガ)の終末におけるカーラ(破壊神)のようなアルジュナに殺されつつ、恐怖が生じ、偉大な戦士たちは戦場で逃げまどった。(四) (五—八略)
王よ、その軍隊が逃げるのを見て、あなたの息子ドゥルヨーダナは、戦場でビーシュマを先頭にして、全軍を率いて、トリガルタ国王の命を救うためにあらゆる努力をして、激しい勢いでアルジュナに襲いかかった。(九—一〇) 彼だけがすべての弟たちとともに、多様な矢を放ちつつ戦場に残った。その他の人々は逃走した。(一一)
王よ、まったく同様に、パーンダヴァたちも鎧を着て、アルジュナのためにあらゆる努力をして、ビーシュマのいる所に行った。(一二) 戦闘におけるアルジュナの恐るべき勇武は知ってはいたが、彼らは「わあ、わあ」という声を出して気勢をあげ、みなしてビーシュマのもとに行った。(一三) それから、棕櫚の旗標を持つ勇士(ビーシュマ)は、戦場で、真っ直ぐの矢でパーンダヴァ軍をおおった。(一四)
大王よ、それから太陽が中天に達した時、すべてのクル軍はパーンダヴァ軍と一塊になって戦った。(一五) (一六—二六略)
王よ、勇士サーティヤキはクリタヴァルマンを制圧してから、多様な矢で祖父(ビーシュマ)を攻撃した。(二七) 彼は羽根のついた鋭い六十本の矢でビーシュマを射て、戦車の座席で大弓を揺すって踊るかのようであった。(二八) 祖父は彼に向けて鉄製の大槍を投げた。それは黄金できらびやかに飾られ、高速で、竜女のような美しい槍であった。(二九) 死神のような鋭い切っ先の槍が激しく落下した時、誉れ高いヴリシュニの勇士(サーティヤキ)は、手練の早業によりそれを破壊した。(三〇) その最高に恐ろしい槍は、サーティヤキに届かず、輝きを失った大流星のように地面に落ちた。(三一) 王よ、それからサーティヤキは恐ろしい自分の槍をとって、祖父の大戦車に向けて激しい勢いで投げた。(三二) 激戦においてサーティヤキの剛腕により投じられたその槍は、猛烈な勢いで飛んだ。終末の夜が人間に訪れるように。(三三)
バーラタよ、ビーシュマは激しく落下するその槍を二本の鋭い馬蹄形の先の矢で二様に切断した。それは地面に散乱した。(三四) 敵を悩ますビーシュマはその槍を切断してから、猛り立ち、笑い、九本の矢でサーティヤキの胸を撃った。(三五) パーンドゥの兄よ、そこでパーンダヴァたちは、戦車兵と象兵と騎兵を率いて、サーティヤキを救うために、戦場でビーシュマを取り囲んだ。(三六) それから、戦いに勝利することを望むパーンダヴァ軍とクル軍との間に、身の毛がよだつ激戦が行なわれた。(三七)

(第百章)

サンジャヤは語った。——
大王よ、夏の終わり(雨季の始まり)に太陽が雲に囲まれるように、猛り立つビーシュマが戦場でパーンダヴァたちに囲まれたのを見て、ドゥルヨーダナはドゥフシャーサナに言った。
「バラタの雄牛よ、あそこに敵を殺す偉大な射手である勇士ビーシュマが、パーンダヴァの勇士たちにすっかり取り囲まれている。勇士よ、お前はあの偉大な人を守るべきである。(一—三) 我々の祖父ビーシュマは、戦場において守られれば、パーンダヴァたちとパーンチャ

ーラ軍を殺すであろうから。(四) まさにビーシュマを守るべきであると私は考える。というのは、我々の祖父である偉大な射手ビーシュマは、我々の守護者であるから。(五) そこでお前はすべての軍隊により祖父を取り巻いて、戦場でなしがたい働きをなしつつ彼を守れ。(六)」

あなたの息子ドゥフシャーサナは、戦場でこのように言われて、大軍に囲まれてビーシュマを守っていた。(七)

それから、スバラの息子(シャクニ)は、百千(十万)の騎兵により、最高の人であるパーンダヴァのダルマ王とナクラとサハデーヴァをぐるりと取り囲んで彼らを制止した。それらの騎兵は、汚れなき投槍を手にし、その他種々の槍を持ち、誇り高く、非常に高速で強力で、軍旗を持ち、訓練された戦いに巧みな最上の人員をそなえていた。(八―一〇) それから、ドゥルヨーダナ王は、パーンダヴァ軍を制圧するために、〔別の〕一万の騎兵を送った。(一一) 王よ、ガルダ鳥のような非常に激しい勢いで戦場に入った馬たちの蹄に打たれた大地は震動し、大音響をあげた。(一二) その時、馬たちのこよなく大きな蹄の音が聞かれたが、それは山の中で燃えている大きな竹林の音のようであった。(一三) そして突進する馬がたてる広大なほこりは、太陽の道(天空)に達して、太陽をおおい隠した。(一四) 激しく突撃するそれらの馬によってパーンダヴァ軍は動揺した。激しい勢いで降下するハンサ(鵞鳥の一種)たちにより大きな湖が動揺するように。そして馬たちがいななく声により、何も聞き分けられなくなった。(一五)

それからユディシティラ王と、マードリーの息子である二人のパーンダヴァ(ナクラとサハデーヴァ)は、

戦場において、騎兵たちの激しい攻撃に対し、速やかに迎撃した。(一六) 雨季で満水となり、満月の日に満潮となった海の水の激しい勢いを、海岸が食い止めるように。大王よ。(一七) それから王よ、その戦士たちは真っ直ぐの矢で騎兵たちの頭を胴体から切り離した。(一八) 大王よ、屈強な弓取りたちに殺されて彼らは倒れた。山の洞窟にいる巨象たちが他の象たちに倒されるように。(一九) 彼らは十方を駆けまわって、鋭い投槍や真っ直ぐの矢で、〔騎兵たちの〕頭を切断した。(二〇) バラタの雄牛よ、騎兵たちは投槍に撃たれ、大樹が果実を落とすようにその頭を落とした(異本による)。(二一) 王よ、あちこちで馬が乗り手とともに殺され、幾百幾千となく倒れ、また倒されつつあった。(二二) 殺されつつある馬たちは、恐怖にかられて逃げ出した。獣たちが獅子に遭遇し、命だけは助かりたいと逃げるように。(二三) 大王よ、パーンダヴァたちは激戦において敵をうち破り、戦場で法螺貝を吹き太鼓を打ち鳴らした。(二四)

バラタの最上者よ、それからドゥルヨーダナは自軍が敗れたのを見て嘆き(異本による)、マドラ国王(シャリヤ)に告げた。(二五)

「強力な伯父よ、あの強力なパーンドゥの長男は、我々が見ている前で、わが軍を敗走させた。(二六) 勇士よ、海岸が海を制止するように、彼を制止しなさい。あなたは非常に抗しがたい力と勇武をそなえていると知られているから。(二七)」

栄光あるシャリヤは、あなたの息子の言葉を聞くと、戦車団を率いて、ユディシティラ王のいる所に行った。(二八) パーンドゥの息子は、洪水のように激しく襲来するシャリヤの大

軍を戦場で制止した。(一九) そして勇士ダルマ王は、戦場において、速やかに十本の矢でマドラ国王の胸の間を射た。ナクラとサハデーヴァも、三本ずつの矢で射た。(二〇) マドラ国王も、三本ずつの矢で彼らを射た。そして更に、六十本の鋭い矢でユディシティラを射た。そして激したナクラとサハデーヴァを、二本ずつの矢で射た。(二一) それから、敵を滅ぼす勇士ビーマは、戦場でユディシティラ王が死神の口に入ったかのようにマドラ国王の支配下に帰したのを見て、ユディシティラのもとに駆けつけた。(二二) それから、太陽が西の方に達して輝いている時、こよなく凄まじく恐ろしい戦闘が行なわれた。(二三)（第百一章）

怒ってビーシュマに挑むクリシュナ

サンジャヤは語った。——

それから、あなたの父（ビーシュマ）は怒り、戦場において、鋭い最高の矢でパーンダヴァたちとその軍隊を全面的に攻撃した。(一) 彼はビーマを十二本の矢で貫き、サーティヤキを九本の矢で、ナクラを三本の矢で、サハデーヴァを七本の矢で貫いた。(二) そして十二本の矢で、ユディシティラの両腕と胸を射た。それからドリシタデュムナを射貫いて、その勇士は雄叫びをあげた。(三) ナクラは六本の矢で、サーティヤキは三本の矢で、ドリシタデュムナは七十本の矢で、ビーマセーナは五本の矢で、ユディシティラは十二本の矢で、それぞれ祖父（ビーシュマ）を射た。(四) 一方ドローナは、サーティヤキとビーマセーナを、それぞれヤマ（閻魔）の杖(ダンダ)のような鋭い十二本の矢で射た。(五) その二人は、それぞれ三本の矢で、バラモンの雄牛であるドローナを射た。(六) サウヴィーラの軍、キタヴァの軍、東部の軍、西部の軍、北部の軍、マーラヴァの軍、アビーシャーハの軍、シューラセーナの軍、シビの軍、ヴァサーティの軍は、鋭い矢で殺されつつも、ビーシュマと戦うことをやめなかった。(七) 同様に、わが軍も偉大なパーンダヴァたちに殺されつつも、種々の武器を持って彼らを攻撃した。王よ、そしてパーンダヴァたちは祖父を取り囲んだ。(八) 無敵の彼は戦車の群にぐるりと取り囲まれたが、森の中に放置された火のように、敵を焼きつつ燃え上がった。(九) 彼の戦車は聖火室である。弓が火焔である。刀と槍と棍棒が薪である。矢が火花である。それらを持つビーシュマという火は、王族(クシャトリヤ)の雄牛たちを焼いた。(一〇) 彼は金の矢筈で禿鷲の羽根のついた、鋭い切っ先の矢により、その他種々の矢により、敵軍をおおった。(一一) 彼は鋭い矢で、騎兵と戦車兵を倒した。そして戦車隊を、葉がなくなった椰子の林のようにした。(一二) 王よ、すべての戦士たちのうちの最上者であるその勇士は、その戦いにおいて、戦車や象や馬を無人のものとした。(一三) バーラタよ、彼の弓弦が弓籠手(ゆごて)にあたる雷鳴のような音を聞いて、すべての生き物は戦慄した。(一四) バラタの雄牛よ、あなたの父の矢は外れることはない。ビーシュマの弓から放たれた矢は鎧に刺さったままでなく〔貫通した〕。(一五) 大王よ、駿馬たちにひかれる戦車が、乗り手の勇士たちを殺され、戦場を走りまわっているのを我々は見た。(一六) チェーディ、カーシ、カルーシャの一万四千の名高い勇士たちは、すべて良家の出で、命懸けで戦い、退却することなく、黄金に飾られ

た旗を有する。(二七) 彼らは戦場において、口を開いた死神のようなビーシュマと交戦して、その馬や戦車や象もろともに、あの世に行った。(二八)(二九―二九略)
ヤーダヴァ族を喜ばせる〔クリシュナ〕は、自軍がうち破られるのを見て、最上の戦車を止めてアルジュナに言った。(三〇)
「アルジュナよ、あなたが望んでいた時がやって来た。人中の虎よ、彼を討て。さもなければ、あなたは迷妄に沈むであろう。(三一) というのは、勇士アルジュナよ、あなたはかつてヴィラータの都において、諸王が集まった際、サンジャヤの前で、言ったではないか。(三二)『ビーシュマとドローナをはじめとするすべてのドゥルヨーダナの兵士たちで、私に戦いを挑む者たちを、私はその従者たちとともに殺すであろう』と。(三三) 敵を制するクンティーの息子よ、その言葉を真実のものにせよ。王族の法(クシャトラダルマ)を思い起こして戦いなさい。パラタの雄牛よ。(三四)」
ヴァースデーヴァ(クリシュナ)にそう言われて、アルジュナは横目で彼を見てうつむいて、気が進まないように、次のように告げた。(三五)
「殺すべきでない人々を殺して、地獄に帰着する王国を得るか、それとも森に住んで苦労するか。私はどちらにしたらよいのだろうか。(三六) ビーシュマのいる所に馬たちをかりたてよ。あなたの言葉通りにしよう。私は侵しがたい老いたクルの祖父を倒すであろう。(三七)」
そこでクリシュナは、太陽のように見られがたいビーシュマがいる所に、銀色に輝く馬たちをかりたてた。(三八)

それから、ユディシティラの大軍は、勇士アルジュナがビーシュマに対して戦いを挑むのを見て再び戦場にもどった。(三九) クルの最上者ビーシュマは、何度も獅子吼して、速やかにアルジュナの戦車に矢の雨を浴びせた。(四〇) たちまち彼の戦車と馬と御者は、矢の大雨によってまったく見えなくなった。(四一) しかしクリシュナはあわてることなく、落着いて、ビーシュマの矢に射られた馬たちをかりたてた。(四二) それからアルジュナは雷雲のように響く神聖な弓をとり、鋭い矢でビーシュマの弓を断ち切って落下させた。(四三) 弓を断たれて、あなたの父であるクルの勇士は、瞬く間に他の弓に弦を張った。(四四) しかしアルジュナは猛り立ち、雷雲のように響く弓を両腕で引き絞り、その弓をも断ち切った。(四五) ビーシュマは彼の手練の早業を称讃した。
「勇士アルジュナよ、見事。クンティーの息子よ、見事。(四六)」
ビーシュマは彼にそう告げると、他の美しい弓をとり、戦場でアルジュナの戦車に向けて諸々の矢を放った。(四七) クリシュナは馬の操縦にかけて最高の能力を示した。円を描いて操縦し、ビーシュマの矢を無駄にさせたのである。(四八) 人中の虎であるビーシュマとアルジュナは、矢に傷ついて輝いていた。二頭の怒った雄牛が、角で傷あとをつけられて輝くように。(四九)
クリシュナは、アルジュナが加減して戦い、ビーシュマが戦場で、絶えず矢の雨を注いでいるのを見た。(五〇) ビーシュマは両軍の中間にいて、太陽のように熱し苦しめ、パーンドゥの息子の有力な兵士たちを次々と殺していた。(五一) ビーシュマはユディシティラの軍に

対して、宇宙紀(ユガ)の終末のようにふるまっていた。敵の勇士を殺す強力なクリシュナは、それを見て我慢できなくなった。(五二) わが君よ、偉大なヨーガの力をそなえた彼は、アルジュナの銀のような色をした馬たちを捨てて、怒って大戦車から飛び下りた。そして強力な彼は、腕を武器として、ビーシュマに挑んだ。(五三) その威光ある世界の主は笞(むち)を持ち、繰り返し獅子吼し、両足で世界を裂くかのようであった。(五四) 無量の光輝を持つクリシュナは、怒りで眼を赤くし、戦場であなたの兵士たちの心を呑むかのようであった。(五五) その激戦においてクリシュナがビーシュマに襲いかかるのを見て、すべての兵士たちは、「ビーシュマは殺される、ビーシュマは殺される」と叫んで、クリシュナを恐れて逃げまわった。(五六) クリシュナは黄色い絹をまとい、宝珠のように青黒く、ビーシュマに向かって走っていたが、それはまるで稲妻に囲まれた黒雲のようであった。(五七) 威光あるヤーダヴァ族の雄牛は雄叫びをあげ、獅子が象を襲うように、牛の群の長である雄牛が他の雄牛を襲うように、ビーシュマに襲いかかった。(五八) 蓮の眼をしたクリシュナが戦場で襲来するのを見て、ビーシュマは動揺することなく大弓を引き絞り、落着いてクリシュナに言った。(五九)

「来なさい、来なさい、蓮の眼をした神のうちの神よ。あなたに敬礼する。サートヴァタ族の最上者よ、今日戦場において私を倒しなさい。(六〇) 非の打ち所ない神よ、クリシュナよ、私が戦場であなたに殺されれば、私はこの世と彼の世で最高の至福を得るであろう。ゴーヴィンダよ、私は今日、この戦いにおいて、三界の者たちに敬われるであろう。(六一)」

それから勇士アルジュナは、クリシュナを追いかけて、両腕で抱いて制止した。(六二) 蓮

の眼をした至高の神人(プルシャ)クリシュナは、アルジュナに抱きかかえられても、彼を引きずって激しく進んで行った。(六三) しかし敵の勇士を殺すアルジュナは、力ずくでクリシュナの両足を抑え、クリシュナが十歩歩いたところでようやく彼を止まらせた。(六四) クリシュナは怒りで眼を三角にし、蛇のように息を吐いていたが、敵の勇士を殺すアルジュナは苦悩して彼に告げた。(六五)

「勇士よ、引き返しなさい。クリシュナよ、あなたが前に『私は戦わない』と言ったことを不真実にしてはならぬ。(六六) クリシュナよ、世人はあなたのことを嘘つきだと言うであろう。この重荷はすべて私にかかっている。私があのビーシュマを殺すであろう。(六七) 敵を悩ますクリシュナよ、私は友情と真実と私の善行にかけて誓う。私は敵どもを滅ぼすであろう。(六八) まさに今日、あの偉大な誓戒を守る無敵のビーシュマが、終末の時の半月のように、たまたま倒されるのを見よ。(六九)」

しかしクリシュナは、偉大なアルジュナの言葉を聞いても何も言わずに、怒って再び戦車に乗った。(七〇) ビーシュマは戦車に乗っている二人の人中の虎に、再び矢の雨を降らせた。雲が二つの山に雨を降らせるように。(七一) あなたの父デーヴァヴラタ(ビーシュマ)は敵軍の兵士たちの命を奪った。寒季が過ぎた時、太陽が光線で種々の〔ものの〕威光を奪うように。(七二) パーンダヴァたちが戦場でクル族の軍隊を粉砕するように、あなたの父は戦場でパーンダヴァ軍を粉砕した。(七三) 敗走した兵士たちは、気力を失い放心し、戦いにおいて無比の、自己の威光で中天に達した太陽のように輝くビーシュマを見つめることができなかった。

（七四）大王よ、宇宙紀（ユガ）の終末のカーラ（破壊神）のようなビーシュマに殺されつつ、パーンダヴァ軍は恐怖にかられて見た。（七五）彼らは戦場で強力な彼に粉砕されて、泥にはまった牛のように、踏みつけられた蛾のように無力になり、救済者を見出さなかった。（七六）バーラタよ、勇士ビーシュマは難攻で、おびただしい矢を放って諸王を苦しめ、光線のような矢を放ち、太陽のように熱していた。パーンダヴァ軍はそんなビーシュマを見つめることができなかった。（七七）そして彼がパーンダヴァ軍を粉砕しているうちに、太陽は西山にかかった。そして疲労困憊した兵たちは、戦場から引きあげたいと考えた。（七八）　（第百二章）

ビーシュマ、自分自身を殺す方法を教える

サンジャヤは語った。――

彼らが戦っているうちに太陽は西山に沈み、恐ろしい黄昏になって、戦況は見えなくなった。（一）バーラタよ、ユディシティラ王は黄昏を見て、そして自軍が敵を滅ぼすビーシュマに殺されて、武器を捨てて退却し、一目散に逃げまわっているのを見た。そしてビーシュマが猛り立って勇士たちを追いかけ、ソーマカの勇士たちが敗れて気力を失ったのを見た。そこで彼はしばらく考えて、軍隊を引きあげることに決めた。（二―四）それからユディシティラ王は、軍隊を引きあげさせ、あなたの軍隊も戦場から引きあげた。（五）クルの最上者よ、軍隊を引きあげて、戦場で傷だらけになった勇士たちは宿舎に入った。（六）パーンダヴァ軍は

ビーシュマにひどく痛めつけられ、戦いにおける彼の働きを思い出して、平安になることはなかった。（七）ビーシュマの方は、戦いにおいてパーンダヴァ軍とスリンジャヤ軍に勝利し、あなたの息子たちに讃えられ敬われていた。（八）喜んだクルの人々に囲まれて、彼は宿舎に入った。それから、すべての生類を朦朧とさせる夜が訪れた。（九）

それからその恐ろしい宵の口に、パーンダヴァとヴリシュニたちと、侵しがたいスリンジャヤたちは協議を始めた。（一〇）政策決定に長けたすべての勇士たちは、専心して、時宜にかなった、自軍に幸いをもたらす政策を協議した。（一一）王よ、それからユディシティラ王は長いこと協議してから、ヴァースデーヴァ（クリシュナ）を見て、次のように言った。（一二）

「クリシュナよ、見なさい。恐ろしく勇猛なビーシュマは、象が葦の群を砕くように、わが軍を粉砕した。（一三）我々は燃え盛る火のようにわが軍を舐め尽くすその偉大な男を見ることすらできない。（一四）クリシュナよ、戦場において鋭い武器を持つ栄光あるビーシュマは、猛毒を持つ恐るべき大蛇タクシャカのようである。（一五）彼は弓を持ち、戦場で鋭い矢を放つ。怒ったヤマ（閻魔）や、金剛杵（ヴァジュラ）を持つ神々の王（インドラ）や、輪縄（羂索）を持つヴァルナ（水天）や、棍棒を持つ財主（クベーラ）には勝つことができよう。しかし、戦場で怒ったビーシュマには勝つことができない。（一六―一七）クリシュナよ、そこで私はこのように悲しみの海に沈んでいるのだ。自分の無能さから、戦場でビーシュマに対峙することになって……。（一八）侵しがたい者よ、私は森に行こう。私にとって、そこに行った方がよい。クリシュナよ、私は戦争をしたくない。ビーシュマは常に我々を殺す。（一九）蝗（いなご）が燃える火に飛び込んで死に急ぐよ

うに、私もビーシュマに立ち向かう。(二〇)クリシュナよ、私は王国を求めて勇武に訴えて破滅する。私の勇猛な弟たちも、矢でひどく傷ついている。(二一)彼らは私のために、兄弟愛から、王国を失っている。またクリシュナー(ドラウパディー)も私のために苦しんでいる。クリシュナよ。(二二)私は生命(いのち)を尊重する。今や生命は得られがたいから。今、生命の残りにより私は最高の法(ダルマ)を実践するであろう。(二三)クリシュナよ、もしあなたが私と弟たちに好意をかけてくれるなら、自己の義務(ダルマ)と矛盾しないように有益なことを(異本による)言ってくれ。(二四)」

ユディシティラの多様な言葉を聞くと、クリシュナは同情して、慰めながら彼に答えた。(二五)

「ダルマの息子よ、約束を守る者よ、嘆いてはいけない。あなたの弟たちは勇士で、無敵で、敵の殺戮者たちであるのに。(二六)アルジュナとビーマセーナは、風と火のような威光を持つ。マードリーの双子たちは勇猛で、神々の主のようである。(二七)あなたは友情から私をこの職務に任じた。パーンダヴァよ、私もビーシュマと戦う。というのは王よ、私はあなたに用いられたら、戦場において何でもやる。(二八)人中の雄牛よ、もしアルジュナが望まないなら、私はビーシュマに挑戦して、ドリタラーシトラの息子たちが見ている前でビーシュマを殺すであろう。(二九)パーンダヴァの王よ、もしビーシュマが殺されれば、あなたは勝利を収めるであろう。私は今、ただ一騎で、クルの老いた祖父を殺すであろう。(三〇)王よ、戦場において大インドラのような私の勇武を見よ。強力な武器を放つ彼を、私は戦車から落

とすであろう。(三一)パーンドゥの息子たちの敵は、疑いもなく私の敵だ。あなたの利益は私の利益である。私の利益はあなたの利益に他ならぬ。(三二)あなたの弟は私の友であり、縁者であり、弟子でもある。王よ、アルジュナのためなら肉を切って与えることさえする。(三三)またこの人中の虎は私のために生命を捨てるであろう。友よ、我々はお互いに相手を救おうというのが我々の約定である。王中の王よ、そこで私に指示してくれ。私は島(拠り所)となるであろう。(三四)

かつてアルジュナはウパプラヴィヤにおいてウルーカの前で誓った。「私はビーシュマを殺すであろう」と(五・一六〇・八参照)。(三五)その英邁なアルジュナの言葉を私は守るべきである。アルジュナに許可されたら、私は疑いもなくやるであろう。(三六)あるいは、戦いにおいて、この重荷はアルジュナだけが担うものである。彼は戦場で、敵の都市を滅ぼすビーシュマを殺すであろう。(三七)アルジュナは戦いにおいて奮起すれば、不可能なことをもするであろう。戦いにおいて、猛り立つ神々や魔類(ダイティヤとダーナヴァ)をも殺すであろう。いわんやビーシュマを殺すのは何でもない。王よ。(三八)シャンタヌの息子である強力なビーシュマも、余生がわずかになり、気力も失せ、判断力も鈍り、きっとなすべきことを知らないだろう。(三九)」

ユディシティラは言った。

「勇士クリシュナよ、あなたの言う通りである。まことにここにいるすべての者たちがかかっても、あなたの激しい勢いを制止できない。(四〇)人中の虎よ、もし強力なあなたが私の

庇護者になれば、私は必ずやすべて望み通りに達成するであろう。(四一)最高の勝利者よ、ゴーヴィンダよ、あなたが庇護者になれば、私は戦いにおいてインドラをはじめとする神々にも勝利するであろう。いわんやビーシュマなど何でもない。(四二)しかし私は自分の利益を重んじて、あなたに嘘をつかせることはできない。クリシュナよ、前に誓った通り、戦わずして援助してくれ。(四三)ところでクリシュナよ、ビーシュマは私にある約束をした。『私はお前のために助言をしよう。しかし決してお前のために戦わない。私はドゥルヨーダナのために戦うであろう。私はこのように誓う』と。主よ。(四四)実に彼は私に王国と助言をくれるであろう。クリシュナよ。そこで我々一同は、あなたとともに、再びデーヴァヴラタ（ビーシュマ）に、彼自身を殺す方法をたずねよう。クリシュナよ。(四五)最高の人よ、そこでもしあなたがよければ、我々はすぐにビーシュマのもとに行き、彼に助言を仰ごう。(四六)クリシュナよ、彼は有益で真実な言葉を述べるであろう。クリシュナよ、私は戦いにおいて、彼が言う通りにするであろう。(四七)誓戒を守る彼は、我々のために勝利と助言とを与えるであろう。我々は子供の時に父を失い、彼に育てられた。(四八)クリシュナよ、我々はその老いた祖父を殺そうと望んでいる。父の父である愛しい彼を。王族(クシャトリヤ)の職業とは何とつらいことか。(四九)」

サンジャヤは語った。――

大王よ、それからクリシュナはユディシティラに言った。

「勇士よ、あなたの言うことはいつも私を喜ばせる。(五〇)デーヴァヴラタすなわちビーシュマは達人で、視線を向けるだけで相手を燃やすであろう。ガンガー川の息子（ビーシュマ）のところへ、彼を殺す方法を聞くために行きなさい。他ならぬあなたにたずねられたら、彼は真実を告げるであろう。(五一)」

「それでは我々はクルの祖父にたずねるためにそこへ行こう。我々は頭を下げて彼に敬礼して、助言を仰ごう。クリシュナよ。彼は我々に助言を与えるであろう。それにより我々は敵と戦うであろう。(五二)」

パーンドゥの兄よ、パーンダヴァの勇士たちはこのように協議して、兄弟すべてと強力なクリシュナとで、そろって武器と鎧を捨てて、ビーシュマの宿舎に行った。(五三)バラタの雄牛である大王よ、そしてそこに入り、敬意を表しつつ、頭を下げてビーシュマに平伏した。それから頭を下げてビーシュマに敬礼し、彼に庇護を求めた。(五四)クルの祖父である勇士ビーシュマは彼らに言った。

「クリシュナよ、ようこそ。アルジュナよ、ダルマの息子よ、ビーマよ、双子よ、ようこそ。(五五)あなた方の喜びを増大させるために、今日あなた方に何をしたらよいか。非常になしがたいことでも、私は全身全霊でやるぞ。(五六)」

喜んで何度もそのように言うビーシュマに対し、ダルマの息子ユディシティラは悲し気に言った。(五七)

「法(ダルマ)を知る人よ、我々はどうしたら勝利できるか。どうしたら王国を取りもどせるか。ど

うしたら臣民が滅亡しないか。主よ、それを私に告げて下さい。王よ、どうしたら我々は戦場であなたに対抗できるか。(五八) あなたは自ら、自身を殺す方法を我々に言って下さい。(五九) というのはクルの祖父よ、あなたにはほんのわずかの隙もないから。いつもあなたが戦場で弓を円形に引き絞っているのが見られる。(六〇) 勇士よ、あなたが戦車の上に太陽のように立ち、弓をとり、矢をつがえて引き絞る時、我々はあなたを見ることができない。(六一) 敵の勇士を殺す者よ、人と馬と戦車兵と象の殺戮者であるあなたを、いかなる男が殺すことができるか。バラタの雄牛よ。(六二) 最高の人よ、あなたは矢の大雨を降らせ、私の大軍団を滅ぼした。(六三) 私が戦争においてあなたに勝利するように、私が王国を取りもどせるように、私の軍隊に平安があるように、その手段を私に告げて下さい。祖父よ。(六四)」

パーンドゥの兄よ、するとビーシュマはパーンダヴァたちに告げた。

「クンティーの息子よ、私が生きている限り、戦いにおいてお前たちが浮かばれることはない。私はこの真実を告げる。(六五) しかし、戦いで私が敗れれば、お前たちは必ずやクル軍に勝利するであろう。お前たちが戦いに勝利することを望むなら、速やかに私を討て。プリターの息子たちよ、私は許可する。心置きなく私を討て。(六六) そのようにすれば非常によいことだと私は思う。諸君は私のことをよく知っているから。私が殺されればすべては滅びる。それ故、そのようにしなさい。(六七)」

ユディシティラは言った。

「戦いにおいて怒ったあなたは、杖(ダンダ)を持つ死神のようだ。我々が戦場であなたに勝てるような方法を教えて下さい。(六八) 金剛杵(ヴァジュラ)を持つインドラやヴァルナやヤマには勝てるかも知れないが、インドラを含む神々や阿修羅たちも、戦いにおいてあなたに勝つことはできない。(六九)」

ビーシュマは言った。

「パーンダヴァの勇士よ、お前の言ったことは真実である。インドラを含む神々や阿修羅たちは、戦いにおいて私に勝つことはできない。(七〇) もし私が戦場で武器をとり、奮起して、すばらしい弓をとれば……。しかし王よ、私が武器を捨てれば、偉大な戦士たちは戦いにおいて私を殺すことができる。(七一)

私は次のような者とは戦いたくない。——武器を放棄した者、倒れた者、鎧と旗を捨てた者、逃げる者、恐れる者、私はあなたに属すると言う者、女性、女性の名前を持つ者、身障者、一人息子(異本は「一人だけの息子を持つ者」)、子供のいない者、醜い者。(七二―七三) ユディシティラよ、私が前に心に誓ったことを聞きなさい。私は不吉な標(しるし)を見たら決して戦わないだろう。(七四) 王よ、お前の軍にいるドルパダの息子である勇士シカンディンは、戦いを好み、勇猛で、戦いに勝利する。(七五) 彼は前は女性であったが、後に男性になった。諸君もすべてをありのまま知っている。(七六) 勇士アルジュナは鎧を着て、戦場においてシカンディンを先に立てて、速やかに諸々の矢でひたすら私を攻撃せよ。(七七) 不吉な標、とりわけ前に女であった彼に対しては、私は矢をとっても(異本による)、決して攻撃したくない。(七八) バラタの雄牛よ、アルジュナはその直後に、私を攻撃して、速やかに矢でいたるところを射るべきである。(七九)

諸世界のうちで、奮起した私を殺せる者を私は知らない。栄光あるクリシュナと、パーンドゥの息子アルジュナを除いては……。(八〇) それ故、アルジュナは私の前方で、誰か他の者を先に立てて、私を倒すべきである。そうすれば勝利はお前のものになろう。(八一) クンティーの息子よ、言われた通りに私の言葉を実行せよ。それからお前は、集結したドリタラーシトラの息子たちを戦いにおいてうち破るであろう。(八二)」

サンジャヤは語った。──

それからパーンダヴァたちは、クルの祖父である偉大なビーシュマに挨拶してから、そこを辞去して自分の陣営に帰った。(八三) ビーシュマが他の世界に行く準備をして、このように告げた時、アルジュナは嘆き悲しみ、恥ずかし気に言った。(八四)

「祖父ビーシュマは長上(グル)であり、一族の長老であり、知者であり、英邁である。クリシュナよ、どうして戦場で彼と戦えようか。(八五) クリシュナよ、子供の頃、私は遊んでいて、体じゅう泥まみれになってあの偉大な人を汚したものだ。(八六) ガダ(クリシュナの弟)の兄よ、彼は私の父である偉大なパーンドゥの父(同様)であったが、子供の私は彼の膝に乗って、『お父さん』と呼んだ。(八七) すると彼は、『バーラタよ、私はお前のお父さんではない。お前の父のお父さんだよ』と、幼児の私に言った。そのような彼を、私がどうして殺すことができようか。(八八) 私の軍隊が滅びようとままよ。私はあの偉大な人と戦えない。私に勝利があろうと、死があろうと……。ところでクリシュナよ、あなたはどう考えるか。(八九)」

聖クリシュナは言った。

「アルジュナよ、あなたは前に、王族(クシャトリヤ)の法(ダルマ)に立って、戦いにおいてビーシュマを殺すことを誓いながら、どうして彼を殺さないと言うのか。(九〇) アルジュナよ、雷電に撃たれた樹のように、彼を戦車から落とせ。戦いで彼を殺さなければ、あなたの勝利はないであろう。(九一) 前もって神々に定められたことは、否応なくあなたに実現する。インドラの息子(テクスト疑問)がビーシュマを殺すであろうということは別様にはならない。(九二) というのは、口を開いた死神のような無敵のビーシュマを殺すことはあなた以外にはできない。インドラ自身でも……。(九三) 勇士よ、ビーシュマを殺せ。そして私の言葉を聞け。かつて大知者ブリハスパティがインドラに言った通りに語るから。(九四)

『シャクラよ、美質をそなえた年長者といえども、自分を滅ぼす者が危害を加えようとして近づいたら(異本による)、これを殺すべきである。(九五)』

アルジュナよ、これは王族(クシャトリヤ)の永遠の法(ダルマ)として確立している。妬み(不満)なく戦い、守護し、祭祀を行なうべきである。(九六)」

アルジュナは言った。

「クリシュナよ、必ずやシカンディンがビーシュマの死をもたらすであろう。というのは、ビーシュマはパーンチャーラの王子(シカンディン)を見るやいなや、戦いをやめるから。(九七) そこで我々は、シカンディンをビーシュマの正面に立てて、方策によりビーシュマを打倒しよう、というのが私の考えである。(九八) 私は矢で他の勇士たちを制御しよう。一方、最高の戦士

シカンディンは、ビーシュマのみを攻撃すべきである。(九九) 私はそのクルの最上者が、自分はシカンディンを殺さないと言うのを聞いた。というのは、彼は娘として生まれ、(後に)男性になったからである。(一〇〇)」

サンジャヤは語った。――

人中の雄牛であるパーンダヴァたちとクリシュナとは、このように決定して、それぞれの寝床に行った。(一〇一)

(第百三章)

ビーシュマを攻撃するシカンディン

ドリタラーシトラはたずねた。

「サンジャヤよ、その戦いにおいてシカンディンはどのようにビーシュマを攻撃したか。またパーンダヴァたちはどのようにビーシュマを攻撃したか。それを私に語ってくれ。(一)」

サンジャヤは語った。――

それから太陽は昇り、清らかな夜明けに、種々の太鼓が鳴らされ、乳色の法螺貝がいたるところで吹かれた時、パーンダヴァたちはシカンディンを先頭に立てて出陣した。(二―三) 大王よ、彼らは一切の敵を滅ぼす陣形を布いた。王よ、シカンディンは全軍の先頭にいた。

(四) ビーマとアルジュナが彼の車輪を守った。その後ろにドラウパディーの息子たちと強力なアビマニユがいた。(五) 偉大な戦士であるサーティヤキとチェーキターナとが彼らを守った。(六) バラタの雄牛よ、それからユディシティラ王が双子とともに、獅子吼を響かせて進んだ。(七) その後を、ヴィラータが自軍に囲まれて進んだ。大王よ、その後をドルパダが進んだ。(八) ケーカヤの五兄弟と強力なドリシタケートゥは、パーンダヴァ軍の殿を守った。バーラタよ。(九) パーンダヴァたちは大軍をこのように布陣して、自分たちの生命を捨てて、戦場においてあなたの軍を攻撃した。(一〇) 王よ、同様にクル軍も、強力なビーシュマを全軍の先頭に立てて、パーンダヴァ軍に対して進軍した。(一一) 彼は非常に強力で無敵なあなたの息子たちに守られていた。それから勇士ドローナと、偉大な戦士である彼の息子(アシュヴァッターマン)が続いた。(一二) その後に、バガダッタが象兵に囲まれて続いた。クリパとクリタヴァルマンが、バガダッタに続いた。(一三) その後に、カーンボージャの強力な王スダクシナと、マガダ国王ジャヤトセーナ、スバラの息子(シャクニ)、ブリハドバラが続いた。(一四) 同様に、スシャルマンをはじめとする偉大な射手である王たちが、あなたの軍の殿を守った。バーラタよ。(一五) 毎日、ビーシュマは戦場において、あるいは阿修羅の陣、あるいは鬼神の陣、あるいは羅刹の陣を布いた。(一六) バラタ族の王よ、それからお互いに殺し合う彼らの間に戦闘が行なわれ、ヤマ(閻魔)の王国の人口を増加させた。(一七)

アルジュナをはじめとするパーンダヴァたちは、シカンディンを先頭に立てて、戦場で種々の矢を注いでビーシュマを攻撃した。(一八) バーラタよ、そこであなたの軍はビーマに

苦しめられ、大量の血にまみれて他界した。(一九)ナクラとサハデーヴァと勇士サーティヤキは、あなたの軍に近づいて、猛烈に苦しめた。(二〇)バラタの雄牛よ、あなたの軍は戦場で殺されて、パーンダヴァの大軍を食い止めることができなかった。(二一)王よ、あなたの軍の兵士は敵の勇士たちに追い立てられ、全面的に殺されて、諸方に逃走した。(二二)バラタの雄牛よ、パーンダヴァ軍とスリンジャヤ軍により、鋭い矢で殺されて、救済者を見出さなかった。(二三)

ドリタラーシトラはたずねた。

「勇猛なビーシュマは、自軍がパーンダヴァたちに苦しめられているのを見て、怒って戦場でどのような行動をしたか、サンジャヤよ、それを私に語ってくれ。(二四)そしてまた、敵を苦しめる彼は、パーンダヴァたちに対してどのように戦いを挑んだか。ソーマカの勇士たちを殺しつつ……。サンジャヤよ、それを私に語ってくれ。(二五)」

サンジャヤは語った。——

大王よ、あなたの息子の軍隊がパーンダヴァ軍とスリンジャヤ軍に苦しめられた時、祖父がどのような行動をしたか、あなたに語りましょう。(二六)パーンドゥの兄よ、パーンダヴァの勇士たちは喜び勇み、あなたの息子の軍を攻撃して殺した。(二七)王よ、敵により人員と象と馬が滅ぼされ、戦場で軍隊が壊滅するのに、ビーシュマは我慢できなくなった。

(二八)その無敵の勇士は、自分の生命を捨てて、パーンダヴァとパーンチャーラとスリンジャヤの軍を攻撃した。(二九)王よ、彼は戦場において、武器を持って身構えるパーンダヴァの五名の最高の勇士たちを、種々の鋭い矢で食い止めた。(三〇)王よ、その人中の雄牛は怒って、戦場で無数の象と馬を殺し、多くの戦車兵を戦車から落とした。(三一)そして騎兵を馬の背から、象兵を象から落とし、集結した歩兵を倒し、敵に恐怖を与えた。(三二)パーンダヴァたちは、戦場で一人で奮戦している勇士ビーシュマに襲いかかった。阿修羅たちが金剛手(インドラ)に襲いかかるように。(三三)彼はインドラの電撃のように激しい、鋭い矢を放ちつつ、恐ろしい身体をして、すべての方角で認められた。(三四)戦場で戦っている彼の大弓は、インドラの弓(「虹」をも意味する)のようで、常に円形に引き絞られているのが認められた。(三五)戦場におけるその働きを見て、王よ、あなたの息子たちは最高に驚嘆し、祖父を讃えた。(三六)パーンダヴァたちは、戦場で戦っているあなたの勇猛な父を見て意気阻喪した。神々がヴィプラチッティ(阿修羅の名)を見るように……。そして口を開いた死神のような彼を食い止めることはできなかった。(三七)このように十日目が来た時、ビーシュマは火が森を焼くように、鋭い矢でシカンディンの戦車隊を焼いた。(三八)ビーシュマは怒った毒蛇かカーラ(破壊神)に創られた死神のようだった。シカンディンは三本の矢で、彼の胸の間を射貫いた。(三九)シカンディンにひどく傷つけられたビーシュマは相手を見て、怒ったが(戦うことを)望まず、笑って次のように言った。(四〇)

「射ようと射まいと、好きなようにせよ。私は決してお前と戦わない。お前は創造神に女と

して造られたあのシカンディニーだから。（四一）」
　シカンディンはビーシュマの言葉を聞くと、怒りにかられ、口の端を舐めまわして彼に告げた。（四二）
「勇士よ、私はあなたが王族たちを滅亡させることを知っている。私はまた、あなたがジャマダグニの息子（パラシュラーマ）と戦ったことを聞いている。（四三）そして私は、あなたの神的な力について何度も聞いた。あなたの力を知りながらも、私は今日、あなたと戦うであろう。（四四）最高の人よ、パーンダヴァたちと自分自身に好ましいことをなしつつ、私は今日、戦場であなたと戦うであろう。（四五）私は必ずあなたを殺すだろう。私はあなたの前で真実にかけて誓う。私の言葉を聞いて、適切なことをしなさい。（四六）射ようと射まいと、好きなようにせよ。生きて私から解放されることはない。戦いに勝利するビーシュマよ、この世の見納めだ。よく見ておけ。（四七）」
　王よ、シカンディンは戦場でこのように言って、言葉の矢でビーシュマを射た。そして更に五本の真っ直ぐの矢で彼を射た。（四八）
　敵を苦しめるアルジュナは、シカンディンのその言葉を聞いて、時は今だと考えて、シカンディンをうながした。（四九）
「私は矢で敵を敗走させつつ、あなたの後について行く。猛り立って、恐ろしく勇猛なビーシュマを攻撃せよ。（五〇）あの勇士は戦いであなたを傷つけることはできないから。それ故、強力な勇士よ、今こそビーシュマを攻撃せよ。（五一）貴君よ、もし戦場でビーシュマを殺さ

ずに去るなら、あなたと私は世人のもの笑いの種になるだろう。（五二）勇士よ、この戦いにおいて我々が笑いの的にならないように戦場で努力せよ。祖父を討て。（五三）敵を苦しめる者よ、私が戦闘においてあなたを守るであろう。すべての戦車兵を制圧して、祖父を討て。（五四）ドローナ、ドローナの息子、クリパ、ドゥルヨーダナ、チトラセーナ、ヴィカルナ、シンドゥの王ジャヤドラタ、ヴィンダとアヌヴィンダ、アヴァンティの王、カーンボージャの王スダクシナ、勇士バガダッタ、偉大な戦士マガダの王、戦いにおいて勇猛なソーマダッタの息子（ブーリシュラヴァス）、リシャシュリンガの息子である羅刹（アランブサ）、トリガルタの王、そしてその他すべての偉大な戦士を、私は戦場において食い止めるであろう。海岸が海を食い止めるように。（五五―五七）集結したすべてのクル族、そしてここにいる兵士たちを、私は戦場において食い止めるであろう。祖父を討て。（五八）」

（第百四章）

　ドリタラーシトラはたずねた。
「パーンチャーラの王子シカンディンは、その戦いにおいて猛り立ち、徳性あり誓戒を守る祖父ビーシュマを、どのように攻撃したのか。（一）パーンダヴァ軍のうちでいかなる勇士たちが勝利を望んで、その緊急時において、武器を振り上げたシカンディンを急いで守ったか。（二）その十日目の戦いにおいて、強力なビーシュマはどのようにして、パーンダヴァとスリンジャヤ（パーンチャーラ）の軍と戦ったか。（三）戦場でシカンディンがビーシュマと対戦することに、

私は耐えられない。ビーシュマの戦車は壊れなかったか。矢を射る彼の弓は折れなかったか。（四）」

サンジャヤは語った。——

バラタの雄牛よ、彼の弓は折れなかった。また戦場で戦うビーシュマの戦車も壊れなかった。彼が戦いにおいて真っ直ぐの矢で敵どもを殺している間に。（五）王よ、幾十万のあなたの勇士たち、戦車や象の諸集団、よく装備された馬たちは、祖父を先頭に立てて進撃した。（六）クルの王よ、戦いに勝利するビーシュマは、約束した通り、絶えずパーンダヴァたちの軍を滅ぼしていた。（七）その勇士が矢で敵を殺しつつ戦っていた時、パーンチャーラとパーンダヴァの軍は、すべて彼を食い止めることができなかった（異本による）。（八）十日目が来た時、彼は鋭い矢で幾百幾千の敵軍をおおって苦しめた。（九）パーンドゥの兄よ、パーンダヴァ軍はその輪縄を持つ死神のような勇士ビーシュマを、戦場においてうち破ることはできなかった。（一〇）

大王よ、その時、敵を苦しめる無敵のアルジュナがすべての戦士たちを恐れさせつつ近づいて来た。（一一）アルジュナは獅子のように高く叫び、何度も弓の弦を引き、大量の矢を放ち、戦場でカーラ（破壊神）のようにふるまった。（一二）バラタの雄牛である王よ、あなたの軍は獅子の声により獣たちが恐れるように、彼の声に恐れ、恐怖にかられて逃げまわった。（一三）アルジュナが勝利し、あなたの軍が苦しめられているのを見て、ドゥルヨーダナはひ

どく悩み、ビーシュマに告げた。（一四）

「祖父よ、あそこにパーンドゥの息子が、白馬たちにひかれ、クリシュナを御者とし、火が森を焼くようにわが軍を燃やしている。（一五）ビーシュマよ、見なさい。兵たちはすべて、戦場でアルジュナに追い立てられて逃走している。最高の戦士よ。（一六）森で家畜の番人が家畜の群を追い立てるように、わが軍は追い立てられている。敵を苦しめる者よ。（一七）わが軍はアルジュナの矢で粉砕され、あちこち逃げまわっている。そしてあの無敵のビーマは、私の軍を敗走させた。（一八）サーティヤキ、チェーキターナ、ナクラとサハデーヴァ、勇猛なアビマニユも、わが軍を焼く。（一九）また勇士ドリシタデュムナと羅刹のガトートカチャという強力な両者も、激しくわが軍を敗走させた。（二〇）バーラタよ、これらすべての勇士たちに殺されている兵たちが、戦うにせよとどまるにせよ、あなた以外に彼らの寄る辺を私は見出さない。人中の虎よ、神のような勇者よ。あなたはそれができる。速やかに苦しむ人々の寄る辺となれ。（二一―二二）」

大王よ、あなたの父（実は伯父）であり、シャンタヌの息子であるデーヴァヴラタ（ビーシュマ）は、このように言われて、しばらくの間考えてから決心し、あなたの息子を力づけながら言った。（二三）

「ドゥルヨーダナよ、よく聞け。王よ、しっかりせよ。勇士よ、前に私はお前に約束した。（二四）数万の偉大な王族（クシャトリヤ）たちを殺してから戦場から引きあげるというのが私の日々の仕事であると。バラタの雄牛よ、私は約束通りにして来た。（二五）今日もまた、戦場において大

いなる働きをするであろう。今日、私が殺されて横たわるか、それとも私がパーンダヴァたちを殺すかだ。(二六) 人中の虎である王よ、今日こそ戦いの最中に殺されて、主君の禄を食んだという借りをお前に返済するであろう。(二七)」

侵しがたいバラタの最上者はこのように告げると、矢で王族たちを苦しめつつ、パーンダヴァたちの軍を攻撃した。(二八) バラタの雄牛よ、ビーシュマが軍隊の中央に立ち、毒蛇のように怒っていた時、パーンダヴァたちは彼を取り囲んだ。(二九) クル族の王よ、この十日目に、彼は自分の能力を発揮して、数十万の兵を殺した。(三〇) 彼はパーンチャーラの強力な最上の王子たちの威光を奪った。太陽が光線で水を吸い上げるように。(三一) 大王よ、彼は一万の強力な象と、一万の馬を、乗り手もろともに殺した。(三二) そして最高の人ビーシュマは、その戦いにおいて、煙のない火のように、満二十万の歩兵を焼いた。(三三) パーンダヴァ軍のうちで誰も彼を見つめることができなかった。北路にあって熱している太陽を見つめることができないように。(三四) パーンダヴァたちはその勇士に苦しめられて怒り、ビーシュマを殺すために襲いかかった。スリンジャヤの勇士たちも同様にした。(三五) その時、勇士ビーシュマは多数の敵と戦い、白雲に満ちた山のようであった。(三六) しかしあなたの息子たちは大軍を率いて、ぐるりとビーシュマを取り巻いていた。それから戦いが始まった。(三七)

（第百五章）

サンジャヤは語った。——

王よ、アルジュナは戦場でビーシュマの武勇を見て、そこでシカンディンに言った。「祖父に近づけ。(一) 今日は決してビーシュマを恐れてはいけない。私は鋭い矢で、最上の戦車から彼を落とすであろう。(二)」

バラタの雄牛よ、アルジュナにそう言われた時、シカンディンはその言葉を聞いて、ビーシュマを襲撃した。(三) 王よ、そしてドリシタデュムナと勇士アビマニユも、アルジュナの言葉を聞くと、喜び勇んでビーシュマを攻撃した。(四) 老いたヴィラータとドルパダと、鎧を着たクンティボージャも、あなたの息子の見ている前で、ビーシュマを攻撃した。(五) 王よ、またナクラとサハデーヴァ、強力なダルマ王（ユディシティラ）、その他のすべての兵たちも、アルジュナの言葉を聞いてビーシュマを襲撃した。(六) (七—一八略)

ドリシタデュムナは猛り立って、偉大な戦士ビーシュマのみを攻撃し、繰り返し兵たちに向かって叫んだ。(一九)

「ここにいるクルの王子アルジュナはビーシュマに戦いを挑む。ビーシュマを攻撃せよ。恐れるな。ビーシュマはあなた方を襲わないだろう。(二〇) インドラといえどもアルジュナと戦場で戦うことはできない。いわんや戦いにおいて勇猛〔といえども〕気力が失せ余命もわずかなビーシュマは（異本による）問題ではない。(二一)」

軍司令官からこのように聞いて、パーンダヴァ軍の勇士たちは喜び勇み、ビーシュマの戦車を攻撃した。(二二) 戦場で強力な洪水のように押し寄せる彼らを、あなたの軍の人中の雄

牛たちは喜び勇んで食い止めた。(二三) 大王よ、偉大な戦士ドゥフシャーサナは恐怖を捨て、ビーシュマの生命を救おうと望んで、アルジュナに襲いかかった。(二四) 同様に、勇猛なパーンダヴァたちも、戦場で、ビーシュマの戦車を攻撃し、あなたの息子である勇士たちに襲いかかった。(二五) 王よ、我々はそこでめざましい奇蹟を見た。アルジュナはドゥフシャーサナの戦車に達したが、そこから先に行けなかったのである。(二六) 海岸が波立つ海を食い止めるように、あなたの息子は怒ったアルジュナを食い止めた。(二七) バーラタよ、両者とも最高の戦士で、無敵であった。その両者は、美々しさと輝かしさにかけて、日月に等しかった。(二八) 両者とも猛り立ち、お互いに相手を殺そうと望んでいた。両者は激戦において、古（いにしえ）のマヤ（阿修羅の名）とインドラのように対決していた。(二九)

大王よ、ドゥフシャーサナはその戦いにおいて、三本の矢でアルジュナを、二十本の矢でクリシュナを射た。(三〇) アルジュナはクリシュナが苦しめられたのを見て怒り、戦場において百本の矢でドゥフシャーサナを射た。それらは彼の鎧を貫通し、彼の血を飲んだ。(三一) それからドゥフシャーサナは怒り、五本の真っ直ぐの矢でアルジュナの額を射た。パラタの最上者よ。(三二) パーンダヴァの最上者は、額に刺さったそれらの矢によって輝いた。メール山が高くそびえる峰々により輝くように。大王よ。(三三) 偉大な射手アルジュナは、あなたの息子である弓取りにより深手を負って、戦場で花咲くキンシュカ樹のように輝いていた。(三四)

それからアルジュナは怒り、ドゥフシャーサナを苦しめた。月相の変わり目に、怒った恐ろしいラーフ（日食、月食を起こす悪魔）が月を苦しめるように。(三五) 王よ、あなたの息子は、強力なアルジュナに苦しめられて、戦場で、鷲（カンカ）の羽根のついた、石で研がれた矢で相手を射た。(三六) 勇猛なアルジュナは速やかにあなたの息子の弓を断ち切り、それから、彼を九本の矢で射た。(三七) 彼は他の弓を持ち、ビーシュマの前面に立ち、二十五本の矢でアルジュナの両腕と胸を射た。(三八) 大王よ、敵を悩ますアルジュナは怒り、ヤマ（閻魔）の杖（ダンダ）のような多くの恐ろしい矢を彼に放った。(三九) アルジュナは努力したが、あなたの息子はそれらの矢が届く前に断ち切った。それは奇蹟のようであった。そしてあなたの息子は、鋭い矢でアルジュナを射た。(四〇) それから怒ったアルジュナは、戦場で、金の羽根のついた、石で研がれた矢を、弓につがえて発射した。(四一) パラタ族の大王よ、それらは偉大な彼の身体に入り込んだ。ハンサ鳥たちが池に達して飛び込むように。(四二) あなたの息子は偉大なアルジュナに苦しめられ、戦場にアルジュナを残して、急いでビーシュマの戦車に寄る辺を求めた。その時ビーシュマは、底知れぬ海で沈みゆく彼の島（寄る辺）であった。(四三) 王よ、それからあなたの息子は意識を取りもどした。それからその勇士は、再び非常に鋭い矢でアルジュナをおおった。ヴリトラがインドラを襲うように。その強力な男はアルジュナを傷つけたが、アルジュナはひるまなかった（異本による）。(四四―四五)

（第百六章）

サンジャヤは語った。――

その時、鎧をつけたサーティヤキはビーシュマに戦いを挑んだ。リシャシュリンガの息子である勇士（羅刹アランブサ）は、戦場で彼を制止した。（一）バラタ族の王よ、しかしサーティヤキは猛り立ち、戦場で笑うかのように、九本の矢でその羅刹を射た。（二）王中の王よ、羅刹の方も猛り立ち、鋭い矢でシニの雄牛サーティヤキを射た。（三）シニの孫である、敵の勇士を殺すサーティヤキは怒り、羅刹に矢の群を送った。（四）それから羅刹は、不屈の勇者である強力なサーティヤキを鋭い矢で射貫いて、獅子吼をした。（五）その時、その戦いにおいて、サーティヤキは羅刹に手ひどく傷つけられたが、威光ある彼は冷静さを保って、笑いかつ吼えた。（六）

それからバガダッタは猛り立ち、戦場において、鋭い矢でサーティヤキを撃った。突き棒で巨象を刺激するように。（七）最高の戦士であるシニの孫は、羅刹を戦場に残して、プラーグジョーティシャの王（バガダッタ）に矢を放った。（八）プラーグジョーティシャの王は、手練の業で、鋭い刃を持つ矢によってサーティヤキの大弓を切断した。（九）敵の勇士を殺すサーティヤキは、急いで他の弓をとって、戦場で怒り、鋭い矢でバガダッタを射貫いた。（一〇）その勇士はひどく傷つき、何度も口の端を舐めまわし、ヤマ（閻魔）の杖のように恐ろしい、黄金と瑠璃で飾られた鉄製の強力な槍を、サーティヤキに向かって投げた。（一一）王よ、彼の腕力により加速し、激しく飛来するその槍を、サーティヤキは戦場において、矢によって三つに切断した。それは輝きを失った大きな流星のように地上に落ちた。（一二）

王よ、その槍が切断されたのを見て、あなたの息子（ドゥルヨーダナ）は大戦車団によりサーティヤキを取り囲んだ。（一三）ヴリシュニの勇士（サーティヤキ）がこのように取り囲まれたのを見て、ドゥルヨーダナは非常に喜び、すべての弟たちに言った。（一四）「クルの王子たちよ、戦場で諸君の大戦車団からサーティヤキが生きて出て行かないようにせよ。彼が殺されれば、パーンダヴァの大軍も滅びたも同然と私は思う。（一五）」「承知した」と言って彼の言葉を受け入れ、勇士たちはビーシュマの面前でサーティヤキと戦った。（一六）

その時、アビマニユはその戦いにおいて身構え、ビーシュマに襲いかかったが、強力なカーンボージャの王が戦場で彼を食い止めた。（一七）アルジュナの息子（アビマニユ）は真っ直ぐの矢でその王を射貫き、更に六十四の矢でその王を貫いた。王よ。（一八）しかし、スダクシナは、ビーシュマの生命を守りたいと望み、戦場において五本の矢でアビマニユを射て、そして九本の矢で彼の御者を射た。（一九）その会戦において（異本による）、二人の間で非常に激しい戦いが行なわれた。

敵を苦しめるシカンディンはビーシュマに襲いかかった。（二〇）老いた勇士ヴィラータとドルパダは、その戦いにおいて大軍を食い止め、猛り立ってビーシュマを攻撃した。（二一）するとうる最高の戦士アシュヴァッターマンが怒って迎え撃った。バーラタよ、それから敵味方の間に戦闘が始まった。（二二）

敵を苦しめる者よ、戦場を飾る者である偉大な射手、ドローナの息子（アシュヴァッターマン）は奮戦した。ヴィラータは十本の矢で彼を射た。（二三）ドルパダも、ビーシュマの前にいる師の息子

（アシュヴァッターマン）に近づいて、三本の鋭い矢で彼を射た。（二四）それからアシュヴァッターマンは、ビーシュマに対して戦おうと身構える、老いたヴィラータとドルパダを、十本の矢で射た。（二五）そこで我々は奇蹟を見た。その二人の老人の働きはすばらしかった。というのは、二人はその戦いにおいて、ドローナの息子の恐ろしい矢を防ぎ止めたのである。（二六）

シャラドヴァットの息子クリパは進撃するサハデーヴァに襲いかかった。あたかも森で発情した象が発情した象を襲うように。（二七）王よ、そしてクリパはその戦いにおいて、金で飾られた七十本の矢で、マードリーの息子である勇士（サハデーヴァ）を射た。（二八）マードリーの息子は矢で彼の弓を二つに断ち切った。そして弓を切られた彼を、九本の矢で射た。（二九）クリパは戦場で、強い負荷に耐える別の弓をとり、非常に喜びながらも怒り、ビーシュマの生命を守りたいと望み、鋭い十本の矢でマードリーの息子を射た。（三〇）王よ、そこでサハデーヴァの方も、ビーシュマを殺すことを望んで猛り立ち、猛り立つクリパの胸を射た。両者の間に、恐ろしくも凄まじい戦いが行なわれた。（三一）

敵を苦しめるヴィカルナ（百王子の一人）は、ビーシュマの生命を守りつつ、戦場で猛り立つナクラを、六十本の矢で射た。（三二）弓を持つあなたの息子（ヴィカルナ）にひどく射られて、ナクラの方も七十七本の矢でヴィカルナを射た。（三三）そこで、二人の敵を苦しめる人中の虎、群の中の二頭の雄牛のような勇士は、ビーシュマのためにお互いに攻撃し合った。（三四）

ガトートカチャは奮戦し、あなたの軍の兵士たちを殺していたが、勇猛なドゥルムカ（百王子の一人）は、ビーシュマを守るために、彼に対し戦いを挑んだ。（三五）王よ、しかしガトートカ

チャは猛り立ち、敵を苦しめるドゥルムカの胸を、九十本の鋭い矢で射た。（三六）勇士ドゥルムカは、その激戦において、喜び勇んで叫び、六十本の鋭い先端の矢で、ビーマセーナの息子（ガトートカチャ）を射貫いた。（三七）

フリディカの息子（クリタヴァルマン）はビーシュマの生命を守ろうとして、ビーシュマを殺そうと望んで戦場を進むドリシタデュムナを食い止めた。（三八）クリタヴァルマンは五本の鉄矢で勇士ドリシタデュムナを射て、更に五十本の矢で速やかに相手の胸の間を射た。（三九）王よ、ドリシタデュムナの方も、鷺（カンカ）の羽根のついた九本の鋭い矢でクリタヴァルマンを射た。（四〇）その激戦において、ビーシュマが原因で、両者の間に、互いに相手を凌駕しようとする戦いが行なわれた。ヴリトラと大インドラの間の戦いのような。（四一）（四二―五五略）

（第百七章）

前兆を知るドローナ

サンジャヤは語った。――

さて、発情した象のように勇猛な、偉大な射手である勇士ドローナは、発情した象を制する大弓をとった。（一）その勇士は、その最上の弓を揺すって〔矢を射て〕、敵の勇士たちを敗走させ、パーンダヴァ軍を苦しめていた。（二）前兆を知る強力なドローナは、いたるところ前兆を見て、敵軍を苦しめている息子に告げた。（三）

「わが子よ、今日がその日だ。勇士アルジュナが戦場でビーシュマを殺そうと望んで最高の努力をする日だ。(四)というのは、私の矢は(自然に箙(えびら)から)飛び上がり、弓はふるえるかのようだ。諸々の武器は互いに打ち合う。私は殺戮について考える。(五)諸方が鎮まった時、鳥獣は恐ろしい声をたてる。禿鷲たちはパラタ族の軍に向かって、低く降下する。(六)太陽は輝きを失ったかのようで、諸方はすべて赤くなる。大地は音をたて、ふるえ、乗物は音を響かせる。(七)鷺(カンカ)、禿鷲、鶴(バラーカ)たちは繰り返し鳴き声をあげる。ジャッカルどもは不吉な声を出して、大きな危険を告げ知らせる。(八)太陽の中央から大流星が落下する。胴体をともなうパリガ(「鉄棒」、星位の名)が太陽を取り巻いて存在する。(九)月と太陽に恐ろしい暈(かさ)が生じた。これは諸王の体が切断される恐ろしい危険を告げる。(一〇)クル族の王の神殿にある神像はふるえ、笑い、踊り、泣く。(一一)諸惑星は不吉な標のある月を左まわりにまわる。聖なる月が、(弦月の二つの)先端を下にして昇った。(一二)ドゥルヨーダナの軍隊の諸王の身体は輝きを失って見える(異本による)。彼らは鎧を着ているのに輝かない。(一三)パーンチャジャニヤ(アルジュナの法螺貝の名)とガーンディーヴァ弓の大音響は、両軍の間でいたるところに聞こえる。(一四)必ずやアルジュナは、最高の武器を用い、戦場で他の戦士たちを相手にせず、祖父(ビーシュマ)を攻撃するであろう。(一五)勇士よ、ビーシュマとアルジュナの対決のことを考えると、私は総毛立ち、私の心は沈みこむ。(一六)アルジュナは戦場において、邪悪で悪い了見のパーンチャーラの王子を先頭に立てて、ビーシュマと戦うために進撃する。(一七)ビーシュマは、『私はシカンディンとは戦わない』と前に告げた。『というのは、彼女は創造神により女性と

定められたが、運命により男性になったのである。(一八)』そのヤジュニャセーナの息子である勇士(シカンディン)は、不吉な旗に他ならない。ビーシュマは不吉な旗を攻撃しないであろう。(一九)私はこのことを考えて、ひどく気落ちしているのだ。まさに今日、アルジュナは戦場でクルの長老を攻撃した。(二〇)ユディシティラの怒り、ビーシュマとアルジュナの対戦、私が武器を使用すること。以上は必ずや生類に不幸をもたらす。(二一)アルジュナは思慮深く、強力な勇士で、武器に通達し、こよなく勇猛である。遠方より射撃することができ、強力な矢を放ち、前兆を知っている。(二二)彼は戦場において、インドラを含む神々によってもうち破られない。強力で知性あり、煩悩を制し、最高の戦士である。(二三)アルジュナは恐るべき武器を持ち、戦いにおいて常に勝利する。彼の通り道を避けて、速やかにビーシュマのもとに行け。(二四)

勇士よ、見よ。今や滅亡が近づいた。勇士たちの黄金で多彩な美しい大鎧は、真っ直ぐの矢によって切り裂かれた。そして、旗の先端、トーマラ(投槍の一種)、弓も、怒ったアルジュナによって断ち切られた。汚れなきプラーサ(投槍の一種)、黄金で輝く鋭い槍、象たちにつけられた旗も断ち切られた。(二五―二七)わが子よ、今は臣下たちが生命を惜しんでいる時ではない。天界をめざして、名誉と勝利のために進撃せよ。(二八)戦場は非常に恐ろしく渡りがたい川のようだ。馬と象と戦車はその渦巻である。あの猿の旗標をつけた〔アルジュナ〕は、その川を戦車で渡る。(二九)

ユディシティラ王には敬虔さ、自制、布施(気前のよさ)、苦行(修養)、偉大な行為が認められる。

彼の弟はアルジュナと強力なビーマセーナと、ナクラとサハデーヴァである。ヴリシュニ族のクリシュナが彼の確固たる寄る辺である。（三〇―三二）苦行で体を焼いた彼の怒り、邪悪なドゥルヨーダナへの怨恨から生じた彼の怒りが、バラタ族を燃やす。（三三）

あそこにアルジュナが見える。彼はクリシュナを拠り所とし、ドゥルヨーダナのすべての軍隊をすっかり制圧している。（三三）アルジュナがわが軍を動揺させているのが見える。大きな鯨が大波におおわれた河口を動揺させるように。（三四）戦いの最中、『ああ、ああ、わあ、わあ』という叫び声が聞こえる。パーンチャーラの王子に向けて進撃せよ。私はユディシティラに向かって行く。（三五）無量の威光を持つユディシティラ王の陣形は、隙を見出すことが難しい。海の内部のように入りがたく、すべての方角にいる超戦士たちに守られている。（三六）すなわち、サーティヤキ、アビマニユ、ドリシタデュムナ、狼腹（ビーマ）、双子が王を守っている。（三七）あそこに、ウペーンドラ（「インドラの弟」、ヴィシュヌ＝クリシュナ）のように浅黒く、シャーラの大樹のように背が高い、第二のアルジュナのような〔アビマニユ〕が、わが軍に向けて進撃する。（三八）最上の武器をとれ。そして他の大弓を持って、王の側面から進撃せよ。狼腹と戦え。（三九）愛し子が永遠に生きることを、誰が望まないだろうか。しかし吾人は、王族の法（クシャトリヤダルマ）を前提として、お前に指令するのである。（四〇）そしてビーシュマもまた、戦場で敵の大軍を燃やしている。彼は戦いにかけて、ヤマ（閻魔）やヴァルナ（水天）によく似ている。（四一）」

（第百八章）／（第百九章／百十章略）

ビーシュマをめぐる激戦

ドリタラーシトラはたずねた。

「サンジャヤよ、シャンタヌの息子ビーシュマは、十日目に、強力なパーンダヴァたちやスリンジャヤ軍とどのように戦ったか。（一）その戦いにおいて、クル軍はどのようにしてパーンダヴァ軍に対抗したか。戦いにおいて輝くビーシュマの偉大な戦いを私に語ってくれ。（二）」

サンジャヤは語った。――

バーラタよ、クル軍はパーンダヴァ軍とどのように戦ったか、そしてその戦いはどのようであったか、あなたがたずねるので、私はそれをあなたに語るであろう。（三）アルジュナは日々、最高の武器によって、向かって来るあなたの軍の戦車兵たちをあの世に送った。（四）戦いを知るクルの勇士ビーシュマも、約束した通り、絶えずパーンダヴァ軍を殺戮した。（五）勇士ビーシュマがクル軍とともに戦い、アルジュナがパーンチャーラ軍とともに戦っているのを見て、人々には勝敗のゆくえがわからなかった。（六）ビーシュマとアルジュナが対戦するその十日目においては、絶えず非常に恐ろしい殺戮が行なわれた。（七）王よ、その戦いにおいて、最高の武器に通じた、敵を苦しめるビーシュマは、繰り返し何万という戦士を

殺した。(八) 王よ、その名前と族姓(ゴートラ)がほとんど知られないが、退却することなく戦うすべての勇士たちが、そこでビーシュマに殺された。(九) 敵を苦しめる、徳性あるビーシュマは、十日間パーンダヴァ軍を苦しめてから、生きることに嫌気がさしていた。(一〇) 彼は速やかに戦線において自分が殺されることを望み、戦場で向かって来る勇士たちをこれ以上殺したくないと考えていた。(一一) 大王よ、あなたの父である勇士デーヴァヴラタ(ビーシュマ)は、考えてから、近くにいるユディシティラに言葉をかけた。(一二)

「大知者ユディシティラよ、すべての武器に通達したわが子よ、私は法(ダルマ)にかない天界をもたらす言葉を述べるから聞きなさい。(一三) わが子よ、バーラタよ、私はこの身体にひどく嫌気がさした。私が戦いにおいて非常に多くの生あるものを殺している間に、時間が過ぎ去った。(一四) それ故、アルジュナとパーンチャーラ軍とスリンジャヤ軍を先に立てて、私を殺す努力をせよ。もし私によいことをしたいと望むなら。(一五)」

真実を見るユディシティラは、ビーシュマのその考えを知り、スリンジャヤ軍とともに、戦場で奮起して、ビーシュマに対して進撃した。(一六) 王よ、それからドリシタデュムナとユディシティラは、ビーシュマのその言葉を聞いて、自軍をかりたてた。(一七)

「進め、戦え、戦場でビーシュマを破れ。諸君は敵に勝利する、約束を守るアルジュナに守られている。(一八) そしてこの軍司令官である勇士ドリシタデュムナとビーマも、必ずや戦場で諸君を守るであろう。(一九) スリンジャヤの諸君、戦いにおいてビーシュマを恐れる必要はまったくない。私はシカンディンを先頭に立てて、必ずビーシュマをうち破るであろう。(二〇)」

このように、十日目に、パーンダヴァたちは誓約して、梵界(ブラフマローカ)に行くことに専念し(死ぬ覚悟をして)、怒りにかられて進撃した。シカンディンとアルジュナを先頭に立てて、ビーシュマを倒すために最高の努力をした。(二一) 彼らは…(二二)

それから、あなたの息子に命じられた諸国の強力な王たちは、ドローナとその息子と軍隊とともに、そして強力なドゥフシャーサナとすべての兄弟たちは、戦場の中央にいるビーシュマを守護した。(二三—二四) それからあなたの軍の勇士たちはビーシュマを先頭として、シカンディンを先頭とするパーンダヴァ軍と戦った。(二五) 猿の旗標を持つアルジュナは、チェーディとパーンチャーラの軍とともに、シカンディンを先頭に立てて、ビーシュマに向かって行った。(二六) シニの孫(サーテイヤキ)はドローナの息子と戦った。ドリシタケートゥはパウラヴァ(プールの末裔)と戦った。ユダーマニユは重臣を率いたドゥルヨーダナと戦った。(二七) 軍隊を率いるヴィラータは、ジャヤドラタ及びその軍隊と戦った。敵を苦しめるユディシティラは、ヴリッダクシャトラの息子(ジャヤドラタ)と、軍隊を率いたマドラ国王(シャリヤ)を攻撃した。よく守られたビーマセーナは(異本による)、象軍を攻撃した。(二八—二九) パーンチャーラの王子(ドリシタデュムナ)は奮起し、ソーマカ軍とともに、無敵で制しがたい、一切の戦士のうちの最上者であるドローナに対して進撃した。(三〇) 獅子の旗標を持つ、敵を制するブリハドバラ王子は、カルニカーラ(名樹)の旗標を持つアビマニユに対して進撃した。(三一) あなたの息子たちは、戦場で、諸王とともに、シカンディンとアルジュナを殺そうと望んで、彼らを攻撃した。(三二) この

ような非常に恐ろしい両軍の激戦において、兵士たちが攻撃し合った時、大地は震動した。(三三)

バーラタよ、戦場でビーシュマを見て、敵味方の軍隊は互いに攻撃し合った。(三四) それから、彼らが奮起してお互いに攻撃し合っていた時、すべての方角に大音響が起こった。(三五) 法螺貝と太鼓の音、象たちの咆哮、兵たちの獅子吼により、凄まじい騒ぎが生じた。(三六) すべての王の首飾り（異本による）や腕環や冠の、月光に似た輝きは、すっかり失せてしまった。(三七) 武器という稲妻におおわれた、ほこりという雲が生じた。そして弓の響きは凄まじいものになった。(三八) 両軍の間に、矢と法螺貝の音、太鼓の大音響、戦車の音が生じた。(三九) 両軍の投槍、槍、刀の群、矢の群に満ち、虚空は光を失ったかのようであった。(四〇) 双方の戦車兵や騎兵たちは戦場で倒れた。象兵は象兵を殺し、歩兵は歩兵を殺した。(四一) 人中の虎よ、かくてビーシュマをめぐって、クル軍とパーンダヴァ軍の間に非常な激戦が戦われた。肉をめぐって二羽の鷹が戦うように。(四二) バーラタよ、戦場において互いに相手を殺し、勝利しようと望む両軍の兵士たちの合戦は凄まじいものになった。(四三)

（第百十一章）

サンジャヤは語った。——

大王よ、アビマニユはビーシュマを倒そうとして勇武を発揮し、大軍を擁してあなたの息

子と戦った。(一) ドゥルヨーダナはその戦いにおいて怒り、九本の真っ直ぐの矢でアビマニユを射て、更にまた三本の矢で彼を射た。(二) アビマニユは怒り、戦場で、死神の妹のように恐ろしい槍を、ドゥルヨーダナの戦車に向けて放った。(三) 王よ、しかしあなたの息子である勇士は、激しく飛来するその恐ろしい槍を、馬蹄形の矢で二つに切断した。(四) 非常に短気なアビマニユは、自分の槍が落ちたのを見て、三本の矢でドゥルヨーダナの両腕と胸を射た。(五) バラタの最上者よ、そして彼は更に十本の恐ろしい矢で、短気なドゥルヨーダナの胸の間を射た。(六) バーラタよ、その戦いは恐ろしく、めざましく、眺める者に喜びを生じさせ、すべての王に讃えられた。(七) アビマニユとドゥルヨーダナの両雄は、それぞれビーシュマを殺すために、アルジュナに勝利するために、戦場で戦った。(八)

バラモンの雄牛である、敵を苦しめるドローナの息子（アシュヴァッターマン）は猛り立ち、その戦いにおいて激しくサーティヤキの胸を矢で射た。(九) バーラタよ、限りなく高邁なサーティヤキも、鷺（カンカ）の羽根のついた九本の矢で、師（グル）の息子のすべての急所を射た。(一〇) アシュヴァッターマンは、戦場においてサーティヤキの腕や胸を九本の矢で、更に三十本の矢で速やかに射た。(一一) 勇士サーティヤキはドローナの息子にひどく傷つけられたが、誉れ高い彼は、三本の矢でドローナの息子を射た。(一二) (一三―五二略)

アルジュナはビーシュマに近づき、鋭い矢で苦しめつつ、森で発情した象のように猛り立つ相手に襲いかかった。(五三) しかし栄光ある強力なバガダッタが、〔発情してこめかみが〕三様に裂け、〔そこから流れる〕分泌液（マダ）で盲目となった象（非常に強い象）に乗って、アルジュナに立

ち向かった。（五四）大インドラの象のように激しく襲来する彼に対し、アルジュナは最高に努力して迎え撃った。（五五）それから、象に乗る栄光あるバガダッタ王は、その戦いにおいて、矢の雨でアルジュナをおおった。（五六）ところがアルジュナは、戦場で銀のような象が襲って来た時、汚れない鋭い鉄の矢でそれを射た。（五七）

大王よ、アルジュナは「ビーシュマに向かって行け、行け」とシカンディンをうながした。そして、「彼を殺せ」と告げた。（五八）パーンドゥの兄である王よ、その時、バガダッタはアルジュナから離れて、急いでドルパダの戦車に向かって行った。（五九）大王よ、そこでアルジュナはシカンディンを先頭に立てて、速やかにビーシュマに襲いかかった。それから戦闘が繰り広げられた。（六〇）そしてあなたの軍のすべての勇士たちは、戦場で叫び声をあげながら、アルジュナを激しく攻撃した。それは奇蹟のようであった。（六一）王よ、アルジュナはあなたの息子たちの種々の軍を蹴散らした。〔夏の〕季節に、風が空中の雲を吹き散らすように。（六二）

一方、シカンディンはバラタ族の祖父（ビーシュマ）に近づき、当惑することなく、速やかに多くの矢で彼をおおった。（六三）ビーシュマはその戦いにおいて、アルジュナの後に従うソーマカ軍を殺した。そしてその勇士は、パーンダヴァたちの軍隊を食い止めた。（六四）彼の戦車は聖火室である。弓は焔である。刀と槍と棍棒は薪である。矢の群は大火焔である。彼はこれらのものを持って、戦場で王族（クシャトリヤ）たちを燃やした。（六五）非常に大きな火が、風をともなって、乾いた草木を燃やすように、ビーシュマは神聖な武器を放って〔敵を〕燃やした。

（六六）王よ、誉れ高いビーシュマは金の羽根のついた真っ直ぐの鋭い矢によって、四方四維を響かせて、戦車兵と象兵と騎兵を倒し、戦車の群を禿頭の椰子の林のようにした。（六七―六八）王よ、すべての戦士のうちの最上者であるビーシュマは、その時戦場で、戦車と象と馬を乗り手のいないものにした。（六九）王よ、雷の轟きのような彼の弓弦と弓籠手（ゆごて）の音を聞いて、すべての兵士たちは戦慄した。（七〇）王よ、あなたの父の諸々の矢は的を外さずに落下した。ビーシュマの弓から放たれた矢は、人々の身体に刺さったままでいなかった（通貫した）。（七一）王よ、駿馬をつないだ無人の戦車が、風のような速さでひかれて行くのが見えた。（七二）一万四千のチェーディ、カーシ、カルーシャの有名な勇士たち、良家の息子たち、命を捨てた、敵に後ろを見せない勇士たちは、戦場において、黄金に飾られた旗を持ち、騎兵と戦車兵と象兵を率いて、口を開いた死神のようなビーシュマに向かって行った。（七三―七四）大王よ、ソーマカの勇士で、ビーシュマに戦いを挑んで生きのびることができると考える者はいなかった。（七五）人々は戦いにおけるビーシュマの勇武を見て、すべての戦士たちは死者の王（ヤマ）の都に送られたと考えた。（七六）いかなる勇士も、戦いにおいて彼に対抗できなかった。白馬にひかれ、クリシュナを御者とする勇猛なアルジュナと、無量の力を持つパーンチャーラの王子シカンディンを除いて……。（七七）

バラタの雄牛よ、シカンディンは戦場でビーシュマに近づき、十本ずつの矢で射た。（七八）バーラタよ、一方ビーシュマは、怒りに燃える眼で、横目でシカンディンを燃やすかのように見たきりであった。（七九）王よ、ビーシュマは相手が女性であったことを思い出し

て、戦場ですべての人々が見ている前で、彼を射ることはなかった。しかし彼はそれに気づかなかった。(八〇) 大王よ、アルジュナはシカンディンに告げた。

「急げ。あの祖父を速やかに殺せ。(八一) どうしてためらっているのか。勇士よ、偉大な戦士ビーシュマを殺せ。ユディシティラの軍隊のうちで、戦場で祖父ビーシュマと戦える者は、あなた以外には誰も見出されないから。人中の虎よ。私はこの真実をあなたに告げる。(八二―八三)」

バラタの雄牛よ、シカンディンはアルジュナにそう言われて、種々の矢で祖父を攻撃した。(八四) あなたの父デーヴァヴラタ(ビーシュマ)は、それらの矢を無視して、戦場で猛るアルジュナに矢を浴びせた。(八五) わが君よ、そしてその勇士は、その戦いにおいて、鋭い矢ですべてのパーンダヴァ軍をあの世に送った。(八六)

王よ、パーンダヴァたちも大軍に囲まれて、雲が太陽をおおうようにビーシュマを取り巻いた。(八七) バラタの雄牛よ、ぐるりと取り巻かれたビーシュマは、火が森を燃やすように、戦場で勇士たちを燃やした。(八八) そこで我々は、あなたの息子(ドゥフシャーサナ)の驚異的な勇武を見た。彼はアルジュナと戦い、かつビーシュマを守った。(八九) 弓をとるあなたの息子である偉大なドゥフシャーサナの、戦場におけるその働きにより、すべての人々は満足した。(九〇) というのは、彼は一人で、戦場において、パーンダヴァたちとその従者たちと戦った。そしてパーンダヴァたちはその戦いで、強力な彼を食い止めることができなかった。(九一) 大王よ、その戦いにおいてドゥフシャーサナは、戦車兵たちの戦車を破壊し、鋭い矢で強力

な騎兵や象兵たちを射貫いて、大地に倒した。そしてその他の象たちは、彼の矢に苦しみ、諸方に逃げ去った。(九二―九三) 焔を上げて燃える強力な火が薪に達して燃やすように、あなたの息子もパーンダヴァ軍を焼き尽くした。(九四) パーンダヴァの勇士は誰も、そのバラタ族の偉大な戦士に勝利することはできなかった。向かって行くことさえまったくできなかった。ただ、白馬にひかれクリシュナを御者とする大インドラの息子は例外であった。(九五) 王よ、というのは、そのアルジュナは戦場で彼をうち破り、全軍の見ているところで、まさにビーシュマに襲いかかった。(九六) あなたの息子はアルジュナにうち破られても、ビーシュマの腕力を頼りにして、何度も自軍を元気づけ、戦いに酔い痴れて戦った。そして王よ、アルジュナに対して戦いを挑んで彼は輝いた。(九七)

王よ、一方シカンディンは、雷電のような矢、蛇の毒のような矢により、戦場で祖父を射貫いた。(九八) 王よ、しかしそれらの矢はあなたの父に苦痛を与えなかった。その時ビーシュマは笑いながらそれらの矢を受け止めた。(九九) 実に暑さに苦しむ人が多量の雨を受けるように、ビーシュマはシカンディンの多量の矢を受け止めた。(一〇〇) 大王よ、王族たちは戦場で、偉大なパーンダヴァたちの軍隊を燃やしている恐るべきビーシュマを見ていた。(一〇一)

わが君よ、それからあなたの息子(ドゥルヨーダナ)はすべての兵たちに告げた。

「いたるところからアルジュナを戦車で攻撃せよ。法(ダルマ)を知るビーシュマが、戦場であなた方すべてを守るであろう。そこで諸君は、大きな恐怖を捨てて、パーンダヴァたちに対して

戦え。（一〇一―一〇三）あそこでビーシュマは、輝かしい棕櫚の旗標のもと、〔我々を〕守護しつつ立っている。彼は戦場において、すべてのドゥルヨーダナ軍の守護であり、鎧である。（一〇四）神々が努力しても、偉大なビーシュマに太刀打ちできない。いわんや人間である無力なパーンダヴァたちは問題ではない。それ故、戦士たちよ、戦場でアルジュナに近づき攻撃せよ。（一〇五）王たちよ、私は今日、あなた方すべてとともに、戦場で努力してアルジュナと戦うであろう。（一〇六）」

王よ、弓を持つあなたの息子の言葉を聞いて、強力な勇士たちはアルジュナに対して戦った。（一〇七）（一〇八―一一〇略）

大王よ、アルジュナはそれらすべての勇士たちとその軍隊に対し、神的な武器を想起して使用した。（一一一）強力なアルジュナは、矢の熱を放つそれらの激烈な武器により、速やかに彼らを焼いた。火が蝗を焼くように。（一一二）剛弓を持つ彼が幾千の矢を放つ時、彼のガーンディーヴァ弓は、空中で輝いているかのように見えた。（一一三）大王よ、諸王は共にそれらの矢に苦しみ、戦車や旗は破壊され、猿の旗標を持つ〔アルジュナ〕に近づけなかった。（一一四）アルジュナの矢に射られ、戦車兵は旗とともに落下した。騎兵は馬とともに倒れた。象兵は象とともに倒れた。（一一五）それから、アルジュナの腕力に追い散らされて敗走する諸王の大軍により大地はおおわれた。（一一六）さて、強力なアルジュナは、敵軍を敗走させてから、戦場でドゥフシャーサナに矢を送った。（一一七）鉄の鏃を持つそれらの矢は、あなたの息子ドゥフシャーサナを射貫いてから、すべて大地に入った。蛇たちが蟻塚に入るように。それから彼は相手の馬たちを殺し、御者を倒した。（一一八）（一一九―一三五略）

大王よ、それからビーシュマは、神聖な武器を呼び起こして、すべての弓取りたちが見ている前で、アルジュナを襲撃した。（一三六）鎧を着たシカンディンは、戦場で身構えるビーシュマを攻撃した。そこでビーシュマは、火のようなその武器を回収した。（一三七）その時、白馬にひかれるアルジュナは、祖父を惑わせて、あなたの軍隊を殺戮した。（一三八）

（第百十二章）

シカンディン、ビーシュマを倒す

サンジャヤは語った。——

バーラタよ、このように退くことのない（異本による）多くの軍隊が布陣した時、すべての者は専ら梵界に行く（死ぬ）決意をしていた。（一）激しい混戦において、軍隊は〔同じ種類の〕軍隊と戦わなかった（通常は同種類の軍と戦う）。戦車兵は戦車兵とともに、歩兵は歩兵とともに戦わなかった。（二）騎兵は騎兵とともに、象兵は象兵とともに戦わなかった。両軍の間に恐ろしい大混戦が繰り広げられた。（三）人間と象と戦車がすっかり混じり合った時、その非常に恐ろしい殺戮は無差別なものになった。（四）（五―一五略）

偉大な戦士である軍司令官（ドリシタデュムナ）は、戦場で軍隊に告げた。

「ソーマカ軍よ、スリンジャヤ軍とともにビーシュマを攻撃せよ。（一六）」

軍司令官の言葉を聞いて、ソーマカ軍はスリンジャヤ軍とともに、いたるところ矢の雨を注いでビーシュマを攻撃した。(一七) 王よ、あなたの父ビーシュマは、攻撃されて、怒りにかられてスリンジャヤ軍と戦った。(一八) わが君よ、かつて英邁なラーマは、敵軍を滅ぼす兵学を誉れ高い彼に授けた。(一九) 敵の勇士を殺す、老いたクルの祖父ビーシュマは、その兵学を用いて敵軍を滅ぼし、毎日のように一万のパーンダヴァ軍を殺した。(二〇) バラタの雄牛よ、その十日目が来た時、ビーシュマは戦いにおいて、一人で、マツヤ軍とパーンチャーラ軍の無数の象兵と騎兵を殺し、七名の勇士たちを殺した。(二一) そして祖父は、激しい戦いにおいて、五千の戦車兵と、一万四千の人員を殺した。(二二) 王よ、それから更に、あなたの父は、一千の象兵と、一万の騎兵を、兵学の力により殺した。(二三) それから彼は、すべての王の軍隊を動揺させてから、ヴィラータの愛しい弟であるシャターニーカを倒した。(二四)

大王よ、栄光あるビーシュマは、戦場で一千人の王を矢で倒した。(二五) アルジュナに従う王たちで、誰でもビーシュマに向かって行った者は、ヤマ（閻魔）の住処に行った。(二六) このようにビーシュマは、十方を矢の網ですっかり〔おおい〕、パーンダヴァたちの軍隊を圧倒して、軍隊の先頭に立っていた。(二七) このようにして、彼はその十日目に、弓を持って両軍の間に立っていた。(二八) 王よ、王たちは誰も彼を見つめることができなかった。夏、中天に達した太陽のように彼は熱していた。(二九) インドラが戦いにおいて悪魔の軍隊を苦しめるように、ビーシュマはパーンダヴァ軍を苦しめていた。パーラタよ。(三〇)

デーヴァキーの息子クリシュナは、このように勇武を発揮している彼を見て喜び、アルジュナに告げた。(三一)

「あそこにビーシュマが両軍の間に立っている。力ずくで彼を殺さなければ、あなたの勝利はないであろう。(三二) この軍隊が破られた場所で、奮起して彼を食い止めろ。主よ、他の者はビーシュマの矢に耐えることはできないから。(三三)」

王よ、その時、猿の旗標を持つ〔アルジュナ〕はそのようにうながされて、ビーシュマとその旗と戦車と馬たちを矢でおおった。(三四) そのクルの長たちの雄牛は、アルジュナに射られた矢の群を自分の矢の群で何度も破壊した。(三五) (三六―三九略)

それからシカンディンは、最高の武器をとり、アルジュナに守られて、激しくビーシュマを攻撃した。(四〇) そして戦いの区別を知る無敵のアルジュナは、ビーシュマのすべての従者を殺してから、ビーシュマ自身を攻撃した。(四一) サーティヤキ、チェーキターナ、ドリシタデュムナ、ヴィラータ、ドルパダ、ナクラとサハデーヴァも、剛弓を持つ〔アルジュナ〕に守られて、ビーシュマに戦いを挑んだ。(四二) またアビマニユとドラウパディーの五人の息子も、強力な武器を振り上げてビーシュマに挑戦した。(四三) 戦いにおいて退くことのない、彼らすべての剛弓を持つ弓術の達人たちは、矢でビーシュマを何度も攻撃した。(四四) 最高の王たちに放たれたそれらの矢の群を破壊して、祖父は勇気凛々、遊ぶかのように矢を防ぎ止め、パーンダヴァ軍に突入した。(四五) ビーシュマは何度も笑い、パーンチャーラの王子シカンディンが女性であったことを思い出し、彼に矢を向けることはなかった。

そして勇士ビーシュマは、ドルパダの軍の七名の戦士を殺した。(四六)それからすぐに、ビーシュマ一人を攻撃するマツヤ、パーンチャーラ、チェーディの軍隊に、「わあ、わあ」という叫び声があがった。(四七)彼らは優れた騎兵と戦車兵の群により、象兵と歩兵により、戦場で敵を苦しめているビーシュマ一人を取り囲んだ。雲が太陽を取り囲むように。(四八)それから、彼と彼らとの、神々と阿修羅たちの戦いのような戦いにおいて、アルジュナはシカンディンを先頭に立てて、ビーシュマを攻撃した。(四九)

(第百十三章)

サンジャヤは語った。——

このように、すべてのパーンダヴァ軍は、戦場でビーシュマをすっかり取り囲み、シカンディンを先頭に立てて彼を射た。(一)バーラタよ、すべてのスリンジャヤ軍は、戦場で多種多様な武器を用いてビーシュマを攻撃した。(二―三)しかしビーシュマは、大勢で攻撃され、鎧は裂け、諸々の急所は傷つけられていたが、苦にすることはなかった。(四)ビーシュマは敵にとって宇宙紀の終末の火のようであった。その輝く矢と弓は焔である。武器の発射が風である。車輪の音が〔燃える〕音である。強力な武器が燃え上がる火である。多彩な弓が大火焔である。勇士の死が大なる薪である。(五―六)ビーシュマが戦車の群の中に沈み、またその中から出て、再び中に入って行動するのが、諸王に認められた。(七)それから、彼はパーンチャーラの王とドリシタケートゥを離れて、速やかにパーンダヴァ軍の中に突入した。

(八)そして彼は、サーティヤキとビーマ、アルジュナ、ドルパダ、ヴィラータ、ドリシタデュムナの六名を六本の矢で射た。それらの矢は、恐ろしい音をたて、非常に高速で、敵の鎧を貫き、太陽のようであった。(九―一〇)しかし勇士たちは、彼の鋭い矢を防ぎ、十本ずつの矢で激しくビーシュマを苦しめた。(一一)

シカンディンは戦場で諸々の矢をビーシュマに放った。金の羽根のついた、石で研がれたそれらの矢は、速やかにビーシュマに入った。(一二)それからアルジュナは猛り立ち、シカンディンを先頭に立てて、ビーシュマを攻撃し、彼の弓を断ち切った。(一三)ドローナ、クリタヴァルマン、シンドゥの王ジャヤドラタ、ブーリシュラヴァス、シャラ、シャリヤ、バガダッタの七名の勇士たちは、ビーシュマの弓が切断されたことに我慢できなかった。彼らは最高に怒って、アルジュナを攻撃した。(一四―一五)これらの勇士は、神的な最高の武器を現出させて、猛り立ってパーンダヴァたちを〔矢で〕おおって、激しく攻撃した。(一六)アルジュナに対して襲いかかる彼らの声は、宇宙紀の終末に氾濫した海の音のように聞こえた。(一七)

「殺して運んで来い。捕えよ。戦え。斬れ。」

アルジュナの戦車のまわりでこのような喧噪があがった。(一八)バラタの雄牛よ、パーンダヴァ軍の勇士たちは、その喧噪を聞いて、アルジュナを守ろうとして駆け寄った。(一九)すなわち、サーティヤキ、ビーマセーナ、ドリシタデュムナ、ヴィラータとドルパダの両名、羅刹のガトートカチャ、猛り立つアビマニユ、これらの七名が怒りにかられ、多彩な弓を持

ち、急いで駆け寄った。(二〇―二一) バラタの最上者よ、彼らの戦いは激しく身の毛がよだつものであって、神々と悪魔たちの戦いのようであった。(二二)

最高の戦士シカンディンは、アルジュナに守られ、その戦いで弓を切断されたビーシュマを十本の矢で射た。そして、彼の御者を十本の矢で、旗を一本の矢で断ち切った。(二三) ビーシュマはこの上なく迅速に他の弓をとった。しかしアルジュナは、彼のその弓をも鋭い半月形の先の矢で切断した。(二四) このようにして、敵を苦しめるアルジュナは、猛り立ち、ビーシュマが弓をとる度に何度もその弓を切断した。(二五) 弓を切られたビーシュマは怒り、口の端を舐めまわし、山をも裂く槍をとり、猛り立って、アルジュナの戦車めがけてそれを投げた。(二六) 雷電のように燃え上がる槍が飛来するのを見て、パーンダヴァの王子は、五本の鋭い半月形の先の矢を放った。(二七) バラタの最上者よ、アルジュナは猛り立ち、ビーシュマが腕力によって投じた彼の槍を、五本の矢で五つに切った。(二八) それは怒ったアルジュナに切断されて、雲の群から分かれて落ちた稲光のように落下した。(二九) その槍が切られたのを見て、敵の都市を征服する勇士ビーシュマは怒ったが、戦場において理性的に考えた。(三〇)

「もし強力なヴィシュヌが守護していなければ、私は一本の弓ですべてのパーンダヴァたちを殺すことができる。(三一) しかし私は二つの理由から、パーンダヴァたちとは戦わない。パーンダヴァたちは不死身であるから。またシカンディンは女であったから。(三二) かつて私の父(シャンタヌ)がカーリー(サティヤヴァティー)を娶った時、彼は〔私に〕満足して、自分の死にたい

時に死ぬことができることと、戦場で殺されないこととという恩寵を授けた。それ故、今自分の死ぬべき時が来たと私は考える。(三三)」

無量の威厳に満ちたビーシュマがこのように決意したことを知り、聖仙たちとヴァス神たちは空中に立ち、ビーシュマに言った。(三四)

「勇士よ、汝が決意したことは、我々にとって非常に嬉しいことだ。そこで偉大な射手よ、戦いを断念しなさい。(三五)」

その言葉が終わると、芳香を運び水滴をともなう吉祥の順風が吹いた。(三六) 神々の太鼓が大きな音で鳴り響いた。王よ、そして花の雨がビーシュマの上に落ちた。(三七) しかし王よ、彼らが述べていることを、ビーシュマ以外は誰も聞くことはできなかった。そして、聖者(ヴィヤーサ)の威光により、私も例外であった。(三八) 王よ、全世界に愛されるビーシュマが戦車から落ちるであろうということになった時、神々の動揺は大きかった。(三九)

神群から以上のような言葉を聞いて、気高いビーシュマは、すべての鎧を貫く鋭い矢で射貫かれながらも、もはやアルジュナを攻撃しなかった。(四〇) 大王よ、シカンディンはいきり立って、九本の鋭い矢でバラタ族の祖父の胸を射た。(四一) しかし大王よ、クルの祖父ビーシュマは、戦場で彼に撃たれても、地震における山のように動揺しなかった。(四二) それからアルジュナは、笑ってガーンディーヴァ弓を引き絞り、二十五本の矢をビーシュマに放った。(四三) 更にアルジュナは猛り立ち、急いで百本の矢によりビーシュマの全身のすべての急所を射た。(四四) 同様に他の者たちによってもその戦いでひどく傷つけられたが、金の

羽根のある、石で研がれたそれらの矢は、ビーシュマに苦痛をもたらさなかった。（四五）
　それから、アルジュナは猛り立ち、シカンディンを先頭に立ててビーシュマに襲いかかり、彼の弓を切断した。（四六）そして十本の矢で彼を射て、一本の矢でその旗を断ち切り、また十本の矢で彼の御者を戦慄させた。（四七）ビーシュマはより強力な他の弓をとった。しかしアルジュナはその弓をも三本の鋭い矢で三つに切断した。ビーシュマが戦場で弓をとる度に、彼は一瞬のうちにそれを切断した。（四八）こうして彼はその戦いにおいて非常に多くの弓を切断した。その後は、ビーシュマはアルジュナを攻撃しなかった。（四九）アルジュナは二十五本の矢でビーシュマを傷つけた。その偉大な射手はひどく傷つけられて、ドゥフシャーサナに言った。（五〇）
「パーンダヴァの勇士アルジュナが戦いにおいて猛り立ち、このように幾千の矢で私を射る。（五一）インドラといえども戦いにおいて彼に勝利することはできない。また、勇猛な神々や悪魔や羅刹たちがそろっても、私をうち破ることはできない。いわんや無力な人間たちはなおさらである。（五二）」
　二人がこのように話している時、アルジュナは戦場でシカンディンを先頭に立てて、鋭い矢でビーシュマを射た。（五三）アルジュナによって鋭い矢でひどく傷つけられたビーシュマは微笑して、再びドゥフシャーサナに告げた。（五四）
「〔私の身体に〕撃ち込まれたこれらの矢は、金剛杵（ヴァジュラ）のように激烈で、鋭い先端を持ち、絶え間なく放たれる。（五五）これらの矢はシカンディンのものではない。これらは確実に鎧を

貫通し、諸々の急所を傷つけ、杵のように私を撃つ。これらの矢はシカンディンのものではない。（五六）これらは梵杖（ブラフマダンダ）（五・九六・二一参照）のように強力で、金剛杵のように激しく、抗しがたく、私の生命を断つ。これらの矢はシカンディンのものではない。（五七）これらは怒った蛇のようで、舌で舐めまわし、猛毒に満ち、私の急所に入って来る。これらの矢はシカンディンのものではない。（五八）これらは派遣されたヤマ（閻魔）の使者のように、私の生命を滅ぼすかのようである。棍棒や鉄棒のように強烈である。これらの矢はシカンディンのものではない。（五九）マーガ月（一月―二月）に〔寒さが〕牛を切るように、これらは私の肢体を切る。これらの矢はアルジュナのものだ。これらの矢はシカンディンのものではない。（六〇）実に他のすべての王たちは私に苦痛を与えることはない。ガーンディーヴァ弓と猿の旗標を持つ勇士アルジュナ以外には……。（六一）」
　バーラタよ、ビーシュマはこう言うと、アルジュナを燃やそうと望むかのように、火花を発し、輝く先端をした槍を投じた。（六二）しかしバーラタよ、アルジュナはすべてのクル族の勇士たちが見ている前で、三本の矢によってその槍を切り落とした。（六三）そこでビーシュマは、死か勝利のいずれかを得たいと望み、黄金で飾られた楯と刀をとった。（六四）しかし彼が戦車から降りないうちに、アルジュナは諸々の矢で（異本による）彼の楯を百に砕いた。それは奇蹟のようであった。（六五）そしてアルジュナは獅子のように高く雄叫びをあげ、自軍をうながした。
「ビーシュマを襲撃せよ。ほんの少しでも恐れてはならぬ。（六六）」

そこで彼らは多種多様な武器によりビーシュマ一人に襲いかかった。パーンダヴァ軍に恐ろしい獅子吼が生じた。(六七―六八)

王よ、同様にあなたの息子もビーシュマの勝利を望み、アルジュナ一人を攻撃して、獅子吼をした。(六九)王中の王よ、かくて十日目に、ビーシュマとアルジュナの対決において、あなたの軍と敵軍との間に激しい戦いが行なわれた。(七〇)戦ってお互いに攻撃し合う軍隊の間に、ガンガーが海と交わる場所に生じる渦巻のような渦巻が生じた。(七一)その時、血に濡れた大地は識別できなくなった。平坦な土地もそうでない土地も、何も見分けられなかった。(七二)

その十日目に、ビーシュマは何万もの戦士を殺して、諸々の急所を傷つけられて戦場に立っていた。(七三)それからアルジュナは、その軍隊の先頭に立ち、クル軍の中央で敵軍を逃走させていた。(七四)わが軍は白馬にひかれたクンティーの息子アルジュナを恐れ、鋭い武器で苦しめられ、戦場から逃走した。(七五)サウヴィーラ、キタヴァ、東部の軍、西部の軍、北部の軍、マーラヴァ、アビーシャーハ、シューラセーナ、シビ、ヴァサーティ、シャールヴァ、トリガルタ、アンバシタ、ケーカヤ、以上すべての国々の軍は、矢に苦しみ、傷に苦しみ、戦場でアルジュナと戦っているビーシュマを捨てた(異本による)。(七六―七七)そこで多くの〔パーンダヴァ軍〕はすべてのクル軍を駆逐し、ビーシュマ一人をぐるりと取り囲み、矢の雨を浴びせた。(七八)

王よ、「倒せ。捕えよ。突け。切れ」というような騒々しい声がビーシュマの戦車のまわりであがった。(七九)幾百幾千の矢の洪水で射られて、彼の身体には矢が刺さらない場所は指の幅ほどもなかった。(八〇)王よ、このようにあなたの父は、戦場でアルジュナに鋭い先端の矢で傷だらけにされ、太陽がわずかに残っている時、あなたの息子たちが見ている前で、頭を東に向けて戦車から落下した。(八一)ビーシュマが戦車から落ちた時、すべての神々や王たちの「ああ、ああ」という大きな叫び声が天空にあがった。(八二)その偉大な祖父が落ちるのを見て、我々すべての心もビーシュマとともに落ち込んだ。(八三)すべての弓取りの旗(最上者)である強力な彼は、投げ出されたインドラの旗のように、地響きを立てて倒れた。しかし彼は、矢の群にすっかりおおわれているので、地面に触れなかった。(八四)人中の雄牛であるその勇士が戦車から落ち、矢の床に横たわった時、神性が彼に入り込んだ。(八五)雨雲は雨を降らせ、大地は震動した。彼は落ちる時、太陽が矮小になるのを見た。(八六)パーラタよ、その勇士は〔死ぬべき〕時期について考えて、意識を取り直した。すると虚空のいたるところに神聖な言葉を聞いた。(八七)

「すべての戦士のうちの最上者、人中の虎である偉大なビーシュマは、どうして太陽が南行する時に死のうとするのか。(八八)」

ビーシュマはそれを聞いて、「私は生きている」と言った。クルの祖父ビーシュマは地面に落ちたが、太陽が北行する時期を待って、生命を持続していたのである。(八九)ヒマーラヤの娘ガンガー(ガンジス)は、彼のその考えを知って、ハンサ(鵞鳥の一種)の姿をとった大仙たちをそこに遣わした。(九〇)そしてそのマーナサ湖に住むハンサたちは急いでそろって飛び立っ

て、クルの祖父ビーシュマに会うために、その最高の人が矢の床に横たわっている場所に行った。(九一)ハンサの姿をとる聖者(ムニ)たちは、ビーシュマの所に行き、矢の床に横たわっているクルの祖父ビーシュマを見た。(九二)彼らは偉大なバラタの最上者ビーシュマを見て、右まわりにまわって敬意を表し、そして太陽が南路にあるのを見た。(九三)それから賢者たちは、お互いに相談してから告げた。

「ビーシュマは偉大な人物であるのに、どうして太陽が南行する時期に死ぬのか。(九四)」

ハンサたちはこう言って、南方に向かって出発した。バーラタよ、大知者ビーシュマは彼らを見て、考えてから、彼らに告げた。

「太陽が南行している時は、私は決して逝去しない。私はそう決意している。(九五―九六)太陽が北行する時、私自身の以前の場所に行くであろう。ハンサたちよ、私はこの真実を汝らに告げる。(九七)私は北行の時期を待って、それまで生命(いのち)を維持するであろう。私は自由意志で生命を捨てることができると定まっている。それ故、北行の時期に死ぬことを望んで、生命を維持しよう。(九八)というのは、あの偉大な父が私に恩寵を与えたのだ。私は自由に死ねると。その恩寵がその通りに実現するように!(九九)命終は定まっているから、そこで私は生命を維持しよう。」

その時ビーシュマはハンサたちにこう言って、矢の床に横たわっていた。(一〇〇)

このようにクル族の頂(最上者)である強力なビーシュマが倒れた時、パーンダヴァとスリンジャヤの兵たちは獅子吼をした。(一〇一)バラタの雄牛よ、バラタ族の無比の勇士が倒された

時、あなたの息子たちはどうしてよいかわからなかった。その時、クル軍の人々はすっかり茫然自失した。(一〇二)それから、ドゥルヨーダナをはじめとする王たちはため息をついて泣いた。そして彼らは、悲嘆に暮れて、長い間感覚を失っていた。(一〇三)王よ、彼らは考え込み、戦う気にならなかった。腿が硬直したように、彼らはパーンダヴァ軍に向かって行かなかった。(一〇四)王よ、シャンタヌの不死身の息子である強力なビーシュマが倒された時、大々的な滅亡がひしひしとクル族に迫った。(一〇五)我々は勇士たちを殺され、鋭い矢で傷つけられ、アルジュナにうち破られて、何をしたらよいかわからなかった。(一〇六)鉄棒のような腕をしたパーンダヴァのすべての勇士たちは、勝利を得て、そして来世における最高の帰趨(天界)を得て、大きな法螺貝を吹いた。ソーマカとパーンチャーラの人々は喜んだ。王よ。(一〇七)それから、幾千の楽器が鳴り響いている時、強力なビーマセーナは強く腕をたたき(喜びの表現)、そして踊った。(一〇八)

両軍の間でビーシュマが倒された時、勇士たちは武器を収めて、あれこれと考えこんだ。(一〇九)ある人々は叫び、ある人々は倒れ、またある人々は気を失った。ある人々は王(クシャトラ)族の道を非難し、またある人々はビーシュマを称讃した。(一一〇)聖仙や祖霊たちは、偉大な誓戒を保つビーシュマを讃えた。そしてバラタ族の祖先たちは彼を称讃した。(一一一)一方、強力で英邁なビーシュマは、偉大な秘説とヨーガによって、念誦し、〔死ぬべき〕時を待っていた。(一一二)

(第百十四章)

英雄は矢の床に眠る

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、父のために禁欲を守った、神のような強力なビーシュマを失って、わが軍の戦士たちはどのようになったか。(一)ビーシュマがドルパダの息子(シカンディン)に憐憫をかけて彼を攻撃しなかったまさにその時、クル族と他の王たちが殺されたも同然と私は考える。(二)今日、愚かな私にとって、父が倒されたと聞いて、これよりもつらいことが他にあるであろうかと私は思う。(三)サンジャヤよ、確かに私の心は石のように堅い。ビーシュマが倒されたと聞いても、百に裂けないとは。(四)デーヴァヴラタ(ビーシュマ)が戦場で倒されたとは、返す返すも残念だ。かつてジャマダグニの息子(パラシュラーマ)が神的な武器で攻撃しても、彼は殺されなかったのに。(五)勝利を望んでいた人中の獅子ビーシュマが今日、戦場で倒された時、彼はどのように行動したか、それを私に語ってくれ。サンジャヤよ。(六)」

サンジャヤは語った。——

クルの長老である祖父がその夕方に地面に倒れた時、ドゥルヨーダナ軍は悲しみ、パーンチャーラ軍は喜んだ。(七)ビーシュマは戦車から地上に落下したが、矢の床に横たわり、地面に触れないでいた。(八)めざましく戦う(異本による)クルの境界の樹(ビーシュマ)が倒れた時、生類

に「ああ、ああ」という騒々しい声があがった。(九)王よ、両軍の王族(クシャトリヤ)たちに恐怖が入り込んだ。鎧と旗がちぎれたビーシュマを見て、王よ、クル軍とパーンダヴァ軍は動転した。(一〇)ビーシュマが倒された時、空は闇でおおわれ、太陽は輝きを失い、大地は大きな音をたてた。(一一)「彼はヴェーダを知る人々の最上者である、彼はヴェーダを知る人々の寄る辺である」と、生類は横たわるバラタの雄牛について告げた。(一二)

「かつてこの人中の雄牛は、父のシャンタヌが愛に苦しむことを知り、性の交わりを断つことを誓った。(一三)」

聖仙たちはシッダやチャーラナ(いずれも半神)とともに、矢の床に横たわるバラタ族の最上者についてそう言った(異本による)。(一四)バラタ族の祖父ビーシュマが倒された時、あなたの息子たちは何をすることもまったくできなかった。バーラタよ。(一五)彼らは顔色が変わり、輝きは失せ、恥じ、慙愧に堪えずうつむいていた。バーラタよ。(一六)

すべてのパーンダヴァたちは勝利を得て、戦場に立ち、黄金の網で飾られた大きな法螺貝を吹いた。(一七)非の打ち所のない王よ、楽器が演奏されその音が高く鳴り響いた時、我々は戦場に強力なビーマセーナを見た。彼は戦場で大軍を擁する敵を殺して、大喜びして遊び戯れていた。(一八―一九)そしてその時、クル軍はすっかり茫然自失していた。カルナとドゥルヨーダナは何度もため息をついた。そして、クル族の重荷を担うビーシュマが倒された時、「ああ、ああ」という声があがり、すべてが混乱状態に陥った。(二〇)

あなたの息子ドゥフシャーサナは、ビーシュマが倒れたのを見て、大急ぎでドローナの軍

隊の所に走って行った。(二一) その人中の虎である鎧をまとう勇士は、兄に派遣され、自分の部隊を率いて、その兵たちを急がせつつそこに行った。(二二) 大王よ、ドゥフシャーサナが来たのを見て、クル軍は「彼は何を言うのか」と思って彼を取り巻いた。(二三) そこでドゥフシャーサナは、ビーシュマが倒されたことをドローナに告げた。ドローナはその悪い知らせを聞いて、突然戦車から落下した。(二四) そして栄光あるドローナは意識を取りもどすと、自分の軍隊に戦闘をやめさせた。わが君よ。(二五) クル軍が戦いを中止したのを見て、パーンダヴァたちも駿馬に乗った使者を送って、自軍を撤退させた。(二六) すべての軍隊が次々と撤退した時、すべての王たちは鎧を脱いでビーシュマの所に行った。(二七) 幾百幾千の戦士たちは戦いをやめ、その偉大な人のそばに立った。神々が造物主(プラジャーパティ)のそばに立つように。(二八) パーンダヴァたちはクル族の人々とともに、横たわっているバラタの雄牛ビーシュマに近づいて、挨拶をしてそこに立っていた。(二九)

その時、徳性あるビーシュマは、平伏してから前に立っているパーンダヴァたちとクル族の人々に告げた。(三〇)

「ようこそ、栄光ある者たちよ。ようこそ、偉大な戦士たちよ。神のようなあなた方に会えて、私は嬉しい。(三一)」

彼はこのように彼らに頭を下げて挨拶してから言った。

「私の頭はあまりにも下がっている。枕をくれ。(三二)」

そこで諸王は、柔らかい上等の枕を運んで来た。しかし祖父はそれらを望まなかった。

(三三) そしてその人中の虎は、笑って王たちに言った。

「諸王よ、それらの枕は勇士の床にはふさわしくない。(三四)」

それから彼は、世界中で最も偉大な戦士である最高の人物、強力なアルジュナを見て告げた。(三五)

「勇士ダナンジャヤよ、私の頭は下がっている。お前がふさわしいと思う枕をくれ。(三六)」

アルジュナは大弓を傍らに置き(プーナ版の読み)、祖父に敬礼し、涙にあふれる両眼をして、次のように言った。(三七)

「クルの最上者よ、最高の戦士よ、私はあなたの召使である。無敵の祖父よ、何をしたらよいですか。(三八)」

ビーシュマは彼に言った。

「わが子よ、私の頭は下がっている。クルの最上者アルジュナよ、私のために枕を持って来てくれ。勇士よ、私の床にふさわしい枕をすぐにくれ。(三九) 勇士アルジュナよ、お前はすべての弓取りのうちの最上者である。そして王族の法(クシャトリヤダルマ)を知り、知性と勇気と美質をそなえている。(四〇)」

アルジュナは「承知しました」と言って、決意するより早く、ガーンディーヴァ弓と真っ直ぐの矢をとり上げて加持した。(四一) それから、バラタ族の無比の大人物の許可を受けて、高速の鋭い三本の矢によってビーシュマの頭を支えた。(四二) アルジュナによって自分の意図が理解された時、法(ダルマ)と実利(アルタ)の真実を知る、徳性あるバラタ族の最上者ビーシュマは満足

した。（四三）枕が与えられたことで、友たちの喜びを増す最高の戦士アルジュナに対し、ビーシュマは感謝した。（四四）
「パーンドゥの息子よ、お前は私の床にふさわしい枕をくれた。もしお前が別様にふるまったら、私は怒ってお前を呪ったであろう。（四五）勇士よ、法（ダルマ）においてこのように定められているのだ。王族（クシャトリヤ）は戦場で、矢の床に横たわって眠るべきだと。（四六）」
アルジュナにこのように言ってから、彼はアルジュナのそばに立っているすべての王や王子たちに告げた。（四七）
「私は太陽が〔南に〕回帰する間は、この床に寝る。その時生きている王たちは私の〔臨終〕を見るであろう。（四八）輝く太陽が世界を熱しつつ、最高に輝く戦車によりクベーラの住む方角（北方）に行く時、私は生命を脱するであろう。親友が親友を離れるように。（四九）王たちよ、この私がいる場所の周囲に溝を掘るべきである。このように百の矢におおわれて太陽を崇拝するであろう。王たちよ、敵意を捨てて戦争をやめよ。（五〇）」
それから、矢を抜くのに長けた外科医が来た。彼らはすべての器具をそなえ、巧みな技術を持つ熟練の医師たちであった。（五一）その時、ビーシュマは彼らを見て告げた。
「医師たちに敬意を払ってから、贈物を与えて帰ってもらいなさい。（五二）このようになっては、もう私には医師は必要ない。私は王族の法に讃えられる最高の帰趨に達したのだから。（五三）王たちよ、矢の床にいる私にとって、それは道（ダルマ）ではない。王たちよ、私は臨終においては、これらの矢とともに焼かれるべきである。（五四）」

あなたの息子ドゥルヨーダナは、彼の言葉を聞くと、適切に敬意を払ってから医師たちを帰らせた。（五五）諸国の王たちは、無量の威光を持つビーシュマが法（ダルマ）において最高に確立しているのを見て驚嘆した。（五六）
王よ、パーンダヴァとクルのすべての勇士たちは、あなたの父に枕を与えてから、そろって清浄な床に寝ている偉大な人物に近づいた。それから彼らは、ビーシュマに挨拶して、右まわりにまわって敬意を表した。（五七―五八）それからすべての勇士たちは、ビーシュマの警護を固めてから、考えこみ、最高に悲しんで、夕方に、血まみれの姿で宿舎に帰った。（五九）
パーンダヴァの勇士たちは宿舎に入り、ビーシュマを倒したことにより喜び勇んでいた。クリシュナは彼らに近づいて、時を見てダルマの息子ユディシティラに告げた。（六〇）
「ユディシティラよ、幸いなことにあなたは勝利した。幸いなことにビーシュマは倒された。あの約束を守る勇士は人間には殺されない。（六一）プリターの息子よ、一切の武器に通達した彼は神々にも殺されない。しかし、眼により敵を殺すあなたを得て、彼は恐るべき眼により燃やされたのだ。（六二）」
ダルマ王はこのように言われて、クリシュナに答えた。
「あなたの恩寵により勝利がある。あなたの怒りにより敗北がある。クリシュナよ、あなたは我々の寄る辺である。信愛する者たちに無畏（安全）をもたらす。（六三）クリシュナよ、あなたが彼らの側にいて、常に戦いにおいて彼らを守護し、常に彼らの幸せに専念するならば、彼らが勝利するのは不思議ではない。あらゆる時あなたに会えて、私には不思議だという思

いがない。(六四)」

クリシュナはこのように言われて、微笑して答えた。

「最高の王よ、その言葉はあなたにのみふさわしいものだ。(六五)」

(第百十五章)

サンジャヤは語った。——

大王よ、その夜が過ぎた時、パーンダヴァ側とドゥヨーダナ側に属するすべての王たちは、祖父(ビーシュマ)のもとに行った。(一)王族(クシャトリヤ)たちは、英雄の床に横たわっている勇猛なクルの最高者、王族の雄牛に挨拶してから、その傍らに立っていた。(二)すべての少女や婦人や子供や老人や一般の見物人たちは、栴檀の粉末や炒り米や花輪によって供養しつつビーシュマに近づいた。生類が太陽を崇めるように。(三)楽器〔奏者〕、芸者、遊女、役者、舞踊家、舞踊場(異本は「職人」「技師」)が、老いたクルの祖父のもとに行った。(四)クルとパーンダヴァの人々は、そろって、戦いを中止し、鎧を脱ぎ、武器を置き、以前のようにお互いに友好的に、年齢に応じて、敵を制する無敵のデーヴァヴラタ(ビーシュマ)に伺候していた。(五―六)幾百の王に満ちたそのバラタ族の集会は、ビーシュマによって飾られて、天上の太陽の輪円のように燦然と輝いていた。(七)そして祖父に伺候する諸王の集会は、神々の主である祖父(梵天)に伺候する神々の集会のように輝いていた。(八)バラタの雄牛よ、一方ビーシュマは、平常心により苦痛を堪えていたが、〔刺さった〕諸々の矢により苦しみ、気分が悪そうな様子で告げた。(九)

「矢で私の身体は苦しみ、その矢の苦痛により私は気絶しそうである。私は水が欲しい。」

彼は諸王にそう告げた。(一〇)王よ、そこで王族たちは方々から種々の食物と冷たい水の瓶をそこに運んで来た。(一一)ビーシュマは運ばれたものを見て告げた。

「諸君、私は今やいかなる人間の食物も人間から享けることはできない。私は矢の床にいて、月と太陽の回帰を待っているのだから。(一二―一三)」

バーラタよ、ビーシュマは弱々しい口調ですべての王たちにそう告げると、勇士アルジュナに向かって話しかけ〔ようとし〕た。(一四)そこで勇士アルジュナは祖父に近づいて挨拶し、合掌して恭しく立ち、「何をいたしましょうか」とたずねた。(一五)王よ、敬礼して前に立っているアルジュナを見て、徳性あるビーシュマは喜んで彼に告げた。(一六)

「私のこの身体は多くの矢により貫かれて焼かれる。諸々の急所は痛み、私の口は干涸びる。(一七)アルジュナよ、私の身体を喜ばせるために水をくれ。勇士よ、お前は作法通りに水をくれることができるから。(一八)」

強力なアルジュナは「承知しました」と言って戦車に乗り、力強くガーンディーヴァ弓に弦を張り、その弓を引き絞った。(一九)その弓弦が弓籠手にあたる音は、雷の轟きのようであり、すべての生類とすべての王はそれを聞いて戦慄した。(二〇)それから、その最高の戦士は戦車に乗って、バラタ族の最上者である最高の戦士を右まわりにまわって敬意を表した。(二一)それから高名なアルジュナは、燃える矢をつがえて加持し、雨神(パルジャニヤ)の武器(アストラ)(句呪)と結合し、すべての人々の見ている前で、ビーシュマの南側の地面を射た。(二二)すると、冷たくて甘

露のような、神々しい香りと味を持つ、汚れない吉祥の水の流れが噴き上がった。(二三) 神々しい勇猛な行為をするアルジュナは、冷たい水流によって、クルの雄牛ビーシュマを満足させた。(二四) めざましい仕事をするインドラのようなアルジュナの行為により、王たちは最高に驚いた。(二五) アルジュナの超人的な驚嘆すべき行為を見て、クル族の人々は寒さに苦しむ牛のように戦慄した。(二六) 王たちはすべて驚きのあまり上衣を振りまわした。法螺貝と太鼓の音でいたるところ騒々しかった。(二七) 王よ、ビーシュマは渇きが癒え、すべての勇猛な王たちの前で、アルジュナに敬意を払うかのように告げた。(二八)

「強力なクルの王子よ、お前にあってはこれは不思議ではない。ナーラダはお前のことを、無量の光輝を持つ古の聖仙(ナラ)であると言った。(二九) お前はヴァースデーヴァ(クリシュナ)とともに、必ずや神々をともなう神々の王(インドラ)もできないような偉大な仕事をするであろう。(三〇) アルジュナよ、知る人ぞ知る。お前は一切の王族の滅亡〔の原因〕であると。お前は地上の弓取りたちのうちの第一人者である。人間のうちの最高の者である。(三一) 世の中では人間が最高である。鳥類のうちではガルダが最高である。湖水のうちで海が最高である。四足動物のうちで牛が最高である。(三二) 光輝のうちで太陽が最高である。山のうちでヒマーラヤが最高である。種姓のうちでバラモンが最高である。弓取りのうちで汝が最高である。(三三) ヴィドゥラ、ドローナ、ラーマ(バララーマ)、クリシュナ、サンジャヤたちが何度も忠告しても、ドゥルヨーダナはその言葉を聞かなかった。(三四) 実にドゥルヨーダナは分別をなくし、正気を失ったかのようで、私の言葉を喜ばない。彼は教令に背き、ビーマの力に圧

倒され、殺されて永遠に横たわるであろう。(三五)」

クル族の王ドゥルヨーダナは、その言葉を聞いて意気消沈した。ビーシュマは彼を見て言った。

「王よ、聞きなさい。怨みを捨てなさい。(三六) ドゥルヨーダナよ、お前は見たであろう。聡明なアルジュナにより、甘露のような冷たい水が噴き出したことを。この世で誰か他にこのようなことをする者が認められるか。(三七) アグニ、ヴァルナ、ソーマ、ヴァーユ、ヴィシュヌ、インドラ、パシュパティ(シヴァ)、梵天、パラメーシュティン(最高の主、ヴィシュヌを指すか)、プラジャーパティ(造物主)、ダートリ、トゥヴァシトリ、サヴィトリ——これらの神々に属する神聖な一切の武器について、すべての人間界において、ただアルジュナのみが知っている。あるいは、デーヴァキーの息子クリシュナのみが知っている。しかし他の誰も知らない。戦いにおいてアルジュナに勝つことは決してできない。(三八—三九) この偉大な男の諸々の行為は超人的である。彼は勇気を持ち、勇猛に戦い、戦場において輝き、戦いにおいて敏腕である。なあ王よ、彼と和平を結びなさい。(四〇) 強力なクリシュナがクルの集会において自制しているうちに、わが子よ、勇士アルジュナと和平を結びなさい。(四一) アルジュナが真っ直ぐの矢でお前の残った軍隊を滅ぼさないうちに、和平を結びなさい。(四二) 生き残った弟たちや、多くの王たちが戦場にいるうちに、王よ和平を結びなさい。(四三) ユディシティラが怒りに燃える眼をして、お前の軍を燃やさないうちに、わが子よ、和平を結びなさい。(四四) パーンドゥの息子であるナクラとサハデーヴァとビーマセーナがお前の軍を全滅させ

ないうちに、なあ大王よ、パーンダヴァたちとともに仲直りするがよい。(四五) わが子よ、パーンダヴァたちと講和して、私の死で戦争を終わらせなさい。私が告げたこの言葉をどうか受け入れてくれ。非の打ち所のない者よ。それがお前にも一族のためにも有益であると思う。(四六) 怒りを捨てて、パーンダヴァたちと講和せよ。すでにアルジュナは十分にやった。ビーシュマの死により、汝らは仲直りせよ。王よ、残った者たちは生きるがよい（異本による）。王よ、どうか鎮まりなさい。(四七) パーンダヴァたちに王国の半分を引き渡すべきである。ダルマ王はインドラプラスタを統治せよ。クル族の王よ、お前は友を裏切り、王たちのうちの最低の者となって、悪名を残してはならない。(四八) 私の死により生類に平和が来るように。王たちは喜び、和合するように。王よ、父は息子のもとに帰り、姉妹の息子は母方の叔父のもとに帰り、兄弟は兄弟のもとに帰るように。(四九) もしお前が迷妄に陥り、愚かしさから、私の時宜にかなった言葉を受け入れないなら、ビーシュマの死によりお前たちはすべて滅びるであろう。私はこの真実の言葉を述べる。(五〇)」

ビーシュマは親愛の情から、諸王の間でこの言葉をドゥルヨーダナに聞かせてから、矢で諸々の急所は痛んだが、努めて自分の苦痛に耐えて、沈黙していた。(五一)（第百十六章）

カルナを許すビーシュマ

サンジャヤは語った。——

大王よ、シャンタヌの息子ビーシュマが沈黙した時に、すべての王たちは各自の宿舎にもどった。(一) ところで人中の雄牛であるカルナは、ビーシュマが倒されたことを聞くと、わずかに恐れを抱いて、急いでそこにやって来た。(二) 彼はその時、誕生の床にいるカールッティケーヤ（スカンダ）神のような、矢の床にいる偉大なビーシュマを見た。(三) 光輝に満ちたカルナは、涙で喉をつまらせて、その眼を閉じた英雄に近づき、彼の両足に平伏した。(四) そして彼に告げた。

「クルの最上者よ、私はカルナです。私は罪もないのに、いつもあなたの眼に入ると非常に憎まれていました。(五)」

クルの長老はそれを聞くと、無理をして眼を向け、おもむろに見て、愛情をこめて言葉をかけた。(六) その場に人がいないのを見て、護衛たちを去らせて、ビーシュマは父が息子を抱くように一本の腕でカルナを抱きしめていた。(七)

「ようこそ、私の好敵手よ。お前は私と競い合っている。もしお前が私の所に来なかったとしたら、疑いもなくお前のためによくなかったであろう。(八) お前はクンティーの息子だ。ラーダーの息子ではない。ナーラダやクリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ（ヴィヤーサ）やクリシュナから私が聞いたことで、疑問の余地はない。(九) わが子よ、私にはお前に対する憎しみはない。お前にこの真実を告げる。しかしお前の威光を減じるために、私は乱暴なことを言ったのだ。(一〇) 実にお前は理由なしにパーンダヴァたちを憎んでいると私は考える。というのは、お前は何度も王に（異本による）かりたてられたから。太陽の息子よ。(一一) 敵たちは戦場に

おいてお前の力に耐えることはできない。それを私は知っている。そしてまた、お前が敬虔で清らかであること、布施に最高に専念していることを、私は知っている。（一二）神のような男よ、人間のうちにはお前に等しい者は誰もいない。しかし、一族の分裂を恐れて、私はいつも乱暴なことを言った。（一三）弓矢にかけて、重荷を担うことにかけて、手練の早業にかけて、武器の力にかけて、お前はアルジュナや偉大なクリシュナに等しい。（一四）カルナよ、お前は弓を持ち、一人でラージャプラに行って、クルの王のために、戦いにおいて諸王を粉砕した。（一五）また、戦いにかけて誉れ高い、強力で無敵のジャラーサンダは、戦闘においてお前に匹敵しなかった。（一六）お前は敬虔で、真実を語り、威光（輝き）により第二の太陽のようであり、神の子であり、戦いにおいて敗れざる者であり、地上において超人的である。（一七）以前はお前に対し怒っていたが、今や私の怒りはなくなった。人間の努力によって運命を超えることはできない。（一八）敵を殺す者よ、勇猛なパーンダヴァたちは、お前の同腹の弟たちである。勇士よ、彼らといっしょになれ。もし私によかれと望むなら。（一九）太陽の息子よ、私との敵対関係は終わりにしよう。今や地上のすべての王の憂いがなくなるように。（二〇）」

カルナは言った。

「大知者よ、疑いもなく私はあなたが言われたことをすべて知っています。無敵の人よ、私はクンティーの息子であり、御者の息子ではありません。（二一）しかし私はクンティーに捨てられ、御者に養育されました。そしてドゥルヨーダナの権力を享受して、それを徒にすることはできません。（二二）気前のよい人よ、私はドゥルヨーダナのために、財産や身体や広大な名声をすべて捨てました。私は常にスヨーダナに依存してパーンダヴァたちを怒らせました。（二三）このことは必然的なことです。それを回避することはできません。何人が人間の努力により運命を回避することができましょう。（二四）祖父よ、様々な前兆が地上の滅亡を告げます。それらについてはあなたも知って、集会において語られました。（二五）パーンダヴァたちとヴァースデーヴァ（クリシュナ）が他の人々によってうち破られないことは、私もすっかり知っています。しかし私たちはあえて彼らに立ち向かうのです。（二六）祖父よ、戦う決意をした（異本による）私をお許し下さい。勇士よ、私はあなたに許可されて戦いたいと考えています。（二七）私は怒りや軽々しさから乱暴なことを言ったり逆らったりしました。私が何かと悪さをしたことをどうかお許し下さい。（二八）」

ビーシュマは言った。

「この非常に恐ろしい敵意をどうしても捨てることができないなら仕方ない。カルナよ、私はお前を許す。天界を望んで戦いなさい。（二九）妬みや怒りを離れて、王族の仕事を行なえ。力の限り、気力の限り、善き人々の行動に専念して。（三〇）私はお前を許す。お前が望むことを達成せよ。お前は疑いもなく、王族の法で勝ち得た世界に到達するであろう。（三一）我執なく、力と気力に依存して戦え。というのは、王族にとって、戦いに勝る法は存在しないから。（三二）私は非常に長いこと、和平のために努力した。しかし成功しなかった。法があるところに勝利がある。（三三）」

サンジャヤは語った。——
カルナはこのように言うビーシュマに挨拶してから戦車に乗り、あなたの息子のもとに行った。(三四)
(第百十七章)

本書中の「バガヴァッド・ギーター」は、岩波文庫『バガヴァッド・ギーター』(上村勝彦訳)として一九九二年三月に刊行された。他の部分は「ちくま学芸文庫」のために新たに訳出されたものである。

ちくま学芸文庫

原典訳　マハーバーラタ6

二〇〇二年十一月六日　第一刷発行

訳　者　上村勝彦（かみむら・かつひこ）
発行者　菊池明郎
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都台東区蔵前二―五―三　〒一一一―八七五五
振替〇〇一六〇―八―四一二三

装幀者　安野光雅
印刷所　三松堂印刷株式会社
製本所　株式会社積信堂

ちくま学芸文庫の定価はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本及びお問い合わせは左記へお願いいたします。
筑摩書房サービスセンター
埼玉県さいたま市櫛引町二―六〇四　〒三三一―八五〇七
電話番号　〇四八―六五一―〇〇五三

ISBN4-480-08606-4 C0198